［授業科目名］ 哲学へのいざない		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 松本　高志
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

自ら問題を発見し、それを整理する方法と、出発点から結論までの筋道を正しく立てる方法を身につけるということを授業の到達目標とする。

授業の概要

古代ギリシアでフィロソフィア（「知を愛すること」）と呼ばれた領域から、今日の哲学が発展した。学生にとって必要な人間観・世界観などをともに考える。第１回から第５回までは、哲学への導入と学習・思考などの諸問題を基本的考察とし、第６回から第10回までは、我々の踏まえる文化的伝統について考察し、第11回以降は、新たな文化を創造しつつ生きるための現代の哲学として構成する。

初回授業時に本科目に対する要望を調査し、それによって新たな内容を以下の予定に付加する場合がある。なお、ほぼ毎回、予習や復習を目的とする課題をクイズ礼式で提示する。

学生に対する評価の方法

課題に対する取り組みなど、授業への積極的参加（30%）と、学期末試験（70%）により評価する。また、前項に示した「課題」に対して、簡単なレポートの形式で回答してきた学生には、別途評価をする。詳しくは第１回授業時に説明するので、必ず出席するよう求める。

既に解説した内容を前提として授業を進めるので、欠席が多い場合、厳しい評価になることを理解して欲しい。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　哲学とは何か

ソクラテスの生涯と思想を紹介し、哲学とは何を問うものであるか、私たちの生活にはどのように関わってくるのかということを考える。

「私はどのような人か」という小レポートを、講義開始時に提出して欲しい。様式などは自由。

第２回　考えるとはどういうことか

「ゼノンのパラドックス」を、まず紹介する予定である。謎々か何かのように見えるこの問いかけは、私たちがものごとをどのように考えているかということを映し出している。考え、答えがわかったと思うところに生じやすい過ちについても、併せて考える。

第３回　自己疎外

私たちはどのようにして、今のこの自分になったのか。そこには自己疎外という現実が存在することを、多くの思想家が指摘し、警告している。そのありさまを考察し、自己回復という面についても考える。

第４回　ことばの働き

私たちは、自分で自由に考え、判断していると思っている。しかし、それは、ことばの働きによって大きく制約を受けている。ことばが誤って働く時、人間の判断も誤る。そのようなありさまについて考察し、私たちは何に気づいておかなければならないのかという点についても考える。

第５回　隠されたカリキュラム

学校は、学びを助ける場でもあるが、同時に、ある錯覚を与えてしまうものでもあると、イリイチは気づいた。それは何だろうか。大学生活を充実したものにするために、イリイチの言葉に耳を傾けてほしい。

第６回　存在と価値

価値に対する私たちの意識はどこから生じるのか。「存在」に対する考察から始め、「価値」につき動かされている私たち自身の生き方に注目する。

第７回　実存と価値

「実存」という捉え方に注目し、生の意味に触れる。さらに、「価値」を２つに分け、「失われぬ価値はあるか」という問いに立ち向かう。

第８回　日本の哲学

岡倉天心の美学を中心に、教育論・文明論をも視野に据えて論じる予定である。日本的感性は、どのような美学を生んだであろうか。

第９回　中国の哲学⑴

私たちの文化に様々な影響を与えた中国の哲学を紹介する。儒教は、単に身分の上下にこだわる窮屈な思想ではない。それは生き生きとした活力に満ちている。

第10回　中国の哲学⑵

老荘の思想は、単に虚無を見つめているのではない。無にさえ意味があることを教えている。孫子の言葉は、多くの成功者にヒントを与えた。人生の知恵を学ぼう。

第11回　イチローの哲学

イチローが語る哲学を探ろうとするのではない。哲学者がイチローの生き方・感じ方をみると、それらはどのように見えるかということである。坂本龍馬・清水宏保・甲野善紀らも登場する。

第12回　これまでの「私」

自分自身を振り返るための方法を、一つ紹介し、実施する。自分のために、自分だけのものとして、各自取り組んでもらいたい。いわゆる「自分史」なるものよりも、はるかに有効であると、担当者は感じている。

第13回　現代を如何に生きるか

現代社会はさまざまな矛盾を抱え、困難に直面しているが、学生諸君は、そのことにどれだけ気づいているだろうか。社会の問題や、これからの自分自身のあり方について、整理し、考え直してみようという授業となる。

第14回　公共哲学

公共性ということについて、どう考えるか。それは個人の尊厳と背反するものではないばかりか、個の尊厳によってこそ支えられ、個の尊厳の証とさえなるものである。哲学の領域における最近の話題について、ともに考えたい。

第15回　解説と試験

筆記試験は、担当者にとっては採点評価の対象であるが、実はそれにとどまらないものである。解答を作成することは、学生にとっては最終的な自己確認であり、自己表現でもある。解答というもののこうした面を理解している学生は、授業を聴くということの本当の意味を理解していると言っても過言ではない。

上記の点や、採点基準、受験する上で注意しなければならないことなどを説明し、試験を実施する。

使用教科書

教科書は特に用いない。必要に応じて、教材プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、次回のための予習となるような内容の問いを、課題として提示する。よく調べ、あるいは考えて、準備をするよう望む。それ以外の課題は、別に示す。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
宗教と文化		講義	松本　高志
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

宗教文化の多様性に対する理解を持つとともに、社会・文化のさまざまな領域が、宗教と密接に関わっていることを理解するようになることを、授業の目標とする。

授業の概要

日常経験によって証明できない秩序に関心を持ち、それによって日常の平安から人生の究極の意味にいたるまでの問題を解決したいと願う心が、宗教の根幹にある。本科目では、宗教体験、儀礼など、宗教一般の事項について解説するとともに、仏教・キリスト教などの個別の宗教や、現代の宗教事情について考察する。

ほぼ毎回、予習用のプリントを配布する。

学生に対する評価の方法

毎回、数分程度で仕上げられる小さな提出物を課す。これを含めて、積極的な授業参加態度（30%）と、学期末レポート（70%）により、評価する。詳しくは第１回授業時に説明するので、必ず出席するよう求める。また、レポートについては必要に応じて説明する。

既に解説した内容を全体として授業を進めるので、欠席が多い場合、厳しい評価になることを理解して欲しい。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　日本人は本当に無宗教か

宗教の定義、多神教と一神教などについて説明し、宗教というものの捉え方を考える。次いで、日本の宗教の特徴について解説する。

なお、「私にとって宗教とは何か」という小レポートを授業開始時に提出して欲しい。様式などは自由とする。

第２回　古代神話のヒーローたち

古代神話に登場するヒーローたちを紹介し、後世に与えた影響などについて考察する。

第３回　イエス・キリストの７つの秘密

イエスの生涯などについては、実は謎が多い。常識とされているものについても、実はいくつもの間違いがある。それらを順に解き明かしながら、キリスト教の世界をのぞいてみよう。

第４回　コーランの響き

キリスト教とイスラム教を中心に考察する。キリスト教の教会の体制、イスラム教の特徴などを解説し、最後に、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教について、いくつかの点で比較を試みる。

第５回　曼荼羅の神秘

仏教の成立とその後について概観し、次いで密教の特徴について説明する。密教をわが国に伝えた空海は、何を夢見たのか。絢爛たる曼荼羅は、何を語っているのか。ビデオ視聴の予定。

第６回　一休さんの悟り方

頓知で知られる一休さんは、実在した禅僧であり、純粋な悟りの世界を徹底して探求した。禅の文化と、禅寺の生活などについて紹介する。ビデオ視聴の予定。

第７回　浄土への祈り

浄土を祈り求めた浄土教と、仏国土を建設したいと願った日蓮宗について、解説する。仏教の世界に、「祈り」はあるか。

第８回　「道」の世界
剣・弓・茶などの世界に、宗教がどのように関わっているかを考察する。私たちの祖先が、単に表面的な完成には満足せず、究極の世界を目指したことがわかるであろう。

第９回　千と千尋の宗教学
宮崎ワールドには様々なからくりがある。『千と千尋の神隠し』を例にとり、そこに様々な神話や民俗が生きていること、この物語にはどのようなからくりが隠されているのかということなどを探究し、「宗教」を新たな角度から考察する。

第 10 回　豆腐小僧のかわいい悪戯
民話の世界に生きている妖怪やその他の不思議な話、年中行事の宗教的な意味など、身の回りにある「宗教」について、紹介する。

第 11 回　花子さんはなぜ学校に現れるか。
宗教という文化は決して過去のものではない。「花子さん」や「口避け女」にも歴史があり、そして現代人の心の中に、今も住んでいる。現代都市文化の中の宗教について解説する。

第 12 回　枯山水の宇宙
わが国の宗教建築や庭園などのいくつかを取りあげて紹介し、それらの鑑賞のしかたの要点を簡単に解説する。ビデオ視聴の予定。

第 13 回　謎の微笑
仏像にはそれぞれに意味があり、仏師の工夫がこらされている。仏像の種別や意味、鑑賞のしかたなどを、いくつかの例を紹介しながら説明する。ビデオ視聴の予定。

第 14 回　残照の聖ミカエル
ヨーロッパの宗教芸術のいくつかを取りあげて紹介する。キリスト教建築・美術の例としてモン・サン・ミシェルとシャルトル大聖堂を予定している。また、ガウディの信仰と作品の関わりについても、解説したい。ビデオ視聴の予定。

第 15 回　現代社会と宗教
現代の諸宗教の動向について、まず紹介する。次いで、世界の宗教文化がどのように変貌しつつあるか。また、諸科学がどのように宗教に直面しつつあるかということについて解説し、簡単な未来展望も行いたい。

使用教科書

プリントを配布して用いる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、「読み物」と題した予習用教材プリントを配付する予定である。これを事前に読んで積極的に学びたいという学生に、受講をしてもらいたい。プリントを配布しない回には、予習方法を別に示す。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
現代社会と倫理		講義	松本　高志
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 管理栄養学部・ヒューマンケア学部

授業の到達目標及びテーマ

倫理とは何かということをまず理解する。さらに倫理上に生じるアンビバレント（両価的）な状況について具体的に理解するとともに、それらの問題に対して自分なりの判断をすることができるような能力を育てることを目標とする。

授業の概要

倫理の問題について、特に現代社会の諸問題を意識しながら、そしてできるだけ意識する視野を広くとりながら、共に考えていこうとする。近年話題になったさまざまな出来事、あるいは新たに登場してきた問題などを視野に置く。なお、ほぼ毎回、予習の手がかりとなる「問題」を提示する。

問題意識を深めるために、小グループによる話し合いの時間を持つ予定であるが、その回数については相談の上変更する場合がある。

学生に対する評価の方法

予習のための課題への取り組みなど、積極的な授業参加（30%）と、学期末レポート（70%）により評価する。前項に示した「問題」に対し、簡単なレポート形式で回答を示した学生には、別途評価をする。詳しくは第１回授業時に解説するので、必ず出席するよう求める。また、レポートについては必要に応じて説明する。

なお、既に解説した内容を前提として、授業を進めるので、欠席が多い場合、厳しい評価になることを理解して欲しい。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　倫理学とは何か
「倫理」という言葉について解説した後、本科目で扱う問題について、具体的に展望していく。
「私の心温まる体験」という小レポートを、授業開始時に提出してほしい。

第２回　黄金のルール
多くの文化圏で共通に語られる道徳律は、一見自明に見える。しかし、本当であろうか。問題の深さに、できるだけ早く気づいておきたい。

第３回　男らしさと女らしさ
さまざまな文学作品などを例に、ジェンダーがどのように倫理上の問題に絡んできたか、今はどうあるのかということを考える。

第４回　総合的学習⑴
小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。

第５回　「男と女」再考
討論をした経験を踏まえて、改めて、この問題を考え直す。倫理上の問題に関して、我々がどれだけ、「エートス」（この語については、第１回に解説する）に左右され、「常識」にとらわれているかということも、考えたい。ビデオ視聴の予定。

第６回　孤独について
「孤独」について考えると、人間の社会性のある一面が見えてくる。プライバシーの問題にも触れながら、考えてみたい。

第７回　「いじめ」の構造
なぜ、そしてどのように「いじめ」は起こるのか。どのような対策があるのか。いじめる側、いじめられる側、さして周囲の人々という、それぞれの視点を区別して、この問題について、考えていく。

第８回　総合的学習⑵
小グループによる話し合いの時間を持ち、問題意識を深める。
第９回　環境問題はどこが難しいか
環境問題に対する私たちの心構えに注目し、具体例を取り挙げながら、そこに問題点がいくつも潜んでいることを説明する。
第10回　環境問題の現状と倫理
「環境」は、現在どのように問題になっているのか、さまざまな問題が叫ばれながら、なぜ、対策が後手にまわりがちなのかという点について、ともに考える。
第11回　生命と倫理⑴
身体性に注目し、私という存在を身体の面から考えてみる。私の身体は、どのように社会に直面しているであろうか。働きかけるだけでなく、社会から、どのように見られ、扱われているだろうか。生と死の社会性について、また、重病の患者をめぐる生と死に関わる葛藤などを考察する。
第12回　生命と倫理⑵
生と死にまつわる倫理上の問題について、また、動物愛護に関わる問題について考察する。諸君は、動物に「権利」はあると思うだろうか。今から約100年前、１頭のイルカを保護するための法令が発せられた。倫理学的には、動物の「権利」に関する偉大な考察がそこにあると考えることが可能である。これらを、広く、生命全般の問題として考察する。
第13回　職業と倫理⑴
さまざまな職場にとって、あるいはそこに働く者にとって、倫理とは何であろうか。近年のさまざまな事例をも視野に入れながら、できるだけ具体的に考察したい。
第14回　職業と倫理⑵
回に引き続き、特に個人の問題として考えていく。組織的決定が曖昧で、個人として意思決定を迫られる時、問題はどのようにひろがるだろうか。
第15回　まとめ
環境・生命・職業にわたるこれまでの考察を整理し、必要に応じて補足を行う。

使用教科書

主として教材プリントを用いる。

自己学習の内容等アドバイス

ほぼ毎回、予習となるような内容の問いを提示する。さらに、「総合的学習」のためにはかなりの時間をかけた予習が必要となるが、これらについては授業中に説明する。

［授業科目名］ 現代社会と倫理		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 真田　郷史
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

テーマ「現代社会における諸問題を、倫理的視点から考える。」

現代社会において、具体的にどのような問題が起こっているのか、また、それらの何が問題であるのかを正しく理解した上で、さらには、それらの問題に対する自分なりの意見を持てるようになることを、本授業の到達目標とする。

授業の概要

２０世紀の後半から主にアメリカを中心として、現代社会の諸問題に対して、倫理学的な視点からのアプローチが試みられて来た。「応用倫理学」と呼ばれるそれら一群の問題領域は、非常に多岐にわたっているが、その中から「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」といった３つの問題領域を取り上げ、それぞれの領域における典型的・基本的な問題を紹介する。

学生に対する評価の方法

毎回、講義内容に関する短いレポートを課すので、それら全１５回分のレポート評点を基に、科目としての評価・単位認定を行う。講義内容の理解（５０％）・課題への積極的取り組み（５０％）が、受講生には、毎回要求されるものと考えておくこと。本授業は、期末試験および再評価を、実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

「生命倫理」「環境倫理」「情報倫理」の３つの領域から、それぞれ４つないし５つのトピックを具体的に紹介して行くとともに、各講義の最後に課題を提示するので、講義時間内に所定のレポート用紙に「解答」を記入し、提出してもらう。課題作成のための作業時間は１５分程度を予定しているが、講義内容の理解を前提としているので、受講中も気を抜かないように。ただ漫然と聴いているのではなく、常に、自分から問題を考えようとする積極的姿勢で、受講して欲しい。

第１回　ガイダンス　「応用倫理学」について
第２回　生命倫理（1）　脳死をめぐる問題
第３回　生命倫理（2）　臓器移植をめぐる問題
第４回　生命倫理（3）　生殖医療をめぐる問題
第５回　生命倫理（4）　遺伝病をめぐる問題
第６回　環境倫理（1）　人間と自然をめぐる問題
第７回　環境倫理（2）　自然の権利をめぐる問題
第８回　環境倫理（3）　世代間倫理をめぐる問題
第９回　環境倫理（4）　地球全体主義をめぐる問題
第10回　環境倫理（5）　人口爆発をめぐる問題
第11回　情報倫理（1）　匿名性をめぐる問題
第12回　情報倫理（2）　プライバシーをめぐる問題
第13回　情報倫理（3）　著作権をめぐる問題
第14回　情報倫理（4）　ネット社会と現実社会をめぐる問題
第15回　情報倫理（5）　言語グローバリズムをめぐる問題

使用教科書

なし（必要に応じて、適宜、資料プリントを配布する。）

自己学習の内容等アドバイス

日頃から、TV のニュースを観たり、新聞に目を通すなどして、社会の中で何が起こっているのか、現在、何が問題になっているのかを、自分から関心を持って知ろうと努めること。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
心の科学		講義	赤嶺　亜紀
［単位数］	［開講期］	［必修・選択］	備考
2	１～４年次前・後期	選択	ヒューマンケア学部は４年次のみ

授業の到達目標及びテーマ

ヒトの心のはたらきを科学的にとらえ、人間を理解する際の新たな視点を得ることをめざす。

授業の概要

心理学入門。心理学psychologyとは、psycho（精神，心）のology（科学，学問）である。この講義では心理的事象に関する実証的データに基づいて、ヒトの行動について解説する。

学生に対する評価の方法

授業中に課すレポート（おもに講義の要約）と学期末試験の成績により評価する。評価の配分はおよそ、レポート：期末試験＝1：2　を考えているが、受講者の課題達成度により若干、変動することがありうる。授業に出席することは当然のことであるから、特別に出席点を加味することはない。

なお、この授業は再評価を実施しない。その点には十分留意すること。

授業計画（回数ごとの内容等）

第 1回 ：　導入：心理学は何を研究するのか
第 2回 ：　環境の認知（1）：感覚・知覚
第 3回 ：　環境の認知（2）：注意
第 4回 ：　学習（1）：古典的条件づけ
第 5回 ：　学習（2）：オペラント条件づけ
第 6回 ：　記憶（1）：記憶のしくみ
第 7回 ：　記憶（2）：記憶の変容と忘却
第 8回 ：　情動と動機づけ（1）：動機づけ
第 9回 ：　情動と動機づけ（2）：ストレス
第10回 ：　対人関係・集団（1）：対人認知
第11回 ：　対人関係・集団（2）：社会的影響
第12回 ：　パーソナリティ（1）：個人差の理解
第13回 ：　パーソナリティ（2）：自己認知
第14回 ：　心理学の最近のトピックス
第15回 ：　試験とまとめ

使用教科書

指定の教科書はなし。毎回、プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

ジャンルにとらわれず、自らの興味にそって読書することがよいと思います。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
心の科学		講義	藤井　真樹
[単位数] ２	[開講期] １～４年次後期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部は４年次のみ

授業の到達目標及びテーマ

心理学を学ぶということは、「心理学」という一つの窓から世界を見る態度を身につけることです。本講義では、大学生のみなさんにとって身近な問題となりうるテーマについて、科学としての心理学の知見に基づきながら考えることによって、自分なりの人間観を養うことを目指します。

授業の概要

自分の心、他者の心について考えることは、学問の内に留まらず、今ここを生きている生身の自分自身の在り方、生き方、人間形成にそのままつながっていきます。このことを踏まえ、本講義では、大学生のみなさんにとって特に重要となる、他者理解、自己理解、他者との関係における自己の育ち、社会化・文化化といったテーマを取り上げます。

学生に対する評価の方法

試験の評価によります。ただし、授業内でのレポート、授業態度なども加味します。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　心理学とは何か - 心理学を学ぶことの意味
第２回　知覚・認知 - なぜ世界はこのように見えるのか
第３回　感情 - 感情は何のためにあるのか
第４回　自己Ⅰ - 私はどこにあるのか
第５回　自己Ⅱ - 私はどのように構成されるのか
第６回　自分を知る
第７回　自己Ⅲ - 自己に関するさまざまな事象
第８回　自己と他者 - コミュニケーションとは何か
第９回　記憶と学習Ⅰ - 人の行動はなぜ変わるのか
第 10 回　記憶と学習Ⅱ - 記憶するということ
第 11 回　発達Ⅰ - 人間の原初的在り方としての乳幼児期
第 12 回　発達Ⅱ - 愛着のモデル
第 13 回　発達Ⅲ - 年を重ねることの意味
第 14 回　これまでの授業のまとめ
第 15 回　解説と試験

使用教科書

適宜資料を配布し、参考文献も紹介します。

自己学習の内容等アドバイス

授業で学んだものの見方、考え方を糸口として、自分自身の身の回りの出来事、人間関係、社会の動きについて新しい目で捉え直してみることが重要です。

［授業科目名］ 青年期の心理		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 松尾　美紀
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 子どもケア専攻を除く

授業の到達目標及びテーマ

生涯発達の視点から青年期をとらえる視点をもち、成人期への移行の姿勢を自分なりにとらえていくことを目標とする。またレポートを書くことで、各テーマに対する自分の考えを客観的に見直していく。

授業の概要

本講義は、青年心理学の入門的内容を扱う。大学生にとって身近な身体の変化と心の変化、恋愛とセクシャリティ、性役割、インターネットにおけるコミュニケーションそして自分探しといったテーマについて、最近のニュースを取り込みながら考えていく。

学生に対する評価の方法

再評価はしない。期間中課す 4 回のレポート（20%）と終盤に行う筆記試験（80%）から総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　「青年期」の成立
第２回　成長する身体と性役割意識１－身体の成長と成熟する性
第３回　成長する身体と性役割意識２－性別と性役割意識
第４回　認知能力の発達１－抽象的な認知能力と情報処理能力
第５回　認知能力の発達２－他者視点の取得
第６回　成長する私１－自己と自我
第７回　成長する私２－アイデンティティの確立
第８回　友人関係の発展－社会的比較理論と友人関係の発達
第９回　彷徨する親子関係－親子間のコミュニケーション
第 10 回　恋愛と性行動１－恋愛に関する理論
第 11 回　恋愛と性行動２－恋に落ちるとき
第 12 回　恋愛と性行動３－恋愛の進展と失恋
第 13 回　恋愛と性行動４－セクシャリティの発達
第 14 回　レポート講評と評価
第 15 回　恋愛と性行動５－恋愛・セクシャリティにおけるトラブル

使用教科書

「青年心理学への誘い－漂流する若者たち－」　和田実・諸井克英著　ナカニシヤ出版

自己学習の内容等アドバイス

事前に教科書を読んでおくと、理解しやすい。またレポートを書くにあたり、新聞や雑誌等の関連記事にも目を通しておくとよい。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
日本の歴史		講義	今井　隆太
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

現代日本人のものの考え方や感じ方が、国家の歴史の枠組みの中でどう形成されてきたか、それを自分で理解し、日本のことをよく知らない誰かに紹介・説明できるようになるのが目標。日本のことをよく知るアメリカ人エドウィン・O・ライシャワー(1910-1990)の著書を材料にして、日本の歴史、東アジアの国際関係のなかでの日本の位置、日米関係を主軸とするグローバルな関係性のなかでの日本の未来などに言及する。

授業の概要

あらかじめ指定したテキストの箇所、およびプリントの内容解説を基礎として、出席者各自が、自分の頭で考え問題に取り組む。高校までの歴史の授業とは違って、歴史上の細かな事実を知識として蓄えているかどうかは問わない。事実はそれ自体が判断の結果であるし、判断は歴史意識に左右され、歴史意識はまた歴史的に形成されてきたものである。そのことを踏まえ、歴史をもういちど自分の頭で捉えなおす機会を提供したい。

学生に対する評価の方法

毎回、テキストと講義内容に沿った小テストを実施する。これが評価材料の全てである。小テストではテキストの理解度とともに、自分なりの思考が働いているかを見る。基本的な材料は提供されるのだから、自分で考えてみることが肝要である。細かな知識ではなく思考力と文章力を見る。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回：まえがき、伝統的な日本・国土と民族、中国の模倣時代、
第２回：国風文化の発展、封建社会の発展
第３回：封建社会の成長と変遷
第４回：国内の再統一
第５回：後期封建制の変容
第６回：近代化される日本・近代国家への移行
第７回：立憲政治と帝国
第８回：経済と政治の発展
第９回：軍国主義の台頭
第 10 回：第二次世界大戦
第 11 回：戦後の日本・アメリカの占領
第 12 回：国家の存続
第 13 回：戦後の達成
第 14 回：懐疑の十年
第 15 回：世界のなかの役割

各回の項目はテキストの章立てに沿っている。進め方は、実際の進行に従って変えることがある。
遅刻しないこと。

使用教科書

『ライシャワーの日本史』エドウィン・O・ライシャワー著、國弘正雄訳、講談社学術文庫

自己学習の内容等アドバイス

テキストをあらかじめ読んでおくことは必須である。高校以前の歴史教科書をいっぺん読んでおくと、理解しやすい。

［授業科目名］ 西洋の歴史		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 早坂　泰行
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

わたしたちが現在自明のものとしている思考・行動様式や社会のあり方は、どのようにして形成されてきたであろうか。本講義では主として中世後期～19 世紀までの西ヨーロッパの歴史をつうじて、そうした問題を考えたい。ヨーロッパ史上の大転換点である産業革命・フランス(政治)革命と、それにさきだつ約 300 年間は、一般に「近代を準備した時代」といわれる。講義では 19 世紀も含め、この 400 年に生じた出来事(宗教改革や近代国家の萌芽など)を毎回扱いながら、中世から近代ヨーロッパへの道筋をたどってゆく。またそれを通じて、わたしたち自身の社会の成り立ちについても改めて考える手がかりを提示したい。

授業の概要

中世後期～近代（13 世紀～19 世紀）にかけての西欧の歴史を講義する。ヨーロッパ全体にかかわる重要な展開を大づかみに捉えつつ、ここでは可能な限りイングランド（イギリス）の具体的な展開にも目を向けたい。まず第 1～3 回は中世盛期～後期の世界について述べる。その後は中世との比較を念頭に、第 4～7 回では宗教改革や主権国家の黎明、第 8～10 回ではヨーロッパ大航海時代を主要なトピックに据えながら、近世ヨーロッパの国家・社会・人間に生じた変化を追う。最後に 18 世紀末の二つの変化（産業革命・フランス革命）とともに、それが現代にまでどのような影響（あるいは問題）を及ぼしているか、という点についても取り扱う。授業に際しては PowerPoint など視聴覚教材も利用し、その時代ごとの具体的な衣食住や技術のありよう、また社会の変化に関するイメージをより容易に捉えられるよう配慮する。

学生に対する評価の方法

期末考査(80%)、および授業のなかで実施する課題レポート(20%)の結果から、内容の理解度を総合的に判定する。なお、この授業は再評価を認めないので、その点に十分留意すること。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　イントロダクション（授業上の諸注意）
　中世後期の生活と社会（１）　私たちの世界とは異なる「国家（公権力）」と社会のかたち
　～封建社会のしくみ、教会の役割、自力救済（決闘・復讐）の慣習
第２回　中世後期の生活と社会（２）　私たちの世界とは異なる日常生活の側面
　～家族関係、「小さな大人」としての子ども、貧者（貧しさ）へのまなざし
第３回　中世後期の生活と社会（３）　イングランドを事例に、中世の封建社会とその展開をみる
　～マグナ・カルタと身分制議会にいたるまでのアンジュー帝国
第４回　中世末・近世の社会変動（１）　英仏百年戦争 ～黒死病と民衆蜂起の時代
第５回　中世末・近世の社会変動（２）　マルティン・ルターの宗教改革と、イングランドでの国教会の成立
　～高まる民衆の宗教運動と、宗派対立により二分されるヨーロッパ
第６回　中世末・近世の社会変動（３）　宗教戦争のなかから成立する初期の近代国家
　～三十年戦争と、「規律」を内面化した「近代人」の誕生
第７回　中世末・近世の社会変動（４）　ピューリタン革命と名誉革命
　～イギリスにおけるふたつの革命と複合国家の時代
第８回　世界の一体化のなかのヨーロッパ（１）　ヨーロッパの大航海時代
　～「海からの世界史」の時代におけるヨーロッパと世界の諸地域
第９回　世界の一体化のなかのヨーロッパ（２）　銀・香辛料・コーヒー・砂糖そして奴隷（その１）
　～スペイン、オランダを経て英・仏へと推移する世界貿易の覇権
第１０回　世界の一体化のなかのヨーロッパ（３）　銀・香辛料・コーヒー・砂糖そして奴隷（その２）
　～イギリス・コーヒーハウスのインパクトと、その背景としての奴隷制度
第１１回　産業革命とフランス革命（１）　グローバルな文脈のなかでみるイギリス産業革命
　～産業革命のイギリスと、世界の他の諸地域（インド、カリブ海周辺等）との関係
第１２回　産業革命とフランス革命（２）　フランス革命とナポレオンへの対応
　～フランス革命・ナポレオンへの対応、および 19 世紀の自由主義とナショナリズム
第１３回　産業革命とフランス革命（３）　ヨーロッパにおける技術・産業の発展と「帝国主義」
　～とくに 19 世紀後半のアフリカにおける植民地支配と「文明化の使命」
第１４回　帝国主義の時代から第一次世界大戦前夜へ
第１５回　全体の総括と、期末試験（60 分）

使用教科書

特にない。毎回の授業ごとにレジュメを配布する。参考文献については、適宜各回のレジュメに掲載する。

自己学習の内容等アドバイス

授業後に要約・要点の整理をおこなうなどして、その回の内容を自分なりにまとめるとよい。単なる事実の羅列ではなく、過去との対比の中で現在の社会を捉えなおしながら、考えや論点をまとめること。

［授業科目名］ アジアの歴史		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 鵜飼　尚代
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

最近日本と中国、韓国との関係はたいへんぎくしゃくしている。しかし、「東アジア共同体」などという語が話題になったように、結束すれば世界における一大勢力となることは確かだ。ユニットとしてのアジアを考える場合、それぞれの国・地域の過去を考慮しないわけにはいかない。そうした歴史を踏まえて現在を見なおし、それぞれの国・地域の特質・特長を総括してこそ「東アジア共同体」の可能性も考えられよう。

また学生自身の関心に沿って東アジアを見ることも重要であると思われるので、学生は各自でテーマを決め、調査をしてもらいたい。

授業の概要

世界史的観点からアジア史、特に東アジアの諸問題を考察する。中国史が東アジア史の一大要素であることは確かであるので、近年経済的にも政治的にも注目を集める中国の近代化の流れを中心に、東アジアの近代化を概観する。受講生には各自でテーマを選び、調査をして、レポートにまとめてもらう。提出されたレポートは、担当教員が授業中にできるだけ紹介する。

学生に対する評価の方法

講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。そこで、a. レポートを課す。レポートを担当教員が紹介するので、b. それを聴いての意見や感想を毎回提出してもらう。講義内容については、c. 期末試験も予定しているので、評価は a（20%）、b（30%）、c（50%）を総合して判断することになる。

授業計画（回数ごとの内容等）

授業は以下の通り進める予定である。

第１回　授業についてのオリエンテーション
　　授業の目的、進め方、学生に求める姿勢等を説明する。
第２回　中国の近代化①（アヘン戦争～太平天国の乱）
第３回　中国の近代化②（日清戦争前後）
第４回　中国の近代化③（義和団事変前後）
第５回　中国の近代化④（中華民国成立前後）
第６回　中国の近代化⑤（中華人民共和国成立前後）
第７回　中国の近代化⑥（現代中国への道）
第８回　朝鮮半島の近代化①（日清戦争前後）
第９回　朝鮮半島の近代化①（日清戦争前後）
第 10 回　朝鮮半島の近代化③（朝鮮半島の独立前後）
第 11 回　朝鮮半島の近代化④（南北分離前後）
第 12 回　朝鮮半島の近代化⑤（現代朝鮮への道）
第 13 回　ベトナムの近代化①（独立前後）
第 14 回　ベトナムの近代化②（現代のベトナムへの道）
第 15 回　試験とまとめ

但し、学生のレポートを授業中に紹介するので、進度が変わることもある。

使用教科書

必要に応じてプリントを配布する。

【参考図書】: 布目潮渢、山田信夫編「新訂東アジア史入門」（法律文化社）

自己学習の内容等アドバイス

講義が広範にわたるので、受講生は自主的に内容を深める努力をしてもらいたい。高校で使った年表や地図帳での確認、歴史事典での調査でも知識は深まり、また広がるであろう。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
歴史と社会		講義	安井　克彦
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
２	１年次前期	選択（教職必修）	幼児保育専攻のみ （小学校教員免許取得用に開講）

授業の到達目標及びテーマ

小学校社会科の学習内容の研究が主たる目的である。小学校 3 年から 6 年までの学習内容は、多岐にわたっており、それらは地理、歴史、公民的分野の基礎的かつ専門的内容である。それらを理解することが目標であるが、同時に、小学校社会科の目標である、公民的資質を培う上で大切な時事問題をＮＩＥ方式で毎時間取り上げ、社会への関心を強めることも目標とする。

授業の概要

社会科は、社会生活を総合的に理解することを通して、公民的資質を養うという重要な役割を果たす教科である。日本の国土や地域の産業、地理的環境、文化財や先人の業績、歴史と伝統、政治の働きと考え方国民生活、国際社会における日本の役割等について、考える力を養成する。また、社会科への理解・態度・能力を身につけ、記述内容・写真・統計資料・地図等の資料を活用することができる柔軟な探究力を養うことを狙いとしている。

学生に対する評価の方法

授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度（20%）、小テスト・レポート（30%）、テスト（50%）などを総合的に評価する。試験の欠席は認めない。本授業は再評価しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　社会科の目標及び授業全体の紹介
第２回　　社会科教育の教科内容
第３回　　小学校第３学年社会科（私たちの町・日進市、人々の仕事とくらし）
第４回　　小学校第３学年社会科（暮らしを守る、火事や事故）
第５回　　小学校第４学年社会科（ごみ、水道）
第６回　　小学校第４学年社会科（郷土の歴史、私たちの県・愛知県）
第７回　　小学校第５学年社会科　（私たちの生活と日本の農業、工業）
第８回　　小学校第５学年社会科　（私たちの生活と情報、国土と環境）
第９回　　小学校第６学年社会科（歴史的分野）
第 10 回　　小学校第６学年社会科（歴史的分野）
第 11 回　　小学校第６学年社会科（政治経済、国際理解）
第 12 回　　具体的な人物学習の事例①近世の人物（伊能忠敬）　　・レポート
第 13 回　　具体的な人物学習の事例②明治維新の人物（福沢諭吉）
第 14 回　　各種統計資料の利用方法
第 15 回　　学習のまとめと試験

使用教科書

特に使用しない。適宜、テーマ関連の資料を配布する。

自己学習の内容等アドバイス

社会への関心を持つために時事問題を取り上げ、新聞をＮＩＥとして活用し、輪番制で発表するので、つねにマスコミ等の時事問題の動向に注意し、自分なりの感想や意見を持つようにすること。毎回、授業の感想・疑問点等を提出するので、授業に集中すること。

［授業科目名］ 歴史と社会		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 安井　克彦
［単位数］ ２	［開講期］ ２～４年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

社会科学を学習するとき、常に歴史的・社会的に見ることが、物事をより深く、本質的に見ることになる。そのことが、正しい社会観や世界観を作っていくことになる。その意味で、日本の教育を「歴史」と「社会」の側面から追究させたい。高校日本史を専攻していない学生も多いと思われるので、さまざまな資料・史料等を提示して、学生が興味を持つようにさせる。

授業の概要

日本の社会と歴史を教育の視点から見ようとするものである。「歴史」と「社会」が教育を規定する面もあるが、逆に「教育」によって社会や歴史が切り拓かれるという面も見られる。明治維新の「学制」発布から 150 年近く経ったことになる。この間の教育、学校、子どもの様子を「歴史」や「社会」と関連して追究しようとするものである。

学生に対する評価の方法

授業への参加活動を重視する。関心・意欲・態度（30%）、レポート（20%）、試験（50%）などを総合的に評価する。授業ごとの授業感想・レポートを評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　オリエンテーション・歴史的・社会的な見方について
第２回　　近代教育制度の成立と展開
第３回　　小学校の普及と子どもの生活の変化
第４回　　天皇制教育体制の確立
第５回　　明治期小学校教育の実態　レポート
第６回　　中等教育の拡充、高等教育の拡大
第７回　　大正デモクラシー期における社会と教育の再編
第８回　　都市新中間層と農村・都市下層の教育
第９回　　大正自由教育の高揚
第 10 回　　貧窮する農村、変化する社会　レポート
第 11 回　　戦時体制下の学校と子ども
第 12 回　　敗戦直後の日本の教育、占領政策と戦後改革
第 13 回　　新学制の展開、戦後教育の新段階
第 14 回　　高度経済成長後の社会と教育
第 15 回　　学習のまとめと試験

使用教科書

特に使用しない。授業に関連する資料を適宜配布する。
参考図書『教育にから見る日本の社会と歴史』

自己学習の内容等アドバイス

毎時間課題を提出するので、事前によく調べておくこと。授業時に紹介する図書などをできる限り読むようにすること。

［授業科目名］ 日本の文学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 大島　龍彦
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 前期・後期リピート

授業の到達目標及びテーマ

智恵子抄の世界を知る。
詩の分析とその詩の背景を学ぶことによって、詩の深層に迫る。
学習の課程により思考力と想像力を涵養する。

授業の概要

詩集『智恵子抄』の各詩の分析を通して、彫刻家で詩人の高村光太郎が一人の女性智恵子を如何に愛し、如何に表現したのかについて学ぶ。

学生に対する評価の方法

主にテストと授業に取り組む姿勢によって評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・奇縁ということ）
第２回　文学ということ・作品へのアプローチの方法について（例えば詩「涙」の分析を通して）
第３回　『智恵子抄』前史（二人の生誕から出会いまで）
第４回　『智恵子抄』前詩「あをい雨」について・作品へのアプローチ再確認
第５回　第１部の世界
　詩「人に」、詩「或る夜のこころ」、詩「おそれ」とその背景
第６回　詩「或る宵」とその背景
第７回　詩「郊外の人に」、詩「冬の朝のめざめ」とその背景
第８回　愛の統合的定義と『智恵子抄』について
第９回　詩「深夜の雪」、詩「人類の泉」とその背景
第10回　詩「僕等」、詩「愛の嘆美」、詩「晩餐」とその背景
第11回　９年間の詩空白と二人の生活
第12回　第２部の世界
　詩「樹下の二人」～　詩「美の監禁に手渡す者」とその背景
第13回　第３部の世界
　詩「人生遠視」～　詩「梅酒」とその背景
第14回　テストと解説
第15回　『智恵子抄』その後

使用教科書

テキスト・大島龍彦・大島裕子編著『智恵子抄の世界』新典社
参考図書・大島龍彦『智恵子抄を読む』新典社・大島裕子『智恵子抄を歩く』新典社

自己学習の内容等アドバイス

本時に扱う詩について事前に鑑賞し、疑問を持って授業に臨むこと。授業後、本時で扱った詩とその背景について整理し、更に感想文を書くことが望ましい。

［授業科目名］ 英米の文学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 鈴木　薫
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

英米文学の世界に触れることで、英語学習に必要な一般常識である英語圏の歴史や文化に関する知識を獲得する。英語力のさらなる向上を目指す学習者にとって、英語圏の文学作品の背景にある歴史・社会・文化について知ることは重要となる。これらについての知識が豊富であれば、異文化理解が容易となり、コミュニケーション能力も向上するからである。国際語としての地位を確立している英語の文化的な基礎知識を獲得することは、グローバルに活躍する社会人を目指す者にとって役立つものとなるであろう。詩のリズムを学ぶことは、英語のプロソディを学ぶことであり、英語音声の表現力を培うものとなる。

授業の概要

英米文学の作品が誕生した背景であるイギリス・アメリカの歴史を辿りながら、代表的な作品を取り上げつつ、英米文学の歴史を概説する。次に、特定の文学作品を英語で鑑賞し、内容に触れることを通して、英語という言語の特徴についても学ぶ。さらに、英語の詩や歌詞に焦点をあてて解説し、文字と音声の関わりについて知識を深める。

学生に対する評価の方法

受講態度（10%）、英語圏の歴史と文学に関するテスト（45%）、米文学作品に関するレポート（15%）、英文学作品に関するレポート（15%）、英語の詩とプロソディに関するレポート（15%）を総合して評価する。本授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業の目的・内容・日程・課題・レポート・テストなどについての説明
　　　　英語圏の歴史と文学（古代）
第２回　英語圏の歴史と文学（中世）
第３回　英語圏の歴史と文学（中世）
第４回　英語圏の歴史と文学（近代）
第５回　英語圏の歴史と文学（近代・現代）
第６回　英語圏の歴史と文学に関するテスト
第７回　米文学作品の鑑賞
第８回　米文学作品の鑑賞
第９回　英文学作品の鑑賞
第10回　英文学作品の鑑賞
第11回　英語音声の変化とプロソディ
第12回　英語の詩の韻律
第13回　英語の詩とプロソディ（マザーグース）
第14回　英語の詩とプロソディ（ロック・ソウル・他）
第15回　英語の詩とプロソディ（ポピュラーソング・他）

使用教科書

随時、プリントを配布

自己学習の内容等アドバイス

毎回配布されるプリントを、年代ごとに整理すること。
歴史上の出来事が、言語や文学に与える影響に着目し、因果関係を把握する。
授業で紹介する文学作品の日本語に翻訳したものを読んだり、映画化されたものと鑑賞したりすることで、作品について理解が深まる。
英語の音声変化やプロソディの理解を容易にするため、英語の歌に積極的に触れることを薦める。

［授業科目名］ 日本の憲法		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 加藤　英明
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

国の最高法規である憲法の原理を学ぶ。憲法の由ってきたる理念、および歴史的淵源に遡って考察することで、日本国憲法のより深い理解を身につける。また憲法の解説を通じて、社会知識、教養をも涵養する。すなわちテーマは、憲法の概説である。

授業の概要

国の最高法規であり、国の基本体制を規律する憲法について概説する。国民主権、人権尊重、平和主義など日本国憲法の原理を学び、あわせて社会的視野の拡大にもつとめる。

受講者の希望に応じ、随時時事問題をとりあげる。新聞が苦労なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。

学生に対する評価の方法

学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度など加味して採点する。試験では、憲法の意義や憲法の基本的概念の理解度を主に問う。原則として、再評価は行わない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　教養とは何か
第２回　憲法とは何か
第３回　憲法とは何か（続）
第４回　社会契約説について
第５回　社会契約説について（続）
第６回　憲法の歴史　世界
第７回　憲法の歴史　世界（続）
第８回　憲法の歴史　日本
第９回　憲法の歴史　日本（続）
第10回　天皇制と戦争の放棄
第11回　三権分立について
第12回　自由と平等について
第13回　論文の書き方
第14回　社会権について
第15回　筆記試験（90分）

使用教科書

教科書というわけではないが、『六法』は必携。（すでに六法をもっている者はどの出版社のものでも可）

自己学習の内容等アドバイス

講義を理解するための復習・予習は勿論として、日頃、新聞･テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結局の早道である。読書、映画･ドラマの鑑賞も大いに薦める。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
日本の憲法		講義	早川　秋子
[単位数] ２	[開講期] １年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻

授業の到達目標及びテーマ

周知のごとく、日本は、第二次世界大戦終結のためにポツダム宣言を受諾し、今後の近代国家のあり方を憲法に示した。国民主権・平和主義・基本的人権の尊重を 3 本柱とする憲法の内容を理解し、国民の権利を尊重するとは具体的にどのようなことか等、事例の整理を通して理解し、各自が自分の言葉で権利義務、平和維持、国づくりのあり方を考え、他者に伝えることができるようにしたい。

授業の概要

憲法の歴史を踏まえながら、基本的人権を判例を通して整理する。法の下の平等や表現の自由を身近な問題に照らし合わせながら整理する。平和維持に関する問題では、湾岸戦争以来の国際社会の動きを軸にして自衛隊問題や国際協力について整理する予定である。

必要に応じてプリント配布、ＤＶＤやパワーポイントを使用する。

学生に対する評価の方法

積極的に参加する姿勢を強く求める。当然のことながら私語や内職は厳禁である。

①受講態度

②不定期に行う小テスト（講義時間中にレポートを作成してもらうことがある）

③最終評価（筆記テスト）

（①20 パーセント＋②20 パーセント＋③60 パーセント）

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　（オリエンテーション）憲法とは何か　どのような内容であるかを理解する
第２回　国家や国民について考えてみよう　個人の尊重、国民主権の指す国民とは何か
第３回　外国人の参政権は認める必要があるか
第４回　憲法13 条の幸福追求権の意味について考えてみよう
第５回　新しい人権　プライバシー権を例に整理してみよう
第６回　自己決定権　尊厳死を例に考えてみよう
第７回　司法権　刑罰・死刑制度・国民裁判員制度について考えてみよう
第８回　法の下の平等　非嫡出子相続分差別違憲裁判を例に平等を考えよう
第９回　インターネットと表現の自由
第10 回　信教の自由と政教分離　靖国神社に政治家が参拝すると騒がれる理由
第11 回　平和主義１　　戦争放棄　（歴史的視点から考える）
第12 回　平和主義２　　国際貢献　（政府の憲法解釈を基に考える・イラク自衛隊派遣違憲訴訟）
第13 回　社会権　　　生活保護の受給と生存権　　朝日訴訟を事例に整理しよう
第14 回　一票の重み　民主主義の政治制度　改憲の可能性
第15 回　総まとめ・評価

（筆記テストは最終日に行う　追試・再試はレポートで評価する）

使用教科書

大沢秀介編　『はじめての憲法』成文堂　2,200 円

自己学習の内容等アドバイス

講義で扱う内容は新聞やニュースで日々報道されている内容と深く関係しています。
いつ、どんな出来事が起こってどのような問題が生じたのか、それについて自分は何を感じたのかと、日々問題意識を持つことが、興味をもって憲法に取り組むきっかけになります。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
法と社会		講義	加藤　英明
[単位数] ２	[開講期] １～４年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

社会生活において、法というものがきわめて重要な役割を果たしているにもかかわらず、高等学校までの学校教育で教えられることはあまりに少ない。ほぼ初心者といってよい学生諸君に、法を一通り学んでいただくのが本講義である。また法の解説を通じて、社会知識、教養の涵養にもつとめる。すなわちテーマは、法の概説である。

授業の概要

民法を中心に、現代日本の実定法秩序を、ときに歴史的観点、国際的観点をも取り入れて、概説する。
受講者の希望に応じ、随時時事問題をとりあげる。新聞が苦労なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。

学生に対する評価の方法

学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば 100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、法というものの理解、「権利」など法に関する基本的概念の理解を主に問う。再評価は行わない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　教養とは何か
第２回　法のかたち　法とは、条文の形になったものだけではない。様々な法の形を考える。
第３回　国家法と非国家法　法とは、国家の法だけではない。国家以外の法にはどんなものがあるだろうか。
第４回　法と道徳　法と道徳は、同じものか、違うのか、違うとすればどこが違うのか、考えてみよう。
第５回　法と道徳（続）
第６回　法のちから　法は、何のために存在するのか。法の存在意義に関わる問題である。
第７回　法による制裁　前回にひき続き、法のちからについて学ぶ。
第８回　刑罰について　刑罰はいかなるものか。その種類と役割を紹介する。
第９回　裁判とはいかなるものか　裁判は、どんな役割を担っているのか。その意味を考える。
第10回　司法の制度　司法制度を、具体的に理解しよう。
第11回　民法とはいかなる法か　近代社会における民法の意味を考える。
第12回　損害賠償の法　民法における損害賠償の理論と、その役割を学ぶ。
第13回　財産所有の法　近代社会における所有権の意義を考え、その他の財産権についても通観する。
第14回　契約の法　我々は、気付いていないが毎日契約を結び、それを履行して生活している。その意味と法理を考察する。
第15回　筆記試験（90分）

使用教科書

教科書というわけではないが、六法は必携（すでに六法をもっている者はどの出版社のものでも可）。

自己学習の内容等アドバイス

講義内容理解のための復習・予習は勿論として、日頃、新聞･テレビなどのニュースに触れ、自分なりの感想、意見をもつようにつとめることが、社会教養を深める結局の早道である。法や裁判に関する読書、映画･ドラマの鑑賞も大いに薦める。それらの書名、題名については、講義中随時提示する。

［授業科目名］ 政治と社会		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 東江　日出郎
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

現代日本の政治と社会政治と社会に関する基礎的概念や制度などの内容を説明できるようになること。

授業の概要

現在の日本社会は、急速に少子高齢化が進んでいる。それは介護等の福祉政策を必要とする。またその財源も必要になる。だが、少子化は労働力減少をも意味し、財源確保を困難にしている。他方、日本社会の格差の拡大も深刻な社会問題である。経済成長をしながら、如何に所得の再分配をするかが課題である。国際社会では、異なる価値観に基づく国や地域間の対立激化で平和と安定に問題が見られ、経済成長を目指す国々による競争は、地球環境問題をも引き起こしている。国際平和や持続可能なグローバルな社会の確立が課題である。このような国内、国際社会の諸問題を解決するための政策を審議・決定・実施するのが政治の役割である。だが、そのような政治の制度やメカニズム、実態についての体系的理解は必ずしも容易ではない。本講義では、そのような政治の諸制度や実態に関する基礎知識を習得することを目標、内容とする。

学生に対する評価の方法

成績評価は、授業への参画態度（30%）と学期末試験（70%）の両方で行います。期末試験に関しては、試験問題を試験の１週間前までに通知します。そのため、試験に際してノートなどの持ち込みは禁止します。また、問題自体を予め通知するため、評価は厳しく行います。試験の出題形式は、大問５つの内、３つ選択して論述形式で解答してもらいます。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　導入(授業の概要説明及び評価手法などの説明)
第２回　政府は何をすべきなのか
第３回　世論と選挙
第４回　政党の役割
第５回　選挙制度と政党
第６回　議会の役割
第７回　内閣と官僚制度
第８回　マスメディアと政治の関係
第９回　利益団体、NPO と政治
第 10 回　財政・金融政策
第 11 回　福祉政策はなぜ必要？
第 12 回　地方分権と政治
第 13 回　公共事業と政治
第 14 回　外交と内政
第 15 回　まとめ　（テスト実施）

使用教科書

なし

自己学習の内容等アドバイス

テレビのニュースや新聞の政治や経済などで、現在の日本の問題を知り、理解するように努めましょう。また、その中で自分が何を知らないかという、問題意識を持ちましょう。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
経済と社会		講義	釜賀　雅史
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

経済は、「疎遠なもの」、「難しいもの」といった印象を持つ人は多いかもしれない。しかし、そうではない。なぜなら、経済現象は人間の営みそのものであるから。本講の目標は、学生諸君が、自分なりの視点で経済事象について語れるようになること、具体的には、①主要な経済用語が常識レベルにおいて理解されていること、②現代経済社会の諸問題により関心を持てるようになること、③それら諸問題について自分なりに(特に文章で)説明できるようになること、である。

授業の概要

上の目標に基づき、本講では、日頃、経済記事（報道ＶＴＲ）などで頻繁に目にするトピカルな話題を念頭に置きつつ、それを理解するのに必要と思われる経済学上の幾つかの基本項目についてわかりやすく講義する（パートⅠ）。そして、現在の経済社会の問題を幾つかとりあげ検討してみる（パートⅡ）。

学生に対する評価の方法

①授業への参画態度　(評価ウエート 20%)
②産業・経済記事のレポート(アサインメント)……具体的に産業・経済に関する新聞記事を一つとりあげ、それについて自分なりに展開する（内容紹介だけにとどまらず、他の情報も導入して記事内容を追究したり、自分なりの見解を述べたものを作成し提出する)。(評価ウエート 40%)
③最終課題への取り組み……授業を踏まえた最終課題に教場で取り組み提出する。(評価ウエート 40%)
以上３点から総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス　(授業のねらい・展開方法・評価など の説明)
第２回　序・経済社会の基本的見方　 われわれが生きる社会(市場経済)の全体像を経済的に説明する。
≪パートⅠ　経済記事を読む上で知っておきたいキーワード≫
日常の経済記事等で出てくる一見難しく、疎遠にみえる用語は、マクロ経済学の領域で経済変数として扱われるものである。ここではこれら主要経済用語の基本的概念をかみ砕いて分かりやすく説明する。
第３回　　経済成長と経済成長率について
第４回　　物価とインフレについて
第５回　　失業と失業率について
第６ 回　 為替相場と国際収支について
第７ 回　 株と株価について
第８回　　GDP について①
第９回　　GDP について②
第 10 回　 景気について
第 11 回　 景気対策および財政政策について
≪パートⅡ　 経済社会の諸問題を考える≫
第 12 回　「豊かさ」について考える。
第 13 回　「少子高齢化」について考える。
第 14 回　 トピカルな話題をとりあげ検討する。
第 15 回　 最終課題への取組とまとめ(発展的学習のための主要文献解説)
※基本的にはこのスケジュールに従って展開するが、進度状況によって一部変更する場合もある。

使用教科書

釜賀雅史・岡本純編著『現代日本の企業・経済・社会』学文社、および、テーマ関連の資料・記事などに従って授業を行う。

自己学習の内容等アドバイス

授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。
《より深く学ぶために》授業時に紹介される文献などにできる限り取り組んでみること。

［授業科目名］ 企業と社会		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 折笠　和文
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

卒業後の進路として、企業や何らかの組織に就職を希望している皆さんにとって、特に企業の役割や実態、あるいは経営戦略などを理解することは必要不可欠なことである。就職活動や社会人へのパスポートとして、現代の企業の活動、実態、それに会社の仕組みや役割などの基本的知識を身につけることが目標である。

授業の概要

企業経営における領域は多岐にわたるので、限られた時間内ですべてを網羅することは不可能なので、下記の４つの領域に絞り、企業の役割や全体像を把握することにする。①企業の組織形態・特質など、②企業において顧客のニーズを探り、売上・利益を仕組みづくりを考える「マーケティング」、④社員を動かす「組織論」、④会社の活動をお金という点から把握する「会計学」である。

学生に対する評価の方法

学期末試験、毎回配布する出席カードの記入内容・問題意識、受講態度（主体性や積極性）など、総合的に評価する。

※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。

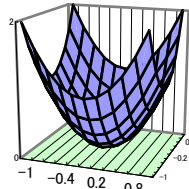
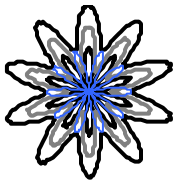
授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業概要と心得. 企業と社会および環境変化との関係. 経済学と経営学との違いについて.
第２回　株式会社など企業形態の諸特質について.
第３回　企業における戦略の役割、および戦略の次元（全社戦略、機能別戦略、事業部戦略など）について.
第４回　企業を取り巻く環境分析（内部環境、外部環境）
第５回　基本的な競争戦略（コスト・リーダーシップ戦略、差別化戦略、集中化戦略など）
第６回　マーケティングの全体像（マーケティングの定義を含めて）
第７回　市場細分化およびその基準、標的市場の選定
第８回　マーケティングの基本戦略　①製品戦略
第９回　マーケティングの基本戦略　②価格戦略
第10回　マーケティングの基本戦略　③プロモーション戦略、④流通チャネル戦略
第11回　組織論（モチベーション論、リーダーシップ論、チームマネジメント論など）
第12回　会計　①貸借対照表、損益計算書、キャッシュフロー計算書）
第13回　会計　②利益の概念（売上総利益、営業利益、経常利益、当期純利益
第14回　会計　③経営分析（安全性の分析、収益性の分析、効率性の分析、成長性の分析など）
第15回　学期末試験および今後の学習課題の指針

使用教科書

教科書は使用しない。随時、プリント等を配布する。

自己学習の内容等アドバイス

学期末試験は、プリントとその講義内容から出題するので、全出席と講義の復習および専門用語の意味調べ等が必須である。

［授業科目名］ 情報と社会		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 折笠　和文
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

現代社会はコンピュータやスマートフォンなどの登場によって、利便性などが声高に叫ばれる社会となった。しかし、そうした情報社会のメリットだけではなく、多くのデメリット（負の側面）をも認識することが重要であろう。広義ではそうしたさまざまな社会の病理現象を認識しつつ、その中で如何に生きるべきかを問い直すことが目標でありテーマである。

授業の概要

ITC（情報技術&コミュニケーション）の進展により、携帯電話からインターネットなど、我々はデジタル・情報社会の中で、多くの恩恵を享受しているが、反面、多くの問題も孕んでいる。講義では情報のもつ意味を考えながら、情報社会で多用されているカタカナ語・略語等の意味の理解、情報社会の功罪両面、情報社会に潜む病理現象および豊かさ・便利さ・効率化・合理化に潜む負の現象など、現代社会の特質を考察する。

学生に対する評価の方法

学期末試験は勿論のこと、受講態度、遅刻数等も考慮に入れて総合的に評価する。
※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　情報社会を学ぶにあたっての授業の目的と講義内容の概要、授業方法等の説明および授業日程の説明
第２回　①情報社会で多用されている日常用語の説明・解説（DVD、ADSL、IC、POS、ユビキタスなど）
第３回　②情報ネットワークで多用されている用語の説明（LAN、ｅコマース、光ファイバーケーブルなど）
第４回　情報という言葉の由来と歴史的な展開
第５回　情報の性質と種類
第６回　現代社会における呼称の特質と解釈・内容（情報化社会、情報社会、高度情報社会、知識産業社会、高度通信技術社会、ハイテクノロジー社会、システム社会などの特質）
第７回　情報社会の特質「システム」の意味とシステム社会に関連して
第８回　①高度情報化社会の具体的動向とその影響（個人・家庭生活・社会生活における事例とその光と影）
第９回　②高度情報化社会の具体的動向とその影響（経済・産業・企業活動における事例とその光と影）
第 10 回 ①国際関係における情報化の具体的動向とその影響（グローバルに展開する情報化の進展について）
第 11 回 ②国際関係における情報化の具体的動向とその影響（デジタルエコノミー、ｅビジネス世界の進展、および主要各国の情報化の取り組み）
第 12 回 ①情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会に潜む病理現象と人間生活）
第 13 回 ②情報社会にみる利便性のパラドックス（情報社会の便利さ、効率化、合理化に潜む負の現象）
第 14 回 ネットワーク社会の進展にともなう諸問題（コンピュータの不正使用や有害情報、ネットワーク犯罪、プライバシーの問題など情報倫理問題）
第 15 回 学期末試験と今後の学習の指針

使用教科書

『高度情報化社会の諸相』折笠和文著（同文館出版）

自己学習の内容等アドバイス

回数毎の授業内容が明記されているので、理解を深めるためにも事前にテキストを読んでおくことが望ましい。

［授業科目名］ 社会学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 今井　隆太
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

現代社会学の概要を理解すること。現代の社会の様々な面に見られるグローバル化の状況をとらえ、理解する手がかりとして、歴史的、理論的アプローチをとるとともに、現場で直接データを収集する社会調査の技法についても見て行きたい。

授業の概要

大体、下記の授業計画に沿って、各項目について講義する。社会学の概要についてはテキストを用いて、現代社会学の諸相、および歴史的な蓄積をみる。社会調査についてはプリントを配布して、概要を見て行く。そのなかで、現代社会学の理論と方法が、調査とどのような関係にあるのかが理解できるようにしたい。

テキストの他に、教材として映画、文芸作品などを用いる。とくに小津安二郎の映像作品には、家族について考えさせられるテーマが含まれている。例年、「東京物語」、「晩春」などをとりあげている。小津作品には、家族論的な要素と共に、戦後日本社会の変動をはかる要素も描かれている。映画史上見事な作品であるが、あくまで社会学的な見方から見ていくとしよう。

あと、くれぐれも遅刻しないでほしい。話し始めた途端、中断、また中断となるのは大変迷惑だから。

学生に対する評価の方法

適宜、講義内容に沿った小テスト（評価全体に占める割合は５０％）を課す。期末テスト（評価全体に占める割合は５０％）では、考え方、文章力も見たい。

授業計画（回数ごとの内容等）

入れ替えはあるが、大体、以下の項目について講義する。
第１回　現代社会論への誘い、グローバル化とはなにか
第２回　国家と社会⑴　国家・脱国家、国民と国籍、
第３回　国家と社会⑵　人種とエスニシティ、自由と民主主義、
第４回　国家と社会⑶　戦争・国家・動員、福祉国家、
第５回　個人と集団⑴　自己と他者、国際養子の社会学
第６回　個人と集団⑵　かたりの社会学（被爆体験、ハンセン病）
第７回　個人と集団⑶　日本の家族、「東京物語」
第８回　社会調査⑴　社会調査とはなにか、社会調査の歴史
第９回　社会調査⑵　社会調査の目的と方法（質的、量的、混合）
第 10 回　社会調査⑶　社会調査の倫理　調査の種類と実例
第 11 回　社会調査⑷　調査企画、仮説と論証のプロセス、
第 12 回　社会学の歴史⑴　啓蒙思想家からウエーバーまで
第 13 回　社会学の歴史⑵　パーソンズと現代社会学
第 14 回　社会学の歴史⑶　日本社会学
第 15 回　期末試験とまとめ

使用教科書

『入門　グローバル化時代の新しい社会学』西原和久・保坂稔共編、新泉社

自己学習の内容等アドバイス

予習は特に求めない。復習として、難解な用語を調べる癖をつけたい。手がかりは『広辞苑』のような一般的な辞書であり、さらに進んで『社会学用語辞典』のような専門辞書に拠る場合もある。Google をはじめとするネット上の検索手段も進化しているが、書籍の形態をとった文字情報の価値を吟味する癖をつけたい。

［授業科目名］ アメリカの社会と文化		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 河井　紀子
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

人種、階級、ジェンダーの観点から、もうひとつのアメリカをみる。マイノリティの視点からアメリカ文化の基本的価値である「自由・平等」理念の歴史的展開について学ぶことで、今アメリカで起こっている事象がどのような意味を持ち、なぜ起きているのかをよりよく理解できるようになることを目標とする。

授業の概要

自由の国としてのイメージが強いアメリカ。アメリカ社会を理解するためには、個人として、国民としてアメリカ人の自己意識にとって重要な「自由」のあり方の歴史を知る必要がある。「自由」は決して固定されたカテゴリーではなく、常に変化しているし、またその「境界」も常に変化してきた。

本授業では、アメリカの政治的自由、経済的自由、市民的自由、精神的自由という自由の 4 つの側面を、その意味、それを可能にした社会的条件、それを享受しえた人々と享受しえなかった人々という 3 つの観点から追及する。このことは、人種、階級、ジェンダーの視点からアメリカ合衆国を見ることでもある。映像資料や歴史史料も用いながら「自由」をキーワードに、自由と民主主義、物質的豊かさが一体となった「アメリカ文明」が世界を席捲する 20 世紀前半と、冷戦終結により唯一の超大国となったアメリカが国内外の新たな試練にさらされる 20 世紀後半をみていく。

「自由」の歴史を読み解くことで、大きな政府と小さな政府、保守とリベラル、貧富の格差、帰還兵、銃の乱射、ヘイトクライム、不法移民など、アメリカが今抱えている様々な問題がなぜ起こっているのかが明らかになるだろう。毎授業時、現代社会の動向とともに、多様性に富むアメリカ社会の断面を映す映像も紹介する。

学生に対する評価の方法

平常の授業態度及びリアクション・ペーパーによる授業の理解度（40%）、中間レポート（20%）、最終に実施する試験（40%）で総合的に評価する。なお、本授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義の概要説明　「アメリカの世紀」
第２回　アメリカの根源―その理想と現実（植民地時代～南北戦争）
第３回　アメリカの根源―その理想と現実（植民地時代～南北戦争）
第４回　アメリカ的文化の成立―その光と影（南北戦争後～1890 年代）
第５回　20 世紀前後のアメリカ―1890 年代
第６回　革新主義の時代―1900 年代～1910 年代
第７回　大衆消費社会の展開―1920 年代
第８回　「現代アメリカ」の危機―1930 年代
第９回　アメリカの世紀へ―1940 年代
第 10 回　冷戦下の「黄金時代」―1940 年代後半～1950 年代
第 11 回　激動の時代―1960 年代
第 12 回　激動の時代―1960 年代
第 13 回　保守の時代―1970 年代～1980 年代
第 14 回　文化戦争の世紀末―1990 年代以降
第 15 回　試験および総括

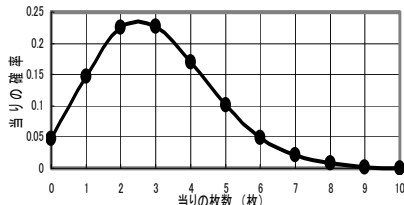
使用教科書

有賀夏紀『アメリカの 20 世紀』（上・下）（中公新書）　その他、史料は随時配布する。

【参考図書】

有賀夏紀・油井大三郎編『アメリカの歴史ーテーマで読む多文化社会の夢と現実』（有斐閣アルマ）
富田虎男・鵜月裕典編『アメリカの歴史を知るための 62 章』（明石書店）

自己学習の内容等アドバイス

次回の授業内容をテキストで予習しておくこと。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
民族と文化		講義	齊藤　基生
[単位数] ２	[開講期] １～４年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

地球上には数多くの「民族」や「文化」が存在しているが、その定義はきわめてあいまいである。まずは言葉の定義から始め、各自の「民族」観や「文化」観を作る。そして、いまだ絶えることのない民族紛争の要因である、誤解、偏見、差別について、その背景を考える。

授業の概要

民族や文化などの、言葉を定義する。自然人類学、文化人類学、それぞれの観点から、ヒトと人を見る。それらを踏まえたうえで、環境・民族と文化の関係を、衣食住それぞれの分野から概観する。

学生に対する評価の方法

成績は、期末試験の平均点を指標（50%）に、受講態度、出席カードへの記入などを加味（50%）しながら、総合的に判断する。開講時間数の３分の２以上の出席が不可欠である。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　導入。各自が民族や文化をどうとらえているか、アンケートを実施する。あわせて、講義の概要を説明する。
第２回　アンケート集計結果の講評。それを手がかりに、文化とは何か、民族とは何かを考える。動物学から文化人類学まで、様々な分野でどのように定義されているか解説し、各自の「文化」観を作る。
第３回　文化人類学と民族１。民族の定義。人文科学の諸分野で民族がどのように定義されているか、様々な研究者の見解を紹介する。
第４回　文化人類学と民族２。民族、民俗、風俗の違いについて述べる。.
第５回　自然人類学と民族１。人種とは何か、人類の進化から解き起こす。
第６回　自然人類学と民族２。人種と形質、民族との関係について述べる。
第７回　自然人類学と民族３。血液型と民族の関係について述べる。
第８回　スライド大会。日本各地の食とデザインについて、スライドを用いて解説する。
第９回　世界の地理と気候。気候が人々の暮らしに及ぼす影響について、主に植生との関係を概観する。
第10回　衣と民族。赤道直下の熱帯から酷寒の極地まで、人々は様々な条件の下で暮らしており、それぞれの気候風土にあった衣服を身にまとっている。それらを概観する。
第11回　食と民族、その１。韓国、東アジアを中心に、食文化に表れた国内外の違いを見る。
第12回　食と民族、その２。食材と食に関する禁忌。
第13回　食と民族、その３。食器の話、箸とフォーク、食器を通して食の作法の違いを知る。
第14回　住まいと民族。衣食住同様、住まいも地域差が著しい。自然への適応と住文化の違いを考える。
第15回　評価試験とまとめ

使用教科書

特定の教科書は用いず、適宜資料を配付する。

自己学習の内容等アドバイス

普段から新聞、テレビ、ラジオなどのマスコミに親しみ、世の中の動きに注意を払ってほしい。インターネットの利用は情報取集の手段にとどめ、必ず原本、実物資料にあたってほしい。

［授業科目名］ 国際社会の動き		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 加藤　英明
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

現代の社会生活において、国際的な知識、発想を有することは大きな財産といえよう。本講義は、日々最新の国際事情を解説して、受講者の理解に供するのみならず、それらのよって来たる歴史的淵源を考察することで、将来を展望する。すなわち学問としての「国際社会の動き」を、つとめて平易に講ずるものである。

授業の概要

まず考察の基礎として、国際社会における重要な要素である民族･文化（言語･宗教）･国家（政治）について、ヨーロッパとシナ（中国）を中心に解説する。世界の盟主としての地位が揺らいではいるが、なお相対的にはナンバーワンであり続けるアメリカについても、わが国と対照しつつ考察する。

受講者の希望に応じ、随時時事問題をとりあげる。新聞が苦労なく読めることを目標とするので、時事教養を身に付けたい者で、意欲ある学生が受講せよ。

学生に対する評価の方法

学期末に行う筆記試験の成績を基本とし（パーセンテージでいえば100%）、これに平常の受講態度などを加味して採点する。試験では、国際社会の動きへの関心度、基本的概念の理解度を主に問う。再評価は行わない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　教養とは何か
第２回　国際社会とは
第３回　アジアの国々
第４回　ヨーロッパの国々と諸民族
第５回　地理と歴史の重要性
第６回　地理と歴史の重要性（続）
第７回　民族とは何か
第８回　言語と世界
第９回　宗教と世界
第10回　宗教と世界（続）
第11回　国家と世界
第12回　アメリカと世界
第13回　アメリカと世界（続）
第14回　日本と世界
第15回　筆記試験（90分）

使用教科書

『グローバルマップル世界＆日本地図帳』昭文社　（後期は未定）
『世界史年表・地図』吉川弘文館

自己学習の内容等アドバイス

講義を理解するための復習・予習は勿論として、日頃、新聞･テレビなどの国際情報に触れ、地図や年表で確認する習慣を身につけること。そうすれば国際的素養は短期間で飛躍的に向上するであろう。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
数と形		講義	森　千鶴夫
［単位数］	［開講期］	［必修・選択］	備考
２	１～４年次前・後期	選択	管理栄養学部・メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

数式があまり好きでない人も、数式にはこんな意味があるのか、数式はこんなことに役立つのか、数式を図形化するとこんな面白い図形になるのか、ということを、パソコンを利用しつつ、比較的容易に理解することをテーマとし、結果として「数式は結構面白く、身近なもの、役立つもの」と実感でき、ある程度デザインなどに役立たせることができるようになることを到達目標とする。

授業の概要

高校で学んだ数式および若干新しい数式を対象にし、日常生活に関連した現象に結び付けて説明する。さらにパソコンを使い、数式を形に表すことによって、数式の新しい側面を見出しつつ理解を深める。

学生に対する評価の方法

授業態度（40%）、毎回行う簡単な演習問題（20%）、期末試験（40%）をもとにして総合的に判断する。
試験の欠席は認めないので注意すること。本授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業の目的と講義内容の概要、数字の歴史、国際単位系
第２回　関数関係（１）：１次関数、多次関数（線、面積、体積）
第３回　パソコンによる１次、２次関数の図形化
第４回　関数関係（２）：弧度法と三角関数
第５回　直角座標と極座標
　　　　円、楕円、双曲線、放物線、等を表すのに便利な極座標
第６回　三角関数と極座標関数を使ったパソコンによる図形化
第７回　図形の自由作成
第８回　関数関係（３）指数関数、対数関数
第９回　パソコンによる指数関数、対数関数等の図形化
第 10 回　微分の概念とパソコンによる近似計算。
第 11 回　積分の概念とパソコンによる近似計算
第 12 回　関数関係（４）特殊な関数、パソコンによる図形化
　　　　減衰振動、サイクロイド、トロコイド、リサージュ、
　　　　バラ曲線等。
第 13 回　ベクトル：ベクトルの概念を理解し、演習を行う
第 14 回　試験と解説
第 15 回　学習のまとめ

半径の異なる円の等高面

三角関数と極座標
を用いた花模様

使用教科書

毎回、プリントを配布する。
【参考図書】　石原　繁　　編　「大学数学の基礎」　裳華房

自己学習の内容等アドバイス

パソコンを数式・数学の新しい理解に活用するため、パソコン使用時の欠席は好ましくない。パソコンが苦手な人もいるが、この授業で少しでもパソコンに慣れるようにして欲しい。

［授業科目名］ 数と形		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 野々山　里美
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 選択	備考 幼児保育専攻

授業の到達目標及びテーマ

数学に関する興味・関心をもつことと数学的要素を養うことを目的とする。初等教育における「数と計算」「図形」指導を念頭に置き、数と図形に関する基本的な内容を学ぶことにより、数学的な系統性・論理性を理解し、日常生活に活かし、数学的な考え方を身につけることを目標とする。

授業の概要

・本授業では、「数」と「形」についての算数的研究活動を通して、日常生活で活用されている算数・数学的な処理のよさに気づくとともに、考えることの楽しさや美しさを理解する。
・「算数的活動」「見通しをもち、筋道を立てて考え、表現する能力」の育成のために、実践的な活動を多く取り入れた授業を行う。

学生に対する評価の方法

・試験（筆記）（６０％）、小テストやレポート（２０％）、授業の参加態度やグループ討議の態度（２０％）を総合的に判断して行う。
・授業の遅刻や欠席等は原則的に認めず、減点対象とする。
・試験の欠席は認めない。また、この授業の再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第　１回　ガイダンス（算数を学ぶことの意義・授業の進め方・授業に関する諸注意等）
第　２回　数の表し方と記数法の歴史の概観（実数・位取り記数法）
第　３回　数の拡張と演算①（整数の加減乗除・九九）
第　４回　数の拡張と演算②（小数・分数の加減乗除）
第　５回　数の計算の意味とその活用（四則計算の性質・問題作成）
第　６回　日常における数学的な事象の考察
第　７回　数と計算領域のまとめ
第　８回　小学校における図形の指導目標と内容
第　９回　「図形」：平面図形（三角形・四角形・正方形・長方形・円）
第１０回　「図形」：平面図形（平行四辺形・ひし形・台形・多角形）
第１１回　「図形」：対称・合同な図形
第１２回　「図形」：立体図形（立方体・直方体・球・展開図）
第１３回　「図形」：立体図形（角柱・角錐・円柱・円錐）
第１４回　数と図形領域のまとめ
第１５回　①「数」と「形」についての算数的考察
②総括的評価テスト

使用教科書

・小学校算数「授業力をみがく」指導ガイドブック　啓林館
・小学校学習指導要領解説「算数編」　文部科学省　東洋館出版
・必要に応じて、プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

・次回の授業の課題（ホームワーク）を提示するので、幅広い資料分析をして予習し、自分なりの考えを確立し、かつ、わかりやすい発表のための工夫をしてくること。
・読み手に自分の考えがより深く伝わるような書き方やまとめ方を工夫したレポートや小テストの作成に心がけること。
・授業計画は授業の進行状況に応じて前後することがある。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
数と形		講義	服部　周子
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 選択	備考 子どもケア専攻

授業の到達目標及びテーマ

小学校・中学校の数と計算・図形の一連の学習の流れを振り返り、小学校での算数の指導の重要性を知る。
数学を学ぶことの楽しさや意義を実感し、日常生活に活かし物事を合理的に処理する力を養う。

授業の概要

ここでは数学的素養を養うことを目的とし、数に関する話題を広く取り上げ講義する。またその際、幼児・初等教育における算数の学習指導（数と計算の指導）の場を念頭に置く。

具体的には、「数とは何か」、「数とはどう表現するのか」、「数の計算はなぜできるのか」を追究する過程を通して、自然数、整数、分数、小数について、そのとらえ方と性質を様々な角度から述べる。人類がどのように数を数字で表したか、数詞の仕組みを見付け出したかという数学史の面から資料の考察をする。また、「数とはどのように用いるのか」を追究する過程を通して、数と図形の関わりについても考察する。

学生に対する評価の方法

毎時の学習評価問題の取り組み及び授業への参画態度を基に評価する。（４０％）
講義内容の理解と自己変革と自己実現という観点から、評価する。　（２０％）
講義内容の理解度の程度を評価するテストを第８回と第 14 回に行う。（４０％）

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　集合と数　（ﾋﾟｱｼﾞｪの実験、幼児の数の認識）
第２回　数の表し方と記数法の歴史（4 大文明の記数法）
第３回　零の発見と位取り記数法
第４回　ｎ進数　（２進数等を基に、十進位取り記数法以外の記数法）
第５回　数の拡張と演算　その１
第６回　数の拡張と演算　その２
第７回　数の拡張と演算　その３
第８回　四則演算の意味　（加法、減法、乗法、除法）・小テスト
第９回　数と計算の意味の活用　（指数計算、複利計算、対数計算、方程式解法）
第 10 回　数と計算の意味の活用　（平方数やパスカルの三角形、ピタゴラス数）
第 11 回　図形の形と大きさ
第 12 回　小学校における図形の指導目標と内容
第 13 回　中学校における図形の指導目標と内容
第 14 回　三平方の定理の多様な証明方法・まとめのテスト
第 15 回　日常の事象の数学的な手法での観察

使用教科書

≪参考書≫：小学校算数科学習指導書、中学校数学科学習指導書　文部科学省

自己学習の内容等アドバイス

次回の授業範囲を教科書で予習しておく。
本日の授業範囲を教科書で復習しておく。
関連する内容を図書・インターネット等で調べる。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
確率と統計		講義	森　千鶴夫
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
２	１～４年次前・後期	選択	前期：管理栄養学部 後期：メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

私達の身の回りには、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろんな種類の多くのデータがあり、その活用に迫られることが多くある。それらのデータを、パソコンを使って整理して、確率と統計の理論に基づいて解析し、意味付けを行なうことをテーマとする。

確率と統計の初歩的な理論を理解すること、身近なデータを、パソコンを使って整理し解析して、グラフ表現を行なう具体的な手法を体得することを到達目標とする。

授業の概要

確率について身の回りの出来事を例にとって説明し、次に確率の延長としての確率分布（２項分布、ポアソン分布、正規分布、など）について述べる。続いて、身の回りのいろんなデータとその統計処理法について述べ、パソコンを使って、統計的データを整理して図形化し、種々の統計的数値を求める。

学生に対する評価の方法

授業態度（40％）、毎回行う簡単な演習問題（20％）、期末試験（40％）をもとにして総合的に判断する。
試験の欠席は認めないので注意すること。本授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業の目的と講義内容の概要、順列、組合せ
第２回　確率、2 項分布
第３回　パソコンによる計算と表示
第４回　データ：データの収集、整理、平均値、広がり、
　　　　標準偏差
第５回　パソコンによるデータの整理、種々の計算、表示
第６回　ポアソン分布、正規分布、
第７回　偏差値
第８回　パソコンによるポアソン分布、正規分布に
　　　　関する計算とグラフ表現
第９回　最小２乗法：回帰直線、近似曲線
第 10 回　共分散、相関、相関係数
第 11 回　パソコンによる相関係数の計算、近似曲線による表現
第 12 回　推定と検定
第 13 回　生活と統計
　　　　物価指数、景気動向指数、ローレンツ曲線、ジニ係数
第 14 回　試験と解説
第 15 回　学習のまとめ

この図はお年玉つき年賀はがきが100 枚ある場合に４等が1 枚も当らない確率は0.05（5%）であり、たとえば 3 枚当る確率は 0.23（23%）であることを意味する。この分布は2 項分布と呼ばれる。このような計算をして図に示すことは EXCEL を使えば簡単にできる。

使用教科書

毎回、プリントを配布する。
【参考図書】　室　淳子・石村貞夫著　「Excel でやさしく学ぶ統計解析」　東京図書

自己学習の内容等アドバイス

上級生になると、種々の調査、実験、および研究のデータを扱うようになり、データの整理を行なって報告書を作成しなければならない。その際に、データの整理が統計学的な手法によってなされ、意味のある統計的な数値を導き出されているかどうかは重要な事柄である。統計学的手法の有用さを十分に理解するように努めて欲しい。そのためには、自身で得たアンケートデータや実験データなどに随時適用することを勧める。

［授業科目名］ 確率と統計		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 服部　周子
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 前期：子どもケア専攻 後期：幼児保育専攻

授業の到達目標及びテーマ

・基礎的な統計処理の手法を理解し、それをもとに身近な現象を理解したり分析したりできるようなる。
・多くの演習を通して統計学の知識をマスターする。
・統計学独特の専門用語を身につける。

授業の概要

私達の身の回りにある自然現象や社会事象には、人口、家計、小遣い、身長、体重など、いろいろなデータがあり、その活用に迫られることが多くある。しかし、それらのデータを活用するには、科学的な分析方法によって解析し、意味付けを行って初めてその価値をもつ。統計学は、大量のデータの中にある法則性を見出す分析方法である。そこで、確率と統計の基礎的な手法を理解し、それをもとに、身近で具体的なデータを解析したりグラフ表現を行う手法を体得したりする。

学生に対する評価の方法

毎時、具体的な統計処理あるいは学習評価問題と授業への参画態度を基に評価する。（４０％）
講義内容の理解を評価するテストを第８回と第14回に行う。（４０％）
自己実現、自己変革を果たしかたかを評価する。（２０％）

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　統計学の考え方の基礎・分析概念
第２回　確率と確率分布の特徴
第３回　母集団と標本・標本抽出
第４回　階級分けと資料の作成
第５回　標本分布の特性値
　　　　・中心的傾向の特性値　（中央値、最頻値、平均）
第６回　標本分布の特性値
　　　　・変動の特性値　（分散、標準偏差、変動係数）
第７回　確率とは・確率を表す方法と記号
第８回　確率変数と確率分布・第１章と第２章のテスト　（テスト）
第９回　二項分布　（離散型確率分布）
第10回　ポアソン分布　（離散型確率分布）
第11回　一様分布　（離散型一様分布・連続型一様分布）
第12回　正規分布　（標準化・正規分布表の読み方）・偏差値
第13回　統計的有意性（信頼係数・有意水準）・標本平均の分布
第14回　母平均μの推定平均・第３章と第４章のテスト　（テスト）
第15回　ｔ分布

使用教科書

「はじめての統計学」　日本経済新聞社　鳥居泰彦　著

自己学習の内容等アドバイス

次回の授業範囲を教科書で予習しておく。
専門用語の意味を確実に理解するよう復習しておく。

［授業科目名］ 自然のしくみ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 井谷　雅治
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 選択（教職必修）	備考 幼児保育専攻のみ （小学校教員免許取得用に開講）

授業の到達目標及びテーマ

自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさに感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。

授業の概要

自然事象に関心をもつと共に、授業に積極的に参加し、自然のもつ偉大さ、巧みさ、しくみに共感し、自然を愛し、自然と共生できる人間を追求する。

学生に対する評価の方法

試験６０％・小論文と発表２０％・授業態度２０％
なお、この授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回：自然科学概論
第２回：学習指導要領の解説
第３回：生物とその環境(1)　身近な生き物
第４回：生物とその環境(2)　植物の生活
第５回：生物とその環境(3)　動物の生活
第６回：生物とその環境(4)　飼育と栽培
第７回：物質とエネルギー(1)　水溶液
第８回：物質とエネルギー(2)　熱と光と力
第９回：物質とエネルギー(3)　電気と磁石
第 10 回：地球と宇宙(1)　地形と土地
第 11 回：地球と宇宙(2)　天気と季節
第 12 回：地球と宇宙(3)　地球と宇宙
第 13 回：地球と環境(1)　食物
第 14 回：地球とその環境(2)　エネルギー
第 15 回：筆記試験とまとめ

使用教科書

テキスト：プリント、小学校学習指導要領解説（理科編）

自己学習の内容等アドバイス

○　自然現象のニュース・情報を基にした自己学習
○　シラバスについての予習
○　講義内容の深化学習

［授業科目名］ 自然のしくみ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 井谷　雅治
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

自然事象を通して、自然のしくみやきまりを追求し、自然のもつ偉大さ・巧みさに感動しながら自然は相互に関わりをもっていることに気付き、地球環境に配慮し、命を大切にできる人間としての生き方を学ぶことを目的とする。

授業の概要

自然事象に関心をもつと共に授業に積極的に参加し、自然のもつ偉大さ、巧みさ、しくみに共感し、自然を愛し、自然と共生できる人間を追求する。

学生に対する評価の方法

試験６０％　小論文２０％　授業態度２０％
なお、この授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回：自然科学概論
第２回：学習指導要領の解説
第３回：生物とその環境(1)　身近な生き物
第４回：生物とその環境(2)　植物の生活
第５回：生物とその環境(3)　動物の生活
第６回：生物とその環境(4)　飼育と栽培
第７回：物質とエネルギー(1)　水溶液
第８回：物質とエネルギー(2)　熱と光と力
第９回：物質とエネルギー(3)　電気と磁石
第10回：地球と宇宙(1)　地形と土地
第11回：地球と宇宙(2)　天気と季節
第12回：地球と宇宙(3)　地球と宇宙
第13回：地球と環境(1)　食物
第14回：地球と環境(2)　エネルギー
第15回：筆記試験とまとめ

使用教科書

テキスト：プリント

自己学習の内容等アドバイス

○　自然現象のニュース・情報を基にした自己学習
○　シラバスについての予習
○　講義内容の深化学習

［授業科目名］ 生命の科学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 日暮　陽子
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 選択	備考 ヒューマンケア学部

授業の到達目標及びテーマ

授業テーマ： 生体のしくみ

到達目標：生体のしくみを理解する

授業の概要

細胞の構造・機能、細胞間の情報伝達を理解したうえで、生体内で起こっている現象について講義をしていきます。生体の基本を学ぶことで、生体のしくみ（目で見ることができない現象）を考える基盤を作っていきましょう。

学生に対する評価の方法

筆記試験・受講態度を総合的に評価する。評価は以下の配分で行う。
出席点：受講態度（10 点）
試験点：中間試験（40 点）・期末試験（50 点）

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　生命科学とは
第２回　細胞：細胞の構成
第３回　細胞：細胞内小器官の機能
第４回　生体の構成１
第５回　生体の構成２
第６回　生命の設計図１
第７回　生命の設計図２
第８回　中間試験とまとめ
第９回　代謝：解糖系・TCA 回路・電子伝達系
第 10 回　エネルギー産生
第 11 回　食と健康：消化・吸収１
第 12 回　食と健康：消化・吸収２
第 13 回　脳の構造・神経細胞
第 14 回　記憶
第 15 回　期末試験とまとめ

使用教科書

生命科学　羊土社　東京大学生命科学教科書編集委員会

自己学習の内容等アドバイス

講義の内容を振り返り、教科書やノートを見直してみてください

［授業科目名］ 人間と地球環境		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 大矢　芳彦
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

私たちは地球上で生を受け、地球上で生活を営み、そして地球に還る。本講では、私たちの生活の場である「地球」あるいはそこに住む私たち「人類」というものを様々な観点から理解する。そして私たち人類が今後も地球と調和的に生きるためには何をすればよいか一人ひとりが考え、行動できる知識と方法を取得することを目的とする。

授業の概要

授業方法は講義形式で行うが、画像や映像を取り入れてより理解が深まるよう工夫しながら解説する。

前半は宇宙を知り、宇宙から地球と人類を探ると同時に生きている地球の現状について理解を深めていく。そして後半には地球の動きと私たちの生活との関係について概説する。ここでは特に、「自然災害」と「地球環境問題」についてその現状を認識する。

学生に対する評価の方法

基本的には、平常の授業態度（10%）、最終時に行う試験（90%）であるが、自主レポートなどを書いたものはその内容によって評価に加える。また、授業中に無駄話をするなど他の学生の迷惑行為をした場合は別途減点する。

授業計画（回数ごとの内容等）

授業計画は、第１回のアンケート調査に基づいて決定されるが、大まかな授業計画は次のとおり。

第１回　ガイダンスとアンケート（講義の内容・目的と単位取得の方法など）
第２回　宇宙の大きさとその動き（宇宙における地球の位置付け）
第３回　星の一生（星の誕生から消滅まで宇宙で行われている現象の認識）
第４回　太陽系の構成（地球に近い天体、特に太陽と惑星の特徴）
第５回　地球の誕生（どのようにして地球は誕生したのかを探る）
第６回　生命が存在する環境と地球外生命体の可能性（生命は地球だけのものか）
第７回　生命の誕生（地球上で生命がいかに誕生したのかを探る）
第８回　生物の進化と地球環境の変化（生物の進化と地球環境との深い関連性を知る）
第９回　地震の原因と被害（災害の中で最も恐ろしいと言われる地震の原因を探る）
第 10 回　東海地震について（地震予知の現状と東海地震に対する対策の現状についての把握）
第 11 回　地球環境問題の素因（なぜ今、地球環境問題が叫ばれているのかその理由の認識）
第 12 回　エネルギー問題（エネルギー問題の現状とその対策の把握と未来のエネルギーについての考察）
第 13 回　地球温暖化（温暖化問題について地球科学的な見地からの分析と将来予測）
第 14 回　生物種の減少（現在の生物種の減少の現状と過去の生物の進化の歴史との比較）
第 15 回　まとめ

使用教科書

「はるかなる地球」　大矢芳彦著　荘人社

自己学習の内容等アドバイス

次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味などを事前に調べておくこと。

<table>
<tr><td colspan="2">［授業科目名］
科学の歴史</td><td>［授業方法］
講義</td><td>［授業担当者名］
松浦　俊輔</td></tr>
<tr><td>［単位数］
２</td><td>［開講期］
１～４年次前・後期</td><td>［必修・選択］
選択</td><td>備考</td></tr>
</table>

授業の到達目標及びテーマ

自然科学や、それと密接に関係する技術の思想がどう生まれ、現代の私たちの社会生活や精神活動にどうつながり、どんな役割を担っているのかを理解します。自分の領分とは離れたところの話を、自分の中にあるものと関連づけて理解することが目標です。

授業の概要

自然科学がどのように成立したか、科学的方法がどのように確立したか、その歴史的な由来や展開をふりかえることによって、科学的思考のあり方をいくつかの方向から捉えることによって、自然科学や科学技術の総体的なイメージを把握します。A（前期）は光と色を中心とした科学史の話題、B（後期）はアイデアのイノベーションという面からの話題を取り上げます。

学生に対する評価の方法

①毎回提出してもらう授業の感想（平常点）　②授業時に行なう試験＋提出物を総合評価します（①50%＋②50%）が、平常点が6割に達せず、かつ、全体で合格点に達しない場合は、再評価なしの不合格とします。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　科学って何（ガイダンス）
第２回　科学を論じるための共通の手がかりとなる素材の提示
第３回　A自然哲学　B科学の源流（ギリシア）
第４回　A中世　Bギリシアの先駆的業績
第５回　Aルネサンス　B中世とイスラム
第６回　A望遠鏡と顕微鏡　Bルネサンス
第７回　A光の速さ　B永久運動機関
第８回　Aりんごとは別のニュートン　B錬金術とフロギストン
第９回　A光の正体（ホイヘンス、ゲーテ）　B原子論
第10回　A電磁波としての光　B進化論
第11回　A光、時間、空間　B　天動説から地動説へ（前提）
第12回　A光の二重性　B　天動説から地動説へ（コペルニクス的転回）
第13回　A科学と芸術（色彩と空間）　B天動説から地動説へ（ケプラーとガリレオ）
第14回　A科学と芸術（抽象化）　B天動説から地動説へ（ニュートン）
第15回　まとめ

なお、実際の反応を見て、進度を修正することがあります。

使用教科書

教科書はとくに指定せず、授業時に資料を配付しますが、モーズリー＋リンチ『科学は歴史をどう変えてきたか』（東京書籍）を読んでおくと、授業の話の歴史上の位置づけについて参考になると思います。

自己学習の内容等アドバイス

科学的思考を身のまわりの素材で繰り返し、授業時の感想や提出物に反映させてください。また、上記やジョンソン『イノベーションのアイデアを生み出す七つの法則』（日経BP社）を積極的に読むことを勧めます。

［授業科目名］ 美術の世界		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 鷹巣　純
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

近代以前の日本絵画が問題としてきた視覚表現の諸要素を理解し、情報を視覚によって表現することの意味を知ることを目標とする。

授業の概要

主に江戸時代以前の日本美術に属するさまざまな絵画の中に示される視覚イメージについて、毎回ひとつの着眼点を設定し、その意味や歴史的展開を紹介してゆく

学生に対する評価の方法

期末試験およびレポート
原則として再評価は実施しない

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス
第２回　フィクションとしての絵画
第３回　図像とは何か
第４回　絵の中の空間
第５回　絵の中の空間
第６回　絵の中の言葉
第７回　模倣と見立て
第８回　怪物の造形
第９回　変身のイメージ
第 10 回　腐乱死体の美術
第 11 回　絵画における描かないことと見えないこと
第 12 回　異界へのまなざし
第 13 回　試験・正答解説
第 14 回　レポート講評
第 15 回　レポート講評

使用教科書

なし

自己学習の内容等アドバイス

毎回膨大なスライドを投影するので、記録用の撮影機材があるとよい。毎授業ごとに必ず復習し、ノートの内容と画像を結び付けておかないと、授業終盤でまとめて試験対策を講じようとしても内容を復元できなくなるので注意。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
音楽の世界		講義	黄木　千寿子
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

西洋芸術音楽を聴くためにコンサート会場へ足を運ぶ愛好家の数は、年々減少している。その一方で、ドラマやCM等のBGM、またネット上の音楽配信によって、西洋音楽芸術はポピュラー音楽と並び扱われ、知らず知らずに我々の耳に届く、意外に身近な存在でもある。この授業は、こうした西洋芸術音楽の流れを、歴史的、文化的に理解することによって、教養としての西洋芸術音楽の知識を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

中世から現代まで、西洋芸術音楽の発展の歴史を概観する。各々の時代における社会的、文化的背景などを交えながら、比較的有名な楽曲を例に平易な解説を行い、西洋芸術音楽を鑑賞する力を養うとともに、雑多なジャンルの音楽が氾濫する現代において、西洋芸術音楽が果たしてきた役割を理解することを目的とする。

学生に対する評価の方法

平常の授業態度（14％）、小テスト（26％）、最終筆記試験（60％）で総合的に評価を行う。試験の欠席は認めないので注意すること。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーション（講義内容の概要、参考書の紹介、古代の音楽）
第２回　中世①（グレゴリオ聖歌とその発展、ノートルダム楽派）
第３回　中世②（アルス・ノヴァ）
第４回　ルネサンス①（15世紀）
第５回　ルネサンス②（16世紀）
第６回　バロック（マドリガーレとオペラの誕生）
第７回　バロック（協奏曲、バッハ）
第８回　前古典派（バッハの息子たち）
第９回　ウィーン古典派（ソナタ形式の成立）
第10回　ロマン派①（前期ロマン派）
第11回　ロマン派②（ロマン主義の諸相１）
第12回　ロマン派③（ロマン主義の諸相２）
第13回　20世紀①（第２次世界大戦まで）
第14回　20世紀②（第２次世界大戦以降）
第15回　まとめと試験

使用教科書

片桐功他『はじめての音楽史』（音楽之友社）

自己学習の内容等アドバイス

次回の授業範囲について、教科書で予習するとともに、その時代に関して各自の専門領域において調べてくることが望まれる。また、授業では音源を多用するため、聴き漏らさないよう注意する。

［授業科目名］ 音楽の世界		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 愛澤　伯友
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

・「音楽とは何か」「芸術とは何か」「創作とは何か」を理解し、各自の領域で探求する。
・西洋音楽と邦楽の違いを理解し、日本における創作の意義を考察する。
・教養としての「音楽」との接し方を学び、教養を深める。

授業の概要

「音楽」について、歴史、地理、文化、社会、宗教、民族、風俗、言語などのさまざまな角度からアプローチし、音楽の多様性の理解と同時に、本来のリベラルアーツとしての教養を高めます。授業は毎回のテーマを中心に、講義、音楽、映像など、さまざまなサンプルから深く考察していきます。

学生に対する評価の方法

「授業ごとの参加度」（30%）－毎回のコメントにて確認
「期末レポート」（70%）－講義で習得した「芸術」「音楽」「教養」を各自が理解し、論述できるか。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　「音楽」とは何か？　－　オリエンテーション、音楽とは何か、西洋音楽と邦楽
第２回　日本の音楽（１）　－　邦楽は西洋音楽だった（奈良時代、音楽の伝来、邦楽）
第３回　日本の音楽（２）－　舶来品の西洋音楽（明治時代、西洋音楽と邦楽）
第４回　テキストと音楽（１）　－　歌い方には４通りもある（テキストと音楽との関係、西洋詩学）
第５回　テキストと音楽（２）　－　和風ラップに至る道（日本語と音楽の関係、東遊歌、能楽、J-pop）
第６回　宗教と音楽　－　感動『戦場のピアニスト』を正しく鑑賞するために（宗教、民族と音楽）
第７回　ポピュラー音楽　－　Mozart の時代にもポピュラー音楽はあった（大衆芸能と芸術の差異）
第８回　日本音楽の受容　－　エッフェル塔と三味線（パリ万博、異国趣味、印象派の音楽）
第９回　音律　－　ドレミは対数？（音響学基礎、音律、世界の音階）
第 10 回　『第 9』とは　－　なぜ『第 9』は年末恒例？（戦後西洋音楽受容史、西洋音楽の衰退）
第 11 回　著作権　－　自分の曲でも使用料払うの！？（音楽における国内、海外の著作権法の概説）
第 12 回　オペラ　－　愛の結末は・・・(古典派オペラ、イタリア・オペラ、楽劇）
第 13 回　電子音楽　－　電子立国ニッポンはすごい（発振の原理、電子音楽史、日本の技術とアーティスト）
第 14 回　民族音楽　－　音楽は世界「非」共通言語（民族音楽とその関連、民族音楽からの享受）
第 15 回　現代の音楽　－　音楽、なぅ！（20 世紀後半からの音楽と思想、音楽と社会、音楽と量子力学？）

※内容は、同時代的な出来事を取り扱うため、変更や順番の入れ替えがあります。

使用教科書

指定なし。毎回の授業で資料を配布する。参考資料などについては授業内で紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

授業で取り上げたテーマに関する楽曲や作品を鑑賞すること。また、作者、時代背景など、関連した項目についても幅広く調べること。できれば、実際に演奏会、公演に行くこと。こうした小さな鑑賞体験の積み重ねで芸術やリベラルアートな教養は高まります。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
文芸の世界		講義	大島　龍彦
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

短編小説の魅力

小説とは何か。短篇小説の方法とその魅力について知る。

小説の方程式を知れば誰でも１編の小説が書けることを知る。

☆実際に書いてみたい人は、「教養総合演習Ⅰ（短編小説を書く）」を受講してください。

授業の概要

文芸作品には、詩歌・小説・戯曲（脚本・シナリオ）・評論・随筆など様々なスタイルがある。講義では、特に短編小説について学ぶ。『漢書芸文志』によれば、小説とは「街談巷語の説」である。だとすれば、小説では何をどう書いてもよいはずである。が、これまでに発表された小説には、本質らしきものや普遍的技法といったものがみられる。そこで本講義では小説の普遍的要素について学び、有史以来の作品について概観し、作者の立場から小説を読み解き、創作への道を拓く。

学生に対する評価の方法

テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義概説（出席とミニットペーパー・講義の目標とその方法）
第２回　文芸の世界概説（詩歌、台本、小説などについて）
第３回　志賀直哉「山鳩」と大島龍彦「今朝は雨降り」に学ぶ小説の三要素について
第４回　小説の三要素と有史以来の作品　例、「千一夜物語」「聖書」「源氏物語」・他
第５回　小説の構造１　例、志賀直哉「出来事」・大島龍彦「夜想曲」を参考にして
第６回　小説の構造２　例、芥川龍之介「蜜柑」・大島龍彦「台風の夜」を参考にして
第７回　小説のジャンル１　例、川端康成「合掌」・大島龍彦「妻からの電話」・他
第８回　小説のジャンル２　例、内田百閒「風の神」・大島龍彦「コルドバの女」・他
第９回　小説のジャンル３　例、ヘミング　ウェイ「老人と海」・大島龍彦「潮時」・他
第10回　模倣ということ　例、レイモンド・チャンドラーと村上春樹他
第11回　模倣からオリジナルへ１　例、芥川龍之介『今昔』から「鼻」へ・他
第12回　模倣からオリジナルへ２　例、芥川龍之介『今昔』から「運」へ・他
第13回　人称（視点）の問題について・大島龍彦「シャボン玉」他
第14回　展開図の作成方法とテスト
第15回　講義のまとめ

なお、講義中で扱う作品については、列記した作品以外を扱う場合もある。

また、小説作法の方程式については各講義の中で少しずつ明らかにしていく。

使用教科書

大島龍彦著『丘上町二丁目のカラス』（新典社）また、必要に応じてプリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

予習・事前に指示するテキストの小説および配布する短編小説を分析しながら読んでくる。

復習・本時にあつかった作品の展開図を独自に作成したり鑑賞文を書くことが望ましい。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
演劇の世界		講義	田尻　紀子
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

テーマ「浄瑠璃の成立と展開」

「文楽」として親しまれている人形浄瑠璃の成立と展開をたどりながら、浄瑠璃・歌舞伎の歴史を学び、代表的な作品を鑑賞できるようになるとともに、古典芸能や日本文化についての理解を深めることを目標とする。

授業の概要

浄瑠璃は、江戸時代に「語り」と伴奏を伴った人形劇として完成されたが、その源流は、中世の『平家物語』（平曲）にまで遡る。本講義では、浄瑠璃成立までの歴史的展開をたどった後、大人気を博した近松門左衛門の世話浄瑠璃作品を紹介し、その特色について考察する。また、作品を鑑賞しながら、歌舞伎との関わりや、時代物の三大名作『菅原伝授手習鑑』『義経千本桜』『仮名手本忠臣蔵』についても言及したい。

学生に対する評価の方法

学期末試験の成績（約80%）や作品鑑賞時等のレポート（約20%）によって総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーション・芸能の起源
第２回　時代の特色――中世――
第３回　『平家物語』と「語り」の成立
第４回　平曲の衰退と早物語『浄瑠璃物語』の流行
第５回　浄瑠璃節と人形浄瑠璃の成立
第６回　歌舞伎と浄瑠璃
第７回　時代の特色――近世①――
第８回　時代の特色――近世②――
第９回　古浄瑠璃と新浄瑠璃
第10回　近松門左衛門と世話物
第11回　――『曽根崎心中』と『冥途の飛脚』――
第12回　作品鑑賞①
第13回　時代物三大名作
第14回　作品鑑賞②
第15回　試験・まとめ

使用教科書

必要に応じて資料を配付する。

自己学習の内容等アドバイス

作品鑑賞に際しては、事前に鑑賞のための資料を配付するので、事前に目を通したうえで、あらすじや特色など、作品に対する理解を深めておくこと。

［授業科目名］ スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 正　美智子
［単位数］ １	［開講期］ １年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 管理栄養学部

授業の到達目標及びテーマ

Ⅰ．自然に興味を持たせ、自然に上達させること。
Ⅱ．各自の技能に応じてルールや審判法を高度なものにしていき、最終的に競技と呼べるところまでもっていく。
Ⅲ．バトミントンを楽しむこと、そして、楽しみ方を知ること。

授業の概要

スポーツや身体運動は、生涯にわたって健康的な生活を送るために、全ての人間に必要不可欠なものである。本授業では、バトミントンを中心に理論に基づいた運動実践法を講義し、その具体的方法について実習する。

学生に対する評価の方法

課題に対する取り組みと成果（60%）、受講態度（40%）など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

１回　実習　初歩的技能の習得
　　１．バトミントンの歴史　２．シャトルあそび　３．グリップ
２回　実習　初歩的技能の習得　〇運動特性、技術、用具などに関する知識の習得
　　１．ハイサービス　２．ストローク　３．簡易ゲーム
３回　実習　初歩的技能の習得　〇各種グリップの理解
　　１．ショット　・ドライブ　・スマッシュ　・ヘヤピン　・ドロップ　・クリヤー　・ロブ
　　２．簡易ゲーム（ハーフコートダブルスゲーム）の実践
４回　実習　初歩的技能の習得　〇ストロークの理解と競技規則に関する知識の習得
　　１．いろいろなサービス　・ショートサービス　・ドライブサービス　・クリックサービス
　　２．簡易ゲーム（オールコート３対３のゲーム）の実践
５回　実習　基本的技能の習得
　　１．高度なストローク　２．フットワーク　３．基本フライトの組み合わせ練習
６回　実習　基本的技能の習得　〇ダブルスゲームの進め方の理解
　　１．ダブルスゲーム　・ダブルスのルール　・フォーメーション　・審判法　・ゲームの実践
７回　講義　ＶＴＲ（全日本バドミントン選手権大会ダブルスの部）を見る
　　１．トップアンドバック、サイドバイサイド　２．入れ替わり（攻守）のタイミング
　　３．ＶＴＲを見て動きや打球技術のポイントをまとめ、レポートを提出する
８回　実習　基本的技能の習得　ダブルスゲームの実践　〇サービス中のフォルトの理解
９回　実習　基本的技能の習得　ダブルスゲームの実践　〇ラリー中のフォルトの理解
10回　実習　基本的技能の習得　ダブルスゲームの実践　〇セッティングの理解
11回　実習　応用技能の習得　公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅰ
12回　実習　応用技能の習得　公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅱ
13回　実習　応用技能の習得　公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅲ
14回　実習　応用技能の習得　公式試合形式でのチーム対抗リーグ戦Ⅳ
（11回～14回）〇初歩的技能練習や基本的技能練習で習得した技術や戦術をゲームに応用し実践する　〇ゲームの内容を検討し、意見交換を行いながら内容の向上を図る
15回　個人で取り組んだ課題の成果をまとめ、レポートを提出する
　☆課題とは毎時間実施する20分間の有酸素運動（ウォーキング、ジョギング、ランニング）のこと

使用教科書

（参考図書）　大体連研修部作成教材　バドミントン（平成20年度作成DVD教材シリーズ）

自己学習の内容等アドバイス

バドミントンに必要な基礎体力を身につける努力をすること。

［授業科目名］ スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 正　美智子
［単位数］ 1	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

Ⅰ. テニスの基本技術を習得し、ゲームができる。
Ⅱ. 瞬発力、持久力、調整力などの体力を高める。
Ⅲ. テニスを通してスポーツマンシップを涵養する。

授業の概要

最近の身体運動に関する様々な現象についての科学的研究の進展は著しい。21 世紀を健やかに生きるために、身体運動に関わる科学的知識と手段についてテニスを実践的に学習するなかで獲得する。
テニスは、現在国際的なスポーツであることや、年齢・性別などそれぞれに応じたプレイを楽しむことができるので生涯スポーツに適している。

学生に対する評価の方法

課題に対する取り組みと成果（60%）、受講態度（40%）など総合的に評価する。本授業は実習科目であるため、とくに授業欠席は減点の対象となるので注意すること。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義　１.ガイダンス　大学体育の意義、授業の目的や進め方について解説する。
　　　　　　　２.スポーツのスキル
第２回　実習　テニスの基礎Ⅰ　打球技術　１.ラケットワーク　２.グランドストローク
第３回　実習　テニスの基礎Ⅰ　打球技術　１.ボレー　２.サービス
第４回　実習　テニスの基礎Ⅰ　打球技術　１.スマッシュ
第５回　講義　テニスの技術論　１.技術構造及び基本技術について解説する。
　　　　　　　２.一流プレイヤーの動きを分析・解説するとともに受講生の動作について分析・解説する。
　　　　　　　３.打球技術及び動きのポイントについてまとめ、レポートを提出する。
第６回　実習　テニスの基礎Ⅱ　総合練習
第７回　実習　テニスの基礎Ⅱ　ダブルスの基本戦術　１.フォーメーション　２.連続プレイの組み立て
　　　　　　　３.コンビネーションの理解と実践
第８回　実習　テニスの基礎Ⅱ　ダブルスの応用戦術　１.フォーメーション　２.コンビネーション
　　　　　　　３.コンビネーションの実践
第９回　実習　ルールとマナー　１.試合の進行　２.審判法　３.ルール　４.マナー
第 10 回　実習　テニスの基礎Ⅱ　基礎練習で習得した技術や戦術をゲームに応用し実践する。の応用
第 11 回　実習　応用技能の習得　ダブルス　リーグ戦１
第 12 回　実習　応用技能の習得　ダブルス　リーグ戦２
第 13 回　実習　応用技能の習得　ダブルス　リーグ戦３
第 14 回　実習　応用技能の習得　ダブルス　トーナメント戦１
第 15 回　実習　応用技能の習得　ダブルス　トーナメント戦２

◎雨天時やコートコンディション不良時は、アリーナまたは、サブアリーナで実施する。

使用教科書

（参考図書）VTR　神和住　純　監修　「ザ・ベスト・オブ・ウィンブルドン」　ポニーキャニオン
　　　　　　VTR　BBC 制作　「テニス教室決定版」　ポニーキャニオン

自己学習の内容等アドバイス

テニスに必要な基礎体力を身につける努力をすること。

［授業科目名］ スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 笹川　慶
［単位数］ 1	［開講期］ 1～4年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

フライングディスク（アルティメット）

アルティメットはフライングディスク(フリスビー)を用いた競技のひとつで、性別・年齢に問わず、技能レベルに応じて誰でも手軽に楽しむことのできるチームスポーツである。誰もが初心者であるディスク競技を用いることで、その競技特性を理解するとともに、身体を動かす喜びやゲームの楽しさを再認識する。また、チーム競技を通して、異なる個性と関わる機会を数多く体験することで、互いに学び合い，助け合い、チームにおける強調性やコミュニケーション能力などの社会人として必要不可欠な教養を習得することを目的とする。

授業の概要

フライングディスク(フリスビー)を用いたチーム競技であるアルティメットを実践するために、基礎的なスローイング技術、キャッチング技術から応用的な技術、戦術および練習方法を習得する。その後、チーム編成を行いアルティメットのリーグ戦を開催する。

学生に対する評価の方法

・授業への取り組み方、授業態度等から総合的に評価する
・出席が３分の２に満たないものは単位習得なしとする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第1回　履修に関するガイダンス・オリエンテーション
第2回　基本的技能Ⅰ（グリップ、キャッチング、バックハンドスロー）
第3回　基本的技能Ⅱ　(サイドアームスロー、ハンマー、など)
第4回　他競技スポーツ
第5回　アルティメットのルールと班編制
第6回　基礎練習とミニゲームⅠ
第7回　基礎練習とミニゲームⅡ
第8回　他競技スポーツ
第9回　アルティメットの基本戦術について
第10回　ポートアルティメットⅠ
第11回　ポートアルティメットⅡ
第12回　他競技スポーツ
第13回　アルティメット　リーグ戦Ⅰ
第14回　アルティメット　リーグ戦Ⅱ
第15回　アルティメット　リーグ戦Ⅲ

使用教科書

なし

自己学習の内容等アドバイス

反復練習あるのみ。

［授業科目名］ スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 森　奈緒美
［単位数］ １	［開講期］ １年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 前期：幼児保育専攻 後期：子どもケア専攻子ども心理コース

授業の到達目標及びテーマ

１）卓球、バレーボール、バドミントン及び健康的・表現的な身体育成、トレーニング、ストレッチ運動などの実技を行い、体力の向上を図ることができる。
２）自己の体力の維持・増進のために必要な運動の理解を深め、各スポーツの運動量や運動強度などを把握して効果的な運動の実践ができる。

授業の概要

本科目では、健康維持のために科学的理論に基づいた運動実践法について実習することを目的とする。また、スポーツの特性に触れた楽しさを享受することによって生涯スポーツへつなげる。

学生に対する評価の方法

課題への取り組みの成果及び提出物（50%）、授業態度（35%）、レポート（15%）を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業の目的と内容の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明
第２回　スポーツの理論と実践法　卓球①　基礎技能の習得とゲームの実践
（ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。）
（ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。）
（歩数計により卓球の運動量や運動強度を測る。）
第３回　卓球②　応用技能の習得とゲームの実践
第４回　卓球③　ゲーム内容の発展
第５回　スポーツの理論と実践法　バレーボール①　基礎技能の習得とゲームの実践
（ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。）
（ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。）
（歩数計によりバレーボールの運動量や運動強度を測る。）
（ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。）
第６回　バレーボール②　応用技能の習得とゲームの実践
第７回　バレーボール③　ゲーム内容の発展
第８回　スポーツの理論と実践法　バドミントン①　基礎技能の習得とゲームの実践
（ゲームの方法を学習し、技術や戦術を理解し工夫する。）
（ゲームをグループごとに行い、スコア表により分析してゲーム内容の向上を図る。）、
（歩数計によりバドミントンの運動量や運動強度を測る。）
（ゲームの合間には、ストレッチ運動、トレーニングを行う。）
第９回　バドミントン②　応用技能の習得とゲームの実践
第10回　バドミントン③　ゲーム内容の発展
第11回　健康的な身体育成法の実践
第12回　表現的な身体育成法の実践
第13回　リズミカルな身体育成法の実践
第14回　歩数計による各スポーツの運動量や運動強度の分析を行う。体重、体脂肪率を自己点検する。
第15回　総括

＜注意事項＞　第１回の授業は、NUAS ホールで行う。運動着不要。筆記用具持参。貴重品等は自己管理する。
第２回以降の授業では、運動着及び体育館シューズ（室内用）を着用すること。

使用教科書

授業の中でプリント等の資料を配付する。

自己学習の内容等アドバイス

卓球、バレーボール、バドミントンの技術、戦術、ルールの下調べをしておくこと。

[授業科目名] スポーツと健康Ⅰ（実習Ⅰ）		[授業方法] 実習	[授業担当者名] 森　奈緒美
[単位数] 1	[開講期] １年次後期	[必修・選択] 選択	備考 子どもケア専攻養護教諭コース

授業の到達目標及びテーマ

2）卓球、バレーボール、バドミントン、トレーニング、ストレッチ運動などの実技を行い、体力の向上を図ることができる。
2）自己の体力の維持・増進のために必要な運動の理解を深めて効果的な運動の実践ができる。

授業の概要

本科目では、健康維持のための運動実践法について実習することを目的とする。
また、スポーツの特性に触れた楽しさを享受することによって生涯スポーツへつなげる。

学生に対する評価の方法

課題への取り組みの成果及び提出物、授業態度、レポート等を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業の目的と内容の概要、授業の準備の仕方、授業日程の説明
第２回　スポーツの理論と実践法　卓球①　基礎技能の習得とゲームの実践
第３回　卓球②　応用技能の習得とゲームの実践
第４回　卓球③　ゲーム内容の発展
第５回　卓球④　ゲーム戦術の工夫
第６回　スポーツの理論と実践法　バレーボール①　基礎技能の習得とゲームの実践
第７回　バレーボール②　応用技能の習得とゲームの実践
第８回　バレーボール③　ゲーム内容の発展
第９回　バレーボール④　ゲーム戦術の工夫
第10回　スポーツの理論と実践法　バドミントン①　基礎技能の習得とゲームの実践
第11回　バドミントン②　応用技能の習得とゲームの実践
第12回　バドミントン③　ゲーム内容の発展
第13回　バドミントン④　ゲーム戦術の工夫
第14回　ストレッチ運動及び各種トレーニング
第15回　総括

＜注意事項＞　第１回の授業は、運動着不要。筆記用具持参。貴重品等は自己管理する。
第２回以降の授業では、運動着及び体育館シューズ（室内用）を着用すること。

使用教科書

授業の中でプリント等の資料を配付する。

自己学習の内容等アドバイス

卓球、バレーボール、バドミントンの技術、戦術、ルールの下調べをしておくこと。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康Ⅱ（実習Ⅱ）		実習	高橋　篤史
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
1	１～４年次前期（集中）	選択	口論義運動公園のプールを利用

授業の到達目標及びテーマ

・クロールを中心に四泳法について学び、ゆっくりと長く泳ぐことができるようになること。
・水中で歩行などの運動を行い、自らの健康増進について理解を深める。
・自分の体の現状を把握し、生涯にわたって健康な体を維持するきっかけ作りにする。

授業の概要

生命の源“水“。水と人とのかかわりは深く、人間の身体は水そのものといっても過言ではない。その人間が水中で運動すると、陸上では考えられない多くの運動効果が得られる。水泳は、全身運動であり、幼児期から高齢期までの一生涯を通じて行なえるスポーツである。
授業では水中運動を通じて健康の維持増進を目指す。

学生に対する評価の方法

授業への参加態度（60%）、受講態度（20%）、技術習得状況等（20%）、について総合的に評価する。
実技が中心であることから履修者は積極的にカラダを動かすことが望ましい。
本授業では再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回（８/２５ 午 前）　オリエンテーション、水の特性、水泳理論等講義
第２回（9/2 午前・午後）　軽運動（柔軟性向上トレーニング）、水中ウォーキングとストリームラインの習得
第３回（9/5 午前・午後）　水中ウォーキング、クロール（姿勢・呼吸の習得）、背泳（姿勢・キック）
第４回（9/8 午前・午後）　軽運動（バランス向上トレーニング）、クロール、背泳の習得
第５回（9/16 午前・午後）　軽運動（筋力向上トレーニング）、クロール、平泳ぎ（姿勢・キック）
第６回（9/18 午前・午後）　クロール、バタフライ（姿勢・キック）、バタフライの習得

※　第１回は教室での講義とする。その際、日程の詳細説明を行う。
※　第２回以降は口論義運動公園までバスで移動を行う。
※　３回の軽運動については大学内で行うこととする。

使用教科書

特に使用しない

自己学習の内容等アドバイス

日頃から体調管理を行い、欠席をせずに実技に取り組むことを心がけてほしい。
実技の回数は限られていることから、授業以外でも積極的に水中運動に親しみ、理解を深めてもらいたい。

［授業科目名］ スポーツと健康科学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 正　美智子
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 管理栄養学部・メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

「運動やスポーツは健康に良いのか、悪いのか」をテーマに、運動の功罪から健康とスポーツ・身体運動の関係を考えてみる。そして「よく生きてゆく人間」を目指して、科学的な見地から自分自身の姿や生きていることのメカニズムを心得て生活してもらいたい。そして、授業の成果として、生涯にわたる身体の健康にたいする意識と活動を期待する。

授業の概要

本講義では、現代生活における健康と身体運動の意味、健康と身体運動のかかわり、身体運動のメカニズム、具体的な身体運動の実践方法などについて解説する。

学生に対する評価の方法

期末試験（50%）、課題の提出（10%）、受講態度（40%）を総合して評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

１回　Ｉ－１．身体は細胞のすみか、そして主は私
　　　　１）自分を見る目をつくる
２回　　　２）身体運動の意味
３回　　　３）地球誕生のスケールの中に人間をおいてみる
４回　　２．宇宙空間における生体変化
５回　　３．運動しているとき、身体の中で何がおこっているのか　－ ヒトは動くようにできている－
６回　Ⅱ－１．生涯発達と健康　　１）発達と健康科学
７回　　　　　　　　　　　　　　２）身体能力の年齢的変化（ライフステージ）に応じた健康スポーツ
８回　Ⅲ－歩行の生涯健康
　　　１．ＤＮＡの持つはるかな記憶　　２．ヒトがサルと別れた日
９回　　３．歩行の定義
10 回　　４．歩行の運動学的意義
　　　　１）歩く（ウォーキング）速さと歩幅　　２）歩く速さとエネルギー消費量
11 回　　　３）歩行　－健康に良い有酸素性運動－
12 回　　　４）歩行と健康　５）歩行と脳
13 回 Ⅳ－運動とからだの健康
　　　１．運動不足と健康障害
　　　２．肥満の予防・解消　－基礎代謝量・活動代謝量を高めるためのトレーニング
14 回　　３．健康的に痩せるとはどういうことか
　　Ｖ－運動の功罪
15 回　　期末試験とまとめ

使用教科書

生涯発達の健康科学　藤井勝紀共著（杏林書院）

自己学習の内容等アドバイス

次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。専門用語の意味等を事前に調べておくこと。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
スポーツと健康科学		講義	森　奈緒美
[単位数] ２	[開講期] １年次前期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部

授業の到達目標及びテーマ

１）健康な生活を送るために必要となるスポーツや運動に関する科学的な基礎知識を理解する。
２）生涯にわたる継続的なスポーツ・運動実践による体力の維持・増進を図る方法について理解する。

授業の概要

本科目では、スポーツと健康に関する科学的知識の習得を目的とする。運動と健康、生活習慣病予防と運動、健康のための効果的な運動実践法、生涯スポーツ、運動生活の設計、事故予防への配慮、などの内容を取り上げる。

学生に対する評価の方法

課題への取り組みの成果及び提出物（50%）、授業態度（30%）、レポート（20%）を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業の目的と講義内容の概要、自己学習の仕方、授業日程の説明
第２回　スポーツ・運動の意義と健康との関わり
第３回　生活習慣病予防のための運動の理論と実践法
第４回　定期的な運動実践の効果及び運動例
　　　　体脂肪率からみたウエイトコントロールの重要性
第５回　歩数による日常生活の運動量の把握
　　　　生活習慣チェックリストを用いた健康生活の自己点検
第６回　健康のための個人に応じた運動内容、運動量、運動強度、時間、頻度などを配慮した
　　　　運動プログラムについて
　　　　生活習慣病予防のための運動実践記録をまとめ、レポートを提出する。
第７回　運動施設の整備・拡充について
第８回　運動クラブの育成・援助について
第９回　運動プログラム・行事の設定・提供について
第 10 回　運動生活の類型、構造及び運動者行動
第 11 回　運動と体力及びトレーニングの原則について
第 12 回　運動の安全な行い方と熱中症を予防する具体的方法
第 13 回　健康のための生涯スポーツの理論と実践法
第 14 回　課題のまとめ
第 15 回　総括

使用教科書

授業の中でプリント等の資料を配付する。

自己学習の内容等アドバイス

専門用語について復習しておくこと。

［授業科目名］ 食と健康		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 五十里　明・日暮　陽子
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 メディア造形学部 ヒューマンケア学部

授業の到達目標及びテーマ

授業の到達目標：体の構造を知り、食べ物が健康に与える影響を理解する。

授業のテーマ：食べ物と健康

授業の概要

現在、生活習慣の乱れによる糖尿病・脂質異常症・高血圧など生活習慣病が増加してきている。本講義では、身体のしくみを理解し、なぜ食べることが大切なのか？健康でいるためにはどのような食生活が求められるのか？食べ物と生活習慣病の間にどんな関係があるか？について考え、理解する。

学生に対する評価の方法

レポート課題（80%）、受講態度（20%）を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回：養生訓とは・長寿者の食生活
第２回：生体の構造について
第３回：生体の構成成分
第４回：エネルギー産生（消化・吸収・代謝）
第５回：栄養素の働き（ビタミン・ミネラル等）
第６回：食事摂取基準
第７回：食習慣について
第８回：食べ物と歯
第９回：食べ物と糖尿病
第10回：食べ物と脂質異常症・メタボリックシンドローム
第11回：食べ物と高尿酸血症
第12回：食べ物と骨粗鬆症
第13回：食べ物と高血圧
第14回：食べ物とがん
第15回：まとめ

使用教科書

参考図書：イラスト　人体の構造と機能および疾病の成り立ち　東京教学社

自己学習の内容等アドバイス

講義内容を振り返り、資料やノートを見直すこと。

［授業科目名］ 英語コミュニケーションＡ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ ファルク・モローネ・スコット・シキ クラップ・ポージン・マクドナルド ポッティンジャー・ロビソン ドーソン・ポーター
［単位数］ 1	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 選択必修 （一部必修）	備考 ※ヒューマンケア学部は必修 ※他学部は選択必修

授業の到達目標及びテーマ

英語ネイティヴスピーカーが担当し、授業進行は基本的に英語で行う。ネイティブの発話に慣れ、基本的なコミュニケーション能力の養成を目的とする。基本的な日常英会話ができるレベル到達を目指す。

授業の概要

自己紹介に始まり、身近な生活に関わる話題について表現できるように指導する。その為に先ず、自然の速度で話される英語を理解する訓練をしながら、正しい発音の仕方、さまざまな実用的な英語表現を習得させる。クラス内の、実質的で有効なコミュニケーションを可能にするために少人数クラスを設定する。

尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。

学生に対する評価の方法

授業受講態度３０％、授業参加貢献度３０％、最終オーラルテスト４０％の割合で評価する。全授業回数の３分の１以上の欠席者には単位は与えられない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第 01 回 Introducing Self and Others.（自己や周りの人の紹介）
第 02 回 Talking about Daily Routine.（日常生活について語る）
第 03 回 Asking to do Something.（してもらいたいことをお願いする）
第 04 回 Talking about Likes / Dislikes.（好き・嫌いについて語る）
第 05 回 Talking about Experiences.（自分の経験談を語る）
第 06 回 Exchanging Personal Information.（個人のアピールをしてみる）
第 07 回 Talking about Frequency of Activities.（クラブやサークルについて語る）
第 08 回 Talking about Past Schedule.（今までのスケジュールを紹介する）
第 09 回 Describing Locations of Places.（場所の具体的位置を述べる）
第 10 回 Talking numbers: Time, schedule, and prices.（数表現についての練習：時間、計画、値段など）
第 11 回 Checking / Confirming Information.（情報の精査と確認）
第 12 回 Positive / Negative Tag Questions.（肯定形・否定形の付加疑問文の練習）
第 13 回 Talking about Future Plans.（先々の計画について語る）
第 14 回 Review Activities / Prep for final oral Test.（総復習・最終オーラルテストの準備）
第 15 回 Final oral Test in small groups.（小グループごとの最終オーラルテストを実施）

使用教科書

原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本や雑誌またはネット上よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。

自己学習の内容等アドバイス

機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。常日頃から英語音声に触れる努力をすること。

<table>
<tr><td colspan="2">[授業科目名]
英語コミュニケーションＢ</td><td>[授業方法]
演習</td><td>[授業担当者名]
ファルク・モローネ・スコット・シキ
ポージン・ポーター・モヤ・クラップ
ドーソン・マクドナルド・ロビソン
ポッティンジャー</td></tr>
<tr><td>[単位数]
１</td><td>[開講期]
１年次後期</td><td>[必修・選択]
選択必修
(一部必修)</td><td>備考
※ヒューマンケア学部は必修
※他学部は選択必修</td></tr>
</table>

授業の到達目標及びテーマ

英語コミュニケーションⅠに引き続き、さらに進んだコミュニケーション能力の増進を目的とする。日常生活上想定されるさまざまなシチュエーションに対応できるようよう訓練する。様々な状況での基本英会話ができるレベルを目指す。

授業の概要

徹底的なパターン練習によって基本表現を習得したうえで、より幅広い会話範囲を維持できるように、語彙力の増強に努める。想定される一般的なシチュエーションを発展させることによって、より現実的な応用力を高める。英語コミュニケーションⅠと同様、小人数クラスで行う。

尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。

学生に対する評価の方法

授業受講態度３０％、授業参加貢献度３０％、最終オーラルテスト４０％の割合で評価する。全授業回数の３分の１以上の欠席者には単位は与えられない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第01回 Responding to a question or statement. Following up a conversation.
(質問および提示に対して回答する。英会話を続ける。)
第02回 Agreeing and disagreeing an opinion. Asking for and giving shorter directions.
(意見に対して賛成したり反対したりする。簡単な指示の内容を尋ねたり、与えたりする。)
第03回 Giving an opinion. Giving reasons. Starting and following up conversation.
(意見を述べる。理由を述べる。会話を始めて、そのまま続ける。)
第04回 Giving instructions. Asking for help. Commenting.
(指示を与える。助けを求める。感想を述べる。)
第05回 Inquiring and giving information about times and prices.
(時間と値段について尋ねたり情報を与えたりする。)
第06回 Getting attention. Talking about countries, cities, travel abroad and entertainment.
(注意をこちらに向ける。国、都市、海外旅行そして娯楽について話合う。)
第07回 Confirming and giving advice. Saying good-bye. Talking about friends.
(助言を確認したり与えたりする。お別れの挨拶。友達のことを語る。)
第08回 Talking about holidays/events plans. Ending and following up a conversation.
(休暇やイベント計画について語る。会話を終わらせるまたはそのまま続ける。)
第09回 Talking about New Year's custom and entertainment. Talking about similarities.
(新年の習慣や楽しみ方について語る。他国との類似点を語る。)
第10回 Responding to happy/unhappy news.
(幸福なもしくは不幸な知らせに対応する。)
第11回 Asking people to do things formally and informally.
(人々に型にはめて行動すること、また型にはまらないで行動することを依頼する。)
第12回 Inquiring and giving information about drugs/medicines. Confirming a statement.
(薬についての情報を尋ねたり教えたりする。提示内容を確認する。)
第13回 Inquiring and giving information about tours abroad. English for Study Abroad.
(海外旅行について尋ねたり教えたりする。海外で学ぶ英語)
第14回 Excitements. Thanks. Closing remarks.
(感激の言葉。感謝の言葉。言及を終える。)
第15回 Final Oral test in small groups.
(小グループでの最終会話テスト)

使用教科書

原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本や雑誌またはネット上よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。

自己学習の内容等アドバイス

機会をみつけて、ラジオ・テレビ・インターネットなどで英会話番組を聴いて、観て英語聞き取り練習をする。多く英語発話を聴くと、その分耳が慣れ、英語に触れるのが楽しくなる。また、外国映画の字幕スーパーを見ないで観賞することも好ましい。常日頃から英語音声に触れる努力をすること。

［授業科目名］ 英語コミュニケーションⅢ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ M.　ファルク
［単位数］ 1	［開講期］ ２年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

The course focus is solely on developing students SPEAKING skills with absolutely NO grammar, reading or writing skills. The course requires students to learn and demonstrate in particular, as how to initiate, hold / carry and end a basic (i) casual and (ii) formal conversation.　受講生は実生活でのコミュニケーションの自信を高めるために、iPod や iPad の電話機能を使って、名古屋外大の外国人留学生や帰国子女などの英語ネイティブスピーカーと国際電話を想定した会話を経験する。学生たちは英語を上手になることを求められるのではなく、英会話力を上達することに興味がある誰もが履修できる。

授業の概要

ほとんどの授業は、担当教員とクラス全体の学生との間で、短い形式的また格式ばらない会話、クイズ、異文化情報提供により成り立つ。下記は、英語コミュニケーション能力やその関連領域含む１５回の授業の当面の計画であるが、学生の興味や学習に必要な内容、また熟達度に応じて変更されることもある。実生活における英語でのコミュニケーションを実践するために、学生たちは時々名古屋外大の外国人留学生と会合することになっている。

学生に対する評価の方法

授業参加度（５０％）、最終ペーパーテスト/オーラルテスト（５０％）。再評価は行うが、全授業回数の３分の１以上の欠席数がある学生単位不認定となる。

授業計画（回数ごとの内容等）

第 01 回　Introducing briefly the course objectives, materials, and classroom activities
（授業の目標、教材、学習活動などを簡単に紹介する。）

第 02 回 Getting to know about participants English learning experiences, interests, and aptitudes.
（授業参加者の英語学習経験、興味、素質などについて知る。）

第 03 回 Developing Informal Yes-No Questioning Speaking Skill in free communication
（自由な英会話の中でのカジュアルにイエスやノーで答える質問作成スキルの上達法）

第 04 回 Developing Informal WH Questioning Speaking Skill in free communication
（自由な英会話の中でのどこでどのようにという簡単な質問文作成スキルの上達法）

第 05 回 Developing Polite Yes-No Questioning Speaking Skill in free communication
（自由な英会話の中での丁寧なイエスやノーで答える質問作成スキルの上達法）

第 06 回 Developing Polite WH Questioning Speaking Skill in free communication
（自由な英会話の中でのどこでどのようにという丁寧な質問文作成スキルの上達法）

第 07 回 Traveling English and Home stay Communication (Learning Useful Expressions)
（旅行英語やホームステイでの英会話ー役に立つ表現法を学ぶ）

第 08 回 Traveling English and Home stay Communication (Using Useful Expressions)
（旅行英語やホームステイでの英会話ー役に立つ表現法を学ぶ）

第 09 回 Traveling English and Home stay Communication (Classroom Drama)
（旅行英語やホームステイでの英会話ー教室内でのドラマ演出）

第 10 回 Giving Personal Information (e.g. Airport, Hotel, Duty Free Shops)
（個人的な情報を提供するー例：空港で、ホテルで、免税店で）

第 11 回 Making an informal Mini Presentation（形式ばらないミニプレゼンを行う）

第 12 回 Practicing numbers including price and time　（値段や時間などの数の表現練習）

第 13 回 Communication with　foreign students about home countries.（名外大の外国人留学生と彼らの祖国の実生活について語る）

第 14 回 Communication with foreign students about Japan.　（名外大の外国人留学生と日本の実生活について語る）

第 15 回 Speaking test in small groups（小グループでの会話テスト）

使用教科書

原則として、教科書は購入・使用しない。時折、様々な種類の本よりコピーしたものがプリントで配布される。学生は自分の英日・日英辞書を持参することが好ましい。

自己学習の内容等アドバイス

- 学生は英日・日英の電子辞書、もしくは携帯電話辞書アプリを持参する。
- パソコンや携帯電話を利用して、ネットで情報検索する。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
総合英語Ａ／Ｉ		演習	加藤　直良・鈴木　薫 安藤　直・増田　喜治
［単位数］	［開講期］	［必修・選択］	備考
２	１・２年次前期	選択 （一部必修）	※ヒューマンケア学部は必修

授業の到達目標及びテーマ

英文で書かれた専門書や雑誌、各種文献はもちろん、情報時代の今日、インターネットで海外の最新情報を得るために英語の読解力は不可欠である。本講では、英語で書かれた文章の意味を正確に理解する能力の習得を目的とする。英字新聞や雑誌を速読で大まかに理解できるレベルを目指す。

授業の概要

語と語の有機的な関係を重視したフレーズ・リーディングから、パラグラフ・リーディングへと読み進める訓練をする。対象によっては精読よりもむしろ早く要点を把握することが優先される場合もあり、それぞれの目的に応じた読み方を学習する。英訳量を増やし、経験からそのテクニックを学ぶ。

尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。

学生に対する評価の方法

テストもしくは課題６０％、授業受講態度２０％、授業参加貢献度２０％で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義　授業計画・試験方法（評価方法）についての説明
今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する。
第２回　演習　英文和訳①
英語講読の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。
第３回　演習　英文和訳②
第２回からステップアップして、段階的に英文内容および長さのレベルを上げる。
第４回　演習　英文和訳③
第３回で行った和訳用教材のレベルを上げる。
第５回　演習　英文和訳④
今後順次、教材レベルを向上させて行く。
第６回　演習　平常テスト実施
第５回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。
第７回　演習　英文和訳⑤
第６回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた英文内容で和訳を行う。
第８回　演習　英文和訳⑥
第７回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。
第９回　演習　英文和訳⑦
第８回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。
第 10 回　演習　英文和訳⑧
第９回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。
第 11 回　演習　英文和訳⑨
第１０回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。
第 12 回　演習　英文和訳⑩
第１１回の教材をステップアップさせた英文で和訳を行う。
第 13 回　演習　復習・質疑応答
いままでの英文和訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。
第 14 回　演習　最終テストもしくは課題訳提出
担当者が一定の英文を提示し、テスト形式解答もしくは課題として提出する。
第 15 回　予備日　学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。

使用教科書

各授業担当者が教科書を選定する。初回授業時に詳しく説明する。他にプリント等を配布する場合もある。

自己学習の内容等アドバイス

総合英語Ｉ（前期）では、主として英文和訳を学習するので、英語本や雑誌、またインターネットなどで英語の文章に触れる機会をできるだけ多く持つように心がけてほしい。毎週英語の記事を最低１つは読み、理解すること。

［授業科目名］ 総合英語B／Ⅱ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 加藤　直良・鈴木　薫・安藤　直
［単位数］ ２	［開講期］ １・２年次後期	［必修・選択］ 選択 （一部必修）	備考 ※　ヒューマンケア学部は必修

授業の到達目標及びテーマ

総合英語Ⅰで習得した英語読解力に基づいて、正しい英語表現力を養うことを目標とする。日本語の内容をそれぞれの目的に応じ正確に英語で表現するためには、多くの英文に接し、語彙・語法・英語特有の表現などについて知ることが必要である。英字新聞や雑誌を速読で大まかに理解できるレベルを目指す。

授業の概要

本講では現代社会のさまざまな問題や、興味深い身辺の話題を扱ったマテリアルを用いて実用的な語彙、語法を習得させながら、英語表現の訓練をする。単に機械的な和文英訳ではなく、自己表現につながるものとして、英語の文章を書く能力を高めたい。量を重ね、テクニックを習得する。

尚、具体的な授業計画は、各担当者がそれぞれ授業開始時にプリントもしくは口頭で説明する。

学生に対する評価の方法

テストもしくは課題６０％、授業受講態度２０％、授業参加貢献度２０％で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義　授業計画・試験方法（評価方法）についての説明
今後の授業受講上の注意、勉強方法、授業進行詳細などを説明する
第２回　演習　和文英訳①
和文英訳の基本として、ベーシックイングリッシュの英訳を試みる。
第３回　演習　和文英訳②
第２回からステップアップして、段階的に和文内容および長さのレベルを上げる。
第４回　演習　和文英訳③
第３回で行った英訳用教材のレベルを上げる。
第５回　演習　和文英訳④
今後順次、教材レベルを向上させて行く。
第６回　演習　平常テスト実施
第５回までの授業で行った英訳の成果をレベル的に精査する。
第７回　演習　和文英訳⑤
第６回での結果を見て、教材内容レベルを定め、それに応じた和文内容で英訳を行う。
第８回　演習　和文英訳⑥
第７回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。
第９回　演習　和文英訳⑦
第８回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。
第 10 回　演習　和文英訳⑧
第９回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。
第 11 回　演習　和文英訳⑨
第１０回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。
第 12 回　演習　和文英訳⑩
第１１回の教材をステップアップさせた和文で英訳を行う。
第 13 回　演習　復習・質疑応答
いままでの和訳英訳の中でよく理解できなかった部分をピックアップして再検討する。
第 14 回　演習　最終テストもしくは課題形式英作文提出
担当者が一定の和文を提示し、テスト形式解答をする。もしくは課題英作文を提出する。
第 15 回　予備日　学生の習熟度合による、進度遅延の場合に備える。

使用教科書

各授業担当者が教科書を選定する。初回授業時に詳しく説明する。他にプリント等を配布する場合もある。

自己学習の内容等アドバイス

総合英語Ⅱ（後期）では、主として和文英訳を学習するので、本や雑誌、またインターネットなどで
自分が英語に訳せそうな日本語の文章に触れ、実際に英語で表現する。毎週英語の記事を最低１つは読み、理解すること。

［授業科目名］ 総合英語Ⅲ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 水岡　久
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

総合英語Ⅱで習得した英語読解力と英語表現力に基づいて、更に英語の総合的運用力を深めることを目標とする。

授業の概要

本講では、Ａ（新聞や雑誌などの出ている程度の英語を観察して、必要な表現や文の構造などについて知識を深める部門）Ｂ（日本語と英語を比較したり検討しながら、表現や語法などの要点を確認して、発表能力の基礎を作る部門）Ｃ（日常的な会話表現から、やや複雑な内容をもつ和文英訳の形式で演習する部門）の３段階で構成された英語表現の授業を行う。ＡとＢに関しては、付属のオーディオ機器を使用する。

学生に対する評価の方法

試験（７０%）、受講態度（２０%）、予習状況（１０%）の総合評価をする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業計画・試験方法（評価方法）
　　　　受講上の注意・勉強方法・授業の進め方の説明
　　　　Lesson1 ~Lesson5　（総合英語Ⅱで実施）
第２回　Lesson 6　PREPOSITIOND AND PHRASES（Ⅱ）　A(英文構造)　B(空所補充)
第３回　Lesson 6　PREPOSITIOND AND PHRASES（Ⅱ）　C(和文英訳)
第４回　Lesson 7　PAST PARTICIPLES　A(英文構造)　B((空所補充)
第５回　Lesson 7　PAST PARTICIPLES　C(和文英訳)
第６回　Lesson 8　*ING*-FORMS　A(英文構造)　B(空所補充)
第７回　Lesson 8　*ING*-FORMS　C(和文英訳)
第８回　Lesson 9　AUXILIARY VERBS　A(英文構造)　B(空所補充)
第９回　Lesson 9　AUXILIARY VERBS　C(和文英訳)
第 10 回 Lesson 10　INFINITIVES　A(英文構造)　B(空所補充)
第 11 回 Lesson 10　INFINITIVES　C(和文英訳)
第 12 回 Lesson 11　CONJUNCTIONS AND CORRELATIVES　A(英文構造)　B(空所補充)
第 13 回 Lesson 11　CONJUNCTIONS AND CORRELATIVES　C(和文英訳)
第 14 回　総括
第 15 回　解悦と試験

使用教科書

プリント教材使用
辞書必携

自己学習の内容等アドバイス

授業では、主として英文読解と和文英訳を行うが、英語ニュース・洋画・洋楽・インターネットなどで常に英語に接することが大切である。「継続は力なり」

［授業科目名］ 実践英語Ａ／Ⅰ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 増田　喜治
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前期	［必修・選択］ 選択	備考 管理栄養学部、ヒューマンケア学部

授業の到達目標及びテーマ

本授業は「実用英語技能検定試験（英検） ２級」合格のための実力を養う事を目標としている。その為、テキストを通して４技能の基本を復習しながら自分の弱点を発見することが重要である。

授業の概要

長文･短文の問題を解読しながら、言葉の表層的意味だけではなく、その言葉が持つ文化的、歴史的意味を語源分析により学び、語彙力を養う。音読による英語的なリズム･イントネーションを身につけることにより、速読の訓練も行う。

学生に対する評価の方法

授業における発表と貢献度（40%）と三回行われる確認テストの点（60%）を総合的に判断して評価される。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業および英検２級についての説明。基礎力判定のためのテスト実施。
第２回　語彙問題 (part1)
第３回　語彙問題 (part2)
第４回　語法問題 (part1)
第５回　語法問題 (part2)
第６回　第一回確認テストとまとめ
第７回　リスニング演習（part1)
第８回　リスニング演習（part2)
第９回　リスニング演習（part3)
第 10 回 第二回確認テストとまとめ
第 11 回　読解問題 (part 1)
第 12 回　読解問題 (part 2)
第 13 回　読解問題 (part 3)
第 14 回　２次試験対策（英語面接)
第 15 回　総括と第三回確認テスト

使用教科書

英検 2 級 頻出度別問題集 (CD 付き)(高橋書店)

自己学習の内容等アドバイス

英語学習の基本は一に音読、二にも音読です。特に新出単語や熟語、長文読解文を読みこなして、身体に英語を染み込ませて下さい。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
実践英語Ａ／Ⅰ		演習	森　明智
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前期	［必修・選択］ 選択	備考 メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

本授業は「実用英語技能検定試験（英検）2 級」合格のための実力を養う事を目的としている。英検 2 級の問題は簡単ではないが、合格のためには満点を取る必要はなく 6 割の正解で合格となる。よって、一次試験においては「各セクションの攻略」、二次試験においては、「英語面接の練習」という攻略方法を知る事と準備の有無が合格への決め手となる。このため、各問題に取り組む中で、それぞれの正解・不正解の「理由・意図」をおさえ、“合格のための自分の指針を知る事”が授業のテーマになる。

授業の概要

15 回という限られた授業数の中で短期間集中的な問題演習となる。英検 2 級の出題形式を体験し、それぞれの問題の意図を探り適確に応答するコツをつかめる授業となるよう配慮する。授業の後半では二次試験(英語面接)の準備も行う。授業の開始時には簡単な復習の時間があり、先回の内容を振り返りつつ授業が進む。
時間が許す限り、問題演習のみならずさまざまな言語材料（映画、TV ドラマ、インターネット）の提供を予定。している。『自分の得意とする英語学習法』を見出し、「英語の授業以外でも英語に親しめる方法」見出して欲しい。本授業は Computer LAB にて行うため、コンピュータを用いた英語学習を身につける良い機会になる。授業への要望などは、受け入れる方針であるため、遠慮なく要望を述べてもらいたい。英検 2 級は就職の際に、履歴書において十分なアピールとなる資格である。その事を念頭に置いて、真剣な取り組みを求める。

学生に対する評価の方法

授業に対する取り組み（20%）、課題提出（20%）、確認テストでの得点（60%）を考慮して評価する。試験については事前に必ず告知するので、試験の実施の日は特に出席を厳守する事。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回目は、授業内容の説明および英検２級という試験を知るための模擬試験の場である。
第 2 回～第 6 回までは、英検 2 級の「語彙力・英熟語の習得・語順整序・(読解練習)」の問題演習と攻略を行う。第 7 回～第 11 回までは、「リスニング」の問題演習と攻略を行う。第 13 回と第 14 回では、2 次試験対策を行うが、あくまで予定であり、授業の様子を見て変更する可能性はある。

第１回　授業および英検２級についての説明。受講生の英検へのニーズ調査。
第２回　語い問題（part1）
第３回　語い問題（part2）
第４回　語法問題（part1）
第５回　語法問題（part2）
第６回　語順整序（part1）＋ 復習
第７回　第１回確認テストとまとめ
第８回　リスニング演習（part1）
第９回　リスニング演習（part2）
第 10 回 リスニング演習（part3）
第 11 回 リスニング演習（復習）
第 12 回 第２回確認テストとまとめ
第 13 回 ２次試験対策（英語面接）(part1)
第 14 回 ２次試験対策（英語面接）(part2)
第 15 回 第３回確認テストおよび総括

使用教科書

英検２級 頻出度別問題集（CD 付き）（高橋書店）

自己学習の内容等アドバイス

英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
実践英語Ｂ／Ⅱ		演習	増田　喜治
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前期	［必修・選択］ 選択	備考 管理栄養学部、ヒューマンケア学部

授業の到達目標及びテーマ

本授業は TOEIC 対策を目指し、500 点を目標とする。英語圏の人々の文化や思考パターンなどを学びつつ、語彙力と文法力を強化することがテーマである。

授業の概要

TOEIC テストの練習のみだけでなく、テキストのテーマに従ってグローバルな視点から英語学習を行う。

学生に対する評価の方法

授業における発表と貢献度（40%）と三回行われる確認テストの点（60%）を総合的に判断して評価される。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業および TOEIC に関する説明と基礎英語力調査
第２回　テキスト Lesson 1 (Traveling Abroad) 語源で語彙力を養う 1
第３回　テキスト Lesson 2 (Food and Cooking)　語源で語彙力を養う 2
第４回　テキスト Lesson 3 (Literature and Writing) 語源で語彙力を養う 3
第５回　テキスト Lesson 4 (Science) 語源で語彙力を養う 4
第６回　第一回確認テストとまとめ
第７回　テキスト Lesson 5 (International Economics) 関係代名詞で読解力を養う 1
第８回　テキスト Lesson 6 (Global Issues) 関係代名詞から読解力で養う 2
第９回　テキスト Lesson 7 (Shopping and Retail) 関係代名詞で読解力を養う 3
第 10 回　テキスト Lesson 8 (The World of Work) 関係代名詞で読解力を養う 4
第 11 回 第二回確認テストとまとめ
第 12 回　テキスト Lesson 9 (Learning Languages)　分詞構文で読解力を養う 1
第 13 回　テキスト Lesson 10 (Globalization of Japanese Universities) 分詞構文で読解力を養う 2
第 14 回　テキスト Lesson 11 (A Sense of History) 分詞構文で読解力を養う 3
第 15 回　第三回確認テストとまとめ

使用教科書

TOEIC Test: Advantage,　TOEIC 形式で学ぶ国際社会と教養 南雲堂

自己学習の内容等アドバイス

英語学習の基本は一に音読、二にも音読です。特に新出単語や熟語、長文読解文を読みこなして、身体に英語を染み込ませて下さい。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
実践英語Ｂ／Ⅱ		演習	森　明智
［単位数］	［開講期］	［必修・選択］	備考
２	１～４年次前期	選択	メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

本授業は今日の日本企業で広く採用される英語能力判定試験である TOEIC の対策を目的とし、履歴書に記載可能な点数である“500 点”を目標としている。内容は決して容易な問題ばかりではない。よって、教員は授業に投入するが、履修生の努力をも必要不可欠となる。TOEIC は「Listening」、および「Reading」の２セクションからなるが、その双方を体験し、攻略のための力の養成が授業のテーマになる。

授業の概要

TOEIC の問題形式はかなり固定されており、限られた時間内で数多くの問題(200 問)が出る。そのため、じっくり考えながら問題を解く手法や、一文ずつ訳して解答する手法は適切ではない。「問題からいち早く最低限の情報を読み取り解答する」ことが要求される。ただ、そのためには、普段の取り組みの中で設問のポイントをつかむ意識を持つ必要がある。授業では「リスニング」「リーディング」双方をバランスよく含めて、合理的かつ実効性のある試験対策の場にしていきたい。授業の開始時には簡単な復習の時間があり、先回の内容を振り返りつつ授業が進む。また、授業への受講生からの質問などを順次答えていく予定である。積極的に質問や要望等、伝えてもらいたい。コンピューターを個々人に備えた教室での授業となる。

学生に対する評価の方法

授業態度（20%）、課題（20%）に加え、2 回の確認テストでの得点(60%)。試験については事前に必ず告知するので、その試験実施の日には特に出席を厳守する事。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

TOEIC の試験形式は、以下の形となっている。
①リスニング(聞き取り ⇒ 4 種類)
(1) 写真問題(10 問) (2)質問と返答の問題(30 問) (3)会話文問題(30 問) (4)モノローグ(一人語り)の問題(30 問)
②リーディング(読み取り ⇒ 3 種類)
(1) 短文穴埋め問題(40 問) (2) 長文穴埋め問題(12 問) (3)短文読解問題(48 問)
使用するテキストは上記の７つのセクションを、それぞれのユニットに含んだ内容の構成となっている。下記の通り、様々な話題があるので楽しみつつ取り組む事も良い。
(〔 〕の中は発音と構文のテーマ)

第１回　授業および TOEIC に関する説明と TOEIC に対する受講生のニーズの調査。
第２回　テキスト Lesson1 (旅行) 〔接尾辞による品詞の見極め〕
第３回　テキスト Lesson2 (日常生活) 〔注意すべき主語と動詞の一致〕
第４回　テキスト Lesson3 (健康) 〔動詞の後の動名詞・不定詞の選択〕
第５回　テキスト Lesson4 (外食) 〔分詞の叙述用法と限定用法〕
第６回　テキスト Lesson5 (出来事) 〔関係詞の制限用法と非制限用法〕
第７回　第１回確認テストとまとめ
第８回　テキスト Lesson6 (遊び) 〔注意すべき受動態〕
第９回　テキスト Lesson7 (メディア) 〔同形の単語の品詞の見極め〕
第 10 回　テキスト Lesson8 (オフィス) 〔3 つの完了形の違い〕
第 11 回　テキスト Lesson9 (人材) 〔比較を使った慣用表現〕
第 12 回　テキスト Lesson10 (金融) 〔置詞・接続詞いずれにも使える語〕
第 13 回　テキスト Lesson 11 (昇進) 〔従属節における主語の省略〕
第 14 回　テキスト Lesson12 (購買) 〔代名詞の特殊な用法〕
第 15 回　第２回確認テストと全体総括・今後の指針の指示。
※ クラスの全体的な英語運用能力によって、授業内容は変更される可能性がある。

使用教科書

THE NEXT STAGE TO TEH TOEIC TEST　Pre-intermediate　金星堂

自己学習の内容等アドバイス

英語の運用能力は、「正しい英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた英文は、できるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので、活用する事。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
実践英語Ⅱ		演習	加藤　直良
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前期	［必修・選択］ 選択	備考 ファッション造形学科

授業の到達目標及びテーマ

授業テーマは「TOEIC テストのスコアアップ」である。
各セクションの攻略法を説明しつつ、TOEIC テストに慣れ、最終到達目標を 500 点とする。

授業の概要

TOEIC テストの問題構成は次の通りである。
Part 1（写真描写問題） → Part 2（応答問題） → Part 3（会話問題） → Part 4（説明文問題） → Part 5（短文穴埋め問題） → Part 6（ 長文穴埋め問題） → Part 7（読解問題）
以上の順番により各セクションの攻略法と解説を加え授業を展開する。

学生に対する評価の方法

①　授業への参画態度　（評価ウエート　40%）
②　最終試験　（評価ウエート 60%）

授業計画（回数ごとの内容等）

第　1 回　Unit 1　リスニング　Part 1 (写真描写問題)　Part 2 (応答問題)
第　2 回　Unit 2　リスニング　Part 3 (会話問題)　Part 4 (説明文問題)
第　3 回　Unit 7　リーディング　Part 5 (短文穴埋め問題)　Part 6 (長文穴埋め問題)
第　4 回　Unit 8　リーディング　Part 7 (読解問題)
第　5 回　Unit 8　リーディング　Part 7 (読解問題)
第　6 回　Unit 3　リスニング　Part 1 (写真描写問題)　Part 2 (応答問題)
第　7 回　Unit 4　リスニング　Part 3 (会話問題)　Part 4 (説明文問題)
第　8 回　Unit 9　リーディング　Part 5 (短文穴埋め問題)　Part 6 (長文穴埋め問題)
第　9 回　Unit 10　リーディング　Part 7 (読解問題)
第 10 回　Unit 11　リーディング　Part 7 (読解問題)
第 11 回　Unit 5　リスニング　Part 1 (写真描写問題)　Part 2 (応答問題)
第 12 回　Unit 6　リスニング　Part 3 (会話問題)　Part 4 (説明文問題)
第 13 回　Unit 11　リーディング　Part 5 (短文穴埋め問題)　Part 6 (長文穴埋め問題)
第 14 回　Unit 12　リーディング　Part 7 (読解問題)
第 15 回　まとめと試験

TOEIC テストの問題構成:
Part 1 (写真描写問題) → Part 2 (応答問題) → Part 3 (会話問題) → Part 4 (説明文問題) → Part 5 (短文穴埋め問題) → Part 6 (長文穴埋め問題) → Part 7 (読解問題)

使用教科書

Kazushige Cho, Masanori Nakamura, and Yukari Nakamura: *Quick Start For The TOEIC® TEST* Level 2,　MACMILLAN　LANGUAGEHOUSE

自己学習の内容等アドバイス

予習復習を実行し、不明な語句・単語は確実に記憶すること。
テキストに用意されている練習問題のみでは、当然のことながら量的に不足するため、自己学習を必要とする。

［授業科目名］ 実践英語Ｃ／Ⅲ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 森　明智
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

本授業は、TOEFL (Test of English as a Foreign Language)の試験対策を目的とし、TOEFL-ITP 試験における 450 点の取得を目標としている。英語圏の大学や大学院において本格的な海外留学を希望している学生やさらに高い英語力を付けたい学生に向けて、学術的な、アカデミックな英語力をつける内容が授業のテーマである。(TOEIC 対策ではない点に注意する事)

授業の概要

現在の TOEFL は、Listening、Reading、Writing、Speaking の４セクションから成るが、名古屋学芸大学が実施する留学システム内の TOEFL では、Listening, Grammar, Reading の３セクションになり、試験形式が変わる。よって、初回の授業で、受講希望者のニーズを確認する予定である。基本的に、本授業では短期間で結果が出やすい Listening のセクションに特に着目して授業内容を進めていく。ただ、Grammar や、Speaking・Writing のセクションも、解答のコツがあるため、スコアをあげるための方法を示したい。また、様々な言語材料（映画、音楽、インターネットなど）を、時間が許す限り授業で紹介する。授業では、Computer Lab にて問題演習する機会を設ける予定である。コンピュータを用いた英語学習方法を身につける良い機会にしたい。海外での本格的な大学(大学院)留学を考えている意欲ある学生の真剣な取り組みを求める。

学生に対する評価の方法

授業に対する取り組み（20%）、課題提出（20%）、およびテスト（60%）での得点を考慮して評価する。試験については事前に必ず告知するので、実施の日には出席を特に厳守する事。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

・TOEFL への準備段階として、第２回～第７回までは一文ずつに区切った形で TOEFL の英文に取り組み、さらに学術的な語いに触れていくための内容を行う。スコアアップへの実践力を高めるため、第 9 回からは TOEFL の実際の問題に似た形の英文を対象にして授業を進めていく。(受講生の実力により変更はある)
・時間が許す限り、毎回の授業で Grammar や Speaking・Writing の攻略も授業内容に含める。

第１回　講義に関する Introduction 、および TOEFL についての説明。受講生の TOEFL へのニーズ調査。受講生の事前の英語力を調査するための模擬試験(成績には何ら関係しない)
第２回　問題演習：Listening (4～5 語のディクテーション / 5～6 語のディクテーション) + α ①
第３回　問題演習：Listening (ディクテーション否定形 / 否定形(not の短縮形)) + α ②
第４回　問題演習：Listening (ディクテーション l と r / 発音とスペル) + α ③
第５回　問題演習：Listening (二重母音 / 長い名詞句) + α ④
第６回　問題演習：Listening (慣用表現 / 7～8 語のディクテーション) + α ⑤
第７回　問題演習：Listening (第２回から第７回までの復習) + α ⑥
第８回　第１回模擬試験実施（授業内）および既習事項確認
第９回　問題演習：Listening (ノートの取り方 / 話し言葉の特徴) + Grammar or Speaking
第 10 回 問題演習：Listening (使役動詞 / 助動詞(could/should/would)) + Grammar or Speaking
第 11 回 問題演習：Listening (口語表現 / 句動詞・イディオム) + Grammar or Speaking
第 12 回 問題演習：Listening (基本動詞 学生生活のキーワード①) + Grammar or Writing
第 13 回 問題演習：Listening (学生生活のキーワード② / 健康相談) + Grammar or Writing
第 14 回 問題演習：Listening (第９回から第 13 回までの復習) + Grammar or Writing
第 15 回 第２回模擬試験実施（授業内）および総括

使用教科書

TOEFL テストリスニング問題 350　喜田慶文 著　(旺文社)

自己学習の内容等アドバイス

英語の運用能力は、「英単語・英文に触れて覚えてしまう事」に最大のポイントがある。授業内で出てきた表現や英文はできるだけ復習の中で覚えてしまうようにする事。授業内でも復習の機会があるので活用して欲しい。

［授業科目名］ フランス語Ⅰ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 田村　真理
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

視聴覚教材の付いた教科書を用いて、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）の習熟を目指す。また、フランスの文化についての理解も深める。
フランス語検定試験の５級が目標。

授業の概要

教科書の各課は会話と練習問題で構成されている。会話で重要な単語、表現、文法事項を学び、練習問題で理解と定着をはかる。ほぼ２週に１課のペースで進み、各課ごとに小テストを行う。

学生に対する評価の方法

各課ごとに行う小テストを７０パーセント、授業中の会話や聞き取りへの参加を３０パーセントとして評価する。小テストの追試は特別な場合以外行わない。遅刻は欠席とし、５回欠席すると失格。
再試験は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業について説明、第０課（アルファベ、あいさつ）
第２回　第０課の復習
第３回　第０課のテスト、第１課（国籍を言う）
第４回　第１課復習
第５回　第１課のテスト、第２課（自己紹介する）
第６回　第２課復習
第７回　第２課のテスト、第３課（好きなものを言う）
第８回　第３課復習
第９回　第３課のテスト、第４課（これは何ですか？）ものについて尋ねる
第 10 回　第４課復習
第 11 回　第４課のテスト、第５課（ここはどこ？）場所を尋ねる
第 12 回　第５課復習
第 13 回　第５課テスト、第６課（年齢を尋ねる）
第 14 回　第６課復習
第 15 回　第６課テストとまとめ

使用教科書

藤田裕二著、『パリのクール・ジャパン』、朝日出版社

自己学習の内容等アドバイス

復習してテストに備えること。

［授業科目名］ フランス語Ⅱ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 田村　真理
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期 ２～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

フランス語Ｉに続き、フランス語の基礎を学習する。単語、表現、基本的な文法規則を学び、コミュニケーションの四つの能力すべて（読む、書く、聞く、話す）の習熟を目指す。

また、フランスの文化についての理解も深める。フランス語検定試験の４級が目標。

授業の概要

はじめの数回はフランス語のＩで学習した内容を復習し、その後はフランス語Ｉで使用した教科書（パスカルオジャポン」または「パリのクールジャパン」）をもとに重要な単語、表現、文法事項を学び、「練習問題」で理解と定着をはかる。ほぼ２週に１課のペースで進み、各課ごとに小テストを行う。

学生に対する評価の方法

各課で行う小テストを６０パーセント、授業への参加を４０パーセントとして評価する。小テストの追試は特別な場合以外、行わない。遅刻は欠席とみなし、５回欠席すると失格。

再試験は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　フランス語Ｉで学んだ内容の復習（第０課～第２課）
第２回　同上（第３、４、５課）
第３回　同上（第６、７、８課）
第４回　第９課（家族について語る）
第５回　第９課テスト、第１０課（年齢を言う）
第６回　第１０課テスト、第１１課（時刻を言う）
第７回　第１１課テスト、第１２課（紹介する）
第８回　第１２課テスト、第１３課（日課を説明する）
第９回　第１３課テスト、第１４課（量を表す）
第10回　第１４課テスト、第１５課（天候を言う）
第11回　第１５課テスト、第１６課（比較する）
第12回　第１６課テスト、第１７課（過去のことを語る）
第13回　第１７課テスト、第１８課（未来のことを語る）
第14回　第１８課テスト、復習
第15回　まとめ

使用教科書

フランス語Ｉで使用した教科書（藤田裕二著、『パスカル・オ・ジャポン』、白水社または藤田裕二著、『パリのクールジャパン』、朝日出版社のどちらでも可）

自己学習の内容等アドバイス

必ず復習し、テストのために準備して下さい。

［授業科目名］ 中国語Ⅰ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 李　萍
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

本授業は半年で中国語の発音要領、基礎的文法と初歩的な会話を身に付けることを目標とする。

授業の概要

　中国語はリズム感がとても大事なので、まず発音をしっかり教える。正確な発音から簡単な会話に入り、さらに短文を理解するために、必要な文法を系統的に教えていく。授業は教材に沿って進行する。

学生に対する評価の方法

　期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　履修に関するガイダンス・オリェンテーション
第２回　　第１課　中国語の特徴と発音要領及びその構成を説明する。
第３回　　第２課　母音･子音と声調(アクセント)を組んで発音の練習をさせる。
第４回　　第３課 「自己紹介」。人称代名詞と平叙文、否定文、疑問文の学習。
第５回　　第３課の要点，難点を詳細に説明する。本文を真似して，トレーニングを行う。
第６回　　第４課 「これはなんですか？」。指示代名詞、疑問詞、副詞の学習。
第７回　　第４課の要点，難点を詳細に説明する。本文を真似して，トレーニングを行う。
第８回　　第５課 「あなたはどこに行きますか？」。動詞の学習。
第９回　　第５課の要点，難点を詳細に説明する。本文を真似して，トレーニングを行う。
第10回　　第６課 中国語と中国事情
第11回　　第７課「これはどうですか？」。形容詞の学習。
第12回　　第７課の要点，難点を詳細に説明する。本文を真似して，トレーニングを行う。
第13回　　「チャレンジ問題」を用いて学習する。
第14回　　総合的復習。
第15回　　全体のまとめ。

(受講者の理解度をみながら進度を調整する)

使用教科書

　プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

前回の授業で学習した内容を復習してほしい。

［授業科目名］ 中国語Ⅱ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 李　萍
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期 ２～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

　この授業では、それぞれの場面を設定して、受講者が自分なりの会話能力を形成していくための手がかりをつかませる。中国語での会話資質を向上させることを目的とする。

授業の概要

　この授業は「中国語Ⅰ」を修了した学生が受ける科目である。まず前半で習得したものを復習して、正確な発音に直す。「中国語Ⅰ」につづいてテキストの後半に沿って教え、文法も「中国語Ⅰ」の後につづく。各課が終わったごとに、本文の会話を真似して、それぞれ自分の事情に合う言葉に書き直す。その後、それらの短文で会話を練習する。

学生に対する評価の方法

　期末試験の成績を基本点数として、授業中の練習の出来具合と授業への態度を参考にしながら、プラス・マイナスして総合点を出す。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　履修に関するガイダンス・オリエンテーション
第２回　　第８課　「中国語Ⅰ」で学んだ疑問詞、動詞、形容詞を復習する。
第３回　　第９課　「中国語Ⅰ」で学んだ文の表現を復習する。
第４回　　第 10 課 「あなたは食事をしましたか？」。過去形、完了文を学習する。
第５回　　第 10 課の要点，難点を詳細に説明する。本文を真似して，トレーニングを行う。
第６回　　第 11 課 「彼はいつ用事がありますか？」。時間の表現を学習する。
第７回　　第 11 課の要点，難点を詳細に説明する。本文を真似して，トレーニングを行う。
第８回　　第 12 課 「あなたの家は遠いです遠くないか？」。介詞、反復疑問文を学習する。
第９回　　第 12 課の要点，難点を詳細に説明する。本文を真似して，トレーニングを行う。
第 10 回　 第 13 課 中国語と中国事情
第 11 回　 第 14 課「あなたは何時から始まりますか」。助動詞を学習する。
第 12 回　 第 14 課の要点，難点を詳細に説明する。本文を真似して，トレーニングを行う。
第 13 回　「チャレンジ問題」を用いて学習する。
第 14 回　総合的復習。
第 15 回　全体のまとめ。

（受講者の理解度をみながら進度を調整する）

使用教科書

　プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

前回の授業で学習した内容を復習してほしい。

<table>
<tr><td colspan="2">［授業科目名］
日本語表現</td><td>［授業方法］
講義</td><td>［授業担当者名］
大島　龍彦</td></tr>
<tr><td>［単位数］
２</td><td>［開講期］
１～４年次前・後期</td><td>［必修・選択］
選択</td><td>備考
管理栄養学部
前期・後期リピート</td></tr>
</table>

授業の到達目標及びテーマ

特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。

授業の概要

日本語表現の扱う範囲は、音声言語と文章言語である。が、講義では特に後者について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法や、書かなければならない事柄へのアプローチの方法と、それらを表現する方法の具体について学ぶ。

学生に対する評価の方法

テストと授業に取り組む姿勢、レポートなどの提出物によって評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義概説（出席とミニットペーパー・講義の内容とその方法・学ぶということ）
第２回　書けることの再発見とその内容
第３回　何を書くか。如何に書くか。知っていることしか書けない。
第４回　起承転結と序破急ということ。「起」に全力を出す。
第５回　「書き出し」と「主題」
第６回　明快な文章は一文が短い。
第７回　時間軸と方向軸について
第８回　文章のレッスンに「接続語」はいらない。
第９回　強い名詞と形容語
第 10 回　写生文と報告文について
第 11 回　小論文について（論より証拠）
第 12 回　履歴書で学ぶ日本語表現　１
第 13 回　履歴書で学ぶ日本語表現　２
第 14 回　これまでの講義内容に関する質疑応答の後テスト
第 15 回　講義のまとめ

使用教科書

必要に応じてプリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

書くことは書き慣れることが大切。毎日数行日記を書くことを勧める。日常生活に目をこらし、話したくなることをメモしておく。

［授業科目名］ 日本語表現		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 鈴木　亙
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

特に書くことに対する抵抗感を払拭し、書くことが楽しく感じられる心を養い、読者を逃さず最後まで付き合ってもらえる文章の書き方（技法）を学ぶ。

授業の概要

講義では、日本語表現に関わる範囲のうち特に文章表現について学ぶ。書きたい事柄を多く持つ方法そして書かなければならない事柄へのアプローチの方法、それらを表現する具体的な方法について学ぶ。

学生に対する評価の方法

授業に取り組む姿勢と、レポートなどの提出物等とによって総合的に評価する。
本授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　講義概要、作文を書く
第２回　　言語活動の重要性、情報処理の仕方・文章の書き方
第３回　　言葉との出会い、文章とは何か
第４回　　コミュニケーション論（『人は見た目が９割』など）
第５回　　言語表現の言語学、多義文
第６回　　修飾の仕方、読点の打ち方
第７回　　修飾について
第８回　　論文・レポートの書き方
第９回　　間違えやすい日本語・敬語
第 10 回　『記号空間論』
第 11 回　　日常生活の言葉の冒険・言葉遊び
第 12 回　　小論文の書き方（就職対策）
第 13 回　　精神的な冒険・エコグラム
第 14 回　　物理的な冒険
第 15 回　　講義のまとめ

使用教科書

必要に応じてプリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

書くことは書き慣れることが大切です。毎日数行日記を書くこと、日常生活に目をこらし、話したことをメモしておくことなどに注意を払ってみてください。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
日本語表現		講義	石川　稔子
[単位数] ２	[開講期] １～４年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 ヒューマンケア学部

授業の到達目標及びテーマ

社会生活において国語力や文章力が問われることがたびたびある。特に自分の考えを正確に、しかも簡潔に文章で述べることは困難である。単にキーワードを並べるだけでは書き手の意図は伝えられない。

この講義では日本語の様々な問題を考察しながら、実生活で必要な日本語表現力を養成し、基本的な文章が正確に書けることを目標とする。

授業の概要

本講義では、文章表現を行うために、まず日本語とはどういう言語か、間違いやすい日本語はどのようなものかを分かりやすく講義する。その上で、具体的な文章の書き方を学ぶ。

学生に対する評価の方法

１．授業に取り組む姿勢と、授業内容に関わるレポートなどの提出物によって全体の４０％を評価する。
２．授業内容の理解度をはかる最終試験は全体の６０％の評価とする。
以上２点から総合的に評価する。なお、再評価は行わない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第　1回　ガイダンス　日本語の特色
第　2回　国語の書き方を決めるのは誰？
第　3回　日本語の文字①　日本語のマナ・カナとは？
第　4回　原稿用紙の使い方と用字法
第　5回　日本語の文字②　漢字はどのようにできたのか？
第　6回　要約文は創作文？
第　7～８回　間違いやすい日本語（主語と述語・修飾語・副詞の呼応）
第　9回　待遇表現　基本的な敬語表現の確認
第10回　日誌の書き方
第11～13回　論文・レポートの書き方と文献資料の扱い方
第14回　試験・エントリーシートを書いてみよう
第15回　講義のまとめ

使用教科書

必用に応じてプリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

辞書は授業だけでなく、頻繁に使用することが望ましい。分からない言葉が出てくるとすぐに調べる習慣をつけること。提出物は授業時間内に仕上げること。

［授業科目名］ 情報リテラシー		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 堀尾 正典・内田 君子・山本 恭子
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 1年次前期：管理栄養学部 1～4年次：メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

ネット社会では、情報の伝搬速度は著しく速い。それが正しい情報であっても間違った情報であっても、である。ネット社会を生きる我々にとっては、あふれる情報の中から真偽を見極めデマや噂に振り回されない姿勢こそが肝要になる。そして、このような姿勢のためには情報リテラシーが必要となる。情報リテラシーは情報活用能力ともいい、情報に対する真偽判断だけではなく、現状分析、取捨選択、加工、発信といった広範にわたる行為が適切に行える能力をさす。本授業では、大学生活では必ず必要となるレポート作成というものをテーマに、ＰＣの基本操作能力（コンピュータリテラシー）とこれら情報リテラシーの修得を目指す。

授業の概要

この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活では、多くの場面で、学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自ら決めた自由なテーマに沿ってレポートの作成を試みる。

具体的な演習内容として、

・パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など）
・ワープロソフト（Microsoft Word）の基本操作
・レポートの書き方とワープロソフトを用いたレポートの作成

と言った点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。

学生に対する評価の方法

普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーションとPC の基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。
第２回　PC の基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ）
第３回　インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法)
第４回　ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能）
第５回　作表（作表、イラスト、文字装飾）
第６回　描画（図形描画）
第７回　基本課題その１（学習した機能を使い複合文書を作成）
第８回　基本課題その２（同上）
第９回　レポートの書き方１（論理的な文章について）
第１０回　レポートの書き方２（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて）
第１１回　レポート課題の作成１（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める）
第１２回　レポート課題の作成２（インターネットなどを利用した文献調査）
第１３回　レポート課題の作成３（章立て・執筆）
第１４回　レポート課題の作成４（推敲・添削・修正・提出）
第１５回　レポート課題提出（提出）

使用教科書

なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。

自己学習の内容等アドバイス

レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集や考察が望まれる。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
情報リテラシー		演習	濱島　秀樹
［単位数］	［開講期］	［必修・選択］	備考
２	１年次前期	必修	子どもケア専攻

授業の到達目標及びテーマ

ワードを使った文章作成・編集・校閲などのレポート作成能力と図形・図表・写真などを使った保健室だよりや学級通信制作能力を身につけることが本授業の目標である。また，その過程で，情報リテラシーであるＰＣ操作能力（コンピュータリテラシー）と情報の取捨選択や発信能力（メディアリテラシー）を身につけることが目標である。IT 関連の知識や社会的時事問題も随時とりあげ，注意を喚起していく。

授業の概要

大学生活では，多くの場面で，学習や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには，インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え，ワードの機能を活用しつつ，テーマの決め方，調査の進め方，内容のまとめ方といった，レポートそのものの作成技法の習得も必要である。そこで，この授業ではコンピュータの基本から学習を始め，ワードの操作の仕方，活用の仕方を含めた，初年次教育におけるアカデミックライティングの基礎を学ぶ。また，保健室便りや学級通信などの作成能力なども養成する。

学習項目の区切りで練習問題や復習問題を随時実施し，知識を定着させていく。学期途中に何度か総合問題を出題する。また，単にパソコンの操作技能だけではなく，論理的なレポートを書くために必要な考え方，ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権，情報の取捨選択といった事柄まで学習する。

学生に対する評価の方法

受講態度・授業への参加態度(60%程度)，授業内で作成するレポート課題（20%程度）と保健室だよりや学級通信などの課題（20%程度）で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーションとPC の基本(受講上の諸注意や講義概要，成績の評価方法などについて説明)。
第２回　PC の基本操作（パーソナルコンピュータについての概論，各種基本操作）
第３回　インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯，ネットワーク社会の光と陰，WWW による情報の検索，電子メールの送受方法，各種パスワードの変更方法）
第４回　ワードの基本的各種操作とWord Web App の利用
第５回　ワードの各機能とワードを使ったレポートの書き方１
第６回　ワードの各機能とワードを使ったレポートの書き方２
第７回　ワードの各機能とワードを使ったレポートの書き方３
第８回　ワードの各機能とワードを使ったレポートの書き方４
第９回　ワードを使ったレポート課題の作成
第10 回　ワードを使ったレポート課題の作成と提出
第11 回　ワードによる図形・図表・写真の作成と挿入１
第12 回　ワードによる図形・図表・写真の作成と挿入２
第13 回　ワードとエクセルの連携
第14 回　保健室便りまたは学級通信作成
第15 回　保健室便りまたは学級通信作成

使用教科書

学生に役立つWord2010　基礎　および　ドリル（FOM 出版）
参考図書はその都度紹介する。必要に応じてプリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

教科書を使って，予習や復習をすると知識がより定着します。読むだけではなく，実際に操作をしてみましょう。また，欠席をした場合は，教科書を使って自習し，次回までに進度を合わせるようにしましょう。

［授業科目名］ 情報リテラシー		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 山本　恭子
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 必修	備考 幼児保育専攻

授業の到達目標及びテーマ

ネット社会では、情報の伝搬速度は著しく速い。それが正しい情報であっても間違った情報であっても、である。ネット社会を生きる我々にとっては、あふれる情報の中から真偽を見極めデマや噂に振り回されない姿勢こそが肝要になる。そして、このような姿勢のためには情報リテラシーが必要となる。情報リテラシーは情報活用能力ともいい、情報に対する真偽判断だけではなく、現状分析、取捨選択、加工、発信といった広範にわたる行為が適切に行える能力をさす。本授業では、大学生活では必ず必要となるレポート作成というものをテーマに、ＰＣの基本操作能力（コンピュータリテラシー）とこれら情報リテラシーの修得を目指す。

授業の概要

この授業は、教養のコンピュータ演習系科目の基礎となる科目である。大学生活はもとより、実社会においても、多くの場面で調査や研究の成果としてさまざまなレポートを作成しなければならない。効果的なレポートを作成するためには、インターネットを含めたコンピュータの活用能力に加え、テーマの決め方、調査の進め方、内容のまとめ方といったレポートそのものの作成技法も重要になってくる。そこで、この授業ではコンピュータの基本から学習を始め、よりよいレポートを効率的に作成するために必要となる考え方や知識を学ぶ。最後に自らが自由に決めたテーマに沿ってレポートの作成を試みる。

具体的な演習内容として、

・パーソナルコンピュータの基本的な取り扱い（WWW や電子メールによる情報の検索・送受など）
・ワープロソフト（Microsoft Word）の基本操作
・レポートの書き方とワープロソフトを用いたレポートの作成

と言った点が学習の中心になる。演習では、単にパソコンの操作技能だけでなく、ネットワーク社会におけるマナーやソフトウェアの著作権、論理的なレポートを書くために必要な考え方や、ふさわしい情報の取捨選択といった事柄にまで話題が及ぶことになるであろう。

学生に対する評価の方法

普段の受講態度(20%程度)、授業内で提出する基本課題（20%程度）とレポート課題（60%程度）で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーションとPC の基本(受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明)。
第２回　PC の基本操作（パーソナルコンピュータについての概論、各種基本操作、タッチタイプ）
第３回　インターネットとメール（インターネットの歴史と発展経緯、ネットワーク社会の光と陰、WWW による情報の検索、電子メールの送受方法、各種パスワードの変更方法）
第４回　ビジネス文書と基本書式（ビジネス文書とは、基本的な書式機能）
第５回　作表（作表、イラスト、文字装飾）
第６回　描画（図形描画）
第７回　基本課題その１（学習した機能を使い複合文書を作成）
第８回　基本課題その２（同上）
第９回　レポートの書き方１（論理的な文章について）
第１０回　レポートの書き方２（大学におけるレポートとは、書き方、レポートフォーマットについて）
第１１回　レポート課題の作成１（最近のニュースなどより各自が自由にテーマを決める）
第１２回　レポート課題の作成２（インターネットなどを利用した文献調査）
第１３回　レポート課題の作成３（章立て・執筆）
第１４回　レポート課題の作成４（推敲・添削・修正・提出）
第１５回　レポート課題提出（提出）

使用教科書

なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。

自己学習の内容等アドバイス

レポート作成では、図書館や自宅などでの積極的な情報収集や考察が望まれる。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
表計算演習		演習	古藤　真
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 選択	備考 管理栄養学部

授業の到達目標及びテーマ

到達目標は、マイクロソフトオフィススペシャリスト(MOS)　Excel2010 を取得できる範囲、内容、難易度とする。また、学生の到達度によっては、Excel の応用として、モデル化とシミュレーションまで学び、傾向分析やＡＢＣ分析などの各種のデータ分析手法の基礎と、マクロ(VBA)を利用する応用能力まで発展させる。

授業の概要

表計算ソフトあるいはスプレッドシートともいう(Microsoft Excel)を用いて、表やグラフの作成、統計処理等における基本知識の再確認と効率的な作成技法について学ぶ。機能や操作方法だけでなく、わかりやすく表現力のある資料を短時間に作成できるように努める。応用能力として、複雑な計算やシミュレーション、データの集計や統合あるいは抽出というデータベース処理の基礎までを学ぶ。

学生に対する評価の方法

①　授業への参加態度（評価ウエート 10%）
②　課題提出（試験も含む　評価ウエート 80%）
③　情報リテラシーを身につけさせる自習型の Web テスト（評価ウエート 10%）
以上３点から総合的に評価する。なお課題提出（試験）は、添付ファイルで提出させる。

授業計画（回数ごとの内容等）

第　１回　ガイダンスおよび基本操作　受講する上での諸注意や演習の概要、成績の評価方法など
第　２回　Excel の基礎知識　データ入力
第　３回　Excel 入門　簡単な表の作成　ファイル操作　プリンタの操作　演習室利用の際の諸注意
第　４回　ワークシートの活用１
第　５回　ワークシートの活用２（課題１　ファイルの添付方法）
第　６回　ワークシートの活用３（課題２・課題３）
第　７回　ワークシートの活用４（課題４）
第　８回　グラフ１
第　９回　グラフ２
第 10 回　データベース１
第 11 回　データベース２
第 12 回　データベース３（課題５）
第 13 回　Excel の応用１（課題６・課題７）
第 14 回　Excel の応用２（課題８・課題９　圧縮フォルダの作成方法と添付）
第 15 回　グラフ試験１またはグラフ試験２（第 ７回～第 ８回の範囲）とまとめ

使用教科書

Windows 7 対応３０時間でマスター Excel 2010　実況出版編集部編　（実教出版）

自己学習の内容等アドバイス

ソフトウェアの修得には、短期間で集中して学ぶことも必要です。時間があれば各自のペースで教科書を自習すること。Web テストの URL は、授業の中で連絡するので、随時実施すること。

［授業科目名］ 表計算演習		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 堀尾　正典
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 1 年次後期：管理栄養学部、幼児保育専攻 1～4 年次：メディア造形学部

授業の到達目標及びテーマ

大学生活や将来の企業内の作業では、ワープロや電子メールとならび、表集計ソフトの利用頻度は高い。
この授業では、まず代表的な表集計ソフト EXCEL の基本的な使い方について学習する。その後、各自が決めた目的のワークシートを作成していく。受講者は、実現目標の設定、実現のための問題点抽出、試行錯誤による問題点の解決など、問題解決に必要な様々なプロセスを、これら演習を通して体験していくことになる。このような体験を通じて問題解決能力の修得を目指すことが本授業の大きなテーマである。
これは仕事や研究に直結する能力でもあるので、研究などでデータ収集を必要とする下級生から就職を控えた上級生まで多くの学生が受講されるとよいだろう。

授業の概要

本科目は、表集計ソフトを用いて様々なデータ・情報の収集、管理、分析について学ぶ。演習は、
・代表的な表計算ソフト EXCEL の基本操作や機能について
・アンケートによるデータ収集方法について
・実践的な活用法
を学習した後、学生諸君が今行っている（あるいは、過去に行っていた、または架空のものでもよい）アルバイトに対して、その１ヶ月分の給与を計算・管理できるワークシートの作成を行う。各自が、雇用条件の異なったアルバイトに対して、実現すべき機能を選別し、それぞれの創意工夫と試行錯誤のチャレンジで完成を目指すことになる。本講義を通じて、そのような問題解決の楽しさを体験していただければと考える。

学生に対する評価の方法

受講態度（15 点程度）、授業内で提出する課題（85 点程度）の完成度で総合的に判断して評価する。課題点は、必修部分が 50 点であり、残りは、複雑な雇用条件を計算式に実現できた場合、その実現難易度に応じて 35 点を満点とした工夫点が加点される。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーション（受講上の諸注意や講義概要、成績の評価方法などについて説明）とデータの入力・編集の基本。
第２回　書式、印刷、リンク貼り付けなど基本操作の説明
第３回　計算機能についての学習
第４回　グラフ機能についての学習
第５回　データベース機能についての学習（アンケート作成と集計の方法）
第６回　関数の基本、絶対番地、混合番地、IF 関数の基本
第７回　IF 関数の入れ子
第８回　IF 関数と論理積・論理和
第９回　日付処理の方法
第１０回　検索行列関数の使い方
第１１回　カレンダーを作る
第１２回　バイト給与計算表の作成１（実現機能の検討）
表集計ソフトを利用して、自分自身が現在行っているアルバイトなどに対し、その１ヶ月分の勤怠と給与状況を計算管理できるようにする。作成するものは、実際の学生生活に利用できうるようなものであること。
第１３回　バイト給与計算表の作成２（必須機能の実現）
第１４回　バイト給与計算表の作成３（工夫機能の実現）
第１５回　バイト給与計算表の採点（課題提出）

使用教科書

なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。

自己学習の内容等アドバイス

授業内の内容を一人で繰り返し独習するなどの復習を時間外に行うことが、理解の定着には効果的である。

［授業科目名］ 表計算演習		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 濱島　秀樹
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 選択	備考 子どもケア専攻

授業の到達目標及びテーマ

表計算ソフトのエクセルを用いて，情報の収集，管理，様々なデータの分析と活用ができるようになることが本授業の目標である。また，その過程で，情報リテラシーであるＰＣ操作能力（コンピュータリテラシー）と情報の取捨選択や発信能力（メディアリテラシー）を身につけることが目標である。IT 関連の知識や社会的時事問題も随時とりあげ，注意を喚起していく。

授業の概要

本授業は，表計算ソフトを用いて様々なデータに関する，情報の収集，管理，分析の仕方について学ぶ。エクセルの基本操作や機能について学んだ後，最後に，保健あるいは心理に関するアンケート等を行い，エクセルを使って収集したデータを分析し，グラフ化する。ワードと連携させ，科学的論文形式に沿ってまとめる。初年次教育におけるアカデミックライティングの基礎を学ぶ。

学習項目の区切りで練習問題や復習問題を随時実施し，知識を定着させていく。学期途中に何度か総合問題を出題する。

認定心理士資格取得希望者は受講を強く望まれる。

学生に対する評価の方法

受講態度・授業への参加態度(60%程度) および授業内で提出する課題（40%程度）で総合的に判断して評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーション(受講上の諸注意や講義概要，成績の評価方法などについて説明)とエクセルの基礎知識，データの入力・編集の基本。
第２回　データの入力，Excel Web App の利用
第３回　数式の入力，関数の利用
第４回　関数の利用
第５回　表の作成，表の印刷
第６回　グラフの作成と活用
第７回　グラフィックの利用
第８回　複数シートの操作，複数ブックの操作
第９回　データベースの利用
第 10 回　ピボットテーブルとピボットグラフの作成その１
第 11 回　ピボットテーブルとピボットグラフの作成その２
第 12 回　マクロの作成
第 13 回　保健あるいは心理アンケート用紙の作成と実施
第 14 回　アンケートから得たデータの打ち込みと分析その１
第 15 回　データの分析その２と解釈，レポート作成

使用教科書

学生に役立つExcel2010　基礎　および　ドリル（FOM 出版）
参考図書はその都度紹介する。必要に応じてプリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

教科書を使って，予習や復習をすると知識がより定着します。読むだけではなく実際に操作をしてみましょう。また，欠席をした場合は，教科書を使って自習し，次回までに進度を合わせるようにしましょう。

［授業科目名］ プレゼンテーション演習		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 内田　君子
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

本科目のテーマは、自分が発見したことや考え、アイデアなどを表現するための道具としてプレゼンテーションソフト（Microsoft PowerPoint）を活かしながら課題探求することである。

特に課題の作成・発表・評価を主体とし、具体的なテーマに基づいたプレゼンテーションの実際を体験しながら、効果的なプレゼンテーションを行うための知識と技術を習得することを到達目標とする。

授業の概要

今日、プレゼンテーションの知識やスキルに対するニーズはますます高まっていく傾向にある。特に、研究発表や企画の説明など、ビジネスの場におけるプレゼンテーションは一層重要性を増している。

そこで本科目は、 プレゼンテーションの基本の理解、資料の作成法の習得、プレゼンテーションのスキル習得、聴者・評価者としての態度の理解と習得、という四つの側面から展開する。

具体的な授業の進め方として、プレゼンテーションの基礎知識、プレゼンテーションソフトの機能と操作、効果的なプレゼンテーションテクニック、課題の作成・発表・評価等の各項目について学習して行く。

学生に対する評価の方法

プレゼンテーションの結果(50%)、提出を義務付けた課題(30%)、授業における取組状況 (20%)により評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス（授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど）
第２回　プレゼンテーションの基礎（プレゼンテーションの概要と PowerPoint の基本操作）
第３回　プレゼンテーションデータ作成の基礎１（テキストデータによるスライドの作成）
第４回　プレゼンテーションデータ作成の基礎２（スライドの編集・加工、印刷）
第５回　プレゼンテーションデータ作成の基礎３（図表やグラフの利用）
第６回　プレゼンテーションデータ作成の基礎４（スライドマスタの利用、特殊効果の設定）
第７回　復習問題
第８回　プレゼンテーションの実践１（オリジナルプレゼンテーションのテーマ設定、ストーリーシートの作成）
第９回　プレゼンテーションの実践２（情報の収集、スライドの作成）
第 10 回　プレゼンテーションの実践３（スライドの作成）
第 11 回　プレゼンテーションの実践４（シナリオの作成）
第 12 回　プレゼンテーションの実践５（発表する技術、発表を聞く技術、討論の技術、評価の技術）
第 13 回　プレゼンテーションの実践６（リハーサルの実施、チェックシートによる自己評価）
第 14 回　発表１（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価）
第 15 回　発表２（プレゼンテーションの実施と聞き手による評価）

使用教科書

プリント教材

自己学習の内容等アドバイス

復習課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。解答は、翌週の授業で解説する。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
プレゼンテーション演習		演習	山本　恭子
[単位数] 2	[開講期] １～４年次後期	[必修・選択] 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

到達目標：①プレゼンテーションの定義、目的が理解できる、②PowerPoint を用いた効果的なスライド資料が作成できる、③論理的なプレゼンテーションの組み立てが理解できる、④スライド資料を活用したプレゼンテーションが実践できる。

テ ー マ：スライドを活用したプレゼンテーション技法の習得

授業の概要

プレゼンテーション能力は、学生生活では研究発表、社会人となってからも企画提案や事業報告など、多くの場面で必要とされている。本科目では、プレゼンテーションソフト（Microsoft PowerPoint）を用いて資料（スライド）作成の技術を習得する。さらに、論理的なプレゼンテーションの組み立てや話し方を学び、自分の伝えたいことを限られた時間の中で効果的に伝えるプレゼンテーション技法を身につける。

授業の成果として、各自で選択したテーマに基づきインターネットや書籍等を活用しながら情報収集を行い、テーマに相応しいスライドと発表シナリオを作成し、対面式のプレゼンテーションを行う。その際に相互評価と自己評価を行い、改善点を把握することでプレゼンテーション能力の向上を目指す。

学生に対する評価の方法

以下の各項目の得点を合計し、評価する。

・総合試験（50%）：スライド資料を用いたプレゼンテーションを行う（発表時間５分、ビデオ撮影）。
・課題（30%）：授業内で提出する課題。
・受講態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回 ガイダンス（授業概要、進め方、成績の評価方法を把握する）
第２回 プレゼンテーションとは
　　　PowerPoint の基本操作(1) 画面構成／レイアウトの選択／テキストの入力／ヘッダーフッターの設定
第３回 PowerPoint の基本操作(2) 図形の挿入／アニメーションの設定／画面の切り替え効果／
　　　スライドショーの実行／リハーサル機能
第４回 PowerPoint の基本操作(3) スライドマスター／表・グラフの挿入
第５回 PowerPoint の基本操作(4) 配付資料の作成／印刷形式
第６回 プレゼンテーション技法(1) ストーリー構成／情報収集の方法
第７回 プレゼンテーション技法(2) 話し方・態度・表現方法／評価のポイント
第８回 総合試験の準備(1) テーマの設定／ストーリーシートの作成
第９回 総合試験の準備(2) 情報収集
第10回 総合試験の準備(3) スライド作成
第11回 総合試験の準備(4) シナリオ作成
第12回 総合試験の準備(5) リハーサル／レーザーポインタの使い方
第13回 総合試験① プレゼンテーションの実践と相互評価
第14回 総合試験② プレゼンテーションの実践と相互評価
第15回 まとめ プレゼンテーション結果のフィードバックと自己評価

使用教科書

なし。必要に応じて資料を配布する。

自己学習の内容等アドバイス

総合試験（プレゼンテーションの実践）に向けて、授業外の時間も有効に使い情報収集に努めてほしい。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
データベース演習		演習	内田　君子
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
２	１～４年次前・後期	選択	

授業の到達目標及びテーマ

本科目のテーマは、データベースシステムを用いて身近な問題を解決することができる実践的な情報処理能力の育成である。

特に実務を想定した例題演習を主体とし、データベースソフト（Microsoft Access）を利用してリレーショナルデータベースを作成し、必要な情報を適切かつ効率的に引き出すための基礎的な知識と技術の習得を到達目標とする。

授業の概要

研究やビジネスにおける活動を高度化、効率化する上で、データベースの活用は不可欠の要素となっている。そこで本科目は、データベースの基本構成および概念の理解、データベースを使用するための概念や方法の理解、データベース設計の基礎の理解、という三つの側面から展開する。

具体的な進め方として、リレーショナルデータベースの仕組み、データベースソフトの機能と操作、データベースの作成（テーブル）、データの抽出や集計（クエリ）、データ入力画面の作成（フォーム）、各種報告書や宛名ラベルの印刷（レポート）等の各項目について学習していく。

学生に対する評価の方法

期末試験（50%）、提出を義務付けた課題（30%）、授業における取組状況（20%）により評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス（授業概要や受講上の諸注意、評価方法の説明、パソコンリテラシーのチェックなど）
第２回　データベースの基礎１（リレーショナルデータベースとは、データベースソフトAccessの基本操作）
第３回　データベースの基礎２（データの検索、並べ替え、印刷）
第４回　テーブルの作成１（テーブルとは、データの形式、データの入力）
第５回　テーブルの作成２（入力支援機能の活用、効率的なデータ入力）
第６回　フォームの作成（フォームとは、使いやすいフォームの特徴、各要素の編集）
第７回　クエリの作成１（クエリとは、選択条件の作成）
第８回　クエリの作成２（集計処理、式ビルダの利用、関数の利用）
第９回　クエリの作成３（アクションクエリの利用）
第10回　データベースの設計１（新規テーブルの作成、フォームの設計）
第11回　データベースの設計２（リレーションシップの設定）
第12回　データベースの設計３（リレーションシップされたクエリの作成と計算）
第13回　レポートの作成（レポートとは、書式や配置のアレンジ、印刷時の機能）
第14回　全体の復習
第15回　期末試験とまとめ

使用教科書

実教出版編集部（編）『30時間でマスター　Access2010』実教出版

自己学習の内容等アドバイス

復習課題を出すので、その内容を中心に復習してくること。解答は、翌週の授業で解説する。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
プログラミング演習		演習	堀尾　正典
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

本科目の目的は、プログラミングの基本を学習し、論理的な考え方を身につけることにある。プログラミングの学習は、コンピュータの本格活用を目指す者にとっても重要となるばかりでなく、学ぶことにより、コンピュータの適用範囲を広げ、道具としてのコンピュータの本質的な面白さにも気づくことができる。

本講義受講後、直ちに本格的プログラマーへの道が開かれるほど、プログラミングは安易なものではないことは心しておいていただきたいが、論理的な考え方を養い、自分の新しい可能性の発見とこれからの挑戦の糸口には十分なものとなるであろう。

授業の概要

本演習では、プログラミング技法の基礎について学ぶ。学ぶ言語は、プログラミング初心者でも手軽に楽しく学べる点などを配慮して、ホームページに対して動的なアクションを与えることができるJavaScriptを用いる。具体的には、まずホームページ作成の基本を解説した後、Javaスクリプトについて学び、プログラミングを行う上での基本的な考え方（逐次、分岐、繰り返し、関数、配列）を、練習問題を通じて学習していく。Javaスクリプトをきちんと理解すれば、高度なホームページの作成や複雑なページのソースコードの理解も可能となる。

なお、映像の学生は専門科目の中でより高度なプログラミングを履修することが可能であるため、本科目は映像以外の学生を優先（映像の学生は、受講者に余裕がある場合のみ受講可能）とするが、映像以外の学生も希望者多数の場合は、抽選となる場合があるので注意していただきたい。

学生に対する評価の方法

普段の受講態度(20%)、授業内で提出する演習課題(80%)を総合的に判断して評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーション（諸注意）、プログラミング概論（プログラミングとは、機械語とコンパイルについて、各種言語の歴史、特徴など）、エディタの使い方。
第２回　HTMLとCSSについて（ホームページ作成・表示の基本的な仕組みなどについて学習）
第３回　主なタグ（HTML言語を用いて簡単なWebページの作成）
第４回　JavaScriptの概要（基本構造、変数、オブジェクト、演算子）
第５回　入出力の方法（プロンプト、テキストボックスによるデータの入出力）
第６回　分岐１（IFの基本的な使い方）
第７回　分岐２（条件分岐の応用）
第８回　繰り返し１（繰り返し処理の作り方）
第９回　繰り返し２（多重ループ）
第１０回　関数（関数とは、作り方、呼び出し方）
第１１回　配列（配列とは、配列の利用方法）
第１２回　課題作成１（簡単なゲーム作成など、いくつかのプログラムを課題として作成する）
第１３回　課題作成２
第１４回　課題作成３
第１５回　評価

使用教科書

なし。授業内でテキストの代わりとなるレジュメを公開するので、各自利用されたし。

自己学習の内容等アドバイス

今までの経験からみて、初学者が授業内だけでプログラミングの考え方を習得することは、きわめて困難と言わざるを獲ない。時間外で、授業中に出された練習問題を各自、繰り返し復習していくことが重要である。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
情報基礎論		講義	望月　達彦
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

１．コンピュータの基礎知識と技術を習得する。
２．パソコンの基本的な問題に対処できる。

授業の概要

　コンピュータを効果的に利用する為には、ハードウェア／ソフトウェアを中心とした、基礎的知識が必要である。本講義では、我々の日常生活とコンピュータとの係わりを考え、人間の仕組みと対比して、コンピュータの仕組みや情報の扱い方、並びに、ハードウェアとソフトウェアの基礎的な知識を学ぶと共に、それらの知識の必要性について理解し、考える。

学生に対する評価の方法

以下に述べる各項目の得点を合計し、評価する。
・試験（80%）：第15回授業時に実施する。
・授業参画態度（20%）：授業に対する意欲的な取り組みを評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス（授業の基本方針と期間の授業計画）
第２回　コンピュータの特徴（世界最初のコンピュータ、コンピュータの特徴）
第３回　ハードウェアとソフトウェア、コンピュータの五大機能と五大装置
（ハード／ソフトの定義、コンピュータの五大装置・五大機能、ＣＰＵ）
第４回　ディジタルとアナログ（ディジタル／アナログの定義、ディジタルの利点、ディジタル化の方式）
第５回　基数変換（２進数、１６進数、基数変換）
第６回　数値表現①（固定小数点数と補数、浮動小数点数と精度・誤差）
第７回　数値表現②（ゾーン10進数、パック10進数）
第８回　文字表現（１バイト系コード、２バイト系コード）
第９回　命令とプログラム
（命令とプログラム、プログラム記憶方式、ノイマン式コンピュータ、第五世代コンピュータ）
第10回　補助記憶装置（ハードディスク、フロッピィディスク、ＣＤ）
第11回　補助記憶装置（ＤＶＤ、光磁気ディスク、半導体ディスク）
第12回　入出力インタフェース（シリアルインタフェース、パラレルインタフェース）
第13回　入出力装置（入力装置、出力装置）
第14回　ソフトウェア（オペレーティングシステム、アプリケーションソフトウェア）
第15回　まとめと試験

使用教科書

　なし
但し、随時プリント等の補足資料を配布する。

自己学習の内容等アドバイス

　本講義は、情報処理技術者試験の「ITパスポート試験」と「基本情報技術者試験」の内容を含んでいるので、関連の書籍が参考になる。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
情報倫理		講義	折笠　和文
［単位数］ ２	［開講期］ １～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

昨今のインターネットや携帯電話等によって、不特定多数の人との交流が盛んになったが、便利であるが故の利便性と危険性の両面も潜んでいる。そうした危険性に巻き込まれないために、あるいは快適な生活を送るためにも、現代人の必須ともいわれる「情報倫理」の知識と規範を学ぶことが求められる。以上のさまざまな問題点を認識し、危険性の潜む現代社会を理解することが到達目標である。

授業の概要

インターネット社会の功罪（光と影）、個人情報、知的財産、インターネット・ビジネスの功罪、インターネット犯罪の具体例、情報セキュリティ対策、SNS（ソーシャルネットワークシステム）など、情報倫理の問題等を広範に学ぶことを目的とする。

学生に対する評価の方法

学期末試験（70 点）、単元ごとの達成度小テスト（5 回分合計 30 点）、受講態度等を考慮して、総合的に評価する。

※病欠および就職試験等（やむを得ない場合）以外は、再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　情報倫理の範囲と方法（倫理学とは、情報倫理とは、現代倫理学の特質など）
第２回　情報社会（インターネット社会の光と影、情報の働きと性質、情報の信頼性）
第３回　個人情報と知的財産（個人情報とは、知的財産権、著作物と著作権）　※第１回達成度小テスト
第４回　社会生活における情報（新しい文化形態としての学習環境の変化、医療・福祉・公共サービス、ビジネスの変化）
第５回　身近な生活における情報（生活スタイル・携帯電話の普及による変化、健康面への影響、コンピュータや情報通信技術の悪用による影響）　※第２回達成度小テスト
第６回　電子メールによる情報の受信・発信（電子メールのマナー・内容、メーリングリスト）
第７回　Ｗｅｂページによる情報の受信・発信（Ｗｅｂページの構成・活用、情報の信憑性、発信する責任、ネット上でのコミュニケーション）
第８回　情報セキュリティ（セキュリティとは、認証とパスワード、暗号とセキュリティ）
※第３回達成度小テスト
第９回　コンピュータの被害（不正アクセス、コンピュータウィルス、スパムメール・チェーンメール）
第 10 回　ネット社会における被害と対策（インターネット上の有害情報や犯罪行為）
※第４回達成度小テスト
第 11 回　ネット社会における被害と対策（インターネット上の違法行為）
第 12 回　ネット社会における被害と対策（ネット上でのトラブル）
第 13 回　まとめ：ネット社会における問題点と解決すべき強化面　※第５回達成度小テスト
第 14 回　まとめ：健全な情報社会のあり方（SNS も含む）を考える
第 15 回　学期末試験および今後の学習課題について

使用教科書

使用しない。

自己学習の内容等アドバイス

講義内容（プリント配布）から出題する「達成度小テスト」（30 点）のためにも、無欠席と授業内容を十分に理解することが最低条件である。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
教養総合演習Ⅰ		演習	大島　龍彦
［単位数］ ２	［開講期］ ２～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 前期・後期リピート

授業の到達目標及びテーマ

【短編小説を書く】

小説作法を実践的に学び、１編の短編小説を書き上げる。

授業の概要

近現代の短編小説を分析（図形化）し、基本的な小説の作り方を知る。授業では小説執筆の 1 つのプロセスを学び、1 編の短編小説を完成させる。本授業では、「創作」という行為と作品の間のせめぎ合いを体験し、制作の苦悩と歓びとを体験する。

学生に対する評価の方法

期末試験は実施しない。成績は、提出作品を中心に受講態度、予習、復習など、総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業概説（ある小説の分析「作図」を通して、今後行うべき作業について概説する）
第２回　あるテーマとその描き方について学ぶ。
第３回　テーマの見つけ方・各自 10 のテーマを設定する。
第４回　初めに主題文あり。主題文からストーリーへ。10 のテーマのうち、5 つのストーリーを書く。
第５回　小説にプロットは欠かせない。5 つのうち、3 つの設計図（小説の姿）を書く。
第６回　3 つの設計図にそれぞれ登場する人物の履歴書作り。
第７回　場面と 3 つの作品の参考資料の収集。
第８回　3 つの設計図から１編を選び、ストーリー・プロット（作図）・登場人物等を再考する。
第９回　１編の小説を書き始める。
第 10 回　１編の小説を書き終わる。
第 11 回　第１回改訂作業（登場人物は機能しているか）
第 12 回　第２回改訂作業（導入部は読者の心を摑むか・障害物は適切か）
第 13 回　第３回改訂作業（伏線・ユーモア・小道具などは適切か）
第 14 回　各自朗読と批評１
第 15 回　各自朗読と批評２

使用教科書

大島龍彦『丘上町二丁目のカラス』（新典社刊）・必要に応じてプリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

次回のシラバスの内容に留意して自主的に準備してくる。また、演習中に実践したことを再考するなど、特に復習に力を入れると学習効果が上がる。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
教養総合演習Ⅰ		演習	折笠　和文
［単位数］ ２	［開講期］ ２～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 ※募集人数は 15 名前後

授業の到達目標及びテーマ

【マーケティング】

　マーケティングの理論と実践をテーマとして、各専攻学生の興味ある問題提起とマーケティングの理解および問題解決能力の育成を目的とする。学部・学科のそれぞれの専門教育と連動させ、マーケティング的な発想を培うまたとない機会となるであろう。

授業の概要

　世に多く出版されている雑誌の分析を、それぞれマーケティングから考える。マーケティングとは「売れるための仕組み作りや流行をいち早くキャッチして商品化・サービス化する」ものである。ある意味では文化創造活動といった見方ができる、われわれの生活に密着した学問である。専攻コースに関連した自分たちの興味あるテーマをマーケティング的に研究する。

学生に対する評価の方法

積極性や問題意識、自分の専攻分野に関するマーケティング的発想・応用度をレポートにまとめた内容（独自の発想や視点）で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ゼミ（演習）の概要とマーケティングとは何かを説明する。
第２回　マーケティングの歴史と理論（平易に解説）
第３回　マーケティングの基本理論　第１章―製品戦略に関する解説・説明
第４回　マーケティングの基本理論　第２章―価格戦略に関する解説・説明
第５回　マーケティングの基本理論　第３章―プロモーション（広告等）に関する解説・説明
第６回　マーケティングの基本理論　第４章―流通チャネルに関する説明・解説
第７回　マーケティングの最近の手法（気付かないで多用している身近な話題）
第８回　マーケティングに関連する、各自興味ある問題テーマ等について話し合う。
第９回　消費者行動について
第 10 回　各自あるいはグループ（専攻ごと）に関連した興味・関心のあるテーマ収集作業
第 11 回　各自あるいはグループ（専攻ごと）に関連したテーマと問題意識発表（討論を行う）
第 12 回　各自あるいはグループ（専攻ごと）に関連したテーマと問題意識発表（討論を行う）
第 13 回　各自あるいはグループ（専攻ごと）に関連したテーマと問題意識発表（討論を行う）
第 14 回　総括
第 15 回　レポート等の提出と半期を振り返って。

使用教科書

　使用しない。各自必要な文献等があればこちらで購入する。

自己学習の内容等アドバイス

　基本となるマーケティンの理論を短期間でマスターすること。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
教養総合演習Ⅰ		演習	加藤　直良
［単位数］ ２	［開講期］ ２～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

各自がそれぞれのテーマについて、調査し十分な情報を得、リポートにまとめる。調査段階で、英文内容を的確に把握できることと、外大留学生にインタビューすることにより、実用英語の習得とリポートにまとめる能力を養うことが目標である。

授業の概要

各自興味関心のあるトピックについて、調査しまとめる。情報源は、選択したトピックについて調査した後、外大留学生にインタビューし、討議し、アドバイスを受け、リポートにまとめる。
例として、次のようなトピックについて考察することにする。
①　観光スポット　②　現地で流行の漫画、映画、音楽、テレビ番組、ゲーム　③　文化の相違　④　各言語（オーストラリア英語、カナダ英語、アイルランド英語など）⑤　その他興味を持っているトピック

学生に対する評価の方法

①　授業への参画態度（評価ウエート 30%）
②　第１段階提出リポート（評価ウエート 30%）
③　最終提出リポート（評価ウエート 40%）

授業計画（回数ごとの内容等）

第　１回　ガイダンス、　テーマの選択法、テーマの根拠と有効性について考える。
第　２回　テーマの選択と今後の展望について調査し考える。
第　３回　テーマについて調査とディスカッション
第　４回　テーマについて調査とディスカッション
第　５回　テーマについて調査とディスカッション
第　６回　調査しリポートにまとめる
第　７回　調査しリポートにまとめる
第　８回　第１段階リポート提出と発表
第　９回　テーマについて留学生にインタビュー
第 10 回　テーマについて留学生にインタビュー
第 11 回　テーマについて留学生にインタビュー
第 12 回　テーマについて留学生にインタビュー
第 13 回　最終リポート準備
第 14 回　最終リポート準備
第 15 回　リポート提出と発表

各自が興味あるテーマについて、調査し、インタビューし、リポートにまとめる。

使用教科書

特にないが、随時提案する。

自己学習の内容等アドバイス

諸外国の実状について日頃より関心を持ち、視野を広めることが肝要である。ネットや書籍、更には、大勢の留学生から直接情報を得ることができる環境にあることを自覚し、積極的にテーマに取り組んでみること。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
教養総合演習Ⅰ		演習	加藤　英明
［単位数］ ２	［開講期］ ２～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

【新聞を読む】

デジタルネットワーク全盛の時代、新聞紙購読率の低下は顕著で、学生諸君もその数字に一役買っているであろう。日々当面の情報入手のみならいざしらず、それを自分なりに理解し、分析して社会に生きる一個の人間としての成長、蓄積につなげようとするなら、新聞紙を読むことは、最も効果的な作業である。

本演習では、毎回様々な新聞記事を読み、受講者間の討議を通じて新聞の読み方を学ぶとともに、社会人としての力量向上をめざす。

授業の概要

受講者は毎回その週読んだ新聞記事のうち、興味をもった記事、また逆に理解できなかった、わからなかった記事を報告し、これを材料に受講者皆で討論する。議論の中で専門用語や教養常識を蓄積するとともに、読解力、要約力、批判力、報告力（レポート作成技術を含む）を養う。

学生に対する評価の方法

試験は行わない。成績は、平常の演習内での報告･発表、質疑応答など授業参加状況によって、総合的に評価する。再評価は行わない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス
第２回　新聞とは。新聞の読み方。
第３回　今週の新聞を読む。
第４回　同
第５回　同
第６回　同
第７回　同
第８回　同
第９回　同
第10回　同
第11回　同
第12回　同
第13回　同
第14回　同
第15回　総括

使用教科書

なし

自己学習の内容等アドバイス

毎日新聞を読み、興味ある記事を抜き出しておくこと。わからない、理解できないところは、自分なりに少しでも調べること。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
教養総合演習Ⅰ		演習	正　美智子
[単位数] 2	[開講期] ２～４年次前・後期	[必修・選択] 選択	備考 受講対象者については要件参照

授業の到達目標及びテーマ

【健やかにダイエット】

・身体についての問題点や課題を自ら発見・理解できる能力の育成を目的とする。

・演習のテーマ：「からだを変える、からだは変わる"健やかにダイエット"」

＜受講の要件＞

・体格指数(BMI)25 以上の学生が対象

体格指数(BMI)の計算式は、体重(Kg)÷身長(m)^2

授業の概要

本演習は、「肥満に対する効果的な運動」と「肥満対策を主にした有益な食習慣」について実体験をし、健康体重への減量に対する気運を高めること及び知識を行動につなげる「ヘルスリテラシー」の確立を目指す。

学生に対する評価の方法

受講態度および課題に対する取組みの姿勢(40%)とレポートのできばえ(60%)を総合的に評価する。
なお、期末試験および再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　身体と運動を考える（サイエンスを学ぶ）○ 文献研究１

第２回　身体と運動を考える（サイエンスを学ぶ）○ 文献研究２

第３回　身体運動の展開（栄養及び食習慣と運動の関係を理解し、応用する）
○ 運動前 身体組成の計測及び体力測定　○ ライフコーダ（生活習慣記録機）の使用説明

第４回　身体運動の展開１ ○ ライフコーダによる１週間分のデータを分析する
○ コンバインドトレーニングの実施（レジスタンストレーニング、エアロビクス）

第５回　身体運動の展開２
第６回　身体運度の展開３
第７回　身体運動の展開４
第８回　身体運動の展開５　　全10回トレーニングを実施する
第９回　身体運動の展開６
第10回　身体運動の展開７
第11回　身体運動の展開８
第12回　身体運動の展開９
第13回　身体運動の展開10　○ コンバイントレーニングの実施　○ 運動後 身体組成の計測及び体力測定

第14回　データをまとめて結果を考察する（レポート作成）

第15回　データをまとめて結果を考察する（レポート作成）

使用教科書

必要に応じて、資料を配布する

自己学習の内容等アドバイス

・運動している自分自身を科学する。
「やってみること」→「やったことを言葉にすること」→「やったことの【理】を知ること」

・知識を豊富にするために身体に関する図書を多く読むこと。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
教養総合演習Ⅰ		演習	M. ファルク
［単位数］ ２	［開講期］ ２～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 前・後期は同内容でリピート

授業の到達目標及びテーマ

【諸外国事情】

ステップアップコミュニケーション英語セミナー： このセミナーの目標は、例えば①海外旅行②海外留学③就職など教室の外で自然に人と英語でコミュニケーションを取れる基本的に必要な会話レベルを学生たちに習得させるものである。学期の終わりまでに、とりわけ先述の①～③までの状況下で自信を持って形式的なもしくは格式ばらない会話をやり始め、運用し、修得する。受講生は実生活でのコミュニケーションの自信を高めるために、iPod や iPad の電話機能を使って、名古屋外大の外国人留学生や帰国子女などの英語ネイティブスピーカーと国際電話を想定した会話を経験する。学生たちは英語を上手になることを求められるのではなく、英会話力を上達することに興味がある誰もが履修できる。

授業の概要

ほとんどの授業は、担当教員とクラス全体の学生との間で、短い形式的また格式ばらない会話、クイズ、異文化情報提供により成り立つ。下記は、英語コミュニケーション能力やその関連領域含む１５回の授業の当面の計画であるが、学生の興味や学習に必要な内容、また熟達度に応じて変更されることもある。実生活における英語でのコミュニケーションを実践するために、学生たちは時々名古屋外大の外国人留学生と会合することになっている。

学生に対する評価の方法

授業参加度（５０%）、最終ペーパーテスト/オーラルテスト（５０%）。再評価は行うが、全授業回数の３分の１以上の欠席数がある学生単位不認定となる。

授業計画（回数ごとの内容等）

第 01 回 オリエンテーションと授業の概要
第 02 回 Introduction of speed of spoken English: Slow, Fast, Natural（口語英語の速度訓練：ゆっくり、早く、自然に）
第 03 回 Introduction and practice of Survival English Prompts.（即答英語の導入とその練習）
第 04 回 Meeting, greetings and introducing self and others at casual or informal situations.（格式ばらない会合、挨拶、自分自身や他人の紹介）
第 05 回 Getting around, staying at hotels/ homes, and dealing with airport formalities.（観光、ホテル滞在、ホームステイ、空港の利用法）
第 06 回 Shopping, handling money, eating, and entertaining.（買い物でのお金の使い方、食事や娯楽）
第 07 回 Formal and informal spoken communication.（格式的な、また格式ばらない話し方）
第 08 回 Formal and informal written communication.（格式的な、また格式ばらない英文の書き方）
第 09 回 Cultural differences（文化の違いについて）
第 10 回 Meeting, greetings and introducing self and others at formal situations.（格式的な会合、挨拶、自己紹介および他の人の紹介）
第 11 回 Making small presentations.（簡単なプレゼン法）
第 12 回 Giving and taking interviews informally/ formally.（格式的な、また格式ばらないインタビューの受け方/やり方）
第 13 回 Real-life communication with NUFS foreign students about home countries.（名外大の外国人留学生と彼らの祖国の実生活について語る）
第 14 回 Real-life communication with NUFS foreign students about Japan.（名外大の外国人留学生と日本の実生活について語る）
第 15 回 レポート提出

使用教科書

教科書購入は不要。下記の本などからプリントを作成し配布する。
(1) *Speaking Naturally*. Tillitt, B & Bruder, M. Cambridge University Press.; (2) *How to Survive in the U.S.A.* Church, A & Moss, A. Cambridge University Press., (3) *Business Opportunities.* Hollett, V. Oxford University Press.

自己学習の内容等アドバイス

- 学生は英日・日英の電子辞書、もしくは携帯電話辞書アプリを持参する。
- パソコンや携帯電話を利用して、ネットで情報検索する。
- クラス内での学習において、パワーポイントのスライドを作成する知識は、学生にとって役に立つ。

［授業科目名］ 教養総合演習Ｉ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 堀尾　正典
［単位数］ ２	［開講期］ ２～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

【オペレーションズ・リサーチ】

人が生活していくと、身の回りには多くの課題や問題が発生する。それら問題を解決するための判断は、現在の状況や過去の経験、直感などを基に下されることが多い。だが、そのような問題の中には数理的な要素を加味して対処した方が、遙かに確実で効果的な結果が得られるものも多数存在している。このように、様々な問題に対して数理的なアプローチで効果的な施策を考え解決を試みる学問が、オペレーションズ・リサーチ（OR）である。この演習では、OR の基本を学び、様々な身近な問題に対して、数理的な要素を考慮して問題解決ができるような能力の育成を目指す。

授業の概要

この授業では、就職活動を進める学生が対象となるため、就職対策としてビジネスで活用できる実践的なEXCELの勉強から始まり、就職活動に必要な情報の収集、目的の企業・業界の研究を経て、自分の希望会社を、数値シミュレーションやＡＨＰといったＯＲ手法を適用することで選別することを試みる。その他の細かい授業内容については学生と担当教員で話し合って決めていくことになる。

なお、この科目受講に際しては、情報リテラシー（もしくは情報処理１）、表計算演習（または情報処理２）を事前に履修しているか、もしくはこれらと同等以上のスキルを有することが望まれる。

学生に対する評価の方法

期末試験は実施しない。成績は受講態度、指定課題（EXCEL のワークシート）などから総合的に評価する。
なお、原則再評価は実施されないので注意されたし。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーション（書注意、講義内容、進め方の話し合い、成績評価方法など）
第２回　ビジネスと表集計ソフトの活用（データの集計）
第３回　ビジネスと表集計ソフトの活用（予算管理）
第４回　ビジネスと表集計ソフトの活用（物品管理）
第５回　ビジネスと表集計ソフトの活用（売上げ管理）
第６回　ビジネスと表集計ソフトの活用（予算計画）
第７回　ビジネスと表集計ソフトの活用（家計簿の作成と生活費の管理への活用）
第８回　ビジネスと表集計ソフトの活用（ABC 分析）
第９回　シミュレーションによる問題解決
第 10 回　就職情報の読み方
第 11 回　企業情報についての研究・調査
第 12 回　数値シミュレーションによる企業希望条件の洗い出し
第 13 回　ＡＨＰとは
第 14 回　ＡＨＰを用いた、希望会社の絞り込み
第 15 回　まとめ
その他、進捗度合いや学生との相談の上、ＰＥＲＴ／ＣＰＭを用いた工程管理、整数計画問題などが行われる場合もある。

使用教科書

なし（授業内で参考となるデータファイルを配布する）

自己学習の内容等アドバイス

時間外において、授業で実施した問題を自分の力でもう一度繰り返し挑戦するなどの復習が重要になる。授業内容が十分に理解できなかった場合や進度に遅れがちの場合は特にこのようなフォローを必ず行っておく。

［授業科目名］ 教養総合演習Ⅰ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 松本　高志
［単位数］ ２	［開講期］ ２～４年次前・後期	［必修・選択］ 選択	備考 15名前後を募集する。

授業の到達目標及びテーマ

【心の深層を探る】

宗教や、その周辺の諸文化が、生活の中に根付いているその様相を研究テーマとする。それらさまざまな文化・社会の中に宗教的要素が内在していることを感じ取り、それらについて幅広い視野の中で考えることができるような力を養うことを目標とする。学期末には研究レポートを作成する。

授業の概要

研究のための視点として宗教心理学を講じることから始める。それに並行して文化の諸領域についても解説し、心理学的な分析をする。受講生の必要に応じて、宗教社会学・宗教人類学の内容を取り入れることもある。

受講者は、その希望に応じて研究テーマを選び、個別指導を受けながら取り組むことになる。

限定という意味ではないが、できれば「宗教と文化」単位取得者の履修が望ましい。

学生に対する評価の方法

授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　宗教心理学とは何か

心理という人間一般の地平で宗教を眺めようとすることは、宗教を人間性に内在するものとして研究しようとすることを意味する。その基本的な立場と方法について解説する。個人指導のための日時の調整もする。

第２回　心の深層と象徴

宗教の周辺文化の中では、「宗教」は直接的な教説として現われず、さまざまな象徴の形で表される。象徴というものの意味と現れを探る。童話『花咲き山』・『100万回生きたねこ』などを題材に解説する。

第３回　元型⑴

ユングが提唱した元型という概念に触れ、その中から「太母」「影」を紹介する。「鬼子母神」説話・『ジキルとハイド』・『山月記』その他を題材に解説する。

第４回　元型⑵

「マンダラ」や「異性像」などについて解説する。『曼荼羅』や、『ピーター-パン』・「一寸法師」説話・「トリスタンとイゾルデ」伝説などを題材とする。

第５回　神話に学ぶ愛のかたち

神話などの物語の中には、様々な愛のかたちが描かれる。前回に続いて「異性像」を取り上げ、そこに物語られるものについて考察する。マーリン（アーサー王伝説）・かぐや姫などを題材とする。

第６回　変容

一般に「瞑想」と呼ばれる行為を中心に考察する。それは宗教的「行」としてだけでなく、私たちの日常の生活の中にも存在し得る。錬金術・茶道・キャンプファイアー・箱庭などを題材に解説する。

第７回　「身体」の宗教心理学

「行」と呼ばれる行為の形で、身体は、宗教やその周辺の文化と深く結びつく。それが私たちの日常生活の中にもあり得るものであることについては、第６回に解説した。これに深く関わる「身体」性を探究する。スポーツ・装飾・「パフォーマンス」などについても触れる。

第８回　「回心」の研究
「回心」研究の歴史は、キリスト教布教の試行錯誤の歩みの中に綴られてきた。それらに少し触れた後、現代版「回心」論と言えるような領域を紹介する。『あゝ無情』その他を題材とする。

第９回　宇宙飛行士の悟り
「個」を超える心について、易しく考えたい。それは、異なるものとの融和し、一体化しようとする心である。何も難しくはない。飛行士たちは宇宙空間を飛んだだけで、それを直観したのだから。

第 10 回　生と死の心理
前回に引き続く内容である。生と死をめぐる諸問題から、現代の科学的な宗教研究にいたるまでを解説する。

第 11 回　芸術と宗教
芸術や芸術家の生涯を取り上げ、宗教文化との関わりを探る。題材については、バッハやゴッホなどを予定しているが、受講生の希望にできるだけ沿う形で勧める。

第 12 回　演習レポートの書き方⑴
どのようにレポートのテーマを決めるか、これは最初の最も重要な課題である。この点について講じる。資料の探索について解説し、資料や原稿の整理作業に着手する。

第 13 回　演習レポートの書き方⑵
最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。解説を踏まえて原稿の整理作業も進める。

第 14 回　演習論文の書き方⑶
レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説する。原稿の整理作業も進める。

第 15 回　演習論文の書き方⑷
レポートには必要な構成、要件がある。前書きや後書きなども、非常に重要な意味を持つ場合、またそのような書き方というものもある。それらの具体的なことがらについて解説する。原稿の整理作業も進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも１冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
教養総合演習Ⅱ		演習	松本　高志
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
２	２～４年次前・後期	選択	15 名前後を募集する。

授業の到達目標及びテーマ

【人間性研究】

「人間性とその業績」をテーマとして研究作業をする。

学生時代に深く傾倒する一人の人物と出会うこと、それも、歴史的背景、風土、人間関係、さまざまな文化的背景などの複合的な研究を通して触れることは極めて有意義である。人間性について、その幅広さや奥深さを知り、その業績だけでなく、人生の遍歴から一つひとつの努力や工夫といった細部にいたるまで研究し、将来の判断や行動の指針について考察できるようになることを目標とする。

授業の概要

「人間性」について解説し、併せて研究方法について説明する。これと並行して、受講生は一人の人物を選び、著作・作品研究などを通して、「思想」という面をも切り口として、その人間性を研究する。

「哲学へのいざない」「宗教と文化」「現代社会と倫理」のうち少なくとも１科目の単位取得者の履修が望ましい。

学生に対する評価の方法

授業中の研究報告と、研究レポートを総合的に評価する。なお、原則として再評価は行わない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　「人間性」とは何か

なぜ、人は時に、特定の人物に強く惹かれるのか。その人の生き方、思想、成し遂げたことの中に、何を感じるのか。その秘密について、共に考える。個人指導のための日時の調整についても話し合う。

第２回　人間性研究の方法論

研究のための方法論を概説する。一人の人間を研究するためには、資料の収集と精査、歴史的社会的背景、ライフ・ヒストリーの研究など、様々な作業が必要になる。そのための全体的な概論である。

第３回　資料について

資料をどのように読みこなしていくか、その方法や留意点について解説する。

第４回　日記・手記・伝記・評伝

日記や手記を読むのには注意が必要である。また伝記・評伝にも、筆者の人間観や価値観が反映するものである。それらの点について解説する。

第５回　人物の背景

歴史的社会的、そして文化的背景を決して見逃すことはできない。現代という観点からのみ見ることは危険である。この点について解説する。

第６回　ライフ・サイクル

ライフ・サイクルという概念について、まず解説をする。それから、偉人と呼ばれる人々が、しばしば個性的なライフ・サイクルを描き出すことについて解説する。

第７回　契機

個性的なライフ・サイクルを描き出すということについて、「契機」という問題を考えていく。そのために、「共時性」についても若干の解説を行う。

第８回　評価

歴史上の人物には「評価」がつきまとう。受講者の演習論文にこれを加えることは求めないが、実質的に、その内容に書き込まれやすいものである。

第９回　歴史的影響⑴

歴史的影響というとその範囲は広いが、近接する文化的領域などへの影響、そして、後継者や賛同者など、さまざまな面を考えなければならない。それらを挙げながら、中でも、近接する文化的領域などへの影響を中心に考える。

第10回　歴史的影響⑵

後世の人物への影響などを中心に考える。

第11回　「人間性研究」のまとめ

全員が、やがて何らかのまとめを行うことになる。結論とまではいかなくても、それに近い考察のし方というものがあるはずである。これまでに触れた視点・考察点のすべてを、受講生の演習論文に求めるわけではない。各自が望む、そしてそれぞれにふさわしい力の入れ方がある。それらを解説する。参考資料の探索と整理についても説明する。

第12回　演習レポートの書き方⑴

どのようにレポートのテーマを決めるか、これは最初の最も重要な課題である。この点について講じる。原稿の整理作業に着手する。

第13回　演習レポートの書き方⑵

最初に、演習レポートに求める要件を提示する。その中には、本演習に独自のものも含まれる。さらに、レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。解説を踏まえて原稿の整理作業に着手する。

第14回　演習論文の書き方⑶

レポートをまとめる手順や作法など具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

第15回　演習論文の書き方⑷

レポートには、必要な構成、要件がある。前書きや後書きなども、非常に重要な意味を持つ場合、またそのような書き方というものもある。それらの具体的なことがらについて解説をする。原稿の整理作業を更に進める。

使用教科書

プリント及び受講生の作成するレジュメなどが教材となる。参考図書類については授業中に紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

受講生は学期中に少なくとも１冊、あるいはそれ以上の書籍を読むことになる。それらについては、個別に指導をする。

［授業科目名］ アートとしての数学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 大内　雅雄
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 選択	備考 映像メディア学科専門科目 ※映像ﾒﾃﾞｨｱ学科生を除く１年次のみ

授業の到達目標及びテーマ

映像、音響、造形などのアートは、物を作るための手作業や，身近な自然現象の観察などにおいて、数学とも、通底している。この授業では、手作業や実験観察を通して、アートと数学の結ばれ方に気づき、新たな表現技法を生み出すことを目指す。

講師の話しを聞くだけでなく、実際に手を動かし創意工夫する経験を多く積むことを促し、学生が今後のアート作品制作において、数学や自然科学との自分なりのかかわり方の糸口を見つけてもらうことを、目標とする。

授業の概要

具体的なテーマは、(1)映像＝(光と影の造形と運動)の実験的試み (2) 紙の造形と数学 (4) 形と比と数列（黄金比とフィボナッチ数列など)。

数学的な作業として必要なのは、最低限で、比例計算や倍率計算と、紙折りによる作図などである。小数計算は 電卓を使ってできればよい。

学生に対する評価の方法

(1) 授業内容を基にした工作作品の提出。
(2) 授業であつかった数学的内容についての筆記試験。
(1)、(2)を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第1回　暗い部屋で水面と光が壁や天井に映し出す映像を見る。反射、屈折、虹などの現象。
第2回　ピンホールカメラとレンズカメラを作り、カメラの光学的原理の基礎を知る。
第3回　ハーフミラーを用いた万華鏡等の実験と制作。
第4回　シャボン膜による球面鏡やシャボン膜の性質の実験。
第5回　針金に樹脂膜を張らせて作る形。
第6回　プリズムやレンズによる光の屈折と虹の観察。
第7回　一定倍率で小さくなる同じ形の図形を一定配置で並べるとどんな形が現れるか。対数螺旋。
第8回　紙で作る対数螺旋。ビデオカメラのモニター画面撮影で生まれる図形。
第9回　紙の編み込みが生む形。
第10回　紙の編みこみの制作と工夫。
第11回　松かさやヒマワリの花とフィボナッツィ数列。
第12回　フィボナッチ数列で葉や花を描く。数列から作る音楽や図形。
第13回　黄金分割について。ペンタグラムと魔よけ。結界の生む造形と物語。
第14回　提出作品の講評。今期授業のまとめと補足。
第15回　数学内容に関係する筆記試験。

使用教科書

使用しない。

自己学習の内容等アドバイス

授業で触れたことを、身のまわりに見つけ出したり、ヒントにして何か作り出せないか、試してほしい。
授業で配布するプリント類は、次のURLにも載せる。
http://homepage1.nifty.com/haniu/nuas/

［授業科目名］ 映像史		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 光　幸國・柿沼　岳志
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 選択	備考 映像メディア学科専門科目 ※映像ﾒﾃﾞｨｱ学科生を除く１年次のみ

授業の到達目標及びテーマ

自分が感動した映像は、たとえ一瞬見た作品であっても一生忘れない。この視点から先人の優れた作品を鑑賞しながら、感動や作品の読み方、その時代背景等を講義する事により、受講生に自分の創作活動を一人よがりならず、創造性やオリジナリティーのある創作を行うために、人間とは何か、社会とは何か、自分とは何かを深く考察探求する知的好奇心を持つ事であり、その事を理解し行動する姿勢の習得を目的とする。

授業の概要

講義は映像作家を志す受講生に、映像史上の著名な作家の作品を鑑賞しながら、それぞれの思想、目的、技術、コンセプトを学び、如何に主体的に、オリジナリティーを持ちながら、感動と社会に適応する創作を行なうかと云う視点から講ずる。特に世界に多大な影響を与えた世界の１８４０年代～１９９０年代の作家を中心に、その時代背景（近代史）と照らし合わせながら講義する

学生に対する評価の方法

小テスト２回（２０%）・学期末テスト（８０%）
当講義では再評価をしない。授業の出欠には十分注意する事。

授業計画（回数ごとの内容等）

第 1 回講義総論・写真の始まりから（ニエプス、ダゲール、タルボット）初期の写真家（ナダール、タルボット、キャメロン）
第２回シネマの確立・サイレントからトーキーへ（リュミエール兄弟、メリエス、グリフィス）
第３回. アメリカに渡った写真（フレディー等）写真の父アルフレッド. スティーグリッツ、
　　ファション写真をアートと確立及び不滅の写真展開催を企画したエドワード. スタイケン
第４回写真黎明期（ユゥジェーヌ、アジェ、マン. レイ、モホリ. ナジ）
第５回写真のピカソ（エドワード. ウエストン)、ランドスケープの巨匠（アンセル. アダムス）
第６回映画の黄金時代・巨匠達の映画（ヒッチコック、フォード、ホークス、ラング）
第７回報道写真家（ロバート. キャパ）ドキメンタリー写真家（ユージン. スミス）
　　フランスの巨匠達（ブレッソン、ドアノー、ブラッサイ、ケルテス）
第８回戦争と映画・世界大戦以降、ベトナム、中東、湾岸、と半世紀に起こった戦争と映画の関わりを分析
第９回小テスト・20 世紀の偉大なファッション写真家（アーヴィング.ペン・リチャード.アヴェドン）
第 10 回・ロバートフランク.メープルソープ、植田正治、セバスチャン.サルガド、サラムーン
第 11 回映画の新潮流・ネオリアリズモ、ヌーヴェルヴァーグ（ロッセリーニ、フェリーニ、ゴダール）
第 12 回ポートレートの巨匠ユージェーヌ.カーシュ、ドキメンタリー作家のポートレート・ダイアン.アーバス
第 13 回小テスト. 現代の写真（田原桂一、シーフ、ジャコメリ）
第 14 回現代映画について・多様化する表現形態（アニメ、CG、3D､）
　　表現形態により変わるものと変わらないもの
第 15 回テスト・その他の写真家

使用教科書

特に使用しない

自己学習の内容等アドバイス

図書館で名作の DVD や写真集を鑑賞し、美術館で名作のオリジナル作品を見る事

［授業科目名］ デザイン論		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 木村　一男　他
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 選択	備考 一部オムニバス形式 デザイン学科専門科目 ※デザイン学科生を除く１年次のみ

授業の到達目標及びテーマ

広範なデザインの領域の活動、その社会的役割や使命について解説することをテーマとして、総合的にデザイン活動の全容を捉え、これからのデザイン学習の基本を習得することを目標とする。

授業の概要

前半をデザインの、その役割、分野、展開等について講義し、後半をオムニバス形式でデザインの各分野について担当教員が述べる。

学生に対する評価の方法

授業への参画態度とレポートによる

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　デザインを学ぶに際して
第２回　デザインのめざすもの
第３回　デザインの領域
第４回　デザインの展開
第５回　デザインと生活
第６回　デザインと社会
第７回　デザインと企業
第８回　これからのデザイン
第９回　◆ヴィジュアル・デザインⅠ
第 10 回　◆ヴィジュアル・デザインⅡ
第 11 回　◆スペース・デザインⅠ
第 12 回　◆スペース・デザインⅡ
第 13 回　◆プロダクト・デザインⅠ
第 14 回　◆プロダクト・デザインⅡ
第 15 回　まとめ
◆＝オムニバス

使用教科書

特になし

自己学習の内容等アドバイス

広いデザイン領域に視野を拡げ、あらゆる事象に常に関心を持って観察し、評価する態度を持つことを期待したい。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
子どもと社会		講義	釜賀　雅史
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 選択	備考 子どもケア学科専門科目 ※子どもケア学科生を除く１年次のみ

授業の到達目標及びテーマ

当講座のテーマ：「社会環境の変化と子ども」子どもを取り巻く社会環境に光をあて子どもの生活世界の変容を広く考察する。当講座の目標：15講の(歴史的)考察を通して、多面的かつより深く「子ども」のイメージを持てるようになること(広い視野に立って子どもと子どもにかかわる諸問題を考えられるようになること)、これが当講座の目標である。

授業の概要

授業の全体構成・展開は次のとおり。まず、西欧における子ども観の変遷を考察しつつ、前近代的(封建的)慣習が残る戦前の日本社会における子どものありように注目する(PartⅠ)。次に、50年代から現在に至る戦後日本社会の発展・変容とそれに伴う子どもの生活世界の変化を追究する(PartⅡ)。さらに、世界的視野にたち世界の子どもが抱える問題を鳥瞰するとともに、途上国の子どもの置かれた状況も考察する(PartⅢ)。最後に、それらの考察を踏まえ、子どものくらしに関する話題を取り上げ検討する(PartⅣ)。

学生に対する評価の方法

①授業への参画態度
②レポート……授業内容に即したテーマで中間レポートと最終レポートを作成し提出。
評価ウエートは①30％ ＋ ②(30％＋40％)で、総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス(授業のねらいと目標、運営方法などの説明)
＜PartⅠ　子どもに注がれる眼差し(子ども社会の歴史的考察) ＞
第２回　子どもが「ちいさな大人」だったとき　－アリエスの『子どもの発見』に即して－
第３回　昔は本当によかったか？ ―戦前の日本社会と子どものくらし―①　概観的講義
第４回　昔の子どものくらしぶり ―戦前の日本社会と子どものくらし―②　事例の考察
＜PartⅡ　戦後日本社会の発展・変容と子ども＞
第５回　戦後日本社会の鳥瞰図―戦後日本をウォッチングする―
第６回　都市化と生活の近代化は子どものくらしをどう変えたか？① ―子どものくらしの全体的風景―
第７回　都市化と生活の近代化は子どものくらしをどう変えたか？② ―遊びと学びの変容―
第８回　子どもの生活(遊び)再考―DVDの映像を通してあるべき子どもの姿を考える
＜PartⅢ　情報化社会に生きる子どもたち＞
第９回　情報化の進展と子どものくらしの変容
第10回　近年の子どもをめぐる諸問題①―75年（高校進学率90％に達した年）以降の状況―
第11回　近年の子どもをめぐる諸問題②―パソコン、ケータイと子どもたち―
＜PartⅢ　世界の子どもたち―発展途上国の状況―＞
第12回　世界における子ども問題の鳥瞰図
第13回　グローバル化・市場経済化と途上国の子どもたち
＜PartⅣ　ケース・スタディ＞
第14回　現代の子ども問題を考える　(具体的事例を取り上げディスカッションする)
第15回　前講の続きと最後のまとめ
※パワーポイントを使って講義する。また、できる限り報道記録や映画などDVDの映像をとりいれビジュアルに説明する。なお、この計画に従って展開するが、進度状況によっては一部変更する場合がある。

使用教科書

教科書は使用しない。授業は配布資料・教材にしたがって進める。当講座との関連で一読を薦めたい文献としては次のようなものが挙げられる。
本田和子「変貌する子ども世界」(中央新書)、高橋勝・下田裕彦編著「子どもの〈くらし〉の社会史」(川島書店)など。また、それぞれ具体的テーマに即してその都度参考図書を紹介する。

自己学習の内容等アドバイス

授業時に示される次回の授業で取り上げられるテーマ・話題について、事前に検討しておくこと。
《より深く学ぶために》授業時に紹介される文献などにできる限り取り組んでみること。

［授業科目名］ 管理栄養士概論		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 立花　詠子
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

管理栄養士になるために、これから勉強する内容の必要性について理解することを目標とする。また、社会人として必要な「コミュニケーション能力」「プレゼンテーション能力」を身につけるために、自分の意見を持ち、相手と意見交換できるようになることも目標とする。

授業の概要

医学および医療技術の進歩により医療が高度化すると同時に、管理栄養士の役割も大きく変化している。特に管理栄養士は疾病者への栄養指導、特に個人を対象とした高度な栄養指導が求められるようになった。

そこで、管理栄養士とはどういうものかを理解してもらうための入門的な講義を行う。また、管理栄養士を目指す者としての自覚を持ってもらうために、各自の食生活や生活状況を見直すことで、現代の栄養問題や栄養指導方法について考えたり、自分の意見を発表したりする。現代社会における管理栄養士の役割について理解をすると共に、将来、どのような職種につくか目標設定の足がかりになるようにする。

学生に対する評価の方法

平常の授業態度（30%）、毎回授業内で行うレポート（30%）、期末試験（40%）等で、総合的に評価する。期末試験の欠席は認めない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　管理栄養士とは。　どうして管理栄養士になりたいの？（目標設定）
第２回　管理栄養士になるために必要な知識とは？（これから勉強する内容などについて理解を深める）
第３回　栄養士・管理栄養士の歴史　昔と今との違い。
第４回　栄養が足りているとは？（食事のバランスや栄養量の設定）
第５回　サプリメントって必要？（栄養機能食品と特定保健用食品）
第６回　「健康」とは？（健康の定義）
第７回　現代の健康の問題点
第８回　管理栄養士の職場紹介①　スポーツ栄養士、食品会社の栄養士、研究教育職の栄養士
第９回　管理栄養士の職場紹介②　給食施設、老人保健施設
第１０回　管理栄養士の職場紹介③　病院
第１１回　管理栄養士の職場紹介④　地域における栄養士・保健所など
第１２回　管理栄養士の職場紹介⑤　栄養教諭
第１３回　健康診断・栄養評価①（栄養評価の方法）
第１４回　健康診断・栄養評価②（栄養評価の方法）
第１５回　まとめと試験

使用教科書

特になし（随時、プリント等を配布したり、パワーポイント等を使用したりする）

自己学習の内容等アドバイス

毎日、新聞に目を通したりニュースを見たりして、社会で何が起こっているかを理解しておくこと。また、その事柄について、自分の意見を持つようにすること。

［授業科目名］ 基礎化学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 間崎　剛
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 必修	備考 同時に『化学入門』も開講する

授業の到達目標及びテーマ

我々の身体や我々が摂取する食品は、化学物質から構成されている。したがって食品の成分（食品学）や人体における役割（栄養学）、人体の仕組み（生化学、解剖生理学）を学ぶには、化学に対する理解と知識が必要となる。この授業では、本学部の専門科目の学習に必要な化学の素養を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

この授業では最初に、化学物質の『構造』と『状態』を軸にして講義する。次に、『溶液の化学的性質』を説明する。そして、物質が別の物質に変化する『化学反応』の仕組みを説明する。最後に、人体や食品の主成分である『有機化合物』の構造と特徴、変化について説明する。

学生に対する評価の方法

中間試験の得点（50%）と、期末試験の得点（50%）の合計点により評価する。どちらかの試験を欠席した場合は、単位を認めない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　原子と電子（原子の構造と構成粒子、同位体、電子配置、周期律、基底状態と励起状態）
第２回　原子の安定化（オクテット則、イオン化エネルギー、電子親和力、イオン結合、金属結合、組成式）
第３回　共有結合（分子式、価電子、点電子式、原子価、σ結合とπ結合、混成軌道、分子の形、配位結合）
第４回　分子間力（電気陰性度、分極、極性分子、水素結合、ファンデルワールス結合、結晶）
第５回　物質の三態（分子間力と物質の三態、密度、蒸発と気液平衡、ボイル・シャルルの法則、状態図）
第６回　溶液の化学（溶解と析出、溶解度、電離、モル濃度、希釈、沸点上昇と凝固点降下、浸透圧）
第７回　コロイド（分類、性質、透析、ゾルとゲル）
第８回　熱力学（エンタルピーとエントロピー、自由エネルギー、活性化エネルギーと反応速度、触媒）
第９回　化学平衡（可逆反応、平衡状態、平衡定数、ルシャトリエの原理）
第10回　酸と塩基（価数、規定濃度、解離定数、p*K*、ヘンダーソン・ハッセルバルヒ式、中和反応、緩衝作用）
第11回　酸化と還元（酸化還元反応、酸化数、半反応式、イオン化傾向、標準電極電位）
第12回　有機化合物（鎖式炭化水素、環式炭化水素、芳香族炭化水素、共役二重結合、異性体、不斉炭素）
第13回　官能基と反応（アルコール、エーテル、カルボニル化合物、カルボン酸、エステル、アミン、アミド）
第14回　生体と食品を構成する有機化合物（炭水化物、脂質、アミノ酸とタンパク質、ビタミン、核酸）
第15回　試験とまとめ

使用教科書

【教科書】　「栄養科学シリーズNEXT　基礎化学」　辻英明　他共著　（講談社）
　　　　　「栄養科学シリーズNEXT　基礎有機化学」　高橋吉考　他共著　（講談社）
【参考図書】「新課程版　視覚でとらえるフォトサイエンス　化学図録」　数研出版編集部　編集　（数研出版）
　　　　　「わかる化学シリーズ１　楽しくわかる化学」　齋藤勝裕　著　（東京化学同人）
　　　　　「わかる化学シリーズ２　物理化学」　齋藤勝裕　著　（東京化学同人）
　　　　　「わかる化学シリーズ４　有機化学」　齋藤勝裕　著　（東京化学同人）

自己学習の内容等アドバイス

高校で化学を履修していない学生を対象とした特別講座『化学入門』が、同時に開講されている。入試科目にて化学Ⅰ、Ⅱを選択していない者には、その受講を強く勧める。また、この講義の内容が理解できない者の場合、教員や先輩へ質問したり、図書館にある化学の解説書を利用するといった授業外の自助努力が欠かせない。

［授業科目名］ 人体生物学の基礎		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 早戸　亮太郎
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

これから人体の仕組みを学ぶために必要不可欠な人体生物学の基礎知識を習得することが、本授業の目標である。

授業の概要

細胞は生命の基本単位である。細胞レベルでの生命現象の理解は、人体の構造と機能を理解する上で基礎となる。高校で生物を学習したものも、学習していないものも、人体生物学という観点から基礎的な生物学的知識の習得を目指す。生物学から生命科学への発展を理解し生命科学や人体の構造と機能を理解するため、人体生物学の基礎知識固めを行う。

学生に対する評価の方法

授業態度、期末試験を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　生命とは何か、人体の成り立ち（生命の起源、生命の定義、細胞）

第２回　生命の物質的基盤（糖）

第３回　生命の物質的基盤（脂質）

第４回　生命の物質的基盤（タンパク質）

第５回　生命の物質的基盤（核酸）

第６回　遺伝（染色体、複製）

第７回　遺伝（転写、翻訳、翻訳後修飾）

第８回　細胞周期（M 期、G1 期、S 期、G2 期、サイクリン、CDK）

第９回　発生（受精、卵割、桑実胚、内胚葉、中胚葉、外胚葉）

第 10 回　エネルギーと代謝（解糖、クエン酸回路、ATP）

第 11 回　エネルギーと代謝（呼吸鎖、ATP 合成酵素、共役、脱共役タンパク）

第 12 回　体温調節（放射、伝導、対流、蒸発、熱産生、体温調節中枢）

第 13 回　個体の恒常性とその調節機構（細胞間情報伝達、受容体、２次メッセンジャー、細胞内情報伝達）

第 14 回　個体の恒常性とその調節機構（恒常性、フィードバック機構、体液、酸塩基平衡）

第 15 回　試験および総括

使用教科書

トートラ人体解剖生理学（原書８版、G. J. Tortra 著、佐伯他訳、丸善、2011）。
人体の構造と機能および疾病の成り立ち（加藤昌彦他、東京教学社）
教科書に併せて、適宜プリントを配布。

自己学習の内容等アドバイス

生体の構造や仕組みには必ず理由がある。この理由を“暗記”ではなく“理解”する。
授業終了後は早めに復習すること。また専門用語が多数出てくるので、それらの意味を理解すること。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
管理栄養士特講（エキサイティング）		講義	山中　克己・和泉　秀彦
[単位数] ２	[開講期] １年次	[必修・選択] 選択	備考 前期・後期合わせて 15 回以上実施

授業の到達目標及びテーマ

大学人としての知識・教養、および管理栄養士としての意識を高めることが目的である。
いろいろな分野を幅広く学び、大きな人間として成長するため、積極的に履修して欲しい。

授業の概要

学内外を問わず、その道で活躍されておられるプロフェッショナルに、オムニバス形式で講義して頂く。
平成 25 年度に開講した内容を下に示すが、平成 26 年度も各界よりお招きして実施する予定である。

学生に対する評価の方法

講義概要とその感想を記述したレポートを 1 週間以内に提出。講義内容が網羅されているか、内容に沿った感想が記されているかなどより評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

回数	授　業　内　容	講　　師
1 回	ＥＱフォローアップガイダンス	キャリアサポートセンター
2 回	正しさで人は動かない　心を開く人に人は動く	Voice Shi-Na　加藤しおな先生
3 回	東北大震災発生後の足跡	福島県南相馬市の原発被災者　林　君子先生
4 回	食品会社の仕事と食品会社が求める人材	岩田食品　総務部マネージャー　岩田信弘先生
5 回	おいしさの科学	味の素（株）広報普及チーム　専任課長　阪田博之先生
6 回	医療における管理栄養士 - 看護の視点から-	日進おりど病院　看護部長　石田邦子先生
7 回	Nutritional Care for Obese Patients	University of California　Davis　Prof. Joan Frank
8 回	食もケアなり　―管理栄養士の現場から―	富田浜病院健康増進センター　次長　福田珠美先生
9 回	食育と栄養管理　―栄養教諭の現場から―	瀬戸市立西陵小学校 栄養教諭　石川桂子先生
10 回	病院における一歩先行く栄養管理	名古屋記念病院　副院長・外科部長　武内有城先生
11 回	それを発信すると何が起こるか ～ソーシャルメディアと想像力～	名古屋学芸大学メディア造形学部　准教授　吉野まり子先生
12 回	食物の特性とおいしさを写す	名古屋学芸大学メディア造形学部　副学部長　西宮正明先生
13 回	果物と食事バランスガイドで健康を守る	農業・食品産業技術研究機構　果樹研究所　田中敬一先生
14 回	お米　～栽培からご飯まで～	愛知経済農業協同組合　販売企画室長　天野正裕先生
15 回	スポーツ栄養士 ～それまでの道のりと現在の活動～	西能みなみ病院　管理栄養士　舘川美貴子先生
16 回	動植物から医薬品や化粧品を見つけ出す ～ブリスベン ESKITIS 研究所にて～	Griffith University ESKITIS 研究所　相生章博先生

使用教科書

教科書は使用しない。適宜、プリント等を配布する。

自己学習の内容等アドバイス

予習の必要はないが、この科目専用の講義ノートを準備すること。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
生命の科学		講義	早戸　亮太郎
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

本授業の到達目標は、管理栄養士を目指す大学生として人体の構造と機能を学ぶにあたり必要となる、生命科学の基礎知識を修得する事である。

授業の概要

生物は有機分子の集合体であり、一つ一つの構成要素は精巧に作られている。それらが巧妙に相互作用することで人体は恒常性を維持し、生理機能を保っている。これら人体の基本的な解剖学および生理学を理解する。人体の構造と機能の基本知識を理解するために、人体の生命現象の仕組みについて学ぶ。

学生に対する評価の方法

授業態度、期末試験を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　細胞（細胞の構造と機能、細胞膜、細胞内小器官）

第２回　上皮組織、結合組織（上皮組織および結合組織の機能および構造と種類）

第３回　筋組織（筋細胞の構造と種類、その収縮機序）

第４回　運動器系（筋、骨格）

第５回　神経組織（膜の興奮性とイオンチャネル、興奮の伝達）

第６回　自律機能（交感神経、副交感神経）

第７回　高次神経機能（脳機能、統合機能）

第８回　感覚（体性感覚、特殊感覚）

第９回　血液（血液・造血器・リンパ系の構造と機能、血球成分）

第 10 回　血液（血漿成分、血清、血液凝固、ABO 式、Rh 式）

第 11 回　免疫と生体防御（体液性免疫、細胞性免疫、特異的・非特異的防御機構）

第 12 回　内分泌系（ホルモンの分類・構造・作用機序）

第 13 回　内分泌系（ホルモン分泌の調節機構）

第 14 回　個体の恒常性とその調節機構（恒常性、フィードバック機構、体液、酸塩基平衡）

第 15 回　試験および総括

使用教科書

教科書：トートラ人体解剖生理学（原書８版、G. J. Tortra 著、佐伯他訳、丸善、2011）。
　　　　教科書に併せて、適宜プリントを配布。
参考書：標準生理学第７版（本郷・広重監修、医学書院、2009）

自己学習の内容等アドバイス

生体の構造や仕組みには必ず理由がある。この理由を“暗記”ではなく“理解”する。
授業終了後は早めに復習すること。また専門用語が多数出てくるので、それらの意味を理解すること。

［授業科目名］ 人体の構造と機能		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 早戸　亮太郎・日暮　陽子
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

本授業の到達目標は、人体において各器官がどのような構造をもち、それらがどのような仕組みを担っているかを知り、人体がどのように内部環境を維持し健康状態を保てているのかを理解することである。

授業の概要

本授業では、人体の構造と機能を把握する。器官ごとに細胞や組織のレベルで構造と機能を知るとともに、各器官の位置関係や機能の関連性を理解する。管理栄養士として、健康の維持を考えるうえで、あるいは疾病の予防や治療を考えるうえで基礎となる専門分野の一つである。

学生に対する評価の方法

授業態度、期末試験を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　人体の構造と機能　序論（人体構造の階層性（化学物質、細胞、組織、器官、器官系、個体））

第２回　個体の恒常性とその調節機構（体液組成、神経、ホルモン、フィードバック機構、動的平衡）

第３回　神経系（中枢神経、体性神経、自律神経、感覚）

第４回　循環系（循環系の基本的性質、心臓の構造と機能）

第５回　循環系（血液循環、循環系の調節）

第６回　呼吸器系（呼吸器の構造と機能）

第７回　呼吸器系（呼吸調節、酸と塩基調節、呼吸性アシドーシス・アルカローシス）

第８回　腎・尿路系（腎臓の構造と機能、尿生成）

第９回　腎・尿路系（体液量調節、酸と塩基調節、代謝性アシドーシス・アルカローシス）

第 10 回　消化器系（口腔、食道、胃、肝臓の構造と機能）

第 11 回　消化器系（膵臓、小腸、大腸の構造と機能）

第 12 回　消化器系（消化、吸収）

第 13 回　生殖器系（生殖器系の構造と機能）

第 14 回　生殖器系（性周期、排卵の機序、生殖、発生）

第 15 回　試験および総括

使用教科書

教科書：トートラ人体解剖生理学（原書８版、G. J. Tortra 著、佐伯他訳、丸善、2011）。
　　　　教科書に併せて、適宜プリントを配布。
参考書：標準生理学第７版（本郷・広重監修、医学書院、2009）

自己学習の内容等アドバイス

生体の構造や仕組みには必ず理由がある。この理由を“暗記”ではなく“理解”する。
授業終了後は早めに復習すること。また専門用語が多数出てくるので、それらの意味を理解すること。

［授業科目名］ 生化学Ⅰ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 田村　明
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前・後期	［必修・選択］ 必修	備考 前期：１・２組対象 後期：３・４組対象

授業の到達目標及びテーマ

エネルギーを産生するための異化代謝や体構成成分をつくるための同化代謝など、私たちの体内で生じる巧妙なからくりを化学的に理解することが目標である。

授業の概要

生命を支える糖質や脂質、タンパク質あるいは核酸などの構造と機能、およびそれらの代謝を中心に解説するが、カバーすべき範囲が広いので生化学Ⅱと共に授業を進めます。また、講義内容をより深く理解するために、復習を兼ねた課題を発表する演習時間を設け、さらに各単元終了と同時に生化学実験を行います。

学生に対する評価の方法

講義ノートの作成や演習時間に対する取り組み態度（30%）、授業中に実施する小テスト（30%）および学期末に実施する試験（40%）などより総合的に評価する（不合格者には再評価を実施します）。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　はじめに：授業運営の方法と講義内容の説明

第２回　人体の構成：器官、組織、人体の最小構成単位の細胞と細胞内小器官の種類と働き

第３回　糖質の化学：各種単糖類、二糖類および多糖類の構造とその特徴

第４回　糖質の代謝：ペントースリン酸回路、グリコーゲンの合成・分解と血糖維持

第５回　脂質の化学：脂肪酸、トリグリセリド（TG）やリン脂質、糖脂質の構造と特徴

第６回　脂質の代謝：TG の合成と分解、脂肪酸から作られる生理活性物質（エイコサノイド）の種類と特徴

第７回　アミノ酸の化学：各種アミノ酸（酸性、塩基性、疎水性、分岐鎖等）の構造と特徴

第８回　アミノ酸の代謝：非必須アミノ酸の生合成、脱アミノ反応、尿素サイクル

第９回　酵素の化学：一般的性質、特異的作用、阻害剤、活性の調節、補酵素

第 10 回　核酸の化学：DNA・RNA の構造、遺伝子、ゲノム

第 11 回　核酸の代謝：DNA の複製と一塩基変異、遺伝子病

第 12 回　個体の恒常性とその調節－１：内分泌系と神経系による細胞間情報伝達

第 13 回　個体の恒常性とその調節－２：フィードバック機構、体液・電解質バランス

第 14 回　学習のまとめ

第 15 回　期末試験とその解説

使用教科書

人体の構造と機能および疾病の成り立ち（東京教学社）

（教育効果を高める目的で、人体生物学の基礎、疾病学ともに同じテキストを、教科書あるいは参考書として使用する。）

自己学習の内容等アドバイス

高校で化学を履修していない人でも分かるように解説しますので、その気になって、積極的に勉強して下さい。積み上げ方式の授業展開になるので、必ず履修したその日のうちにノートまとめなどの復習を行ってください。

［授業科目名］ 生化学Ⅱ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 田村　明
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前・後期	［必修・選択］ 必修	備考 前期：１・２組対象 後期：３・４組対象

授業の到達目標及びテーマ

エネルギーを産生するための異化代謝や体構成成分をつくるための同化代謝など、私たちの体内で生じる巧妙なからくりを化学的に理解することが目標である。

授業の概要

摂取した「ご飯」や「脂肪」は、体内で数多くの酵素反応を受けてエネルギーを産生し、最終的には「二酸化炭素」と「水」になって排泄される。このような生体内で生じる様々な物質変化（代謝）を化学的に理解することは、人間栄養学が中心となる管理栄養士にとって極めて大切である。そこで、講義内容をより深く理解するために、演習や生化学実験を講義の合い間に織り交ぜて授業を進める。

学生に対する評価の方法

講義ノートの作成や授業に対する取り組み態度（30%）、授業中に実施する小テスト（30%）、および学期末に実施する試験（40%）などより総合的に評価する（不合格者には再評価を実施します）。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　生化学を学ぶ上で必要な化学の基礎知識

第２回　細胞膜の構造と働き

第３回　糖質の代謝－１：解糖系によるATP産生、クエン酸回路による水素と二酸化炭素の生成

第４回　糖質の代謝－２：グルコースを作りだす糖新生、コリ回路、グルコースーアラニン回路

第５回　脂質の代謝－１：脂肪酸の合成、脂肪酸の分解（β－酸化）、不飽和脂肪酸の合成

第６回　脂質の代謝－２：コレステロールの合成、リポタンパク質による脂質の体内輸送

第７回　タンパク質の化学：ペプチド結合、タンパク質の高次構造、タンパク質の変性

第８回　アミノ酸、タンパク質の代謝：アミノ酸由来生理活性物質、体タンパク質の分解

第９回　生体エネルギーと代謝：生体酸化、酸化的リン酸化、活性酸素

第10回　核酸－１：遺伝子操作、プリン塩基とピリミジン塩基の代謝

第11回　核酸－２：遺伝子発現（転写、翻訳、翻訳後の修飾）

第12回　個体の恒常性とその調節－１：受容体による情報伝達、細胞内シグナル伝達

第13回　個体の恒常性とその調節－２：酸塩基平衡、体温の調節、生体機能の周期性変化

第14回　学習のまとめ

第15回　期末試験とその解説

使用教科書

人体の構造と機能および疾病の成り立ち（東京教学社）
（教育効果を高める目的で、人体生物学の基礎、疾病学ともに同じテキストを、教科書あるいは参考書として使用する。）

自己学習の内容等アドバイス

その気になって、積極的に勉強して下さい。開講時に、いつ、どの分野を学ぶかを詳細に示しますので、その部分を予習すると同時に、必ず履修したその日のうちに復習を行ってください。

［授業科目名］ 生化学実験		［授業方法］ 実験	［授業担当者名］ 田村　明
［単位数］ １	［開講期］ １年次前・後期	［必修・選択］ 必修	備考 前期：１組・２組対象 後期：３組・４組対象

授業の到達目標及びテーマ

この実験の目的は、生化学Ⅰ・Ⅱで履修した内容を、自ら手を動かし体験することによって理解を深めることである。単に実験操作に追われるのではなく、実験結果の解釈を身につけること。

授業の概要

授業と連動させているので、生化学の講義の途中で、すなわちある単元が終了したら、即それに関する実験を行うこととする。実験は４人１組とし、定量実験の場合、終了後に全員の結果を黒板に記し、考察する。

学生に対する評価の方法

実験に対する取り組み態度 50%、試験 50%とする。

授業計画（回数ごとの内容等）

（1）生化学実験を始めるに際して
第１回　生化学実験を行う上での種々注意と実験室の概要説明
第２回　重量測定、容量測定器具や各種実験道具の取り扱い説明とそれらの練習
第３回　各種濃度の食塩水の調整
（2）細胞膜に関する実験
第４回　浸透圧の異なる食塩水中での赤血球容積変化の解析
第５回　馬洗浄赤血球より赤血球膜の調整
（2）糖質代謝に関する実験
第６回　パン酵母を用いての解糖系反応の解析（ピルビン酸生成量より推定）
第７回　パン酵母を用いての TCA サイクルの解析（二酸化炭素生成量より推定）
（3）脂質代謝に関する実験
第８回　卵黄脂質の酵素（リパーゼとホスホリパーゼ）による加水分解とその解析
第９回　薄層クロマトグラフィーによる馬赤血球膜脂質の分離分析
（4）タンパク質・アミノ酸代謝に関する実験
第 10 回　タンパク質・アミノ酸の定性・定量実験
第 11 回　摂取タンパク質の質と量が異なる被験者の尿中クレアチニン、尿素の測定
（5）酵素反応の性質と補酵素に関する実験
第 12 回　酵素反応の時間依存性、温度と pH 依存性
第 13 回　補酵素の有無が酵素反応に与える影響
（6）核酸塩基の代謝に関する実験
第 14 回　プリン塩基代謝の概説と実験の意義、方法の説明（被験者の選出）
第 15 回　摂取タンパク質の質と量が異なる被験者の尿中クレアチニン、尿酸の測定

使用教科書

「イラスト栄養生化学実験」　相原英孝ほか（東京教学社）

自己学習の内容等アドバイス

操作に気を取られるのではなく、それぞれの結果は何を意味し、その結果から何が分かるかを考えて欲しい。この実験では危険な試薬を使うことがあります。最初に注意するので、実験中は集中して行うこと。

［授業科目名］ 食品学Ⅰ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 和泉　秀彦
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

ヒトは各種の食品からエネルギーや栄養素を得て成長し、生命を維持することができる。したがって、栄養を理解するには食品学を十分に習得する必要がある。この科目では、食品に含まれる主要成分及び重要な微量成分、また食品成分間の反応および食品の物性について理解することを到達目標とする。

授業の概要

食品中の各成分（水分・炭水化物・脂質・タンパク質・ビタミン・ミネラル・嗜好成分）の役割、さらに食品の物性・食品成分間の反応および保健機能食品について講義する。

学生に対する評価の方法

日常の受講態度（20%）および期末試験（80%）により評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　序論：食品および食品学とは
第２回　水分　水のかたち，食品中の水の状態，食品の冷凍と加熱
第３回　炭水化物，単糖，オリゴ糖，多糖，食物繊維の種類と性質
第４回　炭水化物，単糖，オリゴ糖，多糖，食物繊維の機能
第５回　脂質，脂質の種類，脂質の理化学特性
第６回　脂質，脂質の酸化，脂質と栄養
第７回　タンパク質・アミノ酸　タンパク質の構造，タンパク質の分類と性質，タンパク質の変性
第８回　酵素　酵素反応，食品の品質にかかわる酵素，食品生産および加工への酵素利用
第９回　ビタミン　ビタミンの分類，脂溶性ビタミン，水溶性ビタミン
第 10 回　無機質　無機質の種類と含量，無機質の主な機能
第 11 回　色の成分　植物性色素，動物性色素および味の成分　味の感覚，味覚成分
第 12 回　香りの成分　匂いの成分，食品の香り，食品の加熱香気および食品の物性　コロイドの科学
第 13 回　食品成分間の反応　アミノ－カルボニル反応，亜硝酸の反応
第 14 回　保健機能食品　特定保健用食品，栄養機能食品
第 15 回　試験とまとめ

使用教科書

加藤保子・中山勉編　食品学Ⅰ　食品の化学・物性と機能性　　南江堂

自己学習の内容等アドバイス

食品学Ⅰを学習するためには、基礎化学を十分に復習して理解しておくこと。
教科書の練習問題が解けるようにすること。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
食品微生物学		講義	岸本　満
[単位数] ２	[開講期] １年次後期	[必修・選択] 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

食品は第一義的に安全であることが求められる。しかし、食中毒や異物混入、回収問題など人々を不安にさせる事件、出来事があとを絶たない。管理栄養士は食を通じて人の健康を支えるので食の安全に対する知識、技術を習得することは重要である。特に微生物（ウイルス、細菌、真菌など）による食中毒や経口感染症を予防するための衛生管理は管理栄養士の責任のもと実施されることが多く、微生物やその他食品の危害要因に対して科学的かつ客観的な知識を身に付ける必要がある。このような知識を身に付けた上で、食品を扱うプロとしての考え方、問題解決の仕方を主体的に考える能力を養うことがこの講義の到達目標である。

授業の概要

本講義はまず生物学的な危害要因としての微生物の特性を理解し、食中毒や感染症と微生物の関係を学ぶ。さらに化学的ないし物理的危害要因とそのリスクについて理解し、これら危害要因によるリスクの低減方法について考察する。

学生に対する評価の方法

試験（60%）、小テスト（40%）、自由レポートなどで総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回 食品衛生行政と法規①（食品安全基本法、食品の安全性の考え方ほか）
第２回 食品衛生行政と法規②（食品衛生行政、食品衛生法、食品衛生監視員、関連法規ほか）
第３回 食品の変質①　（微生物とは　ほか）
第４回 食品の変質②　（微生物に関する基本事項　ほか）
第５回 食品の変質③　（食品の腐敗・変敗・変質　ほか）
第６回 食中毒①　（食中毒の定義と概要、自然毒食中毒）、
第７回 食中毒②　（微生物性食中毒その１）
第８回 食中毒③　（微生物性食中毒その２）
第９回 食中毒④　（微生物性食中毒その３およびウイルス性食中毒）
第 10 回　食品による感染症・寄生虫症①　（消化器感染症、人獣共通感染症）
第 11 回　食品による感染症・寄生虫症②　（寄生虫症　BSE）
第 12 回　食品中の汚染物質　（カビ毒・化学物質・異物）
第 13 回　食品衛生管理／食品の器具と容器包装　（ＨＡＣＣＰ／包装資材ほか）
第 14 回　食品添加物／新しい食品の安全性問題
第 15 回　試験および総括
（第２回～14 回目の授業のうち、少なくとも 12 回の小テストを実施する）

使用教科書

食品の安全性　小塚諭編　（東京教学社）

自己学習の内容等アドバイス

自由レポートの作成について：　任意に提出するレポートのこと。復習、発展的学習として行うと良い。
提出されたレポートはその内容等を総合評価し、0～5 点をつけ、成績に加点する（上限 30 点）。
第２回～14 回の授業開始時のみ受付。提出日からみて直近の授業に関連する内容で、表題（テーマ）に沿ったまとまりのあるものでなければならない。それ以外は評価の対象にしない。手書きで、A4 サイズのレポート用紙 4 枚以上（表紙除く）であること。ただし、Word などで作成した提出者オリジナルの文書ならば手書きでなくてもよい。このとき、自身のオリジナルの文書であることをページ冒頭に書いておくこと。インターネットの情報をプリントアウトしたものを添付することはできない。
新聞、雑誌、学術雑誌等の出版印刷物のコピーを参考資料として常識の範囲で添付または貼付できる。
レポート表紙に、「第〇回授業（〇月△日）授業レポート」と「レポートの表題（タイトル）」、番号、組、氏名を書き、左上を綴じること。提出を忘れて翌週提出したものは評価の対象にしない。

［授業科目名］ 基礎食品栄養学実験		［授業方法］ 実験	［授業担当者名］ 間崎　剛
［単位数］ 1	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

２年次に実施される食品学実験と栄養学実験に先立ち、その受講に必要となる化学実験の知識と技術を習得することが、この授業の到達目標である。また、種々の実験の意義や原理について考える経験と、実験から得られる様々な結果を考察する体験を通して、様々な事象を多面的にかつ客観的に観察できるようになることと、実験結果から得られる結論を論理的に導きだすことができるようになることも、到達目標とする。

授業の概要

種々の実験器具や測定機器の使用目的と操作方法、ならびに化学薬品の取り扱いに慣れる。また、『容量分析』『定性分析』『吸光度分析』『クロマトグラフィー』といった化学実験の基礎的な分析手法を学ぶ。そして、自らが実験して確かめることにより、これまでの授業で習った『中和反応』『溶液の pH』『緩衝作用』『酵素反応』『アミノ酸とタンパク質』といった事柄をより深く理解する。

学生に対する評価の方法

授業への参画態度（20%）と、実験レポートの内容（80%）により評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　実験のための基礎事項（実験の目的と心構え、危険防止のための注意事項）
第２回　様々な実験器具と基本操作（ガラス器具やピペット類の取り扱い方、実験器具の洗浄方法）
第３回　試薬の調製①（物質を量りとる方法、分析天秤の使用方法、濃度の計算、溶液の希釈）
第４回　中和滴定①（酸・塩基の当量や規定度の計算、滴定曲線、標準規定液の標定）
第５回　中和滴定②（食酢に含まれる酸の定量、モル濃度や含量の計算）
第６回　試薬の調製②（以降の実験に必要な試薬の調製）
第７回　溶液の pH に関する実験（pH メーターの原理と使用方法、水素イオン濃度と pH の関係）
第８回　緩衝作用に関する実験（弱酸・弱塩基の電離度と pK、ヘンダーソン・ハッセルバルヒ式、緩衝作用）
第９回　最大吸収波長の測定（光の波長と色の関係、光の吸収、吸光度分析、分光光度計の原理と使用方法）
第 10 回　吸光度分析による溶質の定量（ランベルト・ベールの法則、検量線）
第 11 回　精製酵素によるアルギニンの分解（尿素回路、酵素反応の特質）
第 12 回　酵素反応の生成物の分離分析（クロマトグラフィー、アミノ酸の検出）
第 13 回　アミノ酸・タンパク質の定性分析（官能基の検出、タンパク質の高次構造と変性、塩析分画法）
第 14 回　乳タンパク質の溶解度に及ぼす pH の影響（アミノ酸・タンパク質の等電点、等電点沈殿法）
第 15 回　タンパク質の定量（種々のタンパク質定量法）

使用教科書

【教科書】　初回の授業で配布する「基礎食品栄養学実験 実験書」
【参考図書】「栄養士・管理栄養士をめざす人の実験プライマリーガイド」　倉沢新一　他著　（化学同人）
「生命科学のための化学実験」　高橋知義　他編集　（東京教学社）
「溶液の化学と濃度計算」　立屋敷哲　著　（丸善）
「はじめてみよう生化学実験」　山本克博　編著　（三共出版）
「新しい生化学・栄養学実験」　吉田勉　監修　（三共出版）

自己学習の内容等アドバイス

次の実験の『目的』『原理』『機器の仕組みと操作方法』『手順』『結果の見方』を予習しておくように努めること。そして、わからない点は図書館の蔵書で調べたり教員に質問したりして、自らわかろうと努力すること。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
調理学		講義	岡田　希和子
［単位数］ ２	［開講期］ １年次前・後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

食品の調理による物理化学的変化、調理操作等について、食の専門家として理論を実践に役立てる力を習得する。

授業の概要

調理には、食べ物を安全で衛生的な状態に整え、食べ物の栄養特性を生かし、必要な栄養をバランスよく摂取させるための操作という基本的な役割と、人間の嗜好的欲求の充足という付加的な役割がある。両者を理解した上で、調理学の基礎的理論と実際の調理操作中に生じるさまざまな現象を一体化させて、実践的で役立つ知識を習得する。

学生に対する評価の方法

平常の授業態度(20%)、最終に実施する試験(80%)などで総合的に評価を行う。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　食べ物と環境、嗜好と機能特性
第２回　調理操作の基礎、種類
第３回　調理用器具・機器、調理システム
第４回　献立と食事設計
第５回　食品成分表と献立
第６回　食品素材の調理機能　植物性食品（穀類、いも類）
第７回　食品素材の調理機能　植物性食品（豆類・種実類、野菜類）
第８回　食品素材の調理機能　植物性食品（果実類、海藻類、きのこ類）
第９回　食品素材の調理機能　動物性食品（食肉類）
第10回　食品素材の調理機能　動物性食品（魚介類）
第11回　食品素材の調理機能　動物性食品（卵類、乳類）
第12回　食品素材の調理機能　抽出食品素材
第13回　食品素材の調理機能　調味料・香辛料
第14回　まとめ
第15回　試験とまとめ

使用教科書

森高初恵・佐藤恵美子編著　「Nブックス調理科学」（建帛社）

自己学習の内容等アドバイス

学習した範囲の復習を徹底しておくこと。

［授業科目名］ 調理学実習Ⅰ		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 岡田　希和子
［単位数］ １	［開講期］ １年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

食の専門家として健康で豊かな食生活が実践できるように、食品の調理性を理解し、調理の基本操作を習得する。

授業の概要

科学的知識に基づいた、日本料理、西洋料理、中国料理等の基本的調理操作技術を習得する。
また、大量調理への展開、食品学、食品衛生学との関わりも理解する。

学生に対する評価の方法

平常の授業態度(20%)、各授業項目の評価(30%)、レポート(50%)などで総合的に評価を行う。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　調理学実習室使用法理解、調理の基本操作（計量）
第２回　調理の基本操作（切り方）
第３回　調理の基本操作（だし汁）
第４回　調理の基本操作（炊飯）
第５回　非加熱調理操作
第６回　加熱調理操作（湿式加熱１）
第７回　加熱調理操作（湿式加熱２）
第８回　加熱調理操作（湿式加熱３）
第９回　加熱調理操作（乾式加熱１）
第 10 回　加熱調理操作（乾式加熱２）
第 11 回　加熱調理操作（乾式加熱３）
第 12 回　食素材の栄養と調理（食肉類）
第 13 回　食素材の栄養と調理（魚介類）
第 14 回　食素材の栄養と調理（芋類、豆類）
第 15 回　レポート試験とまとめ

※　白衣、帽子、上履き、手拭タオルを必携すること。

使用教科書

「食育に役立つ調理学実習」（建帛社）

自己学習の内容等アドバイス

次回の実習献立について、使用食材の扱い方、作成手順を予習しておくこと。

［授業科目名］ 調理学実習Ⅱ		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 岡田　希和子
［単位数］ 1	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

本で学んだ知識で栄養必要量を伝えることは、他の医療職種でも可能である。管理栄養士にしかできない栄養指導とは、「何を、どれくらい、どのような調理法で食べるのか」ということを、対象者に合わせて、置き換えることである。主たるたんぱく質食品である、肉の調理ひとつとっても、どの種別のどの部位をどのような調味料でどのような調理法を用いるかによって、千差万別の肉料理が提供できる。「献立作成」ができる栄養士と一言で言っても、実際に作ることができない献立を、紙の上でたてても意味を成さない。自分で調理、献立立案ができ、他職種に指示を与える能力を養う。

授業の概要

食事は、私たちの心身の健康を維持・増進させるために欠くことのできない栄養源であるとともに、嗜好を満足させ、人と食事をともにすることによって心の充実をはかることができる場でもある。日常食に視点をおき、食材・食品に関する管理栄養士として必要な基礎知識を習得する。

学生に対する評価の方法

平常の授業態度(20%)、各授業項目の評価(30%)、レポート(50%)などで総合的に評価を行う。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　食品成分表　献立①作成
第２回　献立①作成・発注
第３回　献立①実習
第４回　献立②作成・発注
第５回　献立②実習
第６回　献立③作成・発注
第７回　献立③実習
第８回　献立④作成・発注
第９回　献立作成④実習
第 10 回　献立作成⑤作成・発注
第 11 回　献立作成⑤実習
第 12 回　指定献立実習
第 13 回　総括
第 14 回　ＩＨ調理①
第 15 回　ＩＨ調理②

※電卓持参、白衣、帽子、上履き、手拭タオルを必携すること。

使用教科書

「食育に役立つ調理学実習」（建帛社）
五訂食品成分表（女子栄養大学出版）

自己学習の内容等アドバイス

実習献立について、使用食材の扱い方、作成手順を予習しておくこと。
実施献立の評価を適切に行うこと。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
給食管理		講義	南　亜紀
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期・２年次前期	［必修・選択］ 必修	備考 ２クラスずつ開講

授業の到達目標及びテーマ

管理栄養士として給食を提供している施設の目的を理解し、給食の運営に必要な栄養・食事管理を始めとする各管理業務とその関連性を把握し、効果的かつ合理的に行うための基礎的知識と技能を習得することを目標とする。

授業の概要

給食は、病院、学校、事業所、福祉施設などの特定給食施設で、それぞれの目的をもって運営されている。
この運営を効果的かつ合理的に行うためには、給食の対象となる人や特定集団を的確に把握した上で、栄養・食事管理をはじめ、その他の管理業務が機能的に作用することが必要である。したがって、この科目では、給食の運営に必要な各管理業務の基本とそれぞれの関連について講義する。

学生に対する評価の方法

平常の授業への参加態度（２０%）、小テスト（４０%）、期末テスト（４０%）で総合評価をする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業内容の概要、給食の概念：健康増進法と特定給食施設、特定給食施設での管理栄養士の役割
第２回　給食と関係法規、給食システム：給食と関係法規、給食の運営、トータルシステムとサブシステム
第３回　栄養・食事管理（１）：栄養・食事管理の目的、給与栄養基準の設定
第４回　栄養・食事管理（２）：食品構成、献立作成
第５回　栄養・食事管理（３）：栄養教育、栄養・食事管理の評価、小テスト
第６回　生産管理（１）：食材料管理の目的、購入と検収・保管、食材料管理の評価
第７回　生産管理（２）：生産管理の目的、生産計画、大量調理
第８回　生産管理（３）：工程管理、提供管理、洗浄・洗浄管理、生産管理の評価、小テスト
第９回　安全・衛生管理（１）：衛生管理の目的、食中毒の発生状況、食中毒発生時の対応
第10回　安全・衛生管理（２）：大量調理施設衛生管理マニュアル、HACCP システム
第11回　安全・衛生管理（３）：危機管理、衛生・安全管理の評価、小テスト
第12回　事務管理、各特定給食施設の特色（１）：事務管理の目的、帳票の種類、病院給食
第13回　各特定給食施設の特色（２）：病院給食、福祉施設給食
第14回　各特定給食施設の特色（３）：学校給食、事業所給食、その他の給食施設、小テスト
第15回　総まとめ、試験

使用教科書

木村友子他編著　「三訂　楽しく学ぶ　給食経営管理論［第２版］建帛社
赤羽正之他編著　「給食施設のための献立作成マニュアル　第７版」医歯薬出版
「食品成分表」女子栄養大学出版

自己学習の内容等アドバイス

次回の授業範囲を教科書で予習、専門用語の意味等を事前に調べておくとよいでしょう。
日頃から、新聞・テレビ・インターネット等で給食関連の情報に興味を持ちましょう。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
国際栄養・食文化演習		演習	徳留　裕子・塚原　丘美 M. ファルク
[単位数] ２	[開講期] １年次後期	[必修・選択] 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

先進国の生活・食文化、健康・栄養問題について、演習を通して学び、我が国における現状と比較検討することにより、管理栄養士が社会で担うべき役割や、解決すべき課題について理解する。

授業の概要

授業は学内ならびにオーストラリア グリフィス大学（現地大学）の学習で構成され、現地の病院、高齢者施設、フードサービス施設などの課外見学を含む。

オーストラリア グリフィス大学「国際栄養・食文化研修」への参加が必須となる。

学生に対する評価の方法

レポートで評価する

授業計画（回数ごとの内容等）

学内　第１回～第６回、15 回　　現地大学　第７回～14 回とする

第１回　イントロダクション（授業の趣旨と進め方の説明、昨年度の海外研修の内容紹介）
第２回　オーストラリアの生活（歴史・文化・気候）
第３回　オーストラリアの食文化（食習慣、家庭料理）
第４回　管理栄養士の職域と養成システム　オーストラリアと日本の比較
第５回　栄養・肥満に関する現状と問題；オーストラリアと日本の比較
第６回　病院および老人施設の管理栄養士業務；オーストラリアと日本の比較
第７回　オーストラリアにおける食物と食文化
第８回　オーストラリアの学校における食教育
第９回　オーストラリアにおける栄養士の役割
第 10 回　オーストラリアにおける栄養補助食品
第 11 回　オーストラリアの病院における栄養管理①
第 12 回　オーストラリアの病院における栄養管理②
第 13 回　オーストラリアの高齢者福祉施設における栄養管理①
第 14 回　オーストラリアに第高齢者福祉施設における栄養管理②
第 15 回　グループディスカッションとまとめ

使用教科書

教科書は使用しない。ただし、学内・現地大学の学習とも、随時必要に応じプリント等で資料を配布する。

自己学習の内容等アドバイス

教養科目の「英語」を積極的に履修し、現地大学での学習に備えること。

この授業を通して学ぶべき課題を具体的にあげ、それに関する情報の収集や考察に努めること。

なお、この授業は 2012 年入学生から適用するが、受講は２年次以降が望ましい。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
国際栄養学演習		演習	徳留 裕子・岸本　満 早戸 亮太郎・M. ファルク
［単位数］	［開講期］	［必修・選択］	備考
２	１年次後期	選択	

授業の到達目標及びテーマ

先進国の生活、食文化、健康・栄養問題について、演習を通して学び、我が国における現状と比較検討することにより、管理栄養士が社会で担うべき役割や、解決すべき課題を理解する。

授業の概要

授業は学内ならびにカリフォルニア大学デービス校（現地大学）の学習で構成され、現地の病院、高齢者施設、フードサービス施設などの課外見学を含む。
カリフォルニア大学デービス校「管理栄養士研修」への参加が必須となる。

学生に対する評価の方法

レポートで評価する

授業計画（回数ごとの内容等）

学内　第1回～第6回、15回　　現地大学　第7回～14回とする

第1回　イントロダクション（授業の趣旨と進め方の説明、昨年度の海外研修の内容紹介）
第2回　アメリカの生活（歴史・文化・気候）
第3回　アメリカの食文化（食習慣、家庭料理）
第4回　学校給食；日本の現状と問題点、アメリカと日本の比較
第5回　健康問題（生活習慣病）；日本の現状と問題点、アメリカと日本の比較
第6回　病院における栄養管理（糖尿病）；日本の現状と問題点、アメリカと日本の比較
第7回　公衆栄養（食事摂取基準・食事調査法・栄養政策）
第8回　アメリカにおける管理栄養士の養成
第9回　アメリカの病院における栄養管理
第10回　アメリカにおける公衆栄養
第11回　アメリカにおける給食の運営管理
第12回　アメリカの高齢者福祉施設における栄養管理
第13回　アメリカにおける小児栄養
第14回　アメリカにおける食品の開発と流通
第15回　グループディスカッションとまとめ

使用教科書

教科書は使用しない。但し、学内・現地大学の学習とも、随時必要に応じてプリント等で資料を配布する。

自己学習の内容等アドバイス

教養科目の「英語」を積極的に履修し、現地大学での学習に備えること。
この授業を通して学ぶべき課題を具体的に掲げ、それに関する情報の収集や考察に努めること。
なお、この授業は2012年入学生から適用するが、受講は３年次以降が望ましい。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
公衆衛生学 I		講義	須崎　尚
[単位数] 2	[開講期] ２年次前期	[必修・選択] 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

「健康」の背景を幅広く探求する基礎知識を習得することをテーマとし、質の高い生活を手に入れるにはどうしたらよいかについて科学的に考える姿勢を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

公衆衛生は集団を対象として、疾病の予防、寿命の延長、身体的及び精神的健康の増進を図る科学であり、技術である。公衆衛生学 I では予防医学、保健統計、疫学理論、生活習慣病対策などを対象とする。これらは私達が健康で質の高い生活を営むために必要不可欠の問題であり、国民の健康に深く関わり、大きく貢献する管理栄養士にとって、非常に大切な分野である。

学生に対する評価の方法

授業への参加態度（20%）、最終的に行う試験（80%）等により総合的に評価する。授業の欠席は減点の対象となる。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　健康の概念と予防医学
第２回　保健統計（1）人口静態統計
第３回　保健統計（2）人口動態統計
第４回　保健統計（3）生命表
第５回　健康状態の評価（1）疫学
第６回　健康状態の評価（2）疫学と因果関係
第７回　健康状態の評価（3）スクリーニング
第８回　生活習慣の現状と対策（1）食生活、運動
第９回　生活習慣の現状と対策（2）喫煙、飲酒
第 10 回　生活習慣の現状と対策（3）睡眠、ストレス他
第 11 回　主要疾患の疫学（1）悪性新生物
第 12 回　主要疾患の疫学（2）循環器疾患
第 13 回　主要疾患の疫学（3）代謝疾患、骨・関節疾患
第 14 回　主要疾患の疫学（4）歯科、感染症、精神疾患他
第 15 回　試験とまとめ

使用教科書

社会･環境と健康　田中平三他　（健康・栄養科学シリーズ）　南光堂

自己学習の内容等アドバイス

次回の授業範囲を教科書、参考書等で事前に調べておくこと。

［授業科目名］ 公衆衛生学Ⅱ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 岸本　満
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

本講義では環境衛生について基礎的な知識を身につけ、環境と健康との関わりを考察する力を身につけること、変化する社会保障（保健・医療・福祉・介護）制度の概要を理解し、私達が健康で質の高い生活を営むための社会保障制度と国民の健康増進の連関を能動的に考察する力を身につけることを到達目標とする。自然科学と社会科学の両側面から社会事象を考究する姿勢を養うことを目的に授業を構成する。

授業の概要

管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）に示す「社会･環境と健康」の内容のうち、環境と健康、保健医療・福祉･介護の制度（医療、福祉、地域、母子、成人、高齢者、介護、産業、学校、国際）とその関連法規をについて学ぶ。

学生に対する評価の方法

試験（60%）、復習テスト（40%）などで総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　環境と健康①　（生態系と人々の生活）
第２回　環境と健康②　（環境汚染と健康影響　）
第３回　環境と健康③　（環境衛生）
第４回　保健・医療・福祉の制度①（社会保障の概念、行政の仕組み）
第５回　保健・医療・福祉の制度②（医療制度）
第６回　保健・医療・福祉の制度③（福祉制度）
第７回　保健・医療・福祉の制度⑤（地域保健）
第８回　保健・医療・福祉の制度⑥（母子保健）
第９回　保健・医療・福祉の制度⑦（成人保健）
第 10 回　保健・医療・福祉の制度⑧（高齢者保健・介護）
第 11 回　保健・医療・福祉の制度⑨（産業保健）
第 13 回　保健・医療・福祉の制度⑩（学校保健）
第 14 回　保健・医療・福祉の制度⑪（国際保健）
第 15 回　試験および総括
（第２回～14 回の授業で毎回復習テストを実施する。）

使用教科書

公衆衛生学　須崎　尚、北田善三編　　（建帛社）

自己学習の内容等アドバイス

新聞を毎日読むこと。また、自治体が作成し頒布する資料にも関心を持つこと。たとえば、社会保障制度、医療制度、福祉制度、介護保険制度などに関する住民向けの資料に目を通し、関心を持ってこれらの制度を身近な問題と捉えるようになって欲しい。
復習テストについて：60%未満の得点の学生は「課題」提出（次回）なお、授業に遅刻または欠席で復習テストを提出できなければ「課題」提出（次回）次回提出できなければ０点（欠席、遅刻で提出できなくても０点）課題が合格の評価ならば 60%の点数を記録する。
課題：A4 レポート用紙使用、表紙に、タイトル（テーマ、表題）、学年、組、番号、氏名、提出月日を書く。表紙以外で４枚を超えるボリウムであること。　復習テストとその授業内容に関連したテーマで調べ学習をする。手書きであること。ワープロでの作成は不可。　課題が合格かどうかは内容、字数、形式を守ったか、その他基準に照らして合格判定する。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
公衆衛生学実習		実習	須崎　尚・岸本　満
[単位数] 1	[開講期] ２年次後期	[必修・選択] 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

本実習では職域や地域保健活動の中で、管理栄養士として主体的に考察し、社会的で幅広い視野を身に付けることをテーマとし、環境衛生にかかわる様々な測定方法を学び、環境の保全に取り組む技術を習得すると共に、健康管理のための手技として、データの取得の仕方、得られたデータの解析の方法、またそれにもとづく保健教育ができることを到達目標とする。

授業の概要

公衆衛生学は臨床と基礎の両面を持つ学問であり、健康を追求する技術でもある。対象範囲は疫学、統計、環境衛生、生活習慣病対策、学校保健、高齢者保健等きわめて広い。本実習では温度、湿度、水質、騒音、環境中の微生物等についての実習と口腔機能検査、アンケートの実施方法、統計処理等についての実習を行う。

学生に対する評価の方法

平常の授業態度（10%）、実習ごとのレポート（90%）により評価を行う。授業の遅刻、欠席は減点となる。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　環境保健１（温熱）：温度、湿度、気流、輻射熱、温熱指数、不快指数の測定　ほか
環境保健２（空気）：粉塵濃度、CO2、CO、空気中の化学成分、換気量、落下細菌（ｴｱｻﾝﾌﾟﾗｰ）の測定ほか
第２回　環境保健３（騒音他）：騒音測定、照度、紫外線強度の測定　ほか
環境保健４（水質）：硝酸、亜硝酸、塩素イオン、硬度、過マンガン酸カリウム消費量、ｐH の測定、排水/下水のBOD、COD、DO、SS の測定　ほか
第３回　環境微生物１（水質＋環境）：一般細菌、大腸菌、大腸菌群（飲料水としての適否を衛生学的に判断）の計測、拭き取り法による環境微生物検査　ほか
環境微生物２（手指１）：手指、皮膚の常在菌叢の検索、常在細菌数の測定、常在菌の分離と同定、真菌の培養　ほか
第４回　環境微生物３（手指２＋真菌）：前回培養結果のまとめ考察、手指消毒法、消毒薬、手洗い効果測定　ほか
環境微生物４（真菌＋消毒法）：真菌の顕鏡・同定、滅菌法と消毒法の実際　ほか
第５回　社会統計
データの種類、データの把握、記述統計について
第６回　調査法
調査票の作成、データの分析、プレゼンテーション
第７回　口腔機能
味覚、咀嚼力、咬合力、唾液緩衝能等の測定
第８回　まとめ

本実習は１コマ90分授業を３コマ実施して１回分とします。第８回は1.5コマでまとめとします。

使用教科書

授業担当者が作成した実習書を使用

自己学習の内容等アドバイス

次回の実習内容について、実習書を読み、専門的な用語について調べておくこと

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
医療福祉概論		講義	山中 克己・井形 昭弘 末松 弘行・都築 一夫・清水 岳彦
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前・後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

到達目標として臨地実習として現場へ出た時に患者の心の理解ができること、医療を行う側に立った時の職業倫理をみにつけること、この医療行為が全体から見てどの部分を担っているか知る。さらに、病院、福祉施設の実習で困らないように、主な疾病について知識や保健、医療、福祉の中での位置づけ知る。

授業の概要

管理栄養士は医療や福祉の現場で働く機会が多い。当然、そこでは子供、成人、老人の人間が対象になる。栄養学は科学を基盤として発展してきたが、医療や福祉の場では科学では解決できないものが存在する。これはアートまたは癒しの技術と言えるかも分からない。この科目では先人がたどった医療や福祉の道をふり返り、生命、医療の倫理、ＱＯＬの意味などを理解する。さらに疾病の基礎的な病理についても説明する。

学生に対する評価の方法

試験評価（80%）、レポート（10%）、受講態度（10%）により評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　医療の特殊性
　　　　人間の生命、医療とは
第２回　医の倫理、生命倫理、管理栄養士の倫理
第３回　健康・病気・医学の体系
　　　　健康の定義、病気の定義、医学の体系
第４回　病気の原因、身体の変化、診断
第５回　免疫と食事アレルギー
第６回　悪性新生物
第７回　ストレスと栄養
第８回　小児疾患の特性について
第９回　腎臓疾患と体液管理
第 10 回　うつ病
第 11 回　精神疾患
第 12 回　心療内科
第 13 回　高齢者医療
第 14 回　介護保険
第 15 回　ターミナルケアと尊厳死

第１回―７回は山中、第８、９回は都築（ヒューマンケア学部）、第１０、１１回は清水（保健管理センター）、第１２回は末松（ヒューマンケア学部）、第１３－１５回は井形（学長）が担当する。試験は第 15 回目に実施する。

使用教科書

日野原重明　「医療概論」　医学書院

自己学習の内容等アドバイス

次回の講義予定の教科書の範囲を読んでおくと、理解が容易になる。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
解剖生理学実験		実験	早戸　亮太郎・日暮　陽子
［単位数］	［開講期］	［必修・選択］	備考
１	２年次前期	必修	

授業の到達目標及びテーマ

人体ならびに実験動物を対象に、実際に自分で観察し実験して、解剖生理学の講義で学んだ知識を確かめ、理解を深めることを目的とする。研究の基礎的な態度を養い、問題解決能力を身につけることが目標である。

解剖学実験としてラットの解剖と消化器官等の組織観察、生理学実験として呼吸・循環機能、腎機能および感覚機能について実習する。

授業の概要

人体の構造と生理機能の仕組みをヒトおよび実験動物に対して観察・実験することで理解する。

循環器系、呼吸器系、泌尿器系、平滑筋および感覚器系の機能について実験し、またラットの肉眼的解剖を行うとともに消化器系等の組織標本を観察する。

学生に対する評価の方法

実習レポート(70%)、実習態度(30%)等を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

下記の実験は毎回３コマ(90 分×3)続けて行うので、３コマ×８回で合計２４コマの実験になる。

この実験は数名の班に分かれて行うが、８回の実験の順序は各班により異なる。

第１回 循環機能: 心電図、血圧・脈拍について、安静時と負荷時の比較を行う。

第２回 呼吸機能: スパイロメータを用い、正常時、死腔増加時及び気道抵抗増加時の各種肺気量を測定する。

第３回 腎機能: 水制限時、生理食塩水あるいは脱イオン水摂取時の尿量、尿中 Na^+と K^+濃度を経時的に測定し、体液量と浸透圧の濃度の調節について考察する。

第４回 胃平滑筋収縮: 胃平滑筋を種々の電解質液で灌流し、自律神経作動薬の効果を調べ、平滑筋収縮の調節を理解する。

第５回 感覚機能: 皮膚感覚(2 点弁別閾値、知覚点)、視覚(Scheiner の実験、盲点)、深部感覚(Weber の法則)について、各自を被験者として実験する。

第６回 ラット解剖:腹部・胸部内臓を中心に解剖・スケッチし、各臓器の位置関係や形態を理解する。

第７回 組織学実習: 肝臓、腎臓、胃、についてスケッチし、組織の微細構造を理解する。

第８回 総合討論

注意事項を守り、実験器具、動物等を丁寧に扱うこと。

興味をもって、真剣に行い、実験中は整理整頓に心がけ、怪我や事故を防ぐこと。

使用教科書

実習書をもとに実験する。

【参考書】トートラ人体解剖生理学(第７版、丸善)、標準生理学(第７版、医学書院)

自己学習の内容等アドバイス

各実験項目について、実習書や教科書で予習し、実験内容を理解し、実験手順を把握しておくこと。

毎回の実験終了後、復習してレポートにまとめること。

体の仕組みについて自問自答し、人体機能の巧みさを理解してほしい。

［授業科目名］ 疾病の成り立ちⅠ（生活習慣病）		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 五十里　明
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前・後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

【一般目標】管理栄養士として必要な疾病に関する専門的知識を広く習得するために、生活習慣病の成因、病態、診断、治療等を理解する。

【到達目標】１　生活習慣病の病態生理を理解する。
２　疾病の発症や進行を理解する。
３　病態評価や診断、治療の基本的考え方を理解する。

授業の概要

生活習慣病である糖尿病、脂質異常症、高尿酸血症、高血圧，骨粗鬆症、メタボリックシンドロームなどについて、疾病の成因、病態生理、診断法、治療法などについて説明する。

学生に対する評価の方法

授業への参画態度（10%）と期末試験（90%）の成績を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第　1回　オリエンテーション・生活習慣病
第　2回　糖尿病の病態生理
第　3回　糖尿病の診断
第　4回　糖尿病の合併症
第　5回　糖尿病の治療
第　6回　脂質代謝異常の病態生理
第　7回　脂質異常症の診断と治療
第　8回　高尿酸血症と痛風
第　9回　高血圧症
第10回　脳卒中
第11回　心臓疾患
第12回　肥満症とメタボリックシンドローム
第13回　カルシウム代謝と骨粗鬆症
第14回　悪性腫瘍の診断と治療
第15回　授業のまとめと試験

使用教科書

参考図書：イラスト　人体の構造と機能および疾病の成り立ち(東京教学社)

自己学習の内容等アドバイス

糖質代謝、脂質代謝などの生化学の知識、人体の構造や血圧などに関する解剖学・生理学の知識について、１年次で使用した教科書で事前に理解しておくこと。

［授業科目名］ 疾病の成り立ちⅡ(臓器・器官別疾患)		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 北川　元二
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

【一般目標】管理栄養士として必要な疾病についての専門的知識を広く習得するために、消化器系、呼吸器系、循環器系、腎・泌尿器系、脳神経系の疾患の成因、病態、診断、治療等を理解する

【到達目標】

１　主要な臓器に発生する疾患の病態生理を理解する。
２　疾病の発症や進行を理解する。
３　病態評価や診断、治療の基本的な考え方を理解する。

授業の概要

消化器病、肝臓病、胆道・膵臓病、心臓病、呼吸器病、腎臓病、脳血管障害、認知症などについて、疾患の成因、病態生理、診断法、治療法、栄養療法、などについて説明する。

学生に対する評価の方法

受講態度・授業への参加態度(10%)と期末試験(90%)の成績を総合的に評価する

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　消化吸収の病態生理学
第２回　消化器病学（胃と腸）
第３回　消化器病学（肝臓）
第４回　消化器病学（胆のう、膵臓、その他）
第５回　心血管系の病態生理
第６回　循環器病学
第７回　呼吸器系の病態生理
第８回　呼吸器病学
第９回　腎の病態生理
第 10 回　腎・泌尿器病学
第 11 回　脳、神経系の病態生理学
第 12 回　脳血管障害、認知症
第 13 回　神経・精神疾患、摂食障害
第 14 回　運動器疾患・サルコペニア
第 15 回　授業のまとめと試験

使用教科書

参考図書：イラスト　人体の構造と機能および疾病の成り立ち（東京教学社）

自己学習の内容等アドバイス

①　消化・吸収、呼吸、循環、腎、脳神経に関する解剖学・生理学の知識について１年生で使用した教科書で事前に理解しておくこと。
②　上記参考図書の該当する章を事前に予習しておくこと。

［授業科目名］ 実践臨床医学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 北川　元二
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

【一般目標】管理栄養士として必要な臨床医学についての専門的知識を広く習得するために、全身に影響を及ぼす疾患の成因、病態、診断、治療等を理解する。また、医療の実践に関する医学用語、基礎知識について習得する。

【到達目標】

１　医療の現場を理解する。
２　医療を実践する場合の課題と問題点を理解する。
３　エビデンスに基づいた診断、治療の基本的な考え方を理解する。

授業の概要

全身疾患である血液疾患、免疫・アレルギー疾患、感染症、がんなどについて、疾患の成因、病態生理、診断法、治療法、栄養療法、などについて説明する。さらに、診断学、臨床検査医学、放射線医学、薬物治療学、医療倫理学、医療統計学など医療の実践に必要な知識を習得する。

学生に対する評価の方法

受講態度・授業への参加態度(10%)と期末試験（90%）の成績を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　臨床血液学
第２回　臨床免疫学
第３回　感染症
第４回　悪性腫瘍
第５回　代謝性疾患（糖尿病、脂質異常症、高尿酸血症、肥満症、メタボリックシンドローム）
第６回　動脈硬化性疾患（冠動脈疾患、脳血管障害）
第７回　認知症、老人症候群
第８回　医療の基本（医療倫理、チーム医療、インフォームドコンセント、ＮＳＴ、医療安全、等）
第９回　医療面接、診療の実際、医療倫理
第10回　主な症候と病態
第11回　臨床検査
第12回　治療の種類・方法・適応と薬物療法
第13回　輸液治療、栄養療法
第14回　緩和ケア・EBM
第15回　授業のまとめと試験

使用教科書

参考図書：イラスト　人体の構造と機能および疾病の成り立ち（東京教学社）

自己学習の内容等アドバイス

①　血液、細菌、免疫について１年生で勉強した内容を復習しておくこと。
②　上記参考図書の該当する章を事前に予習しておくこと。

［授業科目名］ 食品学Ⅱ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 和泉　秀彦
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

食品学Ⅱでは、農産物、畜産物、水産物などの素材を理解した上で、それらに物理的、化学的、生物的な処理を加えて、食品の貯蔵性、嗜好性、可食性、栄養性、経済性などの新しい価値が付与された食品加工について理解することを到達目標とする。

授業の概要

植物性食品および動物性食品の特性とそれらを利用した加工品について講義するとともに、食品の規格および表示についても解説する。

学生に対する評価の方法

受講態度 20％＋期末試験 80％

授業計画（回数ごとの内容等）

１回　序論　食品の分類
２回　食品成分表　収載食品と収載成分
３回　植物性食品およびその加工品　穀類
４回　植物性食品およびその加工品　いも類
５回　植物性食品およびその加工品　豆類
６回　植物性食品およびその加工品　種実類
７回　植物性食品およびその加工品　野菜類
８回　植物性食品およびその加工品　果実類
９回　植物性食品およびその加工品　きのこ類・藻類
10 回　動物性食品およびその加工品　食肉類
11 回　動物性食品およびその加工品　牛乳
12 回　動物性食品およびその加工品　卵類
13 回　動物性食品およびその加工品と　魚介類
14 回　食品の生産・加工・流通　食品の規格，表示
15 回　試験とまとめ

使用教科書

加藤保子・中山編　　食品学Ⅱ　食品の分類と利用法　　南江堂

自己学習の内容等アドバイス

食品学Ⅱを学習するためには、食品学Ⅰを十分に復習して理解しておくこと。
教科書の練習問題が解けるようにすること。

［授業科目名］ 食品学実験Ⅰ		［授業方法］ 実験	［授業担当者名］ 和泉　秀彦
［単位数］ １	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

化学実験の初歩から始めて系統的に実験を理解できるように進め、実験により食品分析の理論と技術を習得することをテーマとして、食品に対する理解を深めることを到達目的とする。

授業の概要

食品中の５大栄養素について、その成分の定性・定量およびその成分の分離・検出などの実験を行う。

学生に対する評価の方法

３回のレポートにより評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

Ⅰ（第１回～第４回）
食品の一般成分分析
水分・灰分・タンパク質・脂質・炭水化物の測定

Ⅱ（第５回～第 10 回）
タンパク質に関する実験
タンパク質の分離・精製
タンパク質の定量
タンパク質の消化実験
SDS-PAGE によるタンパク質純度検定

Ⅲ（第 11 回～第 14 回）
食品成分に関する実験
ミネラル（リン）の定量
油脂の酸価の測定
抗酸化活性の測定

Ⅳ（第 15 回）
まとめ

使用教科書

渡辺達夫・森光康次郎編　　健康を考えた食品学実験　　アイ・ケイコーポレーション
食品学実験Ⅰ・Ⅱ

自己学習の内容等アドバイス

実験書を熟読し、どのような実験をするかを予習して理解しておくこと。

［授業科目名］ 基礎栄養学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 池田　彩子
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

栄養素の化学、代謝および機能についての基本的事項を学び、人間の健康の保持・増進と疾病の予防・治療への応用力を養い、管理栄養士として幅広い分野で活躍できる栄養学の基礎知識を修得することを目標とする。

授業の概要

本講義では、栄養素である糖質、たんぱく質、脂質およびビタミンの化学、代謝、機能、栄養状態の評価法、栄養的意義等について学ぶ。

学生に対する評価の方法

授業内容の理解度を確認するために、中間試験と期末試験の２回の筆記試験を行い、その合計点で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス　摂食と消化吸収
第２回　糖の消化吸収
第３回　食後の糖代謝
第４回　食間期の糖代謝
第５回　たんぱく質の消化吸収と代謝
第６回　アミノ酸代謝とたんぱく質の栄養価
第７回　中間試験とまとめ
第８回　脂質の消化吸収とリポたんぱく質代謝
第９回　食後のトリアシルグリセロール代謝
第 10 回　食間期のトリアシルグリセロール代謝
第 11 回　コレステロール代謝
第 12 回　ビタミンＡ・Ｄの代謝と機能
第 13 回　ビタミンＥ・Ｋの代謝と機能
第 14 回　水溶性ビタミンの代謝と機能
第 15 回　期末試験とまとめ

使用教科書

池田彩子・石原健吾・小田裕昭 編著
「栄養科学ファウンデーションシリーズ４　生化学・基礎栄養学」朝倉書店

自己学習の内容等アドバイス

第１回のガイダンスで各回の授業内容の詳細と教科書の該当箇所を提示するので、毎回予習として教科書の該当箇所を読んでから授業に臨むこと。また、授業の最後には各回のキーワードを提示するので、授業後に復習として各自でキーワードを説明できるようにまとめておくこと。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
基礎栄養学実験		実験	池田　彩子
［単位数］ １	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

牛乳カゼインと小麦グルテンの栄養価の評価を行うことによって、たんぱく質の栄養価の考え方とその評価法を学ぶ。また、本学で動物実験に行うために必要な事項を理解する。これらの学習を通して、人間の健康の保持・増進への応用力を養い、管理栄養士として幅広い分野で活躍できる栄養学の基礎知識を修得することを目標とする。

授業の概要

食品たんぱく質は、一般に体たんぱく質構成に適したアミノ酸組成を持つものが良質であり、食品たんぱく質の種類によって栄養価が大きく異なる。たんぱく質の栄養評価法には、動物を飼育してその成長や生体成分の分析から判断する生物学的評価法と、化学分析のみから判断する化学的評価法の２つがある。本授業ではこれらの評価法を学び、動物性たんぱく質である牛乳カゼインと植物性たんぱく質である小麦グルテンの栄養価を両方法で評価する。また、動物実験の教育訓練として、動物実験に関する法規等や、動物実験の方法、飼養保管、安全管理等に関する事項を学ぶ。

学生に対する評価の方法

授業への取り組み方とレポートの内容から総合的に評価する。なお、本実験は動物実験であるため、授業内に実施する動物実験教育訓練を欠席した者は、本実験を行うことができないので注意すること。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業ガイダンス　試薬調製
第２回　実験飼料の作製
第 3～5 回　実験飼料中の窒素含量の測定
第６回　食品たんぱく質のアミノ酸組成にもとづく栄養価の評価
第７回　動物実験養育訓練　ラットの飼育　糞尿の採取
第８・９回　ラットの解剖　糞尿の試料調製
第 10 回　たんぱく質効率と正味たんぱく質効率による栄養価の評価
第 11～13 回　糞尿中の窒素排泄量の測定
第 14 回　窒素出納、生物価および正味たんぱく質利用率による栄養価の評価
第 15 回　結果のまとめと考察

使用教科書

青山頼孝・小原郁夫 編著「健康を考えた栄養学実験」アイ・ケイコーポレーション

自己学習の内容等アドバイス

毎回の授業の最後には、次回の教科書の該当箇所や計算等の宿題を提示するので、指示された内容について必ず予習復習をした上で、次回の授業に臨むこと。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
応用栄養学Ⅰ		講義	藤木　理代
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

各ライフステージにおける人体の生理的特徴を理解し、発育発達やライフスタイルに応じた栄養管理が行えるようになることを目標とする。

授業の概要

栄養状態の評価方法や栄養アセスメント結果に基づく栄養ケア計画の立て方を学ぶ。特に発育発達に伴う人体の生理的機能の変化について理解し、成長に応じた栄養所用量の変化および健全な身体形成のための栄養ケアマネジメントについて学ぶ。

学生に対する評価の方法

試験（50%）およびレポート（50%）で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

回	テーマ	内容
1	栄養アセスメント	個人の栄養状態の評価方法を理解する。
2	栄養ケア計画の作成	栄養アセスメント結果に基づき、問題解決のための栄養ケア計画を立てる方法を理解する。計画の実施方法、評価方法を学ぶ。
3	食事摂取基準の概要	食事摂取基準の策定理論と意義を学ぶ。
4	食事摂取基準の活用	食事摂取基準に応じた食事計画法を理解する。
5	成長・発達・加齢	成長・発達・加齢のライフサイクルに伴う身体的・精神的変化と栄養ケアの変遷の概要を理解する。
6	幼児期の身体的特徴	幼児期の発育・発達に応じた栄養ケアができるよう、幼児期の身体的特徴や疾患について理解する。
7	幼児期の栄養ケア	幼児期の食事摂取基準に応じた栄養管理を理解する。適切な食習慣の形成について理解する。
8	保育所給食	保育所における集団の食事改善を目的とした栄養管理を理解する。
9	幼児期の食物アレルギー	食物アレルギーの機序と調理における留意点を理解する。 主なアレルゲンと食品のアレルゲン表示について理解する。
10	学童期の身体的特徴	学童期の発育・発達に応じた栄養ケアができるよう、学童期の身体的特徴と疾患について理解する。
11	学童の栄養ケア	学童期の食事摂取基準に応じた栄養ケアを理解する。適切な生活習慣の形成について理解する。
12	学校給食	小学校における集団の食事改善を目的とした栄養管理を理解する。各種食物アレルギーに対応した献立作成方法の基礎を理解する。学校給食を通した食育活動の意義を理解する。
13	思春期の身体的特徴	思春期の発育・発達に応じた栄養ケアができるよう、思春期の身体的特徴と疾患について理解する。
14	思春期の栄養ケア	思春期の食事摂取基準に応じた栄養ケアを理解する。適切な生活習慣の形成について理解する。
15	試験とまとめ	授業のまとめおよび多肢選択式の試験を実施。

使用教科書

「応用栄養学」　戸谷誠之、藤田美明、伊藤節子　（南江堂）

自己学習の内容等アドバイス

保育園・小中学校では実際にどのような栄養管理が行われているかについて、書籍や Web サイトなどで情報を収集し学びましょう。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
応用栄養学Ⅱ		講義	藤木　理代
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

成人期の身体的特徴を理解し、生活習慣病の予防や、健康増進を目的とした栄養管理が行えるようになることを到達目標とする。

授業の概要

成人期の身体的特徴やライフスタイルについて学び、生活習慣病の一次予防を目指した栄養管理を学ぶ。運動時のエネルギー代謝や生理機能の変化を理解し、生活習慣病の予防や、健康増進を目的とした適切な運動方法について学ぶ。

学生に対する評価の方法

試験（50%）、レポート（50%）で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

1	運動時のエネルギー代謝	運動時のエネルギー代謝経路について理解する。適切な運動量の算定方法を理解する。
2	運動と健康増進	運動の種類と運動による身体機能の向上について理解する。
3	運動と栄養ケア	スポーツ競技者のパフォーマンス向上のための栄養ケア方法を理解する。
4	スポーツ競技者の食事計画	各競技の特性に応じたパフォーマンス向上のための献立作成法の基礎を理解する。
5	成人期の身体的特徴と生活習慣	成人期の身体的特徴、個人の生活スタイルについて理解する。
6	生活習慣病	生活習慣病の成因、現状、予防法を理解する。
7	生活習慣病の一次予防	生活習慣病の一次予防のための栄養ケア計画作成法を理解する。
8	成人期の栄養ケア（糖質）	糖尿病予防のための食事計画を理解する。
9	成人期の栄養ケア（脂質）	脂質異常症予防のための食事計画を理解する。
10	成人期の栄養ケア（塩分）	高血圧予防のための食事計画を理解する。
11	更年期の生理的特徴と栄養ケア	更年期の生理的特徴に応じた栄養ケアを習得する。
12	ストレスと栄養	ストレス環境下における身体の応答と栄養ケア法を理解する。
13	特殊環境と栄養（気温）	特殊環境（気温）における身体の変化と栄養ケアを理解する。
14	特殊環境と栄養（気圧）	特殊環境（気圧）における身体の変化と栄養ケアを理解する。
15	試験とまとめ	授業のまとめおよび多肢選択式の試験を実施する。

使用教科書

「応用栄養学」　戸谷誠之、藤田美明、伊藤節子　（南江堂）
「応用栄養学栄養マネジメント演習・実習」　竹中優、土江節子（医歯薬出版）

自己学習の内容等アドバイス

生理学（骨格筋・循環器系の機能、ストレス応答）、生化学（エネルギー代謝経路）で学習した関連項目を復習しておきましょう。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
栄養教育論		講義	安達　内美子
[単位数] ２	[開講期] ２年次前期	[必修・選択] 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

食の営みの全体像（食の循環）を理解し、人々の生活の質と環境の質のよりよい持続可能な共生をめざした栄養教育プログラムの作成、実施、評価をできるようにする。

授業の概要

将来、管理栄養士として、食の循環を理解し、支援を必要としている人々の生活の質の向上だけでなく、環境の質との持続可能な共生をめざした栄養教育（支援）が行えるようアセスメントから評価までの基礎知識と要領の習得を図る。

学生に対する評価の方法

平常の受講態度（20%）、授業時に課する栄養教育プログラムの課題の提出状況及び内容（20%）、
最終に実施する試験（60%）により、総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業の進め方について
第２回　栄養教育の概念：求められる管理栄養士とは
第３回　国民栄養の変遷と栄養教育
第４回　行動科学理論と栄養教育①
第５回　行動科学理論と栄養教育②
第６回　教育学を基礎とする健康・栄養教育①
第７回　教育学を基礎とする健康・栄養教育①
第８回　栄養教育マネジメント①（アセスメント）
第９回　栄養教育マネジメント②（プランニング）
第 10 回　栄養教育マネジメント③（評価）
第 11 回　食行動から捉える栄養教育
第 12 回　栄養教育のための実践基礎知識①（食事摂取基準、食事バランスガイド）
第 13 回　栄養教育のための実践基礎知識②（食生活指針）
第 14 回　栄養教育の方法
第 15 回　試験とまとめ

使用教科書

春木　敏　編　エッセンシャル栄養教育論（医歯薬出版株式会社）
その他　必要に応じて資料配布、参考図書紹介等を行う。

自己学習の内容等アドバイス

普段の生活の中での自分と食と環境とのつながりを考えてみる。
自分の行動を客観的に捉え、どのような要因によってその行動が起こっているのか考えてみる。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
栄養指導論		講義	安達　内美子
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

管理栄養士として、様々なライフステージの学習者またはその保護者等に栄養教育（支援）を実践する応用力を得ることを目標として、各ライフステージの特徴や課題を明らかにし、人々が望ましい食生活を営む力を身につけるための課題とその支援法について学ぶ。

授業の概要

各ライフステージの特徴や課題を理解し、アセスメントを含む栄養教育プランニングについて学習する。適宜、場面・状況を仮定し、学習者に応じた栄養教育プログラムを作成する課題に取り組む。

学生に対する評価の方法

平常の受講態度（20％）、授業時に課する栄養教育プログラムの課題の提出状況及び内容（20％）、
最終に実施する試験（60％）により、総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義の進め方について
第２回　妊娠・授乳期の栄養教育：体重をコントロールしながら食事バランスを整える
第３回　乳・幼児期の栄養教育：個人の発育・発達を考慮しながら、楽しい食事の実現
第４回　学童期の栄養教育①：生きる力を育む
第５回　学童期の栄養教育②：家庭、地域も元気に
第６回　思春期の栄養教育：食の自己管理能力を養う
第７回　成人の栄養教育①：メタボリックシンドローム予防
第８回　成人期の栄養教育②：特定保健指導による健康的な生活支援
第９回　高齢期の栄養教育：低栄養を予防し、生きがいを支える
第 10 回　障害者の栄養教育：障害を個性ととらえ、自分らしい食事の実現
第 11 回　栄養教育の国際的動向　先進国：生活習慣病や肥満への取り組み
第 12 回　栄養教育の国際的動向　発展途上国：低栄養と過剰栄養への取り組み
第 13 回　食環境づくりと栄養教育：人々が望ましい食生活を営むための食環境
第 14 回　復習：人と食環境をどのようにとらえ、栄養教育プランニングを行うのか
第 15 回　試験とまとめ

使用教科書

春木　敏　編　エッセンシャル栄養教育論（医歯薬出版株式会社）
その他　必要に応じて資料配布、参考図書紹介等を行う。

自己学習の内容等アドバイス

自分とは異なる、様々なライフステージ、状況下にある人々を理解し、課題を共有できるように、日々人との出会いや交流を大事にしてほしい。

［授業科目名］ 栄養カウンセリング演習Ⅰ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 山内　恵子
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

カウンセリングマインドやカウンセリング技法を理解する。さらに、学習者が体験学習を通して、カウンセリングマインドで相手に対応することをこと体験することから、コミュニケーションスキル、栄養カウンセリングスキルを習得する。

到達目標：行動科学に基づいたカウンセリングの理論的理解を深める。リスニングスキルを身に付け、
個別および集団への行動変容アプローチができる能力を身につける。
公認傾聴支援士（リスナー）の資格取得が可能なスキルの習得

授業の概要

SAT ヘルスカウンセリングは、筑波大学の宗像恒次氏によって構造化された技法である。スピーディ
に気持ちや感情を明確にし、自分自身の要求に気づく事ができる。
授業ではヘルスカウンセリングの基本技法のほかに、健康や病気をめぐる人間行動について理解を深め、人々の保健行動の実践や変容のための支援法を学習する。

学生に対する評価の方法

授業における体験学習や問題解決学習での課題レポート提出
公認傾聴支援士（リスナー）の資格取得に繋げるスキルの習得（実践テープの審査）

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　栄養教育におけるカウンセリングの意義と特性
第２回　栄養カウンセリングの必要性と気づきの体験ワーク
第３回　ヘルスカウンセリングの特徴と効果　気持ちや感情・ニードの理解
第４回　カウンセリングの基本について理解し，実践できる
第５回　カウンセラーの態度いろいろ　リスニングの基本姿勢について学ぶ
第６回　傾聴的対応について理解し，技法を実践できる　同感、同情、共感の違いを把握
第７回　モデリングによるカウンセリングのスキル体験　行動目標化までの手順把握
第８回　カウンセリングのスキル体験：行動目標化カウンセリング　グループワークによるスキルの習得
第９回　カウンセリングのスキル体験：行動目標化カウンセリング　グループワークによるスキルの習得
第 10 回　カウンセリングのスキル体験：カウンセラー体験、クライアント体験
第 11 回　カウンセリングのスキル体験：カウンセラー体験、クライアント体験　テープ審査
第 12 回　行動マネージメント　コーチングの理解・ コーチングの事例紹介と体験ワーク
第 13 回　行動マネージメント　コーチングの事例づくりと発表
第 14 回　組織作り・地域づくりへの展開　ソーシャルキャピタル
第 15 回　行動療法の事例を通して学ぶ　実践例：食行動の改善・病態別アプローチ

使用教科書

栄養指導と患者ケアの実践ヘルスカウンセリング　　発行者　医歯薬出版
配付資料（オリジナル教材）を使用

参考図書

SAT カウンセリング技法　宗像恒次著　広英社
ヘルスカウンセリング事典　発行者　日総研出版　宗像恒次編

自己学習の内容等アドバイス

カウンセリングは道具であり、スキルである。基本技法や、手法は頭で理解するのではなく、実践、練習を繰り返すことで身に付く。

［授業科目名］ 栄養カウンセリング演習Ⅱ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 山内　恵子
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

行動科学に基づいたカウンセリングの理論的理解を習得する。また、事例を通して実践的な理解を深る。
ストレスマネージメントの方法や自己分析を習得し、アサーションやネゴシエーションなどのコミュニケーションについても学び、管理栄養士としてより高度な能力についての認識を深める
到達目標：人間行動や気持ち、感情のメカニズムを理解し、行動変容につなぐための方法、理論を習得する。

授業の概要

保健医療従事者として、健康や病気をめぐる人間行動について、行動科学的に対する理解を深めていく。また、栄養カウンセリングの理論、カウンセリングの栄養教育への適応・実践など広義について学び、効果的な栄養面談法を紹介する。

さらに、行動科学の基本的概念や行動の捉え方について保健行動科学の基礎理論などの学習を通して、健康や病気をめぐる人間行動について理解を深める。

学生に対する評価の方法

授業における課題の提出、テストの得点により総合評価。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　病気と疾患　ストレスコーピングの概要と活用法　心の発達と自己成長
第２回　ストレスマネージメント　自己分析
第３回　行動科学の基本的理解
第４回　代表的な理論やモデルの概要理解　ヘルスビリーフモデル・社会的学習理論等
第５回　行動療法①　行動療法の理解　よく用いられる行動技法について学ぶ
第６回　行動療法②　行動を変えるための方法の習得
第７回　行動療法③　トランスセオレティカルモデル(行動変容ステージモデル)の理解と活用
第８回　いくつかの心理療法の理解　TA/自律訓練法・イメージ療法・ゲシュタルト・エンプティチェアなど
第９回　コミュニケーションスキル①　アサーションスキル・ネゴシエーションスキルの理解
第 10 回　コミュニケーションスキル①　アサーションスキル・ネゴシエーションスキルの事例づくりと発表
第 11 回　思春期の問題　摂食障害の理解　事例紹介
第 12 回　行動科学・行動療法の振り返り　さまざまな理論や方法の理解を深め、実践につなぐ　小テスト
第 13 回　カウンセリングの臨床応用　特定保健指導に向けての心理的アプローチ
第 14 回　動機づけ面接法　禁煙指導へのアプローチ法　グループセラピー
第 15 回　試験とまとめ

使用教科書

エッセンシャル　栄養教育論　　配付資料（オリジナル教材）を使用
参考図書
　ヘルスカウンセリング事典　日総研出版
　SAT 法を学ぶ　ヘルスカウンセリング学会出版

自己学習の内容等アドバイス

行動療法の理論を理解するのみでなく、さまざまな事例を通して理解し、実践力をつけていく。国試の問題などにも慣れておこう！

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
臨床栄養学Ⅰ		講義	塚原　丘美
[単位数] 2	[開講期] 2年次前期	[必修・選択] 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

チーム医療の一員として傷病者に対する栄養管理、診療録の見かたや栄養ケアの記録方法などを学習することで、医療機関における管理栄養士の役割と具体的な栄養管理方法について理解する。

授業の概要

傷病者に対して適切な栄養管理を行うための方法について総論的に学習する。すなわち、患者の栄養状態や病態の的確な評価（アセスメント）、栄養ケアプランの作成（栄養治療の目標、栄養必要量の決定、栄養補給法の選択)、実施及び評価（モニタリング）などの総合的な栄養ケアマネジメントを学習する。

学生に対する評価の方法

受講態度（5%）
期末に筆記試験（95%）を行なう。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　Ⅰ　臨床栄養の基礎
　　１、臨床栄養管理の流れ　（栄養ケアマネジメント）
第２回　　２、臨床栄養とチーム医療
第３回　　３、ターミナルケア、ＱＯＬ
　　４、診療・保険制度と臨床栄養
第４回　Ⅱ　臨床での栄養評価
　　１、栄養スクリーニング（栄養状態判定法）
第５回　　２、身体計測
第６回　　３、臨床検査
第７回　　４、喫食調査
第８回　Ⅲ　栄養必要量の算定
　　１、エネルギー
第９回　　２、たんぱく質
　　３、脂質
　　４、ビタミン、ミネラル
第 10 回　Ⅳ　治療食と栄養補給法
　　１、一般食（入院食）と治療食　（入院時食事療養制度）
第 11 回　　２、経腸栄養法・経腸栄養剤
第 12 回　　３、経静脈栄養法・輸液
第 13 回　Ⅴ　医薬品と飲食物との相互作用
　　１、医薬品が栄養に及ぼす影響
第 14 回　　２、食品（食事）が薬効に及ぼす影響
第 15 回　試験とまとめ

使用教科書

中坊幸弘、寺本房子編集　「栄養科学シリーズNEXT　臨床栄養管理学総論」　講談社サイエンティフィク

自己学習の内容等アドバイス

基礎栄養学で学習する各栄養素の役割とその必要量について、また解剖生理学等で学習する各栄養素の消化と吸収および代謝について復習しておく。

［授業科目名］ 臨床栄養学Ⅱ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 塚原　丘美
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

病態の生理学的特徴や代謝異常を的確に判断し、なぜこの栄養必要量や栄養補給法が必要なのかを理解できるようになり、疾病名にかかわらず個々の患者別に栄養ケアプランが作成できることを目標とする。

授業の概要

臨床栄養学Ⅰで学習した基本的な内容を踏まえて、臨床栄養学Ⅱではそれぞれの疾患の病態、臨床検査値などのアセスメント、栄養治療計画から食品構成・献立作成まで、具体的な栄養管理を一連の流れをもって学習する。特に栄養アセスメントを中心に授業を行う。ここでは消化器系、代謝系及び循環器系までの主な疾患について授業を行う。

学生に対する評価の方法

授業態度（5%）
期末に筆記試験（95%）を行う。

授業計画（回数ごとの内容等）

第　1回　　Ⅰ　代謝系の疾患
　　　　　　　１、栄養管理からみた生活習慣病（メタボリックシンドローム）の捉え方
第　2回　　　２、代謝・内分泌疾患　　（糖尿病の病態）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（糖尿病の治療）
第　3回　　　　　　　　　　　　　　　（脂質異常症）
第　4回　　　　　　　　　　　　　　　（肥満症、高尿酸血症、甲状腺機能亢進症）

第　5回　　Ⅱ　循環器系・血液の疾患
　　　　　　　１、血管、心疾患　　（高血圧症）
第　6回　　　　　　　　　　　　　　（動脈硬化症・虚血性心疾患、心不全）
第　7回　　　２、血液疾患　　　　　（貧血）

第　8回　　Ⅲ　消化器系の疾患
　　　　　　　１、消化器系疾患に対する栄養療法
　　　　　　　２、口腔・食道疾患　　（口内炎、舌炎、胃食道逆流症、食道癌）
　　　　　　　３、胃・腸疾患　　　　（胃炎、潰瘍）
第　9回　　　　　　　　　　　　　　　（胃癌、炎症性腸疾患）
第10回　　　　　　　　　　　　　　　（たんぱく質漏出性胃腸症、過敏性腸症候群、下痢）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（便秘、大腸癌・直腸癌）
第11回　　　４、術前・術後　　　　　（術前・術後のマネジメント、短腸症候群、人工肛門増設後）
第12回　　　５、肝疾患　　　　　　　（肝炎、脂肪肝）
第13回　　　　　　　　　　　　　　　（肝硬変・肝不全、肝癌）
第14回　　　６、胆・膵疾患　　　　　（胆のう炎・胆石症、膵炎、膵癌）

第15回　　試験とまとめ

使用教科書

寺本房子、市川寛編集　「栄養科学シリーズNEXT　臨床栄養管理学各論」　講談社サイエンティフィク

自己学習の内容等アドバイス

「疾病学」で学習したそれぞれの疾病の成り立ち、病態の特徴について復習しておく。

［授業科目名］ 臨床栄養学Ⅲ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 立花　詠子
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

それぞれの病態の特徴を理解し、その病気に沿った栄養必要量や補給方法について正しく判断できると同時に、疾病名に関わらずそれぞれの患者別に個々の栄養ケアプランが作成できることを目的とする。

授業の概要

臨床栄養学Ⅰで学習した基本的な内容を踏まえて、臨床栄養学Ⅲでは、「腎臓疾患」とステージ別で「妊娠時の疾患」及び「更年期障害」、「小児期の疾患」を中心に講義を行う。それぞれの疾患の病態、臨床検査値などのアセスメント、栄養治療計画から食品構成・献立作成まで、具体的な栄養管理を一連の流れに沿って勉強する。

学生に対する評価の方法

期末の筆記試験（95%）、受講態度（5%）で総合的に判断する。試験の欠席は認めない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　腎臓疾患とは
第２回　　Ⅰ　糸球体腎炎
　　　　　Ⅱ　ネフローゼ症候群
第３回　　Ⅲ　急性腎不全・慢性腎不全
第４回　　Ⅳ　糖尿病腎症
第５回　　Ⅴ　人工透析
第６回　　Ⅵ　慢性腎臓病（CKD）
第７回　母子栄養（妊産婦栄養）について
　　　　　Ⅰ　妊娠悪阻
　　　　　Ⅱ　肥満
　　　　　Ⅲ　妊娠時の貧血
第８回　　Ⅳ　妊娠高血圧症候群
第９回　　Ⅴ　妊娠糖尿病
第１０回　Ⅵ　更年期障害
第１１回　小児栄養について
　　　　　Ⅰ　小児消化器疾患（乳児下痢症、周期性嘔吐症）
　　　　　Ⅱ　小児肥満
第１２回　Ⅲ　１型糖尿病
第１３回　Ⅳ　小児腎疾患
第１４回　Ⅴ　先天性代謝異常症
第１５回　　まとめと試験

使用教科書

栄養科学シリーズNEXT　臨床栄養管理学各論　第２版　寺本房子、市川寛編集（講談社サイエンティフィク）

自己学習の内容等アドバイス

臨床栄養学Ⅰの内容を復習しておくこと。また、応用栄養学や解剖生理学、基礎栄養学などの内容も併せて予習復習をすること。

［授業科目名］ 公衆栄養学Ⅰ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 徳留　裕子・川崎　和彦
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

１．公衆栄養学が、地域や集団を対象に、食と健康との関連を追及し、その対策として公衆栄養活動を伴う科学であることを理解する。

２．わが国や諸外国の健康・栄養問題と課題、それに対応する主な栄養政策について説明できる。

授業の概要

生活習慣病が大きな健康問題となっている我が国において、健康づくりを推進する際、食生活の問題点、その対策としての政策ならびに社会的努力や支援が重要であることを歴史的視点、国際的比較を通じて学ぶ。

公衆栄養学Ⅰでは、わが国の社会環境と健康・栄養問題ならびにその解決のための栄養政策ならびに公衆栄養活動について、資料や事例をあげて進める。

学生に対する評価の方法

レポート(20%)、確認試験（70%）、受講態度(10%)などにより総合的に評価する。

原則として再評価は筆記試験とする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　公衆栄養の概念
第２回　公衆栄養活動
第３回　社会環境と健康・栄養問題
第４回　健康状態の変化
第５回　食事の変化
第６回　食生活・食環境の変化
第７回　諸外国の健康・栄養問題の現状と課題
第８回　わが国の栄養政策－公衆栄養活動
第９回　わが国の栄養政策－公衆栄養関連法規
第10回　わが国の栄養政策－国民健康・栄養調査１
第11回　わが国の栄養政策－国民健康・栄養調査２
第12回　わが国の栄養政策－公衆栄養関連の指針、ツール
第13回　わが国の栄養政策－国の健康増進基本計画と地方計画
第14回　諸外国の健康・栄養問題
第15回　まとめと確認試験

使用教科書

公衆栄養学　日本栄養改善学会監修
徳留裕子　伊達ちぐさ編（医歯薬出版）

自己学習の内容等アドバイス

次回のテーマについて教科書で予習をすること。

公衆栄養の領域である国や地域の健康、栄養の状況や課題ならびにそれに対する対策は、状況に合わせて変わる。Web 上で、国内外の情報をリアルタイムで得ることができるので、最新の情報を自ら求めてほしい。健康・栄養関連の省庁（例えば、厚生労働省）のホームページにアクセスして最新の情報を得ること。

［授業科目名］ 給食経営		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 高柳　敏子
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期・３年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

給食施設で勤務する管理栄養士は効率よく給食経営ができる専門知識とマネジメント能力が求められている。この科目では、給食の実務を理解した後に給食の運営や経営資源について、総合的に習得することを到達目標とする。

授業の概要

授業では「食事管理の専門家」として保健・医療・福祉・介護・学校などの領域で栄養管理に参画し、業務を円滑に遂行する実力を身につける。そして社会に貢献できるよう特定給食施設（病院、福祉施設、学校、事業所等）の具体的な事例を挙げて、マネジメントやマーケティングの基本的な考え方や方法を、最新の経済情報等を提供しながら進めていく。

学生に対する評価の方法

授業態度（２０％）、授業内で実施するミニテスト（３０％）、試験（５０％）など総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　給食における経営管理（概要・意義・戦略）
第２回　経営管理の機能と展開（組織構造・アウトソーシング・評価）
第３回　マーケティング（定義・機能）
第４回　マーケティング（戦略・要素・顧客との関係）
第５回　給食におけるマーケティング
第６回　給食の財務・会計管理
第７回　給食における生産・提供システム（オペレーションシステム）
第８回　人事・労務管理
第９回　給食の施設・設備管理（厨房設備・機器類）
第 10 回　給食の施設・設備管理（新調理システム）
第 11 回　給食の品質管理・評価
第 12 回　給食の危機管理・情報処理管理
第 13 回　各種給食施設の特徴と経営の実際
第 14 回　外食産業と給食
第 15 回　試験　・　まとめ

使用教科書

「給食経営管理論」　　建帛社
　編著者：木村友子./井上明美/宮澤節子

自己学習の内容等アドバイス

国家試験出題傾向の高い内容は次回の授業でミニテストを実施するので、復習をしておくこと。

［授業科目名］ 給食管理実習		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 南　亜紀
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前・後期	［必修・選択］ 必修	備考 ２クラスずつ開講

授業の到達目標及びテーマ

給食を運営する管理の基本のあり方を理解するとともに、管理栄養士としての主体的な自覚をうながすことを目標とする。

授業の概要

学内の給食施設で学生、教職員を対象に１００食の昼食を生産（調理）して販売する。そのために、利用者の栄養・食事管理をはじめ、その他給食に関する管理を計画、実施、評価・反省という管理サイクルにそった運営をおこない、効果的に機能させる技術を習得する。

学生に対する評価の方法

実習科目であるので実習への参加態度（３０％）、実習態度（３０％）に重点を置き、栄養教育ポスター（グループ点・１０％）、個々に提出の献立（２０％）、その他提出課題（１０％）の総合評価とする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業内容の概要説明、グループわけ（①前半４グループ、②後半４グループの計８グループ）
　　　　栄養・食事管理の計画
第２回　栄養・食事管理の計画（給与栄養目標量設定、食品構成、献立計画）
第３回　①　献立作成、試作準備　　②　実習室の掃除
第４回　①　献立の試作　　②　献立作成、試作準備
第５回　①　次週実施の生産・作業管理計画、衛生安全管理の計画　　②　献立の試作
第６回　①　給食を生産（調理）、提供　［実習室］
　　　　②　次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画　［演習室］
第７回　①　次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理　［演習室］
　　　　②　給食を生産（調理）、提供　［実習室］
第８回　①　給食を生産（調理）、販売　［実習室］
　　　　②　次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理　［演習室］
第９回　①　次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理　［演習室］
　　　　②　給食を生産（調理）、販売　［実習室］
第10回　①　給食を生産（調理）、販売　［実習室］
　　　　②　次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理　［演習室］
第11回　①　次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理　［演習室］
　　　　②　給食を生産（調理）、販売　［実習室］
第12回　①　給食を生産（調理）、販売　［実習室］
　　　　②　次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理　［演習室］
第13回　①　次週実施の生産・作業計画、衛生安全管理の計画と実施した給食の事務整理　［演習室］
　　　　②　給食を生産（調理）、販売　［実習室］
第14回　栄養出納表・栄養月報、その他書類の作成
第15回　ABC分析、実施後の評価・反省

使用教科書

木村友子他編著　「学内給食経営管理実習のためのおいしい食事のコーディネート　第２版」医歯薬出版

自己学習の内容等アドバイス

日頃から自宅で積極的に調理を行ったり、レシピを集めるなど、調理法、料理のレパートリーを増やしておきましょう。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
医療福祉実習		実習	須崎　千鶴
［単位数］ 1	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

本授業では体験高齢者疑似体験を通して高齢者の理解、車椅子使用者や視覚障害者等の外出時の介助法、要介護高齢者の介護法、緊急時の対応法など基礎技術の習得をする。

授業の概要

各援助技術は提供する側、提供される側の両方を体験する。また、基本的技術を踏まえ応用場面への対応を班単位で協力して考え発表する。

学生に対する評価の方法

毎回提出するレポート内容、実習態度を総合して評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

この実習では、1 コマ 90 分の授業を 1 日に 3 コマ実施して 1 回とします。従って、全 8 回では 24 コマ分の実習をおこなうことになります。

第１回　高齢者擬似体験
　　　　車椅子介助方法
　　　　視覚障害者の介助方法
　　　　シニアサイン
第２回　環境の整備
　　　　観察法
　　　　寝衣交換とシーツ交換
第３回　移動と移乗
第４回　食事介助
　　　　口腔ケア
　　　　排泄の介助
第５回　ハンドケア・フットケア
　　　　応急手当の方法
第６回　一次救命処置技術　成人・乳児・小児
第７回　緊急時対応事例学習「こんなときどうする」
第８回　まとめ

使用教科書

冊子を配布する。

自己学習の内容等アドバイス

日常生活の中で使える援助技術は機会があれば積極的に実践してください。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
健康管理論		講義	大橋　鉱二・斉藤　邦明
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

医療の現場では様々な疾患に対して医師の経験および臨床検査データをもとに診断と治療が行なわれている。また患者の治療に当たっては適切な意栄養管理が重要である事が認識され、今や全国の多くの病院でＮＳＴ（栄養サポートチーム）が稼働し、管理栄養士の医療現場での役割は大きくなっている。そのため、管理栄養士も疾患の概要と臨床検査データを正しく理解する能力の養成が必要である。

授業の概要

検診などに利用される代表的な検査項目について疾患と検査値との関連を理解するための必要かつ基礎的な事項を講義する。重要な点は異常値が出るメカニズムについて十分に理解することであり、日常よく遭遇する基準範囲を少し外れた場合にどのように考えるかについて中心に取り上げる。

学生に対する評価の方法

試験をすべての講義終了後に実施する。
合否は試験（90%）の点に授業態度等（10%）を加味して 60 点以上を合格とする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　ガイダンス、医療における臨床検査の必要性
第２回　　臨床検査値の特性と評価法
第３回　　糖尿病連検査項目
第４回　　血清中蛋白成分の臨床的意義と栄養状態
第５回　　血中非蛋白性窒素成分の臨床的意義
第６回　　脂質異常症に関する臨床検査とその意義
第７回　　血清酵素とその臨床的意義-1
第８回　　血清酵素とその臨床的意義-2
第９回　　ポルフィリン代謝とビリルビンの臨床的意義
第 10 回　血清電解質および微量金属イオンの臨床的意義
第 11 回　尿中成分とその臨床的意義
第 12 回　血算と凝固・線溶系検査の意義
第 13 回　腫瘍マーカーとその臨床的意義
第 14 回　整体の免疫反応の仕組みと疾患について
第 15 回　試験とまとめ

使用教科書

「分かりやすい臨床検査医学」廣川書店

自己学習の内容等アドバイス

その日の講義内容については十分に理解し、不明なところはそのままにしないこと

［授業科目名］ 食と環境		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 山本　勝彦
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

環境由来の有害化学物質汚染問題を知り、地球上の全ての生命と人類が共存できる環境について食物汚染を通じて再構築をする必要性を学ぶ。特に 2011 年発生した東日本大震災で発生した原子力発電所破壊と放射能汚染並びに行政対策について学ぶ。

授業の概要

①原子力発電と放射能汚染　②ダイオキシンおよびＰＣＢ類汚染　③残留農薬　④カビ毒（マイコトキシン汚染　⑤動物薬品･資料添加物の残留　　⑥水銀等有害金属汚染　⑦BSE 問題　等７項目を学ぶ。

学生に対する評価の方法

レポートによる評価：　①受講態度（40%）、③レポート（60%）（講義の第１部から第７部の中から興味を持ったテーマについてレポート（Ａ４版５枚程度）を提出する。内容は講義のまとめ、自己調査研究でもよく、意見、要望、感想、環境食品衛生政策への意見も評価の対象とする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第 1 回　第1部　原子力発電事故と放射能汚染　　第１章　原子力発電　第２章　原子力施設の事故
第 2 回　　第３章　チェルノブイリ原発電所事故及び事故に関わる人体への被爆影響の評価
　　第４章　東日本大震災による原子力発電所事故の状況と対策
第 3 回　第2部　ダイオキシン類
　　第１章　ダイオキシン類の性状と毒性　第２章　食品のダイオキシン汚染の実態
第 4 回　　第３章　母乳汚染　　第４章　ダイオキシンの曝露評価　(1) １日摂取量　（２）法的規制
第 5 回　第3部　残留農薬
　　第１章　１．農薬の定義　２．農薬の歴史と変遷
第 6 回　　第２章. 農薬の種類とその作用機序　 第３章　食と農薬に関わる法律
第 7 回　　第４章　食品と残留農薬　(1)残留基準と検査体制　(2)調理による残留農薬除去効果
第 8 回　第4部　マイコトキシン　第１章　概要　(1)産生のメカニズム　(2) カビ毒の毒性
第 9 回　　第２章　１．食料の汚染実態　２．カビ毒汚染の特徴　３．輸入食品検査体制と汚染の現状
第10回　第5部　動物用医薬品・飼料添加物
　　第１章　畜産業･水産業の現状　１．動物用医薬品　２．畜産動物、養殖魚の疾病と治療
第11回　　第２章　動物薬品の法規制　　１．畜水産食品の安全確保と残留実態　２．安全性の評価
第12回　第6部　有害金属
　　第１章　食品の水銀汚染　(1)水銀の毒性　(2)魚介類水銀汚染濃度　(3) 水俣病
第13回　　水俣湾と阿賀野川流域　(4)規制値の設定
第14回　　第２章　食品のカドミウム汚染　(1) イタイイタイ病　(2) 人体毒性　(3) 米の Cd 汚染対策
第15回　第7部　ＢＳＥ（牛海面状脳症）　第１章　１．プリオン病の概況
　　第２章　１．BSE と食品衛生対策（１）検査システム　（２）検査結果

使用教科書

異なった分野の多くの参考書、文献などから情報を収集したので、それらを抽出した資料としてプリントをその都度配布する。

自己学習の内容等アドバイス

我々の食生活において、多くの物質で有益な作用と有害作用のあることを知り、その量的評価の基となる体内及び環境における物質濃度の関係を数量的に評価する見方を養う。

［授業科目名］ 社会保障概論		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 五十里　明
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

医療保険、社会福祉制度、介護保険など、生活に身近な社会保障制度を学ぶ。

講義では、社会保障制度の変遷や、社会保障の具体的な制度内容を知ること、その全体像に関する理解を深めることを目的とする。

授業の概要

本科目は、医療・福祉分野で働く人にとって不可欠な科目である。また、社会保障制度を理解することは、大学を卒業後、個人的生活面においても必要なことである。本科目では、社会保障の具体的実態に言及する。

学生に対する評価の方法

講義への参画態度（20%）、各受講生に課せられた課題について、その発表した内容（40%）、講義後の課題レポートの内容（40%）から総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第　１回　オリエンテーション・各受講生の課題の決定
第　２回　国民生活と社会保障
第　３回　社会保障制度の変遷
第　４回　我が国の社会保障を取り巻く環境（１）
第　５回　我が国の社会保障を取り巻く環境（２）
第　６回　社会福祉（１）生活保護
第　７回　社会福祉（２）社会福祉制度
第　８回　社会福祉（３）介護保険制度他
第　９回　社会福祉（４）次世代制度
第 10 回　社会福祉（５）障害者制度（１）
第 11 回　社会福祉（６）障害者制度（２）
第 12 回　保健医療（１）医療保険
第 13 回　保健医療（２）地域保健・医療施策
第 14 回　年金制度
第 15 回　雇用保険制度・まとめ

使用教科書

「社会保障入門 2014」社会保障入門編集委員会　中央法規出版

【参考図書】はじめての社会保障」椋野美智子・田中耕太郎　有斐閣、「社会福祉六法」みらい　他

自己学習の内容等アドバイス

普段から、新聞やテレビニュースなどから、世界や日本の社会情勢についての情報を得ておくこと。次回の授業範囲を教科書で予習しておくこと。

［授業科目名］ 介護概論		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 須崎　千鶴
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

要介護者がその人らしく自立して生活を継続できるように支援するために、介護者として必要な知識や技術についての理解を深める。

授業の概要

少子高齢社会を迎え、介護を必要とする対象は増加の一途を辿っており、老老介護、認知症者の介護、虐待など深刻な社会問題ともなっている。介護保険制度を含めた社会の現状や生活を支える介護の理念、対象に応じた介護援助、介護施設など介護を取り巻く社会、制度、理念、対象、技術など全体像を学ぶ。

学生に対する評価の方法

筆記試験にて評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　介護とは何か
第２回　介護の対象の理解Ⅰ
第３回　介護の対象の理解Ⅱ
第４回　生活とは何か
第５回　生活歴と介護
第６回　介護の基本　尊厳と自立
第７回　ターミナルケアⅠ
第８回　ターミナルケアⅡ
第９回　要介護者の人権と介護
第 10 回　社会保障制度の理解Ⅰ
第 11 回　介護保険制度とケアプラン
第 12 回　介護を受ける場所と介護の特徴
第 13 回　事故防止と安全対策
第 14 回　まとめ
第 15 回　試験と解説

使用教科書

プリント、VTR を使用する。
参考図書:　介護の基本　ミネルヴァ書房

自己学習の内容等アドバイス

介護制度や介護の現状について新聞等に目を通し問題意識を持って受講してください。

［授業科目名］ 代謝栄養学実験		［授業方法］ 実験	［授業担当者名］ 池田　彩子
［単位数］ １	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

生化学検査を通して、栄養状態や栄養素の代謝変動をあらわす指標となる血液成分および尿中成分とその意義について学び、人間の健康の保持・増進への応用力を養い、管理栄養士として幅広い分野で活躍できる栄養学の基礎知識を修得することを目標とする。

授業の概要

動物実験とは異なり、ヒトを対象としてその栄養状態を知るためには、得られる試料が限られる。血液と尿は、対象者の栄養状態を知るための重要な試料である。血液や尿中に含まれている成分を分析することによって、肝臓、腎臓をはじめとする様々な臓器の状態を知り、対象者の栄養状態を明らかにすることができる。
本授業では、ヒトの血液および尿成分の生化学検査とその評価を行うとともに、それらの代謝変動の意義について理解する。

学生に対する評価の方法

授業への取り組み方とレポートの内容から総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業ガイダンス
第２回　試薬の調製
第３回　血液成分の生化学検査とその評価１　グルコース
第４回　血液成分の生化学検査とその評価２　アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ
第５回　血液成分の生化学検査とその評価３　アラニンアミノトランスフェラーゼ
第６回　血液成分の生化学検査とその評価４　タンパク質　アルブミン
第７回　血液成分の生化学検査とその評価５　尿素窒素
第８回　血液成分の生化学検査とその評価６　コレステロール
第９回　血液成分の生化学検査とその評価７　トリアシルグリセロール
第 10 回　尿検査とその評価１　尿の一般性状　尿試験紙による検査
第 11 回　尿検査とその評価２　グルコース　たんぱく質　ケトン体
第 12 回　尿検査とその評価３　尿素
第 13 回　尿検査とその評価４　クレアチニン
第 14 回　代謝変動についての学習
第 15 回　代謝変動についての発表

使用教科書

青山頼孝・小原郁夫 編著「健康を考えた栄養学実験」アイ・ケイコーポレーション
プリント配布

自己学習の内容等アドバイス

毎回の授業の最後には、次回の教科書の該当箇所や計算等の宿題を提示するので、指示された内容について必ず予習復習をした上で、次回の授業に臨むこと。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
薬理学		講義	山本　勝彦
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

食物が薬理作用に影響すること、また薬物の吸収及び分解・排泄に影響することが明らかになってきた。食生活において無駄の無い有効な薬物の使用について学ぶことは栄養士にとって重要である。また、薬の販売規制の緩和により、薬の登録販売員制度の発足と共に栄養士も職場の一つとして注目されるようになり、薬の基礎的知識を習得する機会としても授業内容に取り込みたい。

授業の概要

１． 総論：薬物の概念、法制度、与薬方法、体内動態、薬理作用、副作用、複数使用薬物の相乗・拮抗作用
２．抗感染症薬、抗がん薬、消炎解熱鎮痛薬、高血圧薬、糖尿病薬、脂質異常症治療薬、骨阻鬆症治療薬など
３．食物（栄養成分）と薬物の相互作用　　以上３部門について学ぶ。
４．上記項目について演習問題をプリント配布し理解を深める。

学生に対する評価の方法

期末試験及び日常の聴講意欲評価：　①期末試験（原則）または指定テーマによるレポート（60%）、②日常の質問などによる授業聴講意欲（40%）

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　第１章　授業概要,　　第２章　薬の基礎知識　１．薬理学の意味
第２回　　　２．医薬品と法令　３．医薬品の種類
第３回　　　４．医薬品の作用
第４回　　　５．医薬品の体内動態　６．医薬品の有害作用
第５回　　第３章　疾病治療薬の概要　１．高血圧及び心疾患治療薬
第６回　　　２．抗がん薬　３．抗感染症薬　　４．抗ウイルス薬
第７回　　　５．消化器に作用する薬　６．抗パーキンソン病薬
第８回　　　７．麻薬性鎮痛薬　８．脂質異常症治療薬
第９回　　　９．抗炎症薬・解熱・鎮痛薬、ステロイド剤　10.　痛風治療薬　11.　糖尿病治療薬
　　　　　　12.　骨租鬆症
第10回　　第４、５章　内服薬の吸収　１．医薬品の吸収・代謝　　２．食事と服薬の時間
第11回　　第６章　食事内容と医薬品相互作用　１．高脂肪食　２．高タンパク質食
　　　　　　３．特異動的作用と薬物効果
第12回　　第７章　食品中の特定成分と医薬品の相互作用　１．お茶　２．グレープフルーツジュース
　　　　　　３．カルシウム含有食品
第13回　　　４．アルコール含有食品　５．チラミン含有食品　６．食物繊維
第14回　　第８章　ビタミン含有食品と医薬品　　１．ワルファリンと納豆　２．その他の食品中ビタミン
　　　　　第９章　健康食品と医薬品の相互作用　１．セントジョーンズワート　２．ニンニクなど
第15回　　１．補足説明とまとめ　２．期末試験

使用教科書

①医療・福祉介護者も知っておきたい食と薬の相互作用（幸書房）第２改訂版　②関連資料のプリント配布

自己学習の内容等アドバイス

教科書を予め読んでおく。配布プリント演習問題で理解を深めておく。

［授業科目名］ 食品学実験Ⅱ		［授業方法］ 実験	［授業担当者名］ 和泉　秀彦
［単位数］ １	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

食品衛生および食品加工に関する実験を通して、人体に安全な食品を製造するためのさまざまな方法を理解することを到達目標とする。

授業の概要

食品添加物の検査および食品の細菌学的検査の実験を通して食品衛生に関する科学的知識を、さらに簡単な機器・器具を利用した加工食品の製造の実習を通して食品加工の原理を理解し、加工食品に対する科学的知識を身につける。

学生に対する評価の方法

単元ごとに提出していただく３回のレポートにより評価する。
授業の遅刻、欠席は減点対象とする。

授業計画（回数ごとの内容等）

Ⅰ（第１回～第４回）
　食品添加物の定量・同定
　　発色剤の定量
　　保存料の定量
　　着色料の分離同定

Ⅱ（第５回～第８回）
　各種微生物の検査
　　一般生菌数の測定
　　大腸菌群の測定
　　大腸菌の測定
　　黄色ブドウ球菌の検出
　　細菌のグラム染色

Ⅲ（第９回～第 14 回）
　食品加工学実験
　　みかん缶詰の製造　（実験）ビタミンＣの定量・シロップ（糖）濃度の定量
　　パンの製造　（実験）湿グルテンの測定・小麦タンパク質の定量
　　豆腐の製造

Ⅳ（第 15 回）
　まとめ

使用教科書

清水英世・杉山章編　　図解 食品衛生学実験　　みらい
食品学実験Ⅰ・Ⅱ

自己学習の内容等アドバイス

実験書を熟読し、どのような実験をするのか予習して理解しておくこと。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
応用栄養学実習		実習	藤木　理代
［単位数］	［開講期］	［必修・選択］	備考
1	３年次前期	必修	

授業の到達目標及びテーマ

各ライフステージにおける適切な食事内容や量を理解し，個人の目標に応じた栄養ケアプログラムを計画する力を身につける。

授業の概要

応用栄養学Ⅰ，ⅡおよびⅢで学習した内容を基に，各ライフステージにおける人体の機能とライフスタイルをふまえた対象例の食生活プランニングを行う．具体的には，対象例の栄養ケアマネジメントの目標設定，適切な栄養量の設定，献立の作成，対象者の社会環境をふまえたアドバイス，フォローアップ方法などを発表，討議する。

学生に対する評価の方法

実習への取組み（50%），レポート（50%）により，総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　オリエンテーション
第２回　離乳期の食事計画
第３回　離乳食の調理
第４回　幼児期の食事計画
第５回　幼児食の調理
第６回　学童期の食事計画
第７回　学童期の食事の調理
第８回　思春期・成人期の食事計画
第９回　生活習慣病予防を考慮した食事の調理
第 10 回　妊産婦の食事計画
第 11 回　妊産婦の食事の調理
第 12 回　高齢者の食事計画
第 13 回　介護食の調理
第 14 回　スポーツ選手の食事計画
第 15 回　授業のまとめ、発表・討議

使用教科書

参考図書および資料；日本人の食事摂取基準 2010 年版，日本食品標準成分表 2010

自己学習の内容等アドバイス

献立にバリエーションが出るよう、豊かな食の知識を身につけて来て下さい。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
スポーツと栄養		講義	大嶋　里美
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

スポーツ栄養学の基本である運動生理学と栄養学の基礎を学び、パフォーマンス向上を目的とした栄養サポートに関する知識および技術を身につけることを目標とする。

授業の概要

授業を通して、運動に必要なエネルギー代謝や供給、体作りのための食事、さらにアスリートに多く見られる栄養関連の障害を紹介していく。また現場で行う栄養アセスメントの実践も取り入れていく。

学生に対する評価の方法

授業中実施する小テスト及びワークシート（40%）、学期末に実施する試験（60%）により総合的に評価する。

本講義は短期集中講義であるため、原則として計２日間以上の欠席、および試験当日の欠席は認めない。

本授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　トレーニングとエネルギー消費
第２回　エネルギー補給
第３回　スポーツ栄養マネージメント
第４回　からだづくりとタンパク質摂取
第５回　骨づくりカルシウム摂取
第６回　栄養カウンセリング実践
第７回　貧血予防と鉄･タンパク質摂取
第８回　運動中の水分補給とビタミン摂取
第９回　トレーニング期の食事
第10回　運動と呼吸循環器系機能：持久力の測定と規定因子
第11回　運動と骨格筋機能：骨格筋の構造と筋肥大
第12回　試合期の食事
第13回　サプリメント摂取
第14回　期末テスト(90分)
第15回　日本とアメリカのスポーツ栄養事情

使用教科書

新版　コンディショニングのスポーツ栄養学　　樋口　満　編著　（市村出版）

自己学習の内容等アドバイス

集中講義であるため期末テストの準備を早めに始めることを勧める。

［授業科目名］ 栄養教育実習		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 山内　恵子
［単位数］ １	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

行動科学に基づいた栄養教育のスキル習得　個別面談力・集団アプローチ、支援力の育成
到達目標：管理栄養士の栄養教育業務に必要な基本的スキルを身につけ、教材、媒体の作成から、行動変容に支援する個別・集団でのアプローチができるようになること。

授業の概要

栄養教育は、乳幼児から高齢者までのライフステージを通じ、健康者、半健康者、病者などのレベルに応じた対応が、地域、職域、教育、臨床などあらゆる分野で展開される。管理栄養士や栄養士の配属されているところでは、必要に応じ、個別相談や集団指導、教室などの教育、実習、演習が実施されているが、実施状況はまだ十分とはいえない。

食事の提供そのものが栄養教育の媒体には違いないが、何れのステージ、場においても、より健康度を上げるための方法について、問題点の把握、教育の目的設定、計画、実施、評価にいたるまでのプロセスを実習しながら技術を体得する。

学生に対する評価の方法

授業における学習態度や実習・演習での課題の提出、グループワークの評価点より総合評価

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　栄養教育のマネージメント　　面接に必要なアセスメント　簡単な栄養計算法
　　　　個別面談の実際　　　　　　　栄養カウンセリングの実際
第２回　生活習慣改善の実際　　　　　生活習慣改善に役立つツール
　　　　　　　　　　　　　　　　　　運動指導の体験
第３回　集団指導の方法と実際　　　　行動療法を活用した教室開催
　　　　ステージ別教育プラン　　　　高齢者の食事　介護食・嚥下食の理解
第４回　病態別食事療法の実際　　　　慢性疾患患者の食事　指導法
　　　　ステージ別教育プラ　　　　　糖尿病・メタボの最新指導法の実際
第５回　ステージ別教育プラン　　　　幼児期から学童期　媒体製作の準備
　　　　病態別食事療法の実際１　　　低タンパク食材の扱い　調理実習
第６回　教育媒体の活用・指導法の実際１　　成人期・慢性疾患患者対応
　　　　病態別食事療法の実際２　　　糖尿病教室開催の体験　調理実習　　面談の実際
第７回　ステージ別教育プラン４　　　幼児期から学童期　媒体製作発表
　　　　ステージ別教育プラン５　　　行動療法を生かした媒体製作発表
第８回　ステージ別教育プラン６　　　特定保健指導　教材製作

使用教科書

栄養教育演習（建帛社）
0.5 単位お食事カード（日総研出版）
配付資料（オリジナル教材）を使用

自己学習の内容等アドバイス

栄養教育や、臨床栄養などから学んだ基礎知識をもとに、栄養教育の手技、手法を学んでいくので、検査値が読める、病態や生理を理解していることが必要。共同作業で、作品を仕上げていく協調性、責任力が必要。

［授業科目名］ 臨床栄養学Ⅳ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 立花　詠子
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

それぞれの病態の特徴を理解し、その病気に沿った栄養必要量や補給方法について正しく判断できると同時に、疾病名に関わらずそれぞれの患者別に個々の栄養ケアプランが作成できることを目的とする。

授業の概要

臨床栄養学Ⅰで学習した基本的な内容を踏まえて、臨床栄養学Ⅳでは、高齢者栄養とその他の疾患の講義を行う。それぞれの疾患の病態、臨床検査値などのアセスメント、栄養治療計画から食品構成・献立作成まで、具体的な栄養管理を一連の流れに沿って勉強する。また、いくつかの症例を取り上げて、栄養管理計画書の書き方に慣れることを到達目標とする。

学生に対する評価の方法

期末の筆記試験（95%）、受講態度（5%）などで総合的に判断する。試験の欠席は認めない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　老年症候群について
　Ⅰ　脳血管障害　嚥下障害
第２回　Ⅱ　意識障害　認知症
　アルツハイマー
第３回　Ⅲ　褥瘡
第４回　Ⅳ　骨粗鬆症
第５回　Ⅴ　サルコペニア
第６回　Ⅵ　ノーマライゼーションと介護保険
第７回　その他の疾患
　Ⅰ　COPD（慢性閉塞性肺疾患）
第８回　Ⅱ　骨軟化症、くる病
第９回　Ⅲ　熱傷
第１０回　Ⅳ　周術期
　Ⅴ　摂食障害
第１１回　まとめと中間試験
第１２回　栄養記録の書き方　SOAP による記入方法
第１３回　栄養管理計画書の作成（練習問題）
第１４回　栄養管理計画書の作成（練習問題）
第１５回　まとめと期末試験

使用教科書

栄養科学シリーズ NEXT　臨床栄養管理学各論　第２版　寺本房子、市川寛編集（講談社サイエンティフィク）

自己学習の内容等アドバイス

臨床栄養学Ⅰの内容を復習しておくこと。また、応用栄養学や解剖生理学、基礎栄養学などの内容も併せて予習復習をすること。

［授業科目名］ 臨床栄養学実習Ⅰ		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 塚原　丘美
［単位数］ １	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

臨床栄養学Ⅰで学習したことを実際に体験することで傷病者の栄養管理についてより理解を深め、医療・福祉施設の管理栄養士として業務を遂行する上で必要な知識と手技を身につける。特に、機器の測定値や実測値及び計算値など様々な数値を正しく捉えることができることを目的とする。

授業の概要

臨床栄養学Ⅰで学習した身体計測や代謝測定の手技、ケアプランの作成（栄養必要量の決定、栄養投与方法の決定、食品構成作成、献立作成）など、実際に身をもって体験する。また、あらゆる方面から傷病者の栄養管理を考えられるようになるために、傷病者の栄養必要量や栄養補給法などの栄養ケアプランについて発表する機会を設け、討論する。

学生に対する評価の方法

項目ごとのレポートで評価する（100%）。

授業計画（回数ごとの内容等）

第 １回　オリエンテーション　臨床栄養学実習を学ぶにあたって
第 ２回　Ⅰ　栄養アセスメント１　－　身体計測　－　様々な測定機器・器具を用いた身体計測
第 ３回　Ⅱ　栄養アセスメント２　－　エネルギー消費量　－　安静時エネルギー消費量の測定、エネルギー基質の算出、タイムスケジュールによるエネルギー消費量の算出
第 ４回　Ⅲ　栄養アセスメント３　－　食事摂取量調査　－　24 時間思いだし法【ロールプレイ】
第 ５回　Ⅳ　栄養アセスメント４　－　臨床検査、臨床診査　－　簡易型自己血糖測定器を用いた 75gOGTT
第 ６回　様々な食品摂取による血糖変化、
第 ７回　臨床検査値（血液、尿）、身体徴候からの病態評価【グループ討議・発表】
第 ８回　Ⅴ　食事計画１　－　栄養補給法（経腸栄養法）　－　PEG についてビデオ学習、経腸栄養剤の試飲、栄養剤投与計画の作り方
第 ９回　経腸栄養剤を用いる患者の症例検討【栄養投与量・方法をグループ討議・発表】
第 10 回　Ⅵ　食事計画２　－　栄養補給法（経口栄養法、嚥下障害食）　－　嚥下障害についてビデオ学習、間接的嚥下訓練、嚥下障害食の検討
第 11 回　嚥下障害患者の栄養管理計画書を作成【グループ討議・発表】、献立の作成
第 12 回　Ⅶ　症例検討（糖尿病１）　－糖尿病食品交換表の使い方、食品構成とは－　アセスメント、栄養量の設定、食品構成【グループ討議・発表】、献立の作成
第 13 回　症例検討（糖尿病２）　アセスメント、栄養量の設定、食品構成【グループ討議・発表】、献立の作成
第 14 回　Ⅷ　診療記録について　栄養指導記録の作成【グループ討議・発表】【栄養指導ロールプレイ】
第 15 回　実習のまとめ

使用教科書

塚原丘美編集　「栄養科学シリーズ NEXT　臨床栄養管理学実習」　講談社サイエンティフィク
日本糖尿病学会編　「糖尿病食事療法のための食品交換表」　文光堂

自己学習の内容等アドバイス

臨床栄養学Ⅰの内容を十分に復習しておく。

［授業科目名］ 臨床栄養学実習Ⅱ		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 立花　詠子
［単位数］ １	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

それぞれの疾病の特徴や代謝異常及び使用薬剤などについて、これまでの学習を復習すると同時に、この実習終了時には教科書などを見ることなく、学生１人で栄養設定や献立作成ができるようになることを目標とする。

授業の概要

臨床栄養学実習Ⅱではすべて症例検討とし、主に具体的な症例から栄養状態や病態の把握、治療計画と食品構成の作成及び献立作成までを学習する。また、献立を調理することで、実際の見た目や味を理解する。あらゆる方面から傷病者の栄養管理を考えられるようになるために、傷病者の栄養必要量や栄養補給法などの栄養ケアプランについて毎回発表する機会を設け、討論する。

学生に対する評価の方法

項目ごとのレポート（約90%）、授業の受講態度（約10%）を総合して評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

すべて症例検討とする。

第１回　　高度肥満症
第２回　　動脈硬化症（脂質異常症）
第３回　　胃切除術後
第４回　　クローン病
第５回　　クローン病の食事（調理実習）
第６回　　肝疾患
第７回　　慢性膵炎
第８回　　慢性膵炎の食事（調理実習）
第９回　　CKD・ネフローゼ症候群
第１０回　慢性腎不全
第１１回　展開食の作成
第１２回　腎不全の食事（調理実習）
第１３回　糖尿病腎症
第１４回　人工透析
第１５回　総合問題
（授業時間外に補講時間を設けて行うこともある）

使用教科書

栄養科学シリーズＮＥＸＴ　臨床栄養管理学実習　塚原丘美編　（講談社サイエンティフィク）
日本糖尿病学会編　「糖尿病食事療法のための食品交換表」　文光堂
「食品成分表」女子栄養大学出版

自己学習の内容等アドバイス

これまでに勉強した臨床栄養学、基礎栄養学、応用栄養学、生理学、生化学、食品学等の内容を含めて、予習復習をすること。

［授業科目名］ 公衆栄養学Ⅱ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 徳留　裕子・川崎　和彦
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

公衆栄養学Ⅱでは栄養疫学ならびに公衆栄養マネジメントの方法について学ぶ。

1. 栄養疫学領域では、疫学の方法と結果の見方について理解する。特に、食事・栄養と健康の関連を探求する栄養疫学における食事摂取量の測定方法や評価方法について説明できる。
2. 地域、職域などに集団を対象に健康問題を解決するための公衆栄養マネジメントについて、基礎的な理論モデルとその応用について理解する。

授業の概要

集団を対象に食事・栄養と健康の関連を観察する栄養疫学における食事摂取量の測定方法や評価の方法について、生活習慣病の事例を挙げて理解を促す。

応用栄養学、栄養教育で学んだ公衆栄養マネジメントの理論モデルを集団に応用する方法の理解や事例をあげて、実際のマネジメントへの応用について講義する。

学生に対する評価の方法

レポート(20%)、確認試験（70%）、受講態度(10%)）などにより総合的に評価する。

原則として再評価も筆記試験とする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　栄養疫学―-概要
第２回　栄養疫学と食事摂取量の測定方法
第３回　食事摂取量の評価方法
第４回　栄養疫学研究の事例
第５回　公衆栄養マネジメント
第６回　公衆栄養アセスメント①
第７回　公衆栄養アセスメント②
第８回　公衆栄養アセスメントのツール
第９回　公衆栄養プログラムの目標設定
第10回　公衆栄養プログラムの計画・実施
第11回　公衆栄養プログラムの評価
第12回　地域特性に対応したプログラムの展開)
第13回　食環境づくりのためのプログラムの展開
第14回　地域集団の特性別プログラムの展開
第15回　まとめと確認テスト

使用教科書

公衆栄養学　日本栄養改善学会監修　徳留裕子　伊達ちぐさ編（医歯薬出版）
食事調査マニュアル　日本栄養改善学会監修（南山堂）

自己学習の内容等アドバイス

栄養疫学は、公衆衛生で学んだ疫学が基本となっているので、復習しておくこと
教科書の予習ならびに資料、教科書の復習をすること。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
公衆栄養学実習		実習	徳留　裕子・川崎　和彦
［単位数］ １	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

本実習では、①管理栄養士の専門性が問われる食事調査法と栄養摂取量の評価法のスキルを修得することと、②地域公衆栄養モデルに準拠したプログラム立案を通して公衆栄養マネジメントについて理解することを目的としている。

②はグループワークで、グループ内で課題をまとめ、最後に課題のプレゼンテーションを行う過程でコミュニケーション能力を身につける。

授業の概要

実習は、上記①は個人ワーク、②は個人またはグループワークで進める。グループワークではディスカッションやロールプレイが求められている。各個人の考えが問われ、それを伝え、グループ内で課題をまとめて、パワーポイントで発表する。

学生に対する評価の方法

レポート(85%)、受講態度(15%)などにより総合的に評価する。

原則として再評価は、課題のレポートとする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１週　食事調査の概要
第２週　秤量食事記録法
第３週　国民健康・栄養調査法
第４週　24 時間思い出し法
第５週　食物摂取頻度調査法
第６週　統計解析　まとめ
第７週　食事調査法のまとめ
第８週　公衆栄養プログラム計画の概要
第９週　地域アセスメント
第 10 週　優先課題の選定と重点目標の設定
第 11 週　評価計画
第 12 週　行動（事業）計画
第 13 週　事例検討
第 14 週　事業の計画書作成と説明
第 15 週　公衆栄養プログラム計画の発表

使用教科書

公衆栄養学ワークブック　徳留裕子　北川郁美　八木典子編集（みらい社）
食事調査マニュアル　日本栄養改善学会監修（南山堂）
公衆栄養学　日本栄養改善学会監修　徳留裕子　伊達ちぐさ編（医歯薬出版）

自己学習の内容等アドバイス

臨地実習で公欠扱いになる学生については、必ず、課題レポートが求められる。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
総合演習Ｉ		演習	塚原　丘美・川崎　和彦 藤木　理代・安達　内美子
［単位数］ １	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

臨地実習の意義とそれぞれの実習先で学ぶべき事柄について十分に理解し、各自が目的を持って実習に臨むことができるようになる。

授業の概要

臨地実習の目的は、実践活動の場における課題発見と解決を通じて、必要とされる専門的知識および技術の統合を図ることにある。従って、臨地実習の教育効果をあげるため、事前に管理栄養士として具備すべき知識および技術を習得するとともに学生自らが実習に対する自主的および意欲的・積極的な態度で取組む姿勢について学ぶ。また、保健所、病院、学校、事業所、福祉施設の管理栄養士から現場における管理栄養士業務の実際についても学ぶ。

学生に対する評価の方法

テスト、授業態度により総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　臨地実習の意義と目的
第２回　保健所・市町村保健センターにおける管理栄養士業務の内容
第３回　保健所・市町村保健センターにおける管理栄養士業務の実際
第４回　病院における管理栄養士業務の内容（１）
第５回　病院における管理栄養士業務の内容（２）
第６回　病院における管理栄養士業務の実際
第７回　学校における管理栄養士業務の内容
第８回　学校における管理栄養士業務の実際
第９回　事業所における管理栄養士業務の内容
第 10 回　事業所における管理栄養士業務の実際
第 11 回　福祉施設における管理栄養士業務の内容（１）
第 12 回　福祉施設における管理栄養士業務の内容（２）
第 13 回　福祉移設における管理栄養士業務の実際
第 14 回　試験と解説
第 15 回　全体評価、まとめ

使用教科書

加糖昌彦、木村友子、井上明美編集　「臨地・郊外実習書（第３版）」　建帛社
プリント

自己学習の内容等アドバイス

授業の内容を必ず復習して、学外講師の講義に臨むこと。

［授業科目名］ 総合演習Ⅱ		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 塚原 丘美・川崎 和彦・藤木　理代 岡田 希和子・安達　内美子 立花 詠子・南　亜紀
［単位数］ 1	［開講期］ ３年次後期～４年次前期	［必修・選択］ 必修	備考 2015 年度 4 年次前期まで 継続履修のこと

授業の到達目標及びテーマ

実習で学んだ事柄を発表することにより、実習内容を振り返って整理する。また、他の学生と討議することで管理栄養士の業務内容や役割について考えることも大切な目的である。

授業の概要

臨地実習をとおして学んだことに対して、自己評価およびまとめについて発表を行うとともに学生間で、実習の目的達成度等について評価を行う。

学生に対する評価の方法

授業態度により総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

【前半】　３年次後期（第１回～第１０回）　大教室にて３年生全員で行う。

臨地実習を行ったグループ順に実習内容、反省点、予習しておくべき事柄などを発表し、質疑応答を行う。

第１回　臨地実習の自己評価および実習のまとめについて発表（主に保健所・保健センター）
第２回　〃
第３回　〃
第４回　〃
第５回　臨地実習の自己評価および実習のまとめについて発表（主に事業所、学校）
第６回　〃
第７回　〃
第８回　臨地実習の自己評価および実習のまとめについて発表（主に福祉施設、病院）
第９回　〃
第10 回　〃

【後半】　４年次前期（第１１回～第１５回）　別々の教室でクラスごとに行う。

クラスごとに発表会を行う。前半で発表していない実習内容や管理栄養士の業務内容について、一人ずつ順に発表・質疑応答を行う。

第 11 回　臨地実習で学習したこと、管理栄養士のあり方について発表
第 12 回　〃
第 13 回　〃
第 14 回　〃
第 15 回　〃

使用教科書

なし

自己学習の内容等アドバイス

次の臨地実習に向けて、発表者の反省点などを参考にして準備する。

［授業科目名］ 管理栄養士実習		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 塚原 丘美・川崎　和彦・藤木 理代 岡田 希和子・安達　内美子 立花　詠子・南　亜紀
［単位数］ ４	［開講期］ ３年次～４年次前期	［必修・選択］ 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

実践活動の場で課題発見、解決をとおして、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識及び技能を修得させることを目的としている。実習の種類及び単位は「臨床栄養学」「公衆栄養学」「給食経営管理論」で４単位以上とし、「給食の運営」に係る校外実習の１単位を含むものとしている。

授業の概要

実習施設は管理栄養士が専従する病院・介護老人保健施設等の医療提供施設（臨床栄養学）、保健所・保健センター又はこれに準ずる施設（公衆栄養学）、事業所等の集団給食施設（給食経営管理論）で実習を行うこととする。なお、実習にあたっては、その教育効果が上がるように総合演習の授業において事前及び事後評価を行うこととしている。

学生に対する評価の方法

各施設における実習の状況及び実習内容等の発表等、総合評価で行う。

授業計画（回数ごとの内容等）

１．【必須】臨床栄養学：１０日間で１日９時間の９０時間（２単位）を原則とする。
「臨床栄養学」の実習については、病院、介護老人保健施設等において、専従の管理栄養士から９０時間以上の指導を受ける。なお、実習の目的としては、①栄養アセスメントに基づいた栄養ケアプランの作成、実施、評価に関する総合的なマネジメントの考え方を理解する。②栄養状態の評価、判定、栄養補給、栄養教育、食品と医薬品の相互作用について修得する。③医療・介護制度やチーム医療における管理栄養士の役割について理解する。

２．【選択】公衆栄養学：５日間で１日９時間の４５時間（１単位）を原則とする。
「公衆栄養学」の実習については、保健所、保健センター等において、専従の管理栄養士から４５時間以上の指導を受ける。なお、実習の目的としては、①地域や職域等の健康・栄養問題とそれえも取り巻く自然、社会、文化的要因に関する情報を収集・分析し、それらを総合的に評価・判定する能力を養う。②保健・医療・福祉・介護システムの中で、栄養上のハイリスク集団の特定とともにあらゆる健康・栄養状態の者に対し適切な栄養関連サービスを提供するプログラムの作成・実施・評価の総合的なマネジメントに必要な理論と方法を修得する。③各種サービスやプログラムの調整・人的資源など社会的資源の活用、栄養情報の管理、コミュニケーションの管理などの仕組みについて理解する。

３．【選択】給食経営管理論（特定給食施設）：５日間で１日９時間の４５時間（１単位）を原則とする。
「給食経営管理論（特定給食施設）」の実習については、病院、介護老人保健施設、社会福祉施設、児童福祉施設、学校、事業所等において、専従の管理栄養士から、４５時間以上の指導を受ける。なお、実習の組み立てとしては、給食システムの解説と見学 ⇒ 課題の計画づくり ⇒ 課題への取り組み ⇒ 整理と検討 ⇒ 検討会・意見交換会 ⇒ 発表会である。

４．【必須】給食の運営（特定給食施設）の実習については、病院、介護老人保健施設、社会福祉施設、児童福祉施設、学校、事業所等において、専従の管理栄養士または栄養士から、４５時間以上の指導を受ける。なお、実習の組み立てとしては、給食システムの解説と見学 ⇒ 献立作成 ⇒ 食数処理 ⇒ 食材料管理 ⇒ 調理・配膳 ⇒ 討論会・反省会である。

使用教科書

加糖昌彦、木村友子、井上明美編集　「臨地・郊外実習書（第３版）」　建帛社　　及びプリント等

自己学習の内容等アドバイス

総合演習Ｉの授業内容を復習すること。

［授業科目名］ 分子栄養学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 池田　彩子
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

栄養素の代謝や生体に及ぼす機能およびその発現機構を、分子レベルで理解することによって、人間の健康の保持・増進と疾病の予防・治療への応用力を養い、管理栄養士として幅広い分野で活躍できる栄養学の基礎知識を修得することを目標とする。

授業の概要

本講義では、はじめに酵素活性調節、細胞内情報伝達システム、遺伝子発現調節の概要について述べる。次に、エネルギー代謝において中心的な役割を果たしている栄養素である糖質と脂質を取り上げ、それらの代謝調節の詳細を解説する。

学生に対する評価の方法

授業内容の理解度を確認するために筆記による期末試験を行い、その結果で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス
第２回　摂食と消化ホルモン
第３回　糖の消化吸収とインスリンの分泌
第４回　臓器への糖の取り込み
第５回　代謝調節のしくみ（1）　アロステリック調節
第６回　代謝調節のしくみ（2）　リン酸化修飾による調節と遺伝子発現調節
第７回　臓器による糖代謝の違い
第８回　グリコーゲン代謝
第９回　フルクトース・ガラクトース代謝
第10回　脂質の消化吸収とリポたんぱく質
第11回　トリアシルグリセロールと脂肪酸の代謝（1）
第12回　トリアシルグリセロールと脂肪酸の代謝（2）
第13回　コレステロール代謝
第14回　糖・脂質代謝におけるビタミンのはたらき
第15回　試験とまとめ

使用教科書

池田彩子・石原健吾・小田裕昭 編著
「栄養科学ファウンデーションシリーズ４　生化学・基礎栄養学」朝倉書店

自己学習の内容等アドバイス

毎回予習として、生化学の教科書の該当箇所を読んでから授業に臨むこと。また、毎回の授業では、内容に関連する問題を提示するので、授業後には復習として問題の解答とその理由を説明できるようにしておくこと。

［授業科目名］ 食品栄養科学英語		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 仲川　政宏
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

１．英文の食品栄養科学に関する文献、英文の調理レシピーや科学技術書を読むことができる。
２．簡単な英文の食品栄養科学資料、食品栄養科学発表用資料を作成することができる。
３．簡単な英文の指示書、取扱説明書等を訳し、其に基づき実施できる。
４．簡単な英文で海外の人達と情報を交換できる。

授業の概要

初期からは易しい基礎的な食品栄養科学に関する英文読解から始め、慣れるに従い中級の英文を理解し、後期には専門の食品栄養科学に関わる英文の読解力や表現力を増す訓練を施す。特に段階を踏み基礎専門用語の語彙を増すようにして、専門書になじめるようにする。

学生に対する評価の方法

平常の授業態度（20%）、授業中随時の Q&A（30%）、事前配布の食品栄養科学に関する英文文献の翻訳とまとめのレポート（50%）により総合評価をする。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義：食品栄養科学英語の必要性、語彙力向上、科学英語を学ぶための参考書などを紹介
第２回　講義：食品栄養科学英文読解と文章作成のための文脈のつかみ方
第３回　講義・輪読：食品と調理の基本単語を覚え、短い文献を翻訳１
第４回　講義・輪読：食品と調理の基本単語を覚え、短い文献を翻訳２
第５回　講義・輪読：栄養科学の基本単語を覚え、短い文献を翻訳１
第６回　講義・輪読：栄養科学の基本単語を覚え、短い文献を翻訳２
第７回　ビデオ鑑賞：英語によるメインディシュ料理番組：要訳
第８回　ビデオ鑑賞：英語によるデザート料理番組：要訳
第９回　ビデオ鑑賞：英語による祝日料理番組：要訳
第 10 回　講義・輪読：栄養素の基礎知識の文献を翻訳
第 11 回　講義・輪読：機能性成分の文献を翻訳
第 12 回　講義・輪読：代謝のしくみの文献を翻訳
第 13 回　講義・輪読：健康な身体のための食品の文献を翻訳
第 14 回　演習；英文科学発表用資料の作成
第 15 回　演習：食品栄養科学に関する問い合わせ：E-mail、手紙、履歴書作成など：試験レポート提出

使用教科書

事前配布資料、プロジェクターで示す資料、ビデオなどを使用。　第８回と最終回にそれぞれ講義内容を受講生のメモリーに配布。

自己学習の内容等アドバイス

課外で受講生が選んだ食品栄養科学の英文資料を読む習慣をつけ、各人が理解できない構文についてはメールなどで質問を受け、添削して回答する。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
栄養情報処理演習		演習	下方　浩史
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

大学院、研究施設などで管理栄養士として、より高度で専門的知識を学ぶに当たり「情報を正しく判断する能力」、「情報を得る能力」、「情報を整理し伝える能力」といった基本的な能力が不可欠となる。本演習では管理栄養士として必要となる上記の能力を学習し、利用できるようにすることを目的とする。

授業の概要

本演習では、特に大学院、研究施設を志す者に対し、管理栄養士として必要となる情報処理の基礎能力を培うことを目的としている。また、現在情報処理にはパソコンは必要不可欠であり、これを適切に操る能力が無ければスタートラインに立つことさえ困難である。本演習では「情報を正しく判断する能力」、「情報を得る能力」、「情報を整理し伝える能力」についてパソコン操作を中心に下記の計画の通り演習を行う。演習の最後に、上記の能力を活かした課題を作成し、発表を行う。

学生に対する評価の方法

受講態度・授業への参加態度（60%程度）、その他課題（40%程度）

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　「オリエンテーション」：受講上の諸注意、講義概要、成績評価法について説明。受講者のパソコン能力の確認）
第２回　「情報を正しく判断する能力 1」：管理栄養士に必要な統計学１
第３回　「情報を正しく判断する能力 2」：管理栄養士に必要な統計学２
第４回　「情報を正しく判断する能力 2」：管理栄養士に必要な統計学３
第５回　「情報を得る能力 1」：情報の種類と情報の集め方
第６回　「情報を得る能力 2」：実際に情報を集める
第７回　「情報を整理し伝える能力 1」：Microsoft Word の使い方
第８回　「情報を整理し伝える能力 2」：Microsoft Excel の使い方１
第９回　「情報を整理し伝える能力 3」：Microsoft Excel の使い方２
第 10 回　「情報を整理し伝える能力 4」：Microsoft Power Point の使い方１
第 11 回　「情報を整理し伝える能力 5」：Microsoft Power Point の使い方２
第 12 回　「情報を整理し伝える能力 6」：Microsoft Power Point の使い方３
第 13 回　「課題 1」：課題の作成１（情報を判断・獲得・整理する）
第 14 回　「課題 2」：課題の作成２（情報を判断・獲得・整理する）
第 15 回　「課題 3」：課題の発表（情報を伝える）

使用教科書

なし。授業内で適宜プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

受講人数および受講者のパソコン能力に授業計画を合わせていきます。

［授業科目名］ 臨床医学特論		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 下方　浩史
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期・４年次前期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

授業の到達目標及びテーマ

【一般目標】栄養サポートが必要な疾患について，その病態，臨床検査，治療，予後などの理解を深めるために，実際の症例をもとに管理栄養士としての実践力を高める。

【到達目標】

1 国家試験に出題されている症例問題を中心に，症候・徴候および検査成績が解釈できる。

2 解釈した結果をもとに，症例の問題点を列挙できる。

3 Problem List をもとに，問題解決の方法を検討できる。

4 症例に該当する疾患の典型的な病態，診断，治療，予後について説明できる。

授業の概要

症例にある現病歴、症状・徴候、血液検査成績をもとに、病態の理解法を解説した上で、医学的および臨床栄養学的な意味づけを理解できるようにする。

学生に対する評価の方法

授業への参画態度(10%)と期末試験（90%）の成績を総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回 糖尿病
第２回 脂質異常症
第３回 肥満症・メタボリックシンドローム
第４回 内分泌疾患
第５回 痛風・高尿酸血症、代謝異常症
第６回 消化器疾患
第７回 肝胆膵疾患
第８回 高血圧症・心臓病・脳血管疾患
第９回 呼吸器疾患
第 10 回 腎・尿路疾患
第 11 回 血液・造血器疾患
第 12 回 運動器疾患
第 13 回 精神・神経疾患
第 14 回 嚥下障害・褥創・低栄養・老年症候群
第 15 回 授業のまとめと試験

使用教科書

栄養科学イラストレイテッド　臨床栄養学　疾患別編（羊土社）

自己学習の内容等アドバイス

各授業で解説する疾患について、教科書等で事前に理解しておくこと。

［授業科目名］ 栄養ケア・マネジメント演習		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 塚原　丘美
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

管理栄養士は医療施設に入院中の患者に対して「栄養管理計画書」、高齢者福祉施設の利用者に対して「栄養ケア計画書」を作成しなければならない。さらに、平成20年度から始まった特定保健指導の積極的支援対象者に対して「特定保健指導支援計画書」を作成しなければならない。この授業を通じて、これらの栄養ケアプランを作成できる実践的な技術を身につける。

授業の概要

臨床栄養学実習Ⅰ・Ⅱでは、代表的な疾患についての栄養管理計画を学習するので、この演習ではより特別な対象者に対する栄養管理計画を学習する。また、より実践的な技術を身につけるために、管理栄養士として職場で使用する形式（栄養管理計画書、栄養ケア計画書、特定保健指導支援計画書）で栄養ケアプランを作成する。必須科目の臨床栄養学の講義・実習よりも少しハイレベルな授業を行う。

学生に対する評価の方法

演習時の提出物（50%）と授業態度（50%）で評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第　1回　栄養ケア・マネジメント（講義）
　　～　栄養管理とは、栄養管理計画書・栄養ケア計画書の作成について　～

第　2回　高齢者の栄養管理（講義）
　　～　高齢者の低栄養予防、褥瘡の評価について　～
第　3回　　症例１　PEM患者の栄養ケア計画書を作成
第　4回　　症例２　褥瘡患者（1）の栄養ケア計画書を作成
第　5回　　症例３　褥瘡患者（2）の栄養ケア計画書を作成
第　6回　　症例４　嚥下障害患者の栄養ケア計画書を作成
第　7回　　症例５　COPD患者の栄養ケア計画書を作成

第　8回　癌、周術期の栄養管理（講義）
　　～　癌患者の外科的療法と内科的療法に対する栄養管理について　～
第　9回　　症例６　癌患者の化学療法時の栄養管理計画書を作成
第 10回　　症例７　癌患者の術後の栄養管理計画書を作成

第 11回　静脈栄養法（講義）
　　～　電解質の補正、輸液による栄養補給、病態に対する静脈栄養法について　～
第 12回　　電解質補正のための輸液量の算出（練習問題）
　　　　　症例８　経腸栄養不可の患者（急性膵炎）の栄養管理計画書を作成
第 13回　　症例９　経腸栄養不可の患者（大腸切除術後）の栄養管理計画書を作成

第14回　特定健診・保健指導について（講義）
　　～　特定健診制度、特定保健指導支援計画書の作成について　～
第15回　　症例１０　特定健診受診者（積極的支援）の特定保健指導支援計画書を作成

使用教科書

中坊幸弘、寺本房子編集　「栄養科学シリーズNEXT　臨床栄養管理学総論」　講談社サイエンティフィク
寺本房子、市川寛編集　「栄養科学シリーズNEXT　臨床栄養管理学各論」　講談社サイエンティフィク

自己学習の内容等アドバイス

臨床栄養学の講義と実習を復習しておく。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
家族心理学		講義	新谷　裕
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
２	３年次後期	選択	

授業の到達目標及びテーマ

近年、学校教育に対する保護者の姿勢は様々である。その中に、学校教育に対して過干渉逆に無関心な保護者の存在は、教師の教育熱を低下させかねない。本講座では、「保護者の心理的支援を行っていくという姿勢を身に着ける」をテーマとして、各自が保護者との良好な信頼関係を構築するため必要な資質能力を向上させることを目標とする。

授業の概要

本講座では、カウンセイリングマインドの育成を図る目的で、構成的エンカウンターやアサーション等の手法を学び、保護者を対象としたコミュニケーションの取り方などの実習やエクササイズを取り入れて実施していく。

学生に対する評価の方法

パフォーマンステスト（30%）、まとめの「評価テスト」（40%）と３回の「レポート」（30%）は自由記述問題で行う。

授業計画（回数ごとの内容等）

第1回　学校における心理的支援・適性検査「自己理解」
第2回　日常生活に生きるカウンセリング・学習アンケート１
第3回　学校カウンセリング
第4回　構成的エンカウンターとは・評価「レポート１」
第5回　構成的エンカウンター「保護者会での活用実践」
第6回　構成的エンカウンター「エクササイズの選び方」
第7回　父性原理と母性原理・評価「レポート２」
第8回　教師のカウンセリングマインド
第9回　親の心と教師の心
第10回　親と教師の信頼関係・評価「レポート３」
第11回　叱れない親と教師
第12回　思春期の親子関係・学習アンケート２
第13回　保護者面談・親面談の進め方・評価（パフォーマンステスト・その１）
第14回　困った親との関わり方・評価（パフォーマンステスト・その２）
第15回　家族心理学のまとめ「学校カウンセリングへの３つの提言」・評価テスト

使用教科書

教科書は使用しない。適宜、プリントを配布する。
【参考図書】児童心理（金子書房）、教育展望（教育調査研究所）、エンカウンターで学校が変わる（図書文化）「教師への道程　第３章」（図書文化）

自己学習の内容等アドバイス

次回の課題の情報を、新聞やインターネット等で収集する。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
栄養教諭特論		講義	山田　敏子
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

教師は教育の専門家として絶えず研究と修養に努め、優れた専門性と豊かな人間性を身に付けるための努力が求められている。この授業では、専門性と豊かな人間性を高めるための総合的な学びを行う。

栄養教諭の教育課程における教育活動の内容や必要とされる資質能力の習得、及び実践的な指導法を身につけることを到達目標とする。また教育の今日的課題にはつねに関心を持ち教師の視点で考察し、自主的に講義内容を定着・深化させるように心がけることも目標とする。

授業の概要

この講座では、①専門教科に関する領域、②教職教養に関する領域、③自己理解に関する領域、④生徒指導に関する領域、⑤新しい教育課題に関する内容などを含めて総合的に授業を行う。また、講義のほか事例研究やグループ討論などの実践演習や体験活動、表現活動を多く取り入れた授業を行う。

学生に対する評価の方法

受講態度・関心意欲（約２０%）、課題・発表（約２０%）、試験の結果（６０%）などで総合的に評価を行う。特に、試験の欠席は原則として認めないので注意すること。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス(授業の進め方、子どもの基本的生活習慣、教育課題)
第２回　教育課程の基本原理及び学校の管理・運営
　　　　教育基本法、教育諸法規
第３回　学習指導要領における学習活動の位置づけ
第４回　食育白書及び食育に関する諸答申からの考察
第５回　食育と基本的生活習慣、学習活動の関係
第６回　栄養教諭の職務の在り方
第７回　教職教養(自己理解、生徒理解)-①
第８回　教職教養(資質・能力、服務、義務、研修)-②
第９回　食育指導の事例研究-①(集団討論)
第 10 回　食育指導の事例研究-②(集団討論)
第 11 回　食育指導の授業づくり(集団討論)
第 12 回　食育指導の実践(学級活動)(プレゼンテーション)
第 13 回　教育の今日的課題への実践的対応-①
第 14 回　教育の今日的課題への実践的対応-②
第 15 回　授業の解説とまとめ及び総括的評価テスト

使用教科書

なし。その都度レジュメを配付する。

自己学習の内容等アドバイス

　各授業のまとめと課題ワークを提示するので自主学習をしておくこと。また、予習・復習をして講義内容を定着・深化させること。提出を指示する課題は、期日までに提出すること。

［授業科目名］ 食物とアレルギー		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 和泉　秀彦
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

タンパク質は、生体を構成している成分の中で最も多く、様々な機能を果たす。タンパク質の摂取なしに生命の維持は考えられない。しかし、そのタンパク質の摂取によって食物アレルギーは引き起こされることがある。そこで、この講義では、タンパク質の基本的な性質を理解し、食物アレルギーの発症およびその抑制について理解することを到達目標とする。

授業の概要

食物アレルギーを引き起こすタンパク質の性質、食物アレルギーの発症機構（免疫反応含む）とその抑制（除去、低アレルゲン食品、免疫療法）、さらに食物アレルギーの現況とその対応について講義する。

学生に対する評価の方法

レポートにより評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　アミノ酸
　　　　タンパク質の構造
第２回　タンパク質の分類
　　　　タンパク質の変性
第３回　タンパク質の消化
第４回　免疫反応１
第５回　免疫反応２
第６回　食物アレルギーの発症機構１
第７回　食物アレルギーの発症機構２
第８回　食物アレルギーの抑制
第９回　食品の低アレルゲン化
第 10 回　食物アレルギーの疫学、症状と治療（アナフィラキシーを含む）
第 11 回　食物アレルギーの検査と診断（食物経口負荷試験）
第 12 回　食品別のアレルギー対応
第 13 回　栄養指導（食品表示制度）
第 14 回　免疫寛容の誘導と経口免疫療法
第 15 回　食物アレルギーの社会的対応

第 10～15 回の講義では、あいち小児保健医療総合センターアレルギー科の医師が講義協力者として参加

使用教科書

認定 NPO 法人　アレルギー支援ネットワーク編　食物アレルギーの基礎と対応　みらい

自己学習の内容等アドバイス

食品学ⅠおよびⅡの内容をよく復習しておくこと。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
食生態論		講義	安達　内美子
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

地域で生活する人々の多様な「食の営み」を構造的にとらえ、人々がそれぞれの生活の質向上につながるような望ましい食生活やライフスタイル、さらにそれを実現しやすい食環境のあり方について考える力を形成する。

授業の概要

「食の営み」を構造的にとらえる手がかりとして、人々の望ましい食生活やライフスタイル、さらにそれを実現しやすい食環境について、個人レベル・家族レベル・地域レベル・・・という階層、人間の食行動の対象物である食物の提供の側面と食情報を提供する側面の両面と両面の関係の構造や、各階層内と階層間の循環について学習する。

学生に対する評価の方法

平常の受講態度（20%）、授業時に課する栄養教育プログラムの課題の提出状況及び内容（20%）、
最終に実施する試験（60%）により、総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業の進め方について
第２回　食の営みを構成するもの：人間の食行動の特徴
第３回　食の営みの成り立ち：食の循環とはどのようなことなのか
第４回　世界の食生活史：自然、社会の変化と共にどのように食生活が変化してきたのか
第５回　日本の食生活史：私達の食生活はどのように形成されてきたのか
第６回　食生活からみた食物：食物が食生活に与える影響
第７回　食生活と環境との関わり：環境が食生活に与える影響
第８回　人間と食文化：よりよく生きるためにどのように食べるのか
第９回　食行動とその個人内要因：食行動の中核をなす食知識・食態度
第 10 回　食生活と対人関係：人とのかかわりの中で自分なりの食生活をどう営むか
第 11 回　食生活と組織：人々がそれぞれの生活の質向上につながるような望ましい食生活を営むための組織の役割
第 12 回　食生活とコミュニティ：食生活の質の向上とソーシャルキャピタルの醸成
第 13 回　フードシステムからの食環境：フードシステムから食環境をとらえ、より良い食環境を考える
第 14 回　食情報システムからの食環境：食情報システムから食環境をとらえ、より良い食環境を考える
第 15 回　試験とまとめ

使用教科書

足立己幸編著　秋山房雄共著　『食生活論』　（医歯薬出版）
その他　必要に応じて資料配布、参考図書紹介等を行う。

自己学習の内容等アドバイス

普段の生活の中での自分と食と環境とのつながりを考えてみる。
世界各地の食に関する問題や、改善への取り組みについて、その構造を考えてみる。

［授業科目名］ 地域コミュニケーション論		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 徳留　裕子・川崎　和彦
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

地域の人々の健康づくりを実現するうえで、
１．地域社会とコミュニケーションの必要性について理解する。
２　住民参加を促す各自治体の取り組みや地域情報の伝達について学ぶ。
３　社会参加を促す取り組みや地域情報の伝達手法について考える。

授業の概要

個人が健康を実現するうえで、健康を支え守るための地域社会の存在は欠かせない。
その地域社会は、一人ひとりが主体的に社会参加しながら、支えあい、人とのつながりを深めることが重要である。本講義では、社会参加するためのコミュニケーションを始め、ソーシャルキャピタルや各自治体の取り組みを学ぶとともに地域社会の活性化について考える。

学生に対する評価の方法

ミニレポート（50%）、プレゼンテーション（50%）による総合評価。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　地域社会とコミュニケーション（Ⅰ）
第２回　　地域社会とコミュニケーション（Ⅱ）
第３回　　地域社会の現状
第４回　　ソーシャルキャピタルという考え方
第５回　　自治体の取り組み（Ⅰ）公民館の役割
第６回　　自治体の取り組み（Ⅱ）地域ボランティア活動
第７回　　自治体の取り組み（Ⅲ）Ｂ級ご当地グルメ・ゆるキャラの取り組み
第８回　　自治体の取り組み（Ⅳ）地域ケーブルテレビ・広報誌等の取り組み
第９回　　地域社会との関わり
第 10 回　情報発信と伝達方法
第 11 回　地域情報としての発信媒体を検討・作成する。（Ⅰ）
第 12 回　地域情報として発信媒体を検討・作成する。（Ⅱ）
第 13 回　検討作成した地域情報発信媒体のプレゼンテーション資料を作成する。（Ⅰ）
第 14 回　検討作成した地域情報発信媒体のプレゼンテーション資料を作成する。（Ⅱ）
第 15 回　プレゼンテーションの発表

使用教科書

特に使用しない。必要に応じて資料を配布する。

自己学習の内容等アドバイス

住所地の自治体の発行する広報誌やホームページを閲覧し、地域情報について知っておくこと。

［授業科目名］ 食品機能論		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 山田　千佳子
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

食品は、人間の生存を支える重要な因子のひとつである。従来、食品の品質は主として、栄養特性（一次機能）および嗜好特性（二次機能）から評価されてきた。しかし、食品には“第三の機能”として生体防御、疾病予防と回復、体調リズム調節、肥満防止、老化の抑制などに関係する生体調節機能成分が含まれている。この授業では、これら食品の機能性について、生体との関連を含めた知識を修得することを目標とする。

授業の概要

我々の健康維持の観点から問題となる活性酸素、メタボリックシンドロームを含めた生活習慣病などの要因と、それらを防ぐために見出されている食品成分について、これまでの研究結果から考察する。また、関連する特定保健用食品についても言及する。

学生に対する評価の方法

レポート（80%）及び授業態度（20%）により評価する。なお、本授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　食品機能学とは、生活習慣病と特定保健用食品について
第２回　おなかの調子を整える食品（乳酸菌）
第３回　おなかの調子を整える食品（オリゴ糖・食物繊維）
第４回　コレステロールが高めの方の食品
第５回　血中中性脂肪、体脂肪が気になる方の食品
第６回　血圧が高めの方の食品
第７回　ミネラルの吸収を助ける食品
第８回　骨の健康が気になる方の食品
第９回　虫歯の原因になりにくい食品と歯を丈夫で健康にする食品
第 10 回　血糖値が気になり始めた方の食品
第 11 回　活性酸素とは、活性酸素の生体成分への影響
第 12 回　抗酸化物質と抗酸化機能食品
第 13 回　神経系に及ぼす機能性成分
第 14 回　アミノ酸の機能性
第 15 回　学習のまとめ

使用教科書

青柳康夫編著　Ｎブックス　食品機能学　建帛社

自己学習の内容等アドバイス

テレビや雑誌などで聞かれる食品の機能に関する情報を収集し、食品中のどんな成分が人体のどこに作用しているのかについて興味を持つこと。また、食品学ⅠおよびⅡの内容をよく復習しておくこと。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
健康食品とサプリメント		講義	須崎　尚・山本　勝彦
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	３年次前期	選択	

授業の到達目標及びテーマ

本講義では健康食品、サプリメントについての正しい知識を習得することをテーマとし、有効で安全な使用方法について考察する態度を身に付けることを到達目標とする。また、消費者の身近で適切なアドバイスができる者として「健康食品管理士」の資格取得も目指す。

授業の概要

「健康食品」「サプリメント」は、広く私たちの日常生活に取り入れられているが、明確な定義がないまま中には有効な成分が少なかったり、逆に認められていない製薬成分が含まれていたために健康被害が起る例がある。また、疾病別治療薬とその疾病の予防に寄与する健康食品との相互作用、両者の併用で重複する薬理学的効果並びに薬理効果低減などの不具合を起こす可能性がある。本講義では健康食品・サプリメントに対して管理栄養士としてどのように対処するかを学ぶ。

学生に対する評価の方法

レポート（80%）及び授業への参加態度（20%）により総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　健康食品学総論　食品の機能
第２回　健康食品学総論　健康食品の現状
第３回　健康食品学総論　健康食品の問題点
第４回　健康食品及び喫煙と医薬品の相互作用
第５回　疾病別治療薬と保健機能食品との相互作用
第６回　健康食品と医薬品の相互作用に関する応用問題解説
第７回　健康食品の安全性　食品表示、食品添加物、食中毒、残留農薬等
第８回　関係法規　食品衛生法、JAS 法、健康増進法、薬事法など
第９回　臨床検査と健康食品（臨床検査総論）
第 10 回　保健機能食品
第 11 回　栄養機能食品
第 12 回　いわゆる健康食品
第 13 回　疾患と健康食品
第 14 回　健康食品と健康被害
第 15 回　まとめ

第４回〜6 回を山本が、それ以外は須崎が担当する

使用教科書

健康食品学、問題解説集（いずれも健康食品管理士認定協会）

自己学習の内容等アドバイス

次回の範囲を教科書等で調べておくこと。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
健康食品とサプリメント		講義	須崎　尚・山本　勝彦
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
2	4年次前期	選択	

授業の到達目標及びテーマ

本講義では健康食品、サプリメントについての正しい知識を習得することをテーマとし、有効で安全な使用方法について考察する態度を身に付けることを到達目標とする。また、消費者の身近で適切なアドバイスができる者として「健康食品管理士」の資格取得も目指す。

授業の概要

「健康食品」「サプリメント」は、広く私たちの日常生活に取り入れられているが、明確な定義がないまま中には有効な成分が少なかったり、逆に認められていない製薬成分が含まれていたために健康被害が起る例がある。また、疾病別治療薬とその疾病の予防に寄与する健康食品との相互作用、両者の併用で重複する薬理学的効果並びに薬理効果低減などの不具合を起こす可能性がある。本講義では健康食品・サプリメントに対して管理栄養士としてどのように対処するかを学ぶ。

学生に対する評価の方法

レポート（80%）及び授業への参加態度（20%）により総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第1回　健康食品学総論　食品の機能
第2回　健康食品学総論　健康食品の現状
第3回　健康食品学総論　健康食品の問題点
第4回　健康食品の安全性　食品表示、食品添加物、食中毒、残留農薬等
第5回　関係法規　食品衛生法、JAS法、健康増進法、薬事法など
第6回　臨床検査と健康食品（臨床検査総論）
第7回　健康食品及び喫煙と医薬品の相互作用
第8回　疾病別治療薬と保健機能食品との相互作用
第9回　健康食品と医薬品の相互作用に関する応用問題解説
第10回　保健機能食品
第11回　栄養機能食品
第12回　いわゆる健康食品
第13回　疾患と健康食品
第14回　健康食品と健康被害
第15回　まとめ

第7回～9回を山本が、それ以外は須崎が担当する

使用教科書

健康食品学、問題解説集（いずれも健康食品管理士認定協会）

自己学習の内容等アドバイス

次回の範囲を教科書等で調べておくこと。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
衛生管理システム		講義	岸本　満
[単位数] ２	[開講期] ３年次後期	[必修・選択] 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

食品を安全に製造、調理し提供する仕組みづくりが食品業界で盛んに行われている。FSSC2200,ISO22000 の認証、厚生労働省「総合衛生管理製造過程」による認証、地方自治体による認証など、いわゆる第 3 者機関による認証を取得し、自組織の安全衛生管理のレベル向上と消費者からの信頼を得る努力をしている。病院、福祉、学校、産業給食などの調理施設、食品製造、流通、小売の現場においても食中毒事故対策や食品事故対策にHACCPによる衛生管理が導入されている。HACCP プラン作成などの演習を通じて、衛生管理ための実践力を身につけることが目標である。

授業の概要

この科目は一般的衛生管理のノウハウと「HACCP システム」の概念を学ぶ。そのうえで衛生管理システム構築の演習を行い、最後に食品安全マネジメントシステムの概念、意義、価値について理解する。(受講生の人数により授業内容および授業形態を変更することがある。）第 10～12 回授業は 11 月末～12 月の土曜日に開催予定の「食品安全マネジメント初級講座HACCP導入研修(9：30-17：30)」として 1 日にまとめて開講する。

学生に対する評価の方法

課題レポートの提出 90%以上であること。その他提出物、授業態度などで総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　食品安全と管理栄養士のしごと　/　＊予習課題提示：ケーススタディ
第２回　ケーススタディ　/　課題の発表、提出
　　　　ノロウイルスによる感染症（ケース１～３）、開封した食品による食中毒の訴え（ケース 1～2)
　　　　＊予習課題提示：事件事例研究
第３回　食中毒事件の事例研究　/　課題の発表、提出　/　＊予習課題提示：5S または 7S とは
第４回　一般的衛生管理プログラム（1）/衛生標準作業手順書　教科書ｐ.2-10
　　　　課題の発表、提出　/　＊予習課題の提示：SSOP 作成の第 1 ステップ
第５回　一般的衛生管理プログラム（2）/衛生標準作業手順書　教科書ｐ.10-21
　　　　課題の発表、提出　/　＊予習課題の提示： SSOP の作成
第６回　衛生標準作業手順書（SSOP）課題の発表　、提出　　　＊予習課題の提示：洗浄殺菌の重要性
第７回　洗浄殺菌　教科書ｐ.22-29　/　課題の発表、提出
　　　　＊予習課題の提示：HACCP と PRPS/7 原則と 12 手順
第８回　HACCP（1）　教科書ｐ.30-37
　　　　課題の発表、提出　/　＊予習課題の提示：調理での HACCP；調理レシピを基に HA と CCP を行う。
第９回　HACCP（2）　教科書ｐ.38-42
　　　　課題の発表、提出　/　＊予習課題の提示：豆腐製造を例としたプラン作成　提示
第 10 回　HACCP の基礎・基本について；「食品安全マネジメント初級講座 HACCP 導入研修」
第 11 回　一般的衛生管理の重要性について；「食品安全マネジメント初級講座 HACCP 導入研修」
第 12 回　グループワーキング（HACCP 演習)；「食品安全マネジメント初級講座 HACCP 導入研修」
第 13 回　HACCP プランの作成　/　豆腐製造を例としたプラン作成/＊予習課題の提示
第 14 回　弁当惣菜の微生物検査のポイント　考察力例題 1～3
　　　　　考察力例題の解説　/　弁当惣菜の特徴と危害微生物　/　弁当惣菜の微生物検査のポイント
　　　　＊予習課題の提示：ISO とは　ISO22000 とは　FSSC22000 とは
第 15 回　食品安全ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄｼｽﾃﾑ（ISO22000/FSSC22000）　/　宿題・課題の発表、提出

使用教科書

管理栄養士のための大量調理施設の衛生管理　　幸書房　（矢野俊博、岸本満著）

自己学習の内容等アドバイス

食品製造、流通、中食、外食、業界、給食サービスなどで食品衛生、食品安全に係る業務に就きたい学生は受講すると良い。食品微生物学の教科書「食品の安全性」（東京教学社）を事前に目を通すと良い。また、「食と健康」、「食品衛生研究」、「HACCP」などの食品衛生に関する専門雑誌に毎月目を通すと良い。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
生化学Ⅱ		講義	田村　明
［単位数］	［開講期］	［必修・選択］	備考
２	４年次前期	必修	

授業の到達目標及びテーマ

生化学は管理栄養士国家試験の中核に位置づけられる科目と考えます。既に1～2年次に生化学は終了していますが、再度、基礎から復習をしてその知識を確かなものにすることがこの授業の目標です。

授業の概要

生命を支える糖質や脂質、タンパク質あるいは核酸などの構造と機能、およびそれらの代謝（主として異化代謝、一部同化代謝）を中心に復習します。

学生に対する評価の方法

知識を確かなものにすることが目標なので、それを確認するため毎回、国家試験や模試の過去問を織り交ぜた小テストを実施します（60%）。さらに学期末に実施する試験（40%）などより総合的に評価（不合格者には再評価を実施します）。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　はじめに： 授業運営の方法と講義内容の説明

第２回　人体の構成：器官、組織、細胞内小器官の種類と働き、及び細胞膜の構造と機能

第３回　糖質の化学： 各種単糖類、二糖類、多糖類および誘導糖の構造とそれらの特徴

第４回　糖質の代謝：１　解糖系、クエン酸回路、電子伝達系、ペントースリン酸回路

第５回　糖質の代謝：２　血糖調節、グリコーゲンの合成・分解、糖新生、コリ回路など

第６回　脂質の化学： 脂肪酸、トリグリセリド（TG）やリン脂質、糖脂質の構造と特徴

第７回　脂質の代謝：１　脂肪酸の合成・分解（β－酸化）、TGの合成と分解、

第８回　脂質の代謝：２　コレステロールの合成とリポタンパク質による脂質の体内輸送

第９回　アミノ酸の化学： 各種アミノ酸の構造・特徴とタンパク質の高次構造・変性

第10回　アミノ酸の代謝： アミノ基転移・脱アミノ反応、尿素サイクル、生理活性アミン

第11回　酵素の働き：特異的作用、阻害剤、活性の調節、補酵素（水溶性ビタミン）

第12回　核酸の化学： DNA・RNAの構造、遺伝子、ゲノム、DNAの複製、

第13回　核酸の代謝： プリン・ピリミジン塩基の合成と分解、タンパク質の合成と分解

第14回　恒常性の調節： 細胞間情報伝達と細胞内への情報伝達システム

第15回　生体防御システムとアレルギー、期末試験

使用教科書

低学年で使用した教科書を使用します。また必要に応じて印刷物を配布します。

自己学習の内容等アドバイス

「記憶するには、それを思い出すことが重要」と言われています。講義日に必ず復習を！

［授業科目名］ 食品分析化学		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 間崎　剛
［単位数］ ２	［開講期］ ４年次前期	［必修・選択］ 選択	備考

授業の到達目標及びテーマ

食品や生体成分の定量的な測定法に関して理解し、分析に必要な基礎知識を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

食品を構成している成分の分析方法について解説するとともに、食品分析に関わる容量分析および機器分析の原理を説明する。また、健康食品管理士の資格取得のための講義も行う。

学生に対する評価の方法

レポートにより評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　栄養とその歴史・食物の消化と吸収
第２回　糖質と代謝
第３回　脂質と代謝
第４回　タンパク質と代謝
第５回　ビタミンとその類似物・ミネラル
第６回　電解質と水の代謝・食物繊維・難消化性糖類
第７回　エネルギー代謝・健全な食生活
第８回　いわゆる健康食品と保健機能食品
第９回　栄養機能食品
第10回　健康食品各論（機能性成分とその作用機構１）
第11回　健康食品各論（機能性成分とその作用機構２）
第12回　容量分析　滴定
第13回　機器分析　比色分析・蛍光分析
第14回　機器分析　クロマトグラフィー・原子吸光分析
第15回　まとめ

使用教科書

新美康隆編　図解食品学実験　みらい
健康食品学　健康食品管理士認定協会
問題解説集　健康食品管理士認定協会

自己学習の内容等アドバイス

食品学および生化学をよく復習しておくこと。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
管理栄養士演習（卒業演習・研究）		演習	安達・五十里・池田・和泉・岡田・岸本・北川正・須崎・立花・田村・塚原・徳留・早戸日暮・ファルク・藤木・間崎・山内
[単位数] 4	[開講期] ４年次	[必修･選択] 必修	備考

授業の到達目標及びテーマ

演習・研究を通して、最新の専門知識や技術を習得すると同時に、問題解決に利用できるさまざまな能力やプレゼンテーション能力を身につけ、創造性および独創性豊かな人間形成を目指す。

授業の概要

希望する教員のゼミに所属し、各教員の個別指導を受けながら４月から 12 月まで演習または研究を行います。
卒業研究：2013 年度研究テーマの一部を下に示しますが、実験研究から調査研究まで様々です。
卒業演習：集中的または定期的にゼミを開講し（年間 60 コマ以上)、輪番制で課題等を発表します。

学生に対する評価の方法

卒業研究…12 月末に研究成果を発表し、論文を審査することにより評価する。
卒業演習…レポートやゼミ発表などより評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

2013 年度の主な研究テーマ
- 女子学生の痩せ願望と「3・1・2 弁当箱法」プログラムの関連
- 魚の入手に関する食環境調査法の検討
- ビタミンK代謝に及ぼすα－トコフェロール摂取の影響
- パイナップル果汁を用いた精白米の低アレルゲン化
- 健常高齢者におけるサルコペニアのリスクファクターの検討
- 健常高齢者における口腔機能と食物摂取状況の関連
- 大腸菌の迅速検出に関する基礎研究
- 調理用手袋を介した二次汚染に関する研究　～モデル実験と細菌伝播率～
- 女子大学生の血中アディポネクチン・レプチン値と栄養摂取状況　の検討
- 女子大学生のボディイメージと栄養摂取状況の検討
- 料理教室における減塩意識の向上と継続の検討
- 地域高齢者における年齢階級別食生活習慣、身体状況の実態
- 糖尿病患者に対する料理教室後の手紙支援の効果
- 強化栄養治療に焦点をあてた入院時栄養アセスメント
- 大学女子駅伝選手における貧血の予防・改善
- 大学女子駅伝選手の月経異常　～その現状と要因～
- 子どもの野菜摂取に対する保護者の行動変容ステージと野菜摂取量
- 大学生のための食物摂取頻度調査票（FFQ）の妥当性
- 給食管理実習室からの緊急時の避難について
- 食物アレルギー対応おやつの開発と普及
- 遺伝的素因に応じた栄養運動プログラムの構築
- 大豆の発芽と生育に伴う各種栄養素の変動
- ポーションコントロール法が２型糖尿病改善に影響を及ぼす要因検討
- フルクトオリゴ糖摂取による食物アレルギー改善効果の解析
- プチヴェール事前摂取による抗アレルギー効果の解析

使用教科書

担当教員の指示に従って下さい。

自己学習の内容等アドバイス

指示されて動くのではなく、自分で考えて計画し、自分から行動することが大切です。
発表に際しては、どのように説明したら相手が理解してくれるかを十分考えて説明してください。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
教職入門		講義	野々山　里美
［単位数］ ２	［開講期］ １年次後期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

初等教育に関わる今日的諸問題について具体的事例をもとに考察し、教師としての職責、身分保障等について理解する。その学びから、教育の重要性と、教師という職業の崇高さや魅力を認識し、教職のイメージを明確にするとともに、教師としての資質・使命・社会的役割を理解し、教職を志望する意識を確認する。

授業の概要

・本授業では、教師という職業の意義や学校での教師の役割などを、学生の被教育体験を生かして検討し合う。
・教師の服務や教育現場の実態及び諸問題解決のストラテジ等を学び合い、考え合い、求める教師像を明らかにする。
・自らを表現する能力と、人としてのモラルを定着させるため、参加型の授業場面を取り入れ、コミュニケーション能力のある教師になるための適性・能力を伸ばす機会を提供する。

学生に対する評価の方法

・試験（筆記）（６０％）、小テストやレポート（２０％）、授業の参加態度やグループ討議の態度（２０％）を総合的に判断して行う。また、授業の遅刻や欠席等は原則的に認めず、減点対象とする。
・試験の欠席は認めない。また、この授業の再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第　1回　　オリエンテーション（授業の目標及び内容・授業の進め方・授業に関する諸注意等）
第　2回　　「教育とは何か」について考える
第　3回　　「自己の教育史」を振り返る
第　4回　　学校組織と教師の役割（公教育の役割・教員の役割と職責）
第　5回　　学校組織と教師の役割（学校教育にかかわる諸法規・憲法・教育基本法等）
第　6回　　学校組織と教師の役割（学習指導要領の役割と変遷）
第　7回　　大村はまの教育論１
第　8回　　大村はまの教育論２
第　9回　　教育現場における課題１（不登校問題とその対応）
第10回　　教育現場における課題２（いじめ問題とその対応）
第11回　　教育現場における課題３（食育に関する諸問題）
第12回　　教える者と学ぶ者の人間関係づくり
第13回　　学校と家庭の信頼関係づくり
第14回　　まとめと筆記試験
第15回　　魅力ある教員を目指してのレポート作成

使用教科書

・「灯し続けることば」大村はま（小学館）
・（参考文献）学習指導要領解説書「総則編」
・必要に応じて講義の折にプリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

・次回の授業の課題（ホームワーク）を提示するので、幅広い資料分析をして予習し、自分なりの考えを確立し、かつ、わかりやすい発表のための工夫をしてくること。また、読み手に自分の考えがより深く伝わるような書き方やまとめ方を工夫したレポートや小テストの作成に心がけること。
・授業計画は授業の進行状況に応じて前後することがある。

［授業科目名］ 教育原論		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 重留　紘治
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

「教育」のイメージを、人間形成という視点から問い直し、「学校」という空間について考え、発達という神話を生みだした歴史を概観し、作り上げられたイメージを洗いなおす。子どもに対する「感性」を考察し、「子ども」とは何か、何故「学校という場」が問題となるのか、学びを支える教育実践とは何か、「教師」という存在と役割の意味を問い、家族・社会・人間関係にある広義の教育作用、共生社会を生きる人間に求められる教育の課題と可能性について、分かりやすく講義して、自分の見解を発表し、他の学生の意見も参考にして、自分なりの教育に対する確とした原理（教育哲学）を形成することを目的とする。

授業の概要

教師を志す学生が今までに描いて来た、また、今持っている教育へのイメージが、果たして人間教育の本質に迫るものなのか、教育作用の効果とは何か、そして子どもたちの心をつかむためにはどうしたら良いのか、教育の原点を問い直すことが必要である。教育を受けるものから、教育をする者へのまなざしの大きな転換により、職業人・教師としてのアイデンティティを創る基礎を培うこと及び自らの考えをわかり易く発表できる力を養う事を目標とする。

学生に対する評価の方法

授業時の態度(20%)・レポート(予習 20%、授業内容 20%),定期考査(中間・期末)(40%)によって総合評価する。授業態度については、常識的な観点。レポートについては、予習による授業時の発言内容、授業時のまとめがしっかりできているかの観点。考査については、知識、理解度、独自性、等を観点とする。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

１回　教育という仕事（イメージの中の教師。教師への道を動機づける時期。教師という職業の魅力。教育を受ける者から、する者へのまなざしの転換）
２回　教育という物語－１（教育の営みとは何か。教育が営まれる場。子育ての営みと教育。）
３回　教育という物語－２（人間形成とその教育機能。時代や社会の中で作られる教育。）
４回　学校という空間（学校の誕生。学校論とその課題。学校空間への挑戦－可能性を探る試み－）
５回　発達という神話（統治者に金を農夫に銅を。発達論の現在）
６回　教育の対象としての子ども－１（子どもの誕生。子ども再考の作業の中で）
７回　１回から６回までの講義の内容についての課題考査実施
８回　子どもの問題と学校教育（子どもの問題が意味するもの。転換期の学校。）
９回　学びを支える教育実践（学ぶということ。教育内容とカリキュラム。）
10 回　学びを支える教育実践。教育の担い手としての教師。（教師という専門職。教師が求められたものは何であったか。）
11 回　教師をめぐる物語。家族が生み出す教育のドラマ。
家族というドラマチックな舞台。家庭の教育力とは何か。
12 回　社会の変化と教育課題
メディアと情報教育。地球時代を生きる子どもたち。性と性差の教育。
13 回　教育の再生する視点を求めて
学校観の変化。小さな試みから大きな宇宙へ。
14 回　８回から１３回までの講義に係る課題考査実施
15 回　授業のまとめ、再試験

使用教科書

萌文書林　　教育学への視座―教育へのまなざしの転換を求めて―
青木久子、磯部裕子、大豆生田啓友　共著

自己学習の内容等アドバイス

授業時に、翌週の学習内容に関するレポート渡すので、その項目について教科書や参考書で調べて記入し、予習してくる。その際に各項目についての自分の見解を必ず書いてくる事。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
教育心理		講義	解良　優基
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

人間の基本的な学習・発達過程を教育心理学的な観点より理解し，児童・生徒の心身の発達に応じた教育のあり方について考えを深める。

授業の概要

効果的に学習を促すには，学習者の発達における心理的特性を理解し，発達に応じた適切な学習指導を行う必要がある。この授業では，発達や学習，そして動機づけといった観点から人間の基本的な理解を深め，学級集団への指導や教育評価などへの応用について考える。受講者は，授業で学ぶ教育心理学の知見を踏まえ，より良い教育実践について積極的に考える姿勢を心がけてほしい。

学生に対する評価の方法

①平常の授業態度（30%），②途中で実施する小テスト（20%），③最終に実施する試験（50%）により，総合的に評価する。

なお，この授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　授業のガイダンス（授業の目的と講義内容の概要，履修上の注意）・導入
第２回　発達の捉え方　人間の発達の基本的特徴と，教育とのかかわりについて学ぶ
第３回　思考の発達　ピアジェの理論をもとに，子どもの知的能力の発達について学ぶ
第４回　社会性の発達　愛着や道徳的判断といった観点から，子どもの社会性の発達について学ぶ
第５回　自己の発達　エリクソンの理論をもとに，子どもの発達段階と各段階の課題について学ぶ
　　　　ここまでの内容確認のための小テスト①
第６回　学習理論　連合論と認知論から学習のメカニズムについて学ぶ
第７回　記憶　記憶のメカニズムについて学ぶ
第８回　教授方法　学習の指導法の形態に着目し，効果的な学習指導法について学ぶ
第９回　教育評価　児童・生徒の学習活動に対する評価の目的や種類，そして考慮すべき点について学ぶ
　　　　ここまでの内容確認のための小テスト②
第 10 回　動機づけの理論①　児童・生徒の学習へのやる気について，内発的動機づけ理論をもとに学ぶ
第 11 回　動機づけの理論②　児童・生徒の学習へのやる気について，より認知的な理論の観点から学ぶ
第 12 回　原因と動機づけ　「原因」に対する認知とやる気との関連について学ぶ
第 13 回　教師と生徒との関係　教師のリーダーシップや，児童・生徒への学習支援の方法について学ぶ
第 14 回　生徒同士の関係　子どもの仲間関係について，社会的・学習的な観点より学ぶ
第 15 回　筆記試験および総括

使用教科書

必要な資料を適宜配布する。

自己学習の内容等アドバイス

事後学習により講義内容をよく理解し，自分の考えを整理しておくことが望ましい。

[授業科目名]		[授業方法]	[授業担当者名]
教育行政学		講義	小野田　章二
[単位数]	[開講期]	[必修・選択]	備考
２	３年次後期	選択（栄教必修）	

授業の到達目標及びテーマ

この講義では、我が国の教育行政の主体である、国（文部科学省）と地方公共団体（教育委員会）・学校との関係やこれまでの歴史、現状・改善点を学び、併せてこれからの課題について考えることを目的とする。
そして、必要な教育関連法規の知識を確実に身につけた、信頼される栄養教諭になることを目指す。

授業の概要

教育行政は教育法規に基いて行われており、教育制度の大部分が教育法規によって形づくられている。したがって、教育法規についても多くの時間を割いて学ぶこととする。教育小六法を常に携帯し、与えられた演習問題を自ら解くことにより教育に関する幅広い知識・教養が身につくような授業を展開する。

学生に対する評価の方法

教職を目指す学生を対象に開講されている講座であり、授業への参加態度は特に重視する。また、講義中に実施する教育法規の演習問題への真剣な取り組みが求められる。
評価は、授業への参加態度（20%）、中間テスト（40%）、テスト（40%）を総合的に判断して行う。
なお，この授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　講義の進め方、法規の読み方
第２回　教育行政の組織
第３回　学校の管理と運営
第４回　教育費と教育財政
第５回　教育活動を支える諸条件
第６回　教職員の養成・採用・研修
第７回　教育課程行政と教科書、中間テスト

教育法規（第８回から第 14 回まで）
①　国の法規と地方公共団体の法規
②　日本国憲法と教育基本法
③　国家公務員法・地方公務員法・教育公務員特例法
④　学校教育法・教育職員免許法
⑤　学校保健安全法・学校給食法
⑥　地方教育行政の組織及び運営に関する法律
⑦　義務教育費国庫負担法・市町村立学校職員給与負担法

15 回　まとめとテスト

使用教科書

「教育小六法」平成 26 年版　兼子仁ほか（学陽出版）

自己学習の内容等アドバイス

あらかじめプリントを配布するので、小六法等を使って演習問題を解いておくと良い。

［授業科目名］ 教育課程		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 新谷　裕
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

学問を習得するためには、ただ闇雲に取り組んでも得るものは少ない。次世代を担う子どもたちに計画的な学び方を理解させるためには、まず自らの学び方の集大成をすることが必要である。教育課程の授業を通して教育課程の編成の仕方を学ぶと共に、計画的な学び方の手法を身に付けることを目標とする。

授業の概要

教育課程の編成の元になる学習指導要領を、平成 10 年と 20 年との比較を通してその内容を深く理解する。また、各教科等の内容を元に指導計画並びに学習指導案を作成し、模擬授業実習を実施する。

学生に対する評価の方法

２回の「まとめの評価」(30%）は客観テスト式問題で、1 回の「評価テスト」(40%）と３回の「レポート」(30%）は自由記述問題で行う。

なお、この授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第1回　　教育課程の全体構造「教育課程とは」
第2回　　教育課程の編成「基本的な要素」
第3回　　学習指導要領改訂の基本方針・まとめの評価①
第4回　　教育課程編成の一般方針「総則第 1」
第5回　　学習指導要領の内容「総則第 2」
第6回　　授業時数の取扱い(総則第 3)
第7回　　指導計画作成の配慮事項(総則第 4）・まとめの評価②
第8回　　指導計画の理論と実際
第9回　　各教科の改善（国語)・レポート①
第10回　　各教科の改善（社会)
第11回　　各教科の改善（算数・数学)・レポート②
第12回　　各教科の改善（理科・生活)
第13回　　各教科の改善（特別活動等)・レポート③
第14回　　各教科の改善（その他の教科)・評価テスト
第15回　　教育課程のまとめ

使用教科書

小学校学習指導要領新旧比較対照表　日本教材システム（教育出版)

【参考図書】教育課程の編成と実施（筑波大学開発国際協力研究センター)、教職研修（教育開発研究所)、児童心理（金子書房)、教育展望（教育調査研究所)、教師への道程　第 3 章（図書文化)

自己学習の内容等アドバイス

次回の課題の情報を、新聞やインターネット等で収集する。

［授業科目名］ 道徳教育の研究		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 三浦　浩子
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

豊かな人間性育成の中核は道徳教育にあることを理解し、自己の道徳教育に対する教育観を構築する。また、道徳教育の実践的指導法の基礎を身につけることを到達目標とする。くわえて、指導者としての道徳性を高めていくことを目標とする。

授業の概要

本授業は、「道徳」とは何かを自己の生活から問うことからスタートし、家庭、学校、社会の規範意識の現状と課題を探る。次に、道徳性の発達についてと日本の道徳教育のあゆみについて理解する。次には、学校教育に求められている「道徳教育」とその課題を学習指導要領を手がかりに探り、それらの理解の上に立ち栄養教員として児童・生徒に育てたい道徳性をテーマに、学習指導案を作成し模擬授業を行い指導法を模索する。

学生に対する評価の方法

授業への参加状況と態度(20%)、レポート(30%)、試験の結果(50%)等を総合的に判断して評価を行う。
教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度や欠席遅刻等は減点の対象となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　ガイダンス　（授業の進め方と日常における自己の情報収集への心構え）
第２回　　「道徳」、「道徳教育」についての考察（私のなかの道徳観）
第３回　　社会的自己実現と道徳教育
第４回　　家庭における道徳教育（家庭で育む豊かな心と課題）
第５回　　学校における道徳教育（児童・生徒の規範意識を育む場と課題）
第６回　　社会における道徳教育（社会が育む規範意識とその課題）
第７回　　道徳性の発達段階（乳幼児期、幼児期、児童期、思春期、青年期）
第８回　　日本の道徳教育のあゆみ
第９回　　「学習指導要領」が目指す道徳教育
第 10 回　　道徳的価値の自覚と内面化への方策その１　教師の人間性のはたす役割
第 11 回　　道徳的価値の自覚と内面化への方策その２　心に響く道徳の授業づくり
第 12 回　　道徳的価値の自覚と内面化への方策その３　「道徳教育全体計画」による実践
第 13 回　　「道徳教育」実践に向けての指導案作り①
第 14 回　　「道徳教育」実践に向けての指導案作り②
第 15 回　　「道徳教育の研究」のまとめと試験

使用教科書

小学校学習指導要領解説　道徳編　文部科学省　東洋館出版

自己学習の内容等アドバイス

授業の中でみえてきた課題については、参考書等で調べ自分なりの答えや考えをもって授業に臨むよう心がけること。また、日常生活の中でのモラルに関する気付きを授業と関連づけて考える姿勢をもつこと。

［授業科目名］ 特別活動の研究		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 小野田　章二
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

今回の学習指導要領改訂の基本的なねらいは、教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ、「生きる力」の育成、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成及び豊かな心や健やかな体の育成などにある。

特別活動の「目標と内容」を理解し、それを達成するため具体的にどのような指導と実践が行われたら良いか等、教師としての実践的な指導力向上を目指す。

授業の概要

「特別活動」の内容は、学級活動、生徒会活動、学校行事の三領域が中心である。それぞれの領域で学習指導要領の目標や理念を生かした授業を展開するには、どのような配慮や工夫が必要か等、できるだけ具体例を取りあげながら講義、発表・レポートなどの授業を進める。

学生に対する評価の方法

教職を目指す学生を対象に開講されている講座であり、授業態度は特に重視する。また、講義中に随時指示するテーマについて、発表やレポート、小テストを行う。

評価は授業態度（20%）、レポート（20%）、テスト（60%）を総合的に判断して行う。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

１回　講義内容のガイダンス、参考書の紹介等
２回　学習指導要領等の改訂の経過と特別活動
３回　特別活動に求められるもの
４回　教科教育と教科外教育の意義と目標
５回　戦前の教科外教育の歴史と変遷
６回　戦後の教科外教育の歴史と変遷
７回　教育課程における「特別活動」の位置づけの変遷
８回　「学級活動」の特質、活動内容
９回　「学級活動」の指導計画の作成及び留意事項
10回　「生徒会活動」の特質、活動内容、指導上の留意点
11回　「学校行事」の特質、活動内容、指導計画の作成、指導上の留意事項
12回　「部活動」の特質、活動内容、指導計画の作成、指導上の留意事項
13回　「総合的な学習の時間」の現状と課題
14回　「総合的な学習の時間」と特別活動
15回　まとめとテスト

使用教科書

「特別活動の創造」原清治・檜垣公明編著　学文社

自己学習の内容等アドバイス

次時の講義内容をテキストで確認して講義に臨むようにしてください。

［授業科目名］ 教育方法論		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 新谷　裕
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

「教育は人なり」の考えに基づき、先人の教育方法論や教育技法を学ぶと共に、自らのこれまでの学びに基づいて独自の教育方法や技能を探し当てるための基礎となる能力を身に付けることを目標とする。その時に教えるものとのラポールを合わせて身に付けることをサブテーマとする。

授業の概要

教育の方法論や技能を学び、これを実際の授業にどう生かせるかを、指導案作りや教材づくり並びに模擬授業等の実習等を通して学ぶ。合わせて教師としてのカウンセリングマインドの習得を図る。

学生に対する評価の方法

3回の実習（30%）と4回の「レポート」（40%）、1回の「評価テスト」（30%）、は自由記述問題で行う。
なお、この授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第1回　教育とは・レポート①
第2回　授業がめざすもの・レポート②
第3回　学習指導案のポイント・レポート③
第4回　問いの創造・レポート④
第5回　授業展開・学習指導案の書き方
第6回　教材づくり実習
第7回　模擬授業実習①
第8回　模擬授業実習②
第9回　授業と教授メディア
第10回　コンピュータの特性と活用
第11回　学習障害の理解
第12回　学習障害の理解と指導
第13回　授業と教師
第14回　評価の役割と方法・評価テスト
第15回　教育方法論のまとめ

使用教科書

新版教育の方法・技術　松平信久（教育出版）
【参考図書】授業分析の基礎理論（明治図書）、教職研修（教育開発研究所）、教育の方法と技術（図書文化）、教育展望（教育調査研究所）、教師への道程　第3章（図書文化）

自己学習の内容等アドバイス

次回の課題の情報を、新聞やインターネット等で収集する。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
生徒指導論		講義	加藤　純一
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次前期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

テーマ：　生徒指導の「心」と「構え」のあり方

授業の到達目標：自分の個性にふさわしい生徒指導の方法を構築するための基礎的知識を身につけることを到達目標とする。

授業の概要

生徒指導の意義は、児童生徒が「社会的に自己実現できる資質・態度を形成する指導・援助である」ことを認識するとともに、子どもたちの状況、心、社会的背景、家庭等について理解させ、教職につく者にとって必須の条件である「子どものさまざまな問題行動」に対する対応方法の基礎・基本について学習する。

学生に対する評価の方法

授業への参加態度（20％）、試験の結果（80％）等を総合的に判断して評価を行う。

教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度は減点となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　ガイダンス
第２回　子どもを取り巻く社会Ⅰ（高学歴社会、大量消費社会、情報化社会）
第３回　子どもを取り巻く社会Ⅱ（退廃文化、都市化）
第４回　生徒指導の原理・意義
第５回　生徒指導の定義　、生徒指導の位置づけ
第６回　生徒指導と生徒理解Ⅰ（これからの生徒指導、生徒指導の充実に向けて）
第７回　生徒指導と生徒理解Ⅱ（生徒指導と進路指導、生きる力の育成）
第８回　生徒指導と生徒理解Ⅲ（児童虐待、いじめ）
第９回　生徒指導の「心」と「構え」
第 10 回　生徒指導と教育相談
第 11 回　生徒指導の組織的実践
第 12 回　危機理論・性善説と性悪説・父性原理と母性原理
第 13 回　子どものサインを受け止める（行間を読む、欠席、加点評価）
第 14 回　家庭を見直す（家庭機能の変化、父母の心理的不在、核家族と少子家族）
第 15 回　まとめと試験

使用教科書

なし

自己学習の内容等アドバイス

限られた授業回数では、生徒指導の基本に触れることしか出来ない。
文部科学省のホームページで、生徒指導に関する文部科学省の姿勢を、きちんと把握することが望ましい。

［授業科目名］ 教育相談とカウンセリング		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 加藤　純一
［単位数］ ２	［開講期］ ２年次後期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

テーマ：教師が行う教育相談活動の「心」と「構え」

授業の到達目標：自分の個性にふさわしい、自分自身の教育相談の方法を構築するための「基礎的知識」を身につける。

授業の概要

不登校及びいじめ問題への対応が大きなきっかけとなり、文部科学省は学校教育相談の充実を目指してきた。この授業において、学校現場できちんと応用できる「学校教育相談の基礎」及び「有効な教育相談・カウンセリングを行うための基本的な姿勢」について学習する。

学生に対する評価の方法

授業への参加態度（15％)、レポート（20％)、試験の結果（65％）等を総合的に判断して評価を行う。

教員養成を目的として開講されている科目であるので、教員としてふさわしくない授業への参加態度は減点となる。やむを得ない理由以外、試験の欠席は認めない。再評価は実施しない

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　　ガイダンス
第２回　　学校教育相談の歴史
第３回　　学校と専門機関の相談の違い・校内連携・校外連携
第４回　　学校教育相談における相談係の役割
第５回　　ディレクティブとノンディレクティブ・聴くことの重要性
第６回　　相談の目標と終結
第７回　　人が人を変えるということ
第８回　　不登校
第９回　　ノイローゼ等病的事例
第 10 回　長期欠席と進級・原級留置・休学
第 11 回　特別支援教育
第 12 回　思春期の理解
第 13 回　親の構えを組み立てなおす
第 14 回　教育相談を行うときの注意事項
第 15 回　まとめと試験

使用教科書

『親面接のポイント』　加藤純一著　ほんの森出版

［ 参考図書 ］ 『学校教育相談学　ハンドブック』ほんの森出版

自己学習の内容等アドバイス

毎時間の授業資料プリントを配布する。資料プリントに、関連事項の書かれている教科書のページ数が記されているときには、前もって教科書のその部分を読んでおくこと。

［授業科目名］ 教職実践演習（栄養教諭）		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 新谷　裕・安達　内美子
［単位数］ ２	［開講期］ ４年次後期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

平成 17 年に施行された食育法は、子どもたちの健全な食生活の実現と豊かな人間性を図るため学校に栄養職員を置くことができるとした。この職につき次世代を担う子どもの食習慣の形成に努めるための指導を実践を通して身に付けていくことを目標とする。更にテーマとして、学校給食を活用して栄養教諭が学校で何ができ得るかを模索することを目指す。併せて教師としてのカウンセリングマインドを持つことを目指す。

授業の概要

子どもを知るためには子どもを正しくアセスメントすることが必須である。方法としては、観察法や質問紙法などを通して子どもを見つめることを実施する。観察法は、実際に教育現場で行うことがベストであるが、それは難しいのでビデオを使って撮影したものを見てグループ討議を行う。その分析結果に基づき質問紙を作成しアンケートを行いその資料を分析する。

学生に対する評価の方法

2 回の「学習テーマ発表会・評価テスト」は、発表とレポートで評価する（30%×2）。また「まとめ・シェアリング」は、学習した内容を小論文のかたちで評価する（40%）。

なお、この授業は再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第1回　　ガイダンス・観察法と質問紙法
第2回　　学習テーマの決定・テーマ発表会
第3回　　学校給食のビデオのグループ討議①
第4回　　学校給食のビデオのグループ討議②
第5回　　学校給食のビデオのグループ討議③
第6回　　学校給食のビデオのグループ討議④
第7回　　学習テーマ発表会
第8回　　質問紙の項目検討・評価テスト
第9回　　質問紙の作成
第10回　　質問紙予備調査
第11回　　質問項目再検討
第12回　　調査依頼文の作成及び実地調査
第13回　　調査回収及び礼状作成
第14回　　調査結果報告会・評価テスト
第15回　　まとめ・シェアリング

使用教科書

表記の手引き（教育出版）

【参考図書】児童心理（金子書房）、教職研修（教育開発研究所）、教育展望（教育調査研究所）、栄養教諭による食に関する指導実践事例集（文部科学省）、観察法・調査的面接法の進め方（ナカニシヤ出版）

自己学習の内容等アドバイス

表記の手引きを常に持参し、ことあるごとに目を通す。

［授業科目名］		［授業方法］	［授業担当者名］
栄養教育実習指導		演習	増田　温美
［単位数］ 1	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考 ※2015 年度まで継続履修

授業の到達目標及びテーマ

教育実習の概要や意義を知ると共に、児童・生徒にわかる授業実践ができるように、指導の工夫を理解し、学習指導案の作成をする。また、模擬授業を行い、検討協議をする。

教育実習の事前・事後指導を実施して栄養教諭としての実践力を身につけることを目標とする。

授業の概要

授業計画に従って、わかる授業、食生活の向上につながる授業のあり方を模索し、模擬授業を実施する。また、その後の協議を通して、指導の工夫を図る。

学生に対する評価の方法

受講態度、授業内のコメント、レポートを４０％、学習指導案、模擬授業を６０％で評価する。

受講態度、授業内コメントについては意欲・関心を、レポート、学習指導案、模擬授業については知識、理解度、課題解決への演繹力、独創性、解答のレベルを主たる評価の観点とする。再評価は実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　教育実習の意義と実習内容、課題および実習生としての自覚
校務分掌、学習指導、児童・生徒理解、部活動指導

第２回　教育実習にあたっての留意点
勤務・服務について、実習前（事前指導、実習校との打ち合わせ）、実習中（観察、参加、授業研究）
実習後（反省会、提出物など）

第３回　良い授業のために
教材研究、児童の実態把握、板書の工夫、観点別評価、指導と評価の一体化

第４回　実践的・体験的活動を重視した授業
資料の提示、実験の仕方など

第５回～１４回
朝食の重要性、栄養バランス、牛乳の価値、好き嫌いをなくそう、効果的なおやつ、郷土の特産品など食育に関わる事項の学習指導案を作成する。
交代で模擬授業を実施して後、授業内容、資料、発問の仕方、指導と評価について検討協議する。
模擬授業は教育実習にでる直前まで継続して行う。

第１５回　まとめ
教育実習を終えて、授業実践をして、実習の報告書第１回

使用教科書

適宜プリントを配布する

自己学習の内容等アドバイス

食生活を豊かにする教材は何か、児童生徒が納得できる資料は何かと、興味を持って食生活を見つめること。

［授業科目名］ 栄養教育実習指導		［授業方法］ 演習	［授業担当者名］ 増田　温美
［単位数］ 1	［開講期］ ４年次前期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考 ※2013 年度から継続履修分

授業の到達目標及びテーマ

前年度の学習をもとに、教育実習の概要や実習効果を上げるための留意事項と成果のまとめ方を扱う。また、受け入れ校に迷惑をかけることのないよう基本的な生活態度の在り方について指導の徹底を図り、教師として必要な力量を磨く。

授業の概要

教育実習の事前・事後指導を実施し、実習効果を上げるとともに、受け入れ校に迷惑をかけることのないように指導の徹底を図る。実習後は実践結果を報告し、教職への理解を深めるとともに、更なる向上策を研究する。

学生に対する評価の方法

授業時の課題、研究発表、論文で評価する。
課題、研究発表についてはアプローチ法、解答のレベルを観点とする。評価論文については、知識、理解度、問題解決への演繹力、独自性、解答のレベルを観点とする。

授業計画（回数ごとの内容等）

＜４年次の内容＞
４年次の教育実習に出る前まで、３年次に続けて学習指導案を作成し全員が交代で模擬授業を実施し、研究協議する。
その後は、これまで学習した理論を教育実習で実践する。
実習終了後は、実践結果と理論との比較のもとに、教育実践理論の再認識と実践力の向上について研究・協議する。
最後に研究・協議結果を自分なりに評価し、自己の教育観を論文にまとめる。

使用教科書

適宜プリントを配布する。

自己学習の内容等アドバイス

１つでも多くの授業を参観し、良い点を取り入れた授業実践をめざす。
周りの人と積極的にかかわりをもつ。

［授業科目名］ 栄養教育実習		［授業方法］ 実習	［授業担当者名］ 増田　温美
［単位数］ 1	［開講期］ ４年次前期または後期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

　教育実習はこれまでに修得した教育に関わる全ての教科の基礎知識を、教員として統合化・体系化し教育実践に生かす訓練をすることを目的として行われる。この実習を通して実践力を身につける手だてと、さらに充足すべきことは何かを明らかにして、立派な教師として成長するための機会とする。

授業の概要

　教育実習を通して実践力を身につけ、教師として成長するための機会となるよう支援する。

　受け入れ校では、後継者育成という立場から指導に当たる点を肝に銘じて、実のある実習にさせたい。

学生に対する評価の方法

巡回指導時の研究授業や学習指導案、実習校の評価、実習中の実習記録、実習終了後の報告会用資料をもとに総合的に評価する。

授業計画（回数ごとの内容等）

実習校において行う内容はおよそ以下の通りである。

登校指導、職員朝礼、朝のショートタイム、指導者の講話（オリエンテーションや生徒指導、職員分掌業務について）、指導者の授業参観、教材研究と学習指導案作成、研究授業の実施（実習生が授業を行い指導教員達が参観し指導する）、指導者とのティームティーチング、週一度のホームルーム、職員各部の分掌業務の手伝い、下校指導、部活動指導

使用教科書

「教育実習の手引き」、「教育実習記録」（名古屋学芸大学）

自己学習の内容等アドバイス

実習校では諸活動に積極的に参加して、児童・生徒とのふれあいを多くできるように。

［授業科目名］ 学校栄養指導論Ⅰ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 吉見　成子
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次前期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

食に関する指導と生きた教材としての学校給食の管理を一体のものとした食育を通して、未来を担う子どもたちに豊かな人間性と生きる力を身につけさせることを使命とした栄養教諭の育成をめざす。
栄養教諭としての使命感をもち、職務を遂行するために必要な知識・技術を身につけさせることを目的とする。

授業の概要

栄養教諭の役割および職務内容に関する事項、並びに児童生徒を取り巻く食や健康に関する現状と諸課題について講義を行う。
学校現場での実践例や実際に使用されている食育の媒体・学校給食の献立のレシピなどを紹介することにより、食育の啓発資料を作成するなど実践に役立つ授業内容とする。

学生に対する評価の方法

小テストと学期末テスト（７０％）、受講態度・提出物（２０％）、レポート及び毎回の意見・要望・質問・感想（１０％）を総合して評価する。教員養成目的の科目であるため教員としてふさわしくない授業態度や、やむを得ない場合をのぞき欠席遅刻等は減点となる。なお、この授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回ガイダンス
　授業の進め方、栄養教諭とは――職務内容と役割――
第２回　栄養教諭が行う食に関する指導についてⅠ　　栄養教諭制度の概要
第３回　栄養教諭が行う食に関する指導についてⅡ　　学校給食の教育的な意義と役割
第４回　栄養教諭が行う食に関する指導についてⅢ　　学校給食の管理と運営
第５回　栄養教諭が行う食に関する指導についてⅣ　　学校給食の栄養管理の実際
第６回　栄養教諭が行う食に関する指導についてⅤ　　学校給食の衛生管理の実際
第７回　栄養教諭が行う食に関する指導についてⅥ　　学校給食と食に関する指導の実際
第８回　まとめと小テスト
第９回　食に関する指導及び学校給食管理に関する法令と諸制度
第10回　児童生徒の食に関わる諸課題についてⅠ　　食卓をめぐる現状
第11回　児童生徒の食に関わる諸課題についてⅡ　　食生活をめぐる現状と社会的状況その１
第12回　児童生徒の食に関わる諸課題についてⅢ　　食生活をめぐる現状と社会的状況その２
第13回　児童生徒の食に関わる諸課題についてⅣ　　学校給食と食の安全
第14回　食に関する指導の「全体計画」について
第15回　前期のまとめとテスト

使用教科書

改訂　栄養教諭論　―理論と実際―　　金田雅代　編著　　建帛社
【参考図書】食に関する指導の手引　　改訂版　　文部科学省　編著　　東山書房

自己学習の内容等アドバイス

授業内容をより確実に身につけ、さらに深めるため他の科目の教科書や授業内容で関連する事項についても予習および復習をし、栄養教諭として、管理栄養士の専門性および教員としての資質と能力を高めること。食をめぐる日本国内及び諸外国の現状や課題について常に興味・関心をもち、食育に関連させて実践に生かせるよう努めること。

［授業科目名］ 学校栄養指導論Ⅱ		［授業方法］ 講義	［授業担当者名］ 吉見　成子
［単位数］ ２	［開講期］ ３年次後期	［必修・選択］ 選択（栄教必修）	備考

授業の到達目標及びテーマ

「学校栄養指導論Ⅰ」を基礎において食育を推進するために必要な知識を積み上げ、現状と今後の方向性を考え、栄養教諭として実践的かつ有用な指導力の習得を目標とする。
指導案を作成し、媒体や教材等を使用して模擬授業を行い、学生間での相互評価による実践演習を行う。これにより授業の方法や指導技術の向上を図り、実践力を高めることを目的とする。

授業の概要

食生活の歴史と文化および、食料の生産・流通・消費、食と環境、食の安全性など食を取り巻く現状、さらに小中学校における食育の実際について講義をする。これらをふまえて模擬授業を行い、実践力を身につけさせる。

学生に対する評価の方法

テストまたはレポート（３０％)、実践演習での指導案及び発表内容（５０％)、受講態度（１０％)、毎回の意見・要望・質問・感想（１０％）を総合して評価する。教員養成目的の科目であるため教員としてふさわしくない授業態度や、やむを得ない場合をのぞき欠席遅刻等は減点となる。なお、この授業は再評価を実施しない。

授業計画（回数ごとの内容等）

第１回　食生活の歴史と文化Ⅰ　日本の食文化
第２回　食生活の歴史と文化Ⅱ　食生活の変遷――食糧自給率から――
第３回　食生活の歴史と文化Ⅲ　学校給食の歴史と食文化の変遷
第４回　食に関する指導の方法Ⅰ　総論、全体計画と年間計画、指導案の作成について
第５回　食に関する指導の方法Ⅱ　教科における食に関する指導
第６回　食に関する指導の方法Ⅲ　特別活動・総合学習等における食に関する指導
第７回　食に関する指導の方法Ⅳ　学校・家庭・地域との連携における食の指導
第８回　食に関する指導の方法Ⅴ　肥満・食物アレルギーなどの個別指導の方法
第９回　食に関する指導の方法Ⅵ　指導の技術（話し方、板書計画、媒体)、小テストまたはレポート
第 10 回　実践演習Ⅰ　模擬授業
第 11 回　実践演習Ⅱ　模擬授業
第 12 回　実践演習Ⅲ　模擬授業
第 13 回　実践演習Ⅳ　模擬授業
第 14 回　実践演習Ⅴ　模擬授業
第 15 回　実践演習のまとめ、講義の総まとめとテスト

使用教科書

改訂　栄養教諭論　―理論と実際―　　金田雅代　編著　　建帛社
【参考図書】食に関する指導の手引　　改訂版　　文部科学省　編著　　東山書房

自己学習の内容等アドバイス

授業内容をより確実に身につけ、さらに深めるため他の科目の教科書や授業内容で関連する事項についても予習および復習をし、栄養教諭として、管理栄養士の専門性及び教員としての資質と能力を高めること。食をめぐる日本国内及び諸外国の現状や課題について常に興味・関心をもち、食育に関連させて実践に生かせるよう努めること。